

---

# 罪人天使

雨月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

罪人天使

### 【Nコード】

N9447A

### 【作者名】

雨月

### 【あらすじ】

天道時時雨は色々と大変な少年である。なし崩し的に引越したりしたもんだから彼はどんどん厄介な事に巻き込まれる。

## しょのいち 関係ない世界、交わる世界（前書き）

また、性懲りもなく登場してしまいました。これはこれで見てくれるならうれしいです。

## しょのいち 関係ない世界、交わる世界

アンノウン・エンジェル

罪人天使とは過去一度あった天界と魔界という対等の立場をもつ二つの世界に起きた戦いに終止符を打つための神が作り出した謎の天使であった。名前こそ天使とついているが天使に見えるだけであり、実際の所は生活態度、性質などは謎のままである。つまりその存在がなんなのかは定かではないことであり、別にどうという事ではない。

ただ、最近判ったことといえば自分でもわからない重大な出来事や宿命を持つものがその謎多き天使になるといわれている。まあ、実際の所このことも確定した出来事ではないということである。

その天使は悪魔と天使、すべての力を纏いすべての終わりを齎す者。そして、世界を紅と蒼に染め上げ紫に導く。

「.....さて皆、今日はかねてよりみんなの友達であった天道時てんだうじ 時雨君しぐれが引越す日です。彼は今日の昼頃にはこの学校の生徒ではなくなる予定です。」

朝のホームルーム、年若いムキムキの男子教師はそんなことを言っている。まあ、実際そういうことになっているのだから仕方ない。

「うえっ、まじかよ。」

「番長、自分達がふがないからこの学校から消えてしまっんですか？」

その他もろもろ、そんな声が聞こえてくるが僕は無視する。泣きながら訴えてくる暑苦しい男子生徒たちを手を振って座らせる。そう、何を隠そう僕はこの学校の番長という奴なのである。ちなみに僕は高校二年生だが番長の称号を得たのは全く持つて面倒くさいことに巻き込まれたものだ。

少々、昔の話をさせてもらおう。あれは入学式の事である。正確に言うと入学式の放課後、皆の帰った教室で僕は上級生に絡まれていたのであった。絡まれた理由はどこからどう考えても僕が悪い。まず、上級生の足を間違つて踏んだ拳句にそのことに気がつかずその事実を無視してそのまま帰ろうとしたからである。

そのとき僕は思いつき殴られて気絶したはずであったが、気がついたときには上級生たちは僕の目の前にのびていたのであった。そして次の日には三年生はすべて消えていた。

理由は簡単、三年生は全員が退学を喰らったのであった。（このことはうわさで聞いたぐらいであるのではっきりいえることは出来ないが、うわさでは下級生をかなりいびつに扱っていたのが学校側にばれたらしいのだ。）

しかし、世の中勘違いが多いようだ。

ほとんどの生徒は僕が上級生をコテンパンに締め上げて全員を二度と立ち上げられないほどに痛めたと別の噂が立ち上がってしまったのである。

その結果として僕には悲しいことにろくな友達が出来なかったし、彼女もできることはなかった。（今僕が通っている高校は男子校なので彼女ができるはずがない。無論、彼氏なんてモノも存在しない）しかも、今度の引越しは離れて暮らしている母親が勝手に決めたものである。つまり今僕は一人で住んでいるのである。なぜそうなのかわかるのは僕の悲惨な過去話を聞いて欲しい。

今から二年ぐらい前の事である、母が再婚すると聞いていたが当時の僕は別に気にしてはいなかったのであった。

しかし問題があるとしたら今の父親の連れ子がいると会う少し前（一分前）に聞かされたのであった。

その連れ子は双子（まったく似ていない）であり、僕と同年である。

まあ、羨ましがる人もいるだろうが僕には悲惨な出来事であった。

なぜだか知らんが夜、僕の部屋に片方（毎日入れ替わりに来る）が入ってきて僕にプロレス技をかけていくのだ（その時間約三十分）。そのほかにも僕がトイレに入っているのにしていてわざと漬物石より数倍でかい石を置いていたりしていた。

そんなことが連日連夜続いたものだから（幸い、その二人とはクラスが違うので学校であったことはない）。

（まだ進路を検討していた僕は（その二人が地元の共学高校に進学すると聞いたので）地元の共学高校ではなく、あえてこの男子校（専制が僕には少し無理だと言っていたが寝ないで勉強したのでらくらく通ることが出来た）。

）を選んだのである。

その二人にはそのことを話しておらず、母親を説得して（男を磨いてくるといった記憶がある）。

（一人暮らしを始めたのであった）。

（始めは学業と家事を同時にするのは辛かったが今では楽勝である。ちなみにその二人には気づかれることなく僕はこの町に引越してきたのである）。

それから二人には全くあった事はない（家にかえってきたら玄関の前に立っていたことが何回かあったが僕は回れ右をして学校に戻ったりした）。

（正月なども母親達がいる町には帰らずに（そんなことになったら僕は今度こそスリーカウントを取られるだろう）僕は布団で寝

て過ごしていたりしたし、電話が掛かってきたとしても適当にこまかしていた（お掛けになられた電話番号は只今使われてませんと答えたりした）。バレンタインデーの時には玄関の前に二つのチョコが置かれてギョツとしたが迷わず送り返した（ホワイトデーの時はキチンとお返しした）。

しかし母親はとうとう堪忍袋の緒が切れたらしい。この前家にかえってきたら家具やらなんやらすべてなくなっていた。代わりに置かれていたのは手紙であった。

『時雨、あなたは一週間後今通っている高校からあなたの妹達かよっている高校に通わせます。』

そんなことが書かれた手紙を僕は青ざめながら黙読したのであった。そして一週間後、つまり今に至る。とうとう神様がいるなら僕を見放したようだ。なぜ転校させられるかがわからない。（いまだに成績は少なくとも上の下ぐらいだ。）反抗するにも全くそうできるような状態ではないし、あっちに戻っても部屋に鍵さえしておけば大丈夫だろう。

「それでは時雨君、皆に最後の言葉を掛けてやって欲しい。」

「……わかりました。月並み言葉で申し訳ないけどこの一年間全く話していない人もいますか……」

話し掛けると話し掛けたほとんどの生徒が冷や汗をかきながら僕からさつさと離れていった。

「今まで有り難うございました。」

教室の一部（不良の塊）がいろいろ騒ぐ。

「時雨さん、あっちに行っても頑張ってください。」

「そうですよ、『紅時雨』の名前を轟かせてください。」

辺り一体の高校は既にこの男子校の傘下におさまっていた。いや、番長というものは全くもって騒がしいもんであった。

「いや、僕は普通の高校生活を送りたいから君達もがんばってくれよ。」

お節介かもしれないがこの人たちの未来が心配である。

その後、少し話して僕は高校をさっさと出て行った。短い間お世話になったがまあ、今は未練も何にもない（母さんが言った時点で僕に拒否権とやらはなくなっている。親がいなければ今の自分などは存在しないからだし、いまだに仕送りをしてもらっているのそのことをあげられたりしたらかなり辛い。）。

振り返らずに校門を通り過ぎ、もう少しで家という所で僕は不思議なおじさんから声を掛けられた。

「その君、今ちょっと暇はあるかね？」

「ええ、暇は一応ありますよ。」

「私の店の第一号の客になってくれないか？」

彼が指さす方向には変わった形の店が静かに立っていた。



「なあに心配は要らないよ。お試しでやってもらっただけだし、お金も取らないからね。占い屋をしているんだがなかなか客がこなくて困った所だったんだ。」

今の僕にはお金がないのでちょうどいいだろう。これからどうなるか占って欲しい。

「分かりました、いいですよ。」

そのまま僕はそのおじさんの後を付いて行き店内に入って行つた。中は一般の家とほとんど代わらず、テーブルに彼の奥さん（見た目はとても優しそうである。）がコーヒーを飲んでいた。

「あら、お客さん?」

「いや、彼はお試しのお客さんだよ。」

彼女は立ち上がり冷蔵庫からオレンジジュースを取り出してコップに注ぎ僕の目の前に置いてくれた。

「どうぞ召し上がってくださいな。」

「は、はあ。有り難うございます。」

ちらりとおじさんを見てみると僕を眺めてうんうん唸っている。その隣でも彼の奥さんと思われる人もうんうん唸っていた。

「うーん、君の名前は何かな?」

「天道時 時雨です。」

彼の体がぴたりと止まりどこから取り出したの彼の手の中には契約書と書かれた紙が握ってあった。

「君は天使を知っているかな？」

天使とはあれだろうか？白い羽を持っていて死んだときに現われたりする神様の使い。

「はあ、えーと、白い羽を持っている神様の使いですか？」

「うん、そのくらいで結構だ。これから少々よくわからない話をするけど構わないかな？」

僕は黙ってうなずいた。時間はまだたっぷりあるし、家に帰っても何もすることはない。

「この世界、といってもこの人間界のほかにも世界はあるんだけどね。天国、天界、人間界、魔界、地獄これらの世界があるんだよ、この世界はそこにあってないもの。つまりところ昼間に出ている月は太陽の強力な光でその存在は消えているんだ。見るように色々努力すれば見ることができるんだよ。」

難しい話である。簡単に説明するとこの世界にはそれらと通じる何かがあるということであろう。

「天国はそうだね、神様が住んでいる場所。天界はその神様の使いたちが住んでいる所かな。人間界は文字通り人間が住んでいる。魔界には色々な種族が住んでいるんだよ。地獄は・・・そうだね、

すべての終点という場所なんだ。」

そこで彼は話の核心をつくような顔になり僕に手にもっていた紙を差し出してきた。

「……天使になってみないかい？ どうやら君にはいろいろ良くないことが起こりそうだしこのままでは……死んでしまうかもしれないんだ。」

彼の瞳に嘘をつくような光はやどつておらず、その目は僕の後押しをするような感じであった。

「……天使は何をすれば良いんですか？」

天使になつてもする事がわからなかったらそれは意味のないことであり、無駄骨という奴である。

「かんたんさ、世界が今の状態を保っていられるように努力してくればいい。後は普段通りの生活を送っていればいいよ。」

常人だつたらしないかもしれない、でも今の僕はそのまま紙を貰いその契約書にサインをした。そして改めて契約書全体を眺める。

「……この下の空欄はなんですか？」

名前をかくらんの下には小さな空欄があった。

「そこに君の意気込みみたいなものを書いて欲しい。そうだね、何でもいいんだよ。年齢制限がかかった本を立ち読みしないでいいし、デートの約束を破らないでもいいんだ。」

ほんとに何でもいいようである。

「それじゃあ、一日一善でいいですね。」

一瞬おじさんの顔が驚愕の顔を浮かべていたみたいだが僕は契約書をおじさんに手渡した。多分何かの間違いだろう。

「……まず時雨君の視力に影響が出てくると思うから頑張ってくれたまえ。」

「視力が悪くなったりするんですか？」

「いいや、そういうことではないよ、それより君にこれをあげよう。これは今日から君のものだからすきにしてもらってけっこうだよ。」

そう言っておじさんから渡されたのは水晶球のような綺麗な石であつた。

素人の僕から見てもその石は高いと一発で分かったのだがおじさんは僕をさつさと店から追い出してしまった。

「さあさ、これからの生活頑張ってくれよ。」

店の外に出て僕に手を振るおじさんにお礼を述べて僕はその後を後にして家に帰る事にした。

「いいの？あのこは世界を一度破壊した少年だったよ。」

「ああ、いいんだ。彼を裁くのは彼自身さ。そして罪を償うのも彼自身だからね。しかし彼に天使化のやり方を教えなかったのは少しまずかったかもしれないな。」

僕は家に帰りつき残っていた荷物をバッグの中に放り込む。（残っていたものは少量の下着だけであった。）そして昔住んでいた町まですを自転車にまたがりその約三時間の道のりに挑戦するのであった。

自転車をこぎ出したのはいいことだがこれは相当辛いものがあり僕は何度も何度も休憩をしながらその町の近くまでやってきていた。真上に輝いていた太陽は今や辺りをオレンジ色に染め上げている。近くにある公園でいったん休憩を取ることにして自転車後と公園内に入り、近くにあったベンチに腰をかける。家に帰った後の事を考えてみることにしよう。そう思った所で携帯がなった。この着信音は母さんの携帯からなのであり、あの双子のアドレスなどは僕の携帯に入っていない。

『今日から数日間お父さんと共に家をあけます。あの二人と仲良くやって欲しいと思いますから、家事はあなたに任せます。』

こ、このメールは僕にとって死刑宣告みたいなものだ。母さんは気を利かせてくれたのかもしれないが別にしてくれなくていいことである。

溜息をついて立ち上がるとそこには三人の人影が僕を見ていた。

顔にはそれぞれ顔を覆うものをかぶっている。（一人目がバイク

のフルフェイスマスク、二人目が覆面、三人目が紙袋に穴を空けたものである。その腕にはどう考えても相手を痛めつけたり、叩いたりするものが握られている。（一人目が竹刀、二人目、木刀、三人目が竹箒である。）その中の一人目が僕を竹刀で狙いながら言葉を発する。

「世界を破滅させたお前を神の名において断罪する！」

僕はさつさとこの場を後にすることにした。しかしまあ、とうとうこの町にも変質者が出てくるようになったか。今度行く高校の先生にこのことを伝えておいたほうがいただろう。

自転車にまたがりペダルを再びこぎだす。

「待ちなさい！逃げる気ですか？」

「逃げるも何も怪しい人の話を聞いちゃいけないと先生から教わっただけですよ。」

そのまま謎の三人組を置き去りにしようとしたがいつのまにか自転車の進行方向には三人組の一人、木刀を持っている人物がストンプをかける。というよりその木刀は僕の首を狙っているようだ。

「断罪！」

首筋に木刀の気配が近づいてきたが僕は難なくそれをよけた。（男子高校ではなぜか誰かとけんかしたとき怪我をしないように避ける方法などを習った。）さすがにこのまま自転車に乗ったままだと辛いので降りることにした。

「！」

避けられたと知って意外に驚いてるようだ。そして一人目が再び叫ぶ。

「今の彼は人間のはずよ、皆でかかれれば勝てるはず！」

三人組はさつさと僕を囲み一気に襲い掛かってくる。だが、この位ならまだ大丈夫である。（やはり、一人で大人数とやり合う方法をあの高校で学んだ。）

スイ、スイ、スイ。

竹刀、木刀、竹箒を順に避け三人の足を思いっきり引つ掛け転ばせる。

「きゃ」

「きゃあ」

「く、のわあ。」

そのまま無視して自転車にまたがり今度こそ脱走を計画。

「あばよ、とつつあん」

最後にベルを響かせ僕はオレンジ色に輝く太陽に向かって自転車をフルスピードで動かした。

「まちなさーい」

そんな声がしたような気がしたが今の僕には関係ないことだ。しかし、まさかあの高校の体育の時間で習ったあれがこんなに役に立つとは思わなかったな。今度先生に御礼を言っておいたほうがいいのかもしれない。

家に帰り着く数分前にまた母さんからのメールが届く。

『夕飯は既に準備しているからね。仲良く食べて。』

却下である。あの二人と食べるぐらいなら僕敵にはそこらへんで野良犬を眺めながら雑草をかじっていたほうが気が休まる。

家に帰り着いたときには太陽は既になくなっており、家には明かりがついていた。僕の部屋に行くにはその前を必ず通らないといけないがどうしたもんだろう。こうなったら突撃するだけである。今日の晩御飯話と考えることにして部屋に入ったらこの前買ってきた鍵をつけてさっさと寝ることにしよう。まず、始めが肝心だ、失敗はろくな事を生まない。

玄関を静かにあけて一気に走る準備をする。

「!？」

走り出そうとして気がついた。今の僕の足元には細い紐が引いてあり、どうやらこれに引っかかってしまったら音が鳴るような仕掛けと思われる。いつから僕の家はこんなセキュリティのある家になったんだ？先程のような変質者がそんなに多く出ているのだろうか？



それを飛び越しそのまま一気に駆け出す。明かりが漏れている部屋の前を息を殺して駆け抜けそのまま自分の部屋がある二階へと続く階段を駆け上がり自分の家に転がるように入り込み買ってきた鍵をかける。

完璧だ、今まで生きてきた中でこんな完璧に事を運んだことはない。

自画自賛しながら僕は既に置いていたベットに入りそのまま眠りについた。明日早く起きて体を洗い早めに学校に行こう。そうすればあの二人組みに合うことはまずないはずである。

いろいろあつて疲れていた僕は目を閉じて二分以内に眠りの世界に旅立つことに成功したが見た夢は最悪そのままであった。あの双子と追いかけてくことをしている夢であった。

昨日宣言したとおり僕はかなり早い時間帯に起きることが出来た。鍵をあけて廊下を見渡す。

僕の部屋は双子の部屋に左右を囲まれており、何か物事が起きた場合すぐさま首を引つ込む準備をした。

だが、辺りは静かなまんま僕はそのまま階段をおりシャワーを浴びて学校に行く準備をしてから朝食の準備をする（昼食を食べるまでの時間はあるはずである。もし作っている間に上から降りてきた場合はそのままにして学校に行くことにしてある）。僕の記憶が正しければあの二人が起きてくるにはまだ時間があるはずである。

朝食をあらかじめ食べ終わった頃に二階から音がしたので僕は靴を引っつかみ家を後にした。

そのまま走って学校に登校、ぼろぼろだった校舎はどこにもなくとてつもなくでかい校舎が僕を見下ろしていた。

適当に中に入って職員室を捜し始めたがこんなでたらめに広い内部で探すなんて無駄な行為だ。仕方ないので近くにいた男子生徒に話し掛けた（さっきから女子生徒しかいなくてかなり不安であった。あの双子のせいなのか僕は女子が少々怖い。）。

「あの、すみません。職員室はどこですか？」

「うん、ああ、あっちに行ったら十分ぐらいでつくと思うよ。」

礼を言って走り出す。このままではいつあの双子に出くわすか分かったものではない。

職員室につくまでの間先程の男子生徒以外男子生徒を見かけることは全くなかった。

「すみません、今日からこの高校に通うはずの天道時 時雨です。」

職員室の前に立っていた人に話し掛ける。どうやらその人はこの職員室を管理しているような人みたいで用件はこの人に言わなくてはいけないようだ。先程見かけたポスターにそのようなことが書かれていた。

「……………ああ、確かにそうみたいです。君の担任の先生はあの先生ですよ。」

職員室にいるまだ若い部類に入る男子生徒を指さして答えた（刺すのは少々失礼ではないのであるか？）。僕はそのままその先生の所まで歩いていき自己紹介をした。

「ああ、よろしく、『紅時雨』君。実は僕の兄さんは君が前にいた男子校の体育の先生なんだよ。さて、そろそろ教室に行こうか？」

少々厄介なことを知っている先生の生徒になってしまったようだ。この先生は見た目いい人なので僕が番長であった事は黙ってくれているだろう。

「さて、時雨君、この高校は新しく変わってしまったてね、今いるのはどちらかと言うと女子の比率が多いんだ。それに大半がお嬢様みたいだから気をつけるんだよ。下手なことをしたら君はこの世に入れなくなるよ。」

この共学高校もこんなに変わってしまったのか？？しかもお嬢様が多いらしいしそれなら男子の身は狭いんだろうな。校舎の廊下も車を通れる見たい出しまさしく驚愕（共学）高校である。

彼が担当している教室につく少し前にチャイムが鳴り響く。そして少し騒がしい教室のドアの前に立って僕のほうを見て激励の言葉をかけてくれた。

「男子はかなり少ないからって遠慮することはないよ。これからの高校生活をおおいに楽しんでくれると俺が教師になった意味があるというものだからね。」

そう言って彼は教室の中に入って行った。今僕の心には色々な出来事が渦巻いていたが願いは一つである。

あの双子と一緒にのクラスにはなりませんように！

神様はすべていい存在なんてありえることはない。なぜなら彼らは神様であり、全てを創造出来る者だから……。彼らは自分の意思で物事を決めるし、ケンかをする事など日常茶飯事である。そんな彼らが恐れているものはただ一つだけ、恐れだしたのは近頃……ある罪人天使が世界を一度消してしまったからだ。

## しよのに 女番長『蒼霜』、生徒会長賢治

イノセント・エンジェル

断罪天使は元悪魔と戦っていた天使でその名のとおり罪を犯したものを断罪しまくっていた。だが、例外として神様が出現させた罪人天使には何もせず黙っていたのであった。しかし、近頃になり神様は断罪天使にとある罪人天使を消す事を命令したのであった。

「……………僕の名前は天道時 時雨です。知流高校から転校してきました。」

今僕は教団にたつて自己紹介をしている真つ最中である。まあ、これ以上の自己紹介などはしない。

「じゃあ、時雨君の席はあそこだよ。君の隣に座っている彼女とは仲良くできると思うからね。」

教室の端っこ（窓側の一番奥の席）にずたずたの学ランを着ている女の子が座っていた。その子はこっちに、にこりと笑いかけながら席を立ち僕の前に立った。

「よろしく、『紅時雨』さん。私の名前は霜崎<sup>しもやまき</sup> 亜美<sup>あみ</sup>。」

亜美さんが『紅時雨』と言った所で教室が静かになる。しかし構わず彼女は話す。

「……………その名はある高校教師がつけたものらしくなぜこのよくな名前になったかはその場の状況かららしい。その教師が見た場

面は上級生が盛大な鼻血を吹き出してその光景がまさしくその名前にふさわしかったからである。その『紅時雨』は今に至るまで一度も負けることはなかった……」

僕の異名にはそんな意味がこめられていたのか。全くもって迷惑な話である。

そんな中一人の少年が立ち上がり僕に話し掛けてくる。

「……ある学校には『蒼霜』と言われる番長がいるらしいよ。」

男子生徒（この人を含めても四人しかいない）はそう言って席に座った。もう一度亜美さんに視線を向けると彼女は僕に拳をプレゼントしようとしていたのである。

「転校祝いの『蒼霜』からのプレゼントだよ。」

鋭く突き刺さるような拳を寸前でかわす事が出来た。またこれであの教師に借りが出来た。

「……出来たらプレゼントはもうちょい喜ばれるものがないなあ。」

「……なかなかやるね。」

その後彼女が言ったことは……

「単なる人間のくせにね。」

彼女は人間ではなく間違いなく天使である。そんなことが今の僕

には簡単に分かってしまった。あのおじさんが言っていたのはこの事だったのだろう。

「さ、後はクラスになじめるように俺は席を外させてもらおうよ。」

教室から先生が出て行き辺りは静かになった。

未だに亜美さんは僕を睨んだままである。

そして他の生徒、（ほとんどが女子生徒で皆が怯えている。男子生徒はほとんどが面白そうなものを見ているような目をしている。だが、一人だけは僕をじつと凝視していた）はいつでも逃げられるように体制を保っている。このままでは転校初日から独りぼっちになってしまう。何かここでわらわかすようなことをしなくては……

「そ、そんなに見つめられたら困るよ。」

一瞬教室にいた全ての生徒がぼかんとした顔になり（今目の前にいる人物も例外ではない）それを無視して僕は続ける。

「僕は女の子と話したことなんてほとんどないんだから。えーこれからよろしくね霜崎 亜美さん。」

手を勝手に取り握手してさっさと自分の席につく。未だに教室はあぜんぼうぜんしていたが少人数がしゃべり始めた。

「聞いてた噂と違うわよ。」

「そうよね、『紅時雨』に手をあげた者はその場で料理されると言っているものね。」

「……どれだけ僕は極悪人なのだ？このままではあまり言い噂は立たないみたいなのでここで自己弁護をしておいたほうがいいだろう。」

僕が立ち上がると教室はまた静かになったがそんなのことにしないで未だに固まっている亜美さんの隣、つまり教壇に立って皆に対して自己弁護を始めた。

「えーっと、確かに僕はあっちの高校ではそんな名前と呼ばれていましたがこっちの高校ではそのように呼ばれる筋合いはありません。」

またヒソヒソばなしが開始されたが一人の女子生徒が手をあげて僕に質問をした。

「それじゃあ、その上級生を血に染めたのは嘘なんですか？」

ここで嘘を言っても僕のためにならないことは既に承知済みである。（嘘についても今僕の隣に立っている人物が否定するだろう。）

「……事実です。」

また騒然となる教室（男子生徒は一人を除き嬉しそうにしていた）。

「けどそれは自己防衛です。今からその詳細を話していきたいと思います。」

その後きちんと事実を述べていってその他もろもろの噂話の真偽をはっきりさせていった。（結果的には彼女達が聞いてきたことは



全て本当の事であつた。）

しかしキチンと話してくれたおかげで僕は何とか皆に認めてもらうことが出来た。過去の血なまぐさい話からだんだん遠くなり至って普通の質疑応答までこぎつけることが出来た。

「時雨君はさつき女の子が苦手と言つてたけど何ですか？」

「……中学生ぐらいに義妹達からいじめられていたからです。未だに女の子を見ると少々怖いですね。」

ちなみに今の状況は凄まじい事になっている。隣から拳が飛んできていたのでそれを交わしたり防いだりしながら質問に答えている。これも天使になつたおかげだろうか？

「く、避けてるからつていい気にならないでよね。」

なぜそこまで彼女が本気になるか分からないが男子生徒は僕に尊敬の眼差しを向けている。（多分彼らは普段かわいそうなくらいこの人から虐められているにちがいない。あのときの自分の顔にそっくりだ。）まあ、これで皆から避けられることはないだろう。

「くっそー、こうなつたら放課後に必ず屋上にきてね。血に濡れた過去を持つ番長なんてこの学校には必要ないから断罪してあげる。」

彼女はそのまま教室から走り出し僕はそれを追いかけようとして男子生徒に囲まれた。

「ありがとう、君のおかげで日ごろの鬱憤が晴れたよ。」

「うんうん、これから宜しく。」

そんな話をしていたが一人の男子生徒が話し掛けてきた。先程、亜美さんのことを説明してくれた男子生徒である。

「やあ、僕の名前は霜崎しもざき 賢治けんじ。この学校の生徒会長をしているんだ。ちなみに亜美のいとこだよ。賢治と呼んでくれて結構だ。」

「ああ、うん。よろしく賢治。」

「しかし、時雨君はいけない男の子だね、女の子を怒らせてしまったらいけないじゃないか。」

それには教室中の女子が賛成する。

「たしかにそうよね。時雨君はいい人みたいだからあのこがしていた約束は護るよね。」

「………わかった、行つて来るよ。」

そういつたら今度は女子生徒たちがやってきたので僕は後ろに後退していったのであった。

「約束破つたら皆で時雨君を虐めるから覚悟しておいてね。」

これ以上恐怖症が進行したらたまらないのでここは素直に聞いておいたほうがいいにちがいない。

その後はこつちに来て初めての授業を受けたりもしたがその間亜

美さんが戻ってくることはなかった。そして休み時間になると僕はさっさと男子便所に直行。なぜそのような行動をとるかは察しのいい人なら分かると思う。事実、教室に戻って椅子に座るとクラスメートがよってきて僕に言ってくるのだ。

「さつき時雨君の義妹さんが来てたよ？」

「あ、そう。教えてくれて有り難う。」

男子便所にいればまず女子生徒が入ってくることはないの僕にとっては結界の張られている聖地である。午前中はそのまま繰り返してついに昼休みになった。昼休みは少々長いので逃げるのは辛いかもしれないのでとりあえずこの教室からは離れることにした。

「時雨君、一緒に食べないかい？」

「食べたいけど実は弁当忘れちゃったんだ。」

なんか買ってくるというて教室を出て行くことに成功。まだ誰も廊下に出ていないのでこれ幸いと思いつき廊下を走り抜けることにした。目指すは図書室、あそこならば本棚などがありばれることはないだろう。このまま放課後まで逃げ切れるかもしれない。

どすうう。

そんな目の前に竹刀が突き刺さる。拾ってみるとこの竹刀を見たことがあった。『手作り』

と焼印がおされている所を見るとどうやらこの竹刀は僕の義妹のものようだ。はじめてあった時もこの竹刀を持っていた記憶がある。

これが飛んできたということはこの近くに義妹（多分姉のほう。）がいるようだ。

「時雨、見つけたぞ！何で私をそんなにさけるのだ？」

いた、既に僕の後ろにいるようだ。こうなったら徹底的にまくしか道は残っていない」  
ようだ。

「・・・・・・・・。」

ダッシュ

「こ、こら逃げるな。何でそんなに私をさけるんだ。」

一気に駆け抜け曲がり角を曲がり近くにあった男子トイレに入り個室に入り鍵をかける。流石の彼女もここには入ってこないようだ。彼女が諦めるまでここにこもっていよう。

そしてそのまま時間が過ぎ昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴り響く。これでいったんは大丈夫のはずだ。

辺りを見回しながら注意して教室に帰ろうとして今度は木刀が飛んできた。その木刀には『味な出来』と焼印がおされておりこの木刀には見覚えがある。この木刀を持っているのは義妹（多分、妹の方）が初めに会った持っていたのを覚えている。

「兄さん、見つけたよ！なんで・・・・」

スーパーダッシュ！今の僕は普段の三倍の速さで動くことができるのだ。（嘘）

「あ、ちょ、何で逃げるのさ！」

スタコラさっさのはいはいはい！

曲がり角を曲がり隠れる場所はないか探してみるが女子トイレしかない。

こうなったらこの女子トイレに潜伏するしかない！僕は迷わずトイレに入り鍵をかけて足音がなくなるのを待ってからトイレの外に出る。そして今曲がり角を曲がった反対の方向に行こうとしてギョッとなった。無効から義妹（竹刀）がこっちに歩いてきているようだ。幸いなことにまだ気がついてないようなので手のうちようはあるはずだったが……

「!？」

今度は曲がった方から義妹（木刀）がこっちにやってきている。

絶体絶命のピンチだった。もう一度トイレに入りたかったがもしばれてしまった場合が恐い。トイレ以外にあるのは窓だけである。

「……覚悟を決めよう。」

ここは二階だから飛び降りても大丈夫のはずだ。

窓を開けて飛び降りる。下は運が良かったのかかなり高い位置までマットがつかれており難なくそこに着地することに成功。今日の追いかっけっことはどうやら僕の勝ちのようだ。

こんな話を他の人になしたらきつと笑われること間違いなしだが

この追いかけっちは僕の蜻蛉のようにはない命が関わっている  
のであの二人には悪いがこのまま教室に逃げさせてもらおう。

僕が降り立った場所は一度も見たことがない場所であり、日が当  
たっていなかった。

そんな場所から教室に戻ろうとしてもかなりの時間を有すると思わ  
れるし、この校舎は初めてである。

まさか学校で迷子になるとは思っていなかったのとおりあえず誰か  
を捜す事にして辺りをうろつく事にした。しかし授業が既に始まっ  
ているので校舎内には誰もおらず僕が自力で自分の教室まで辿りつ  
いたら放課後のチャイムが鳴り響いた。そしてほとんどの生徒は帰  
っていた。残っているのは生徒会長だけであった。

「やあ、初めての校舎探検はどうだったかな？」

「……迷子になってゲームオーバーさ。ところで案内して欲  
しい所があるんだけど屋上はどこにあるの？」

確か放課後には亜美さんとの約束があったはずであり、僕は皆に  
行くと断言してしまった。

「わかっているよ、そのために僕がここで待っていたんだからね。  
それじゃあいこうか？」

賢治の後をついて行くことにして僕は静かに歩き出した。彼はそ  
のまま話し出した。

「……時雨君はこの世の本当の歴史を知っているかな？」

「えーと、天国とか地獄とか魔界とか天界とかかな？」

うんと頷きさらに話を進める。

「それじゃあ過去に起こった戦争、そして最近になって起こった世界滅亡を知っているかな？」

肯定からは運動部のかたがたの無駄に迫力のある声が聞こえてくる。そして僕が知っていることはほとんどない。

「知っているなら無視してもいいけど少々話させてもらう。過去かなり前に魔界と展開は戦争をしていたんだ。理由は些細なことだったそうだがその戦争は長く続き両者ほとんど戦えないほどまでにその力は衰退の一途をたどっていったんだ。神様はいいかげんそんな事に飽きてただろうね、ある神様が新たな種族を誕生させてその戦争を終わらせたんだよ。」

それからその天使は天界に住み多くの仲間を葬ったので他の存在からは『断罪天使』と言われてんだ。

そして断罪天使はなんなのかさっぱり分からない存在なんだ。そして最近起こった事はその断罪天使の一人がこの世を一度滅亡させてしまったんだ。その断罪天使は『霸王』と呼ばれる家計の子供だったが今では『滅亡者』と呼ばれるようになってしまったんだ。神様はその罪人天使の反発を恐れその『滅亡者』を見つけ出し断罪することになっていたんだ。」

複雑な事情が色々あるんだなあ。今はそんなことよりこれからのことを考えた方がいいようだ。

賢治はもう一度僕に話し掛けてきて今度は僕のことについて話を始めた。

「……僕と同じように君もどうやらその断罪天使のようだね。君はもう契約を書いたのかい？ 契約と言っても紙の方じゃないから

ね。」

「紙の方じゃないならどういふ契約があるのかな？」

彼はにやりと笑い僕に話を始めた。とはいってもほとんど話しになつてはいないのだけだね。

「それは亜美から聞くといいよ。」

そう言つて黙つたまま歩き出した。そろそろ屋上に付く頃合いのよう出し、気合を入れるために頬に平手を繰り出す。

「……彼女を受け入れてあげるのがいいことさ。そういうことをするのも番長の仕事さ。ま、健闘を祈るよ。」

賢治はそう言つて屋上の扉の前で方向転換してそのまま帰ろうとしてまでもや僕の方を向いて付け加えた。

「困つたときは『我は、悲しみを背負いし天使』と言つてごらん。この呪文は君を手伝つてくれるはずさ。だけどこの呪文を使つと君を狙つてくる人が増えると思うから気をつけるんだよ。」

そして最後に……

「誰もいないからつて亜美を襲つちや駄目だよ。まずは友達から始めるのが礼儀というものだろうからね。」

「襲わないよ！」

そして笑いながら去つて行つたのであつた。さっき言っていたこ



とは単なるジョークというものだろうか？

そんなことはさておき僕は屋上の扉を開ける。風が吹いてきて僕の顔などに当たる。そして僕の目に移るのはオレンジ色の夕焼けをバックに腕組して立っている女の子。

「遅かったね、もしかしてビビッタリしてたの？」

「はずかしながら校舎で迷子になってたんだよ。昼休み校舎を歩いていたらしいあつてね、さっきようやく教室にたどり着いたと言っことさ。」

この発言に嘘偽りなどは全く含まれていない。真実100%である。

「ま、いいかそんなことより『紅時雨』さんはもう用意が出来ているのかな？」

「？何の用意。」

「救急車の用意だよ！」

彼女は僕にあのときのような鋭い拳をプレゼントしてきた。僕的には今度はもうちょっと相手をいたわるようなプレゼント（ジュースとかお菓子とかそんなもので結構だ。）が良かったが今はそんなことを考えている場合ではない。

避けることに専念しなければ本当に救急車を呼ばなくてはいけない。もつともここで僕が倒れた場合誰が救急車を読んでもくれるかは謎なのだが……

「そおら！これならどう？」

今度は回しげりが僕の髪の手をすすめていく。そんなことが後何回か続き、それを僕はさっさと交わして距離をかせぐ。稼ぐならお金を稼ぎたい気分だが（男子高校生には色々が必要な物があるのだ。）今は距離で我慢しておこう。

「しょうがないね、悪いけど私の家の門番は夕飯を皆が食べ出す前なんだ。」

もしかしてこれで許してくれたのだろうか？それなら僕もさっさと帰って部屋に閉じこもらないとまた僕は追いかけてこをしないといけなくなるにちがいない。

「……本気を出してあげるよ。人間の君に対して敬意をはらってね。」

彼女の体を白い光が包むように見えた。

『我は、罪を犯したものを断罪するために生まれし者。』

その光は彼女の背中に集まり白き光を発する何かを形作る。その形はよく物語などで見ると天使の羽というものになった。彼女はショートカットの髪を揺らし僕を睨み地面をけり一気に僕を射程範囲に入れる。

僕は心の中で思いつきり叫んだ。

（けんじー、襲われたのは僕のほうだー！）

先程よりも幾分か早い鉄拳が僕の顔面を狙って飛んでくる。

「断罪！」

そう叫び更にスピードを上げる拳を僕はギリギリでかわすことに成功した。これがゲームだったらボーナス位は貰えるかもしれない。

「へえ、がんばるね。だけど余裕はないみたいだから……次で終わりにしてあげるよ。」

今度は彼女から距離を取った。そしてあの光がまた強くなり今度は彼女の右腕に集まり形を変える。

「……今日の私の家の夕食は串揚げだからおかずにしてあげるよ。」

形作られたものは白い光を放つ剣。その切っ先を僕に向けて突っ込んでくる。この速さは流石に避けられないので諦めて刺される事にした。

ブスリ！

「ぐうう。」

刺されるといっても心臓のない方をかすらせるようにするので痛みはあるがまだ動ける。そして剣は僕の体に深く突き刺さっているのでなかなか抜け出せないようだ。

「く、しまった！」

無言で亜美さんのはらを殴ろうとしたがやめた。ここで殴ってし

まうのは非情に簡単だが（実は刺された部分が非情に痛い。）、ま  
ず明日から話し掛けてくれる人はいなくなるだろう。そして僕は軽  
く亜美さんの腹を拳で殴り（このパンチなら赤ちゃんを泣かすこと  
も不可能であろう。）彼女の耳元で囁いた。

「……………君の勝ちでいいから早くはなれて欲しいんだけど・  
・」

なぜなら僕には深く刺さっている剣があり、深く刺さっていると  
いうことは彼女の体が僕の体とほとんど触れ合いそうな状況なのだ。  
こんな不毛な勝負は負けで結構なので早くはなれて欲しい。

「……………認めないよ！止めを刺すなら今がいいのに何でささない  
んだよ！」

そろそろ我慢の限界だ。僕は自分で剣を抜き、彼女から体を離し  
た（なんかこの表現怪しいような感じがする。）。

そして僕の我慢の限界が極限まで上がる（いつておくが変な意味  
での我慢が切れたわけではない。）。

ぐうううううううう。

「……………」

夕闇がだんだん広がってきている辺りに響く僕の腹の虫の鳴き声。  
今日はばたばたしてお昼を食べるのを忘れていたのだ。

目の前にいる亜美さんは啞然としているので僕は回れ右をして校  
舎の中に入った。一応別れのあいさつをするべきだと思うので振り  
返り右手を上げる。

「じゃあ、また明日。後これからよろしく。」

僕はそのまま屋上を後にしてそのまま家にかえる事にした。貫通していた胸の部分の痛みが既にひいている。これも天使になったからだろうか？

学校をそのままとぼとぼと歩いて出て行き、家にかえたらまた大変かもしれないなと思っていると大変な出来事はすぐそこまで来ていたらしい。義妹ではなかったが僕の目の前に現われたのは昨日の三人組であった。服装は変わっていたがつけているものと手に持っているものはかわりはないようである。（一番得意そうにしているのは袋に穴を空けている人物である。）

「……今日の夕飯なんにしようかなあ。早く帰らないとあの二人が部活から帰ってくるからなあ。」

こういう状態に陥ってしまったたら平常心である。いつものように振舞っていれば（僕に独り言を言う癖はない。）きっと大丈夫だ。

「……あの……」

あっちの木刀を持った人が話し掛けてくるがここは無視だ！意味の分からない連中を友達をこれ以上つくるよりも明日（今日は週末であった。）学校で普通の人物達と仲良くやるべきである。しかしかといって僕の頭の片隅では悪魔と天使が議論を掛け合っていた。

「どうして無視するんだ！昨日のように遅いかかって来る行為よりも今君は酷いことをしているんだぞ！君にはあの人たちがどんな気持ちで君に話し掛けているか分かっているのか？」

天使がそんなことを言っていると悪魔はこんなことを言っている。

「おいおい、いきなり襲い掛かってくる方が悪いに決まっているだろうに。お前の頭の中はスラスラでとつても通気性抜群な頭になってしまったのかい？ここはこのまま帰るべきだ。どうせ来週の今頃にはまた待ち伏せしているに違いないぞ！確かに無視するのはいけないことだ。話し掛けても深追いするようなことは避けたほうがいいに決まっている。」

全く持つて常識をわきまえた悪魔だ。ここは両者の意見を聞いて無視するのをやめることにした。

そしてもう一度木刀を持った人が話し掛けてくる。（多分ここにいる人物は全て女の子であり、人間ではないと思われる。）

「……あの、無視しないで下さい。」

その声はなんとなくどこかで聞いたことがあるような気がしたがきのせいだろう。なんにせよこの人には謝っておかないといけないようだ。

「無視してすいません、これ以後無視をしないように努力したいと思います。……それで何か僕に用件があるんでしょうか？」

相手はやはり驚いているようだ。

「いえ、もう結構ですよ。そんなことより今回はあなたとお話にきました。」

僕には覆面を被っている人たちとはなす事は特にないような気がしてならない。

「……何の話ですか、できれば手短にお願いしますよ。わけ合  
って今日の昼から何も食べてないからフラフラなんですからね。」

そういつたら竹刀が飛んで来た。僕はさっさとそれを避けて投げ  
た本人を見る。

「暴力反対ですよ。悪いですがもう帰らせてもらいますね。」

流石にいきなり竹刀を飛ばしてくるのは失礼極まりないだろう。  
僕は彼女達を警戒しながらその横を通り過ぎようとしてなんとなく  
罪悪感にさいなまされたので一つだけ彼女達に渡すものを作った。

「……話すだけなら電話でもいいですよ、流石に電話で攻  
撃されることはないと思いますから一応僕の携帯電話の番号を教え  
ておきますよ。」

二枚の紙切れに番号を書いて二人に渡す。（僕に竹刀を投げてき  
た人物には当然のように渡したくはなかった。）二人は喜んでいた  
がもらえなかった一人は僕をじっと見ている。このままにしてい  
たら所構わず襲ってきそうな雰囲気だったので仕方なく紙に書いて渡  
す。

「一応、僕の携帯電話のアドレス帖には母親と父親以外の番号は載  
ってないので（その昔は不良どもの番号が載っていたがこの前携帯  
を変えたので綺麗さっぱり消滅させることに成功した。ついでにい  
うなら義妹達のアドレスも載っていない。）僕としても話し相手が  
出来て嬉しいですよ。けどあまり女の子は苦手なのでうまく話せ  
ないと思いますけどね。さて、僕は帰ってもいいですか？」

全員が首を縦に動かしたのを見て僕は歩き出そうとしたが木刀を

持っている人物に再度話し掛けられた。（未だに竹箒を持っている人物が話したところを見たことはない。）

「・・・あの、なんで女の子が苦手なんですか？」

「それは過去に血のつながっていない義妹達に恥ずかしいことに虐められていたからです。それがきっかけで僕はこの土地から一度去っていますから。また同じ屋根の下に暮らすだけでも未だに抵抗があります。」

大体の家庭は逆だろうが僕の場合は違う。

「・・・虐められた？」

「ええ、夜僕の部屋に来てプロレス技かけていたりトイレに入ってたなら出れないようにしたりそりやもう辛い日々でしたよ。」

「それは、多分甘えたかったのだと思いますよ。」

どこの国にプロレス技をかけたりする愛情表現の仕方があるのだろうか？

「・・・そうですね、とりあえず今度そんなことをまたされたら行方をくらませることにしているんですよ。もしそうなりしたら僕は二度とこの街に帰ってこないと誓いますよ。」

ビックリしたようにその木刀さんは黙り込み残りの二人も黙り込んだ。何かそんなにおかしいことをいったであろうか？

「それじゃあ僕はこのまま帰らせてもらいたいと思います。さよう



なら。」

後ろから不意打ちされるかかなり心配だったがその必要はなかったようだ。僕は安心してできるだけ小走りで家にかえることにした。もしかしたら既に帰ってきている可能性があるので早く何とかしなくてはいけない。

そして幸いなことに家にはまだ誰も帰り着いておらず、僕はさつさと夕飯を作り（念の為あの二人の分も作っておいた。）その間に洗濯機を回してから風呂に入り自分の部屋に静かに入って鍵をかけた。

すると携帯電話が鳴り響き手にとって見るがメールではないようだ。

『もしもし、時雨さんですか？』

「はい、そうですがどなたですか？」

電話の相手はしばしば黙り込み何か考えているようだ。

『謎の美少女です。ちなみに担当は木刀です。』

さっぱり意味の分からない自己紹介である。

「分かりました木刀さん、それで今日は何のようですか？」

やる事もないので（予習や復習をしなくてはいけない。）話をすることにしよう。

『あなたの義妹さん達と話をしてあげてください。あなたは逃げて

ばっかりではないんですか？」

「……確かに逃げてばかりだが僕はあの二人と顔をあわすのは嫌である。」

「そうかもしれませんがどうせまた虐められるだけです。僕はあのときのようなことをもう二度とされたくないし、もう高校生だから兄妹もくそもあったもんじゃないですよ。」

『それでもいいから話を聞いてあげるだけでもいいから私のいうとおりにして下さい。、もしかしたらあなたが勘違いしているだけかもしれないじゃないですか！』

「……わかりました。検討しておきますよ。」

この話題がそんなに気にすることだろうか？僕としてはなぜ僕を待ち伏せしていたのかそっちの方が気になるのだが……

『……約束ですよ？』

「わかってます。自慢じゃないですが僕は今まで約束を破ったことはないんですよ。」

「わかりました。期待してますね。」

そしてそのまま一方的に電話を切られてなんで僕を襲ってきたか聞くのを忘れてしまっていた。彼女と約束をしてしまったのでこれは少々鬱陶しいが守らないといけないだろね。

嘘つきは何かの始まりとも言うし、ここは腹を決めよう。そういいながら僕はそのままベットにのめりこみ意識を夢の世界に送り

込んだのであった。どうせ明日は休日だからいいだろう。

ある神様は戦争のあつていた天界に行きそこで今にも事切れそうな天使を拾った。

別に情があつたわけではない、ただ単に実験に使いたいためにその天使を拾ってきたのである。

そしてその神様は天使になにかを告げ、彼に契約書を書かせ術を唱えた。するとその天使は悶えながら苦しみ、彼は初めての罪人天使となったのである。初めての罪人天使は『救世主』と言われ、その後多くの伝説を残していった。彼と神様の間でどのような契約が行われたか分からないがそのおかげで天界と魔界の戦争は終わりを告げたのだ。

しよのに 女番長『蒼霜』、生徒会長賢治（後書き）

この前の後書きはかけてなかったと思うので今回はキチンとかきたいと思います。何だかんだいつて結局時雨が主人公になってしまいました。が、これまでのものとは比較にならないほどちゃんとした話にしておきたいと思います。まずそのためにははなしが二十話位まで続けていききたいと思います。この話はほとんど昔のものと違っており、何処となくファンタジーのような気がしていきなりませんがどうぞこれからもよろしく願います。今回の時雨は昔の彼とはなんとなく違う部分がありますので新鮮な気持ちで呼んでもらえたら嬉しいと思います。

しょうのさん 休日、それは不幸のはじまり（前書き）

今回は（いつもですが・・・）なんとなくコメディーではないような気がします。

## しょのさん 休日、それは不幸のはじまり

悪魔、この世界においてもっとも初めに神に創造されし者の片割れ。彼らは天使と対になるものだ。戦闘が苦手な天使とは違い普段から力を存分に振るえる悪魔達は天使との間で起きた戦争で主導権を握っていたりもした。しかし流石の悪魔達も罪人天使たちには適う事はなかった……。

休日の朝。窓からは光が入っておらず雨がざああふっていた。別に雨が嫌いというわけでもないが僕の今の状況では今日一日中は家の中で過ごさないといけないことである。

起き上がり扉を開けるために扉に近寄り普通に扉を開ける。

がちやり

何か忘れているような気がしなくてもないがそのまま階段を降り時計に目をやる。

時間はまだ結構早い時間帯であの二人が起きているはずはなかったと思っていたがトイレの方から音がした。そして昨日電話でいわれたことを思い出して内心溜息をつきながらも朝食を作るためにキッチンに立つ。（僕はそこまで料理の腕はうまくないがあのだ二人が作ったものはあまり食べたくない。これもまた偏見だろうか？）

足音がだんだん近づいてきて僕の後ろ辺りで止まる。目玉焼きを作っていた僕の腕が固まる。

「…………あの、兄さんおはよう。…………」

どうやら先に起きてきたのは妹の方だ。あれからほとんど顔を見なかったのどのように変わったか想像しにくいことだがここはやはり振り返るべきだろう。

「・・・あ、ああうん。おはよう。・・・悪いけど食器を並べてくれないかな。」

後ろを振り返ることは出来なかった。だからどのような顔をしているか分からなかった。ただ義妹の妹は素直に頷いてくれたのであった。

「うん、いいよ。」

その声はいたって嬉しそうだったがなぜだかはわからない。ここで僕は後ろを振り返った。食器を並べているその横顔はあの時とあまり変わっていない。そういえば皿をフリスビーのように僕投げつけてきたことがあったなあ。あの時頭に当たって気絶したような気がするなあ。

「・・・蕾、涼と仲良く生活してたのかい？」

この義妹の名前は蕾つばきという。彼女はその姉と違いまだ話を聞く方であるが、姉よりも力があり多分僕より力は間違いなくうえに違いない。

「うん、してたよ。・・・兄さんのほうはどうだったの？あれから全く会わなかったし昨日も無視してたけど何でこの家からでったの？」

それはね、君達から虐められるからだよ。とはいえずにかなり遠回りな言い方になってしまふのは僕がこの女の子に対して恐怖を覚えていいるからだろうか？

「それは、これまでの生活に飽き飽きしていたからだよ。そして一人で暮らしたかったからさ。」

これでこの話は打ち切りにしたかったが蕾は食い下がってきた。

「もしかして私達がいたからこの家出て行きたかったの？」

正確に言うならあなた達が僕に様々なことをしてきたからである。そのおかげででたために僕のやわなハートはずたずたにされたんだよ。

さて、ここで正直に言うべきだろうか？言うべきなんだろうか？

「正確に言うなら違うけどね。蕾とその姉が僕を虐めたからかな。」

「え？兄さんを虐めたことなんて全くないよ。」

く、やった方はそんなに忘れるものだろうか？それとも僕が根に持つタイプだからだろうか？

「だって、夜に僕の部屋に来てプロレス技をかけていたりしてたじゃないか！」

ついつい声の調子が強くなってしまった。

「あ、あれはただそのお。兄さんが出来たのが嬉しかったからだよ。」



「ならなんであんな事してきたんだ。」

「それは・・・兄さんが全く私達に話し掛けてこなかったりしないから寂しくなったんだよ。」

確かにその頃の僕は人見知りをする性格だったのだ。（今でも変わりはない。昨日教壇にあがっていったのはそれだけ僕の切実な願いがあつたからである。）それにきょうからいきなり義妹なんていったってそんなに割り切れるほど僕はそんなにはつきりした人間ではない。そのことを蕾に告げると彼女は悲しそうな顔になった。

「・・・じゃあ、今もそんなことを思っているの？」

その顔に浮かぶのは悲しみというより恐れであるような感じがした、

「いや、今は一応義妹と思っているよ。とりあえず蕾の事はね。」

姉の方は全く持って僕に対して酷い行いばかりする。

そんなことはさておき僕は朝食を並べて蕾と共に食べ始めた。何か話したそうな顔をしている気がしてならなかったが僕が彼女にはなす事は特にない。そしてとうとう蕾が僕に話し掛けてきた。

「・・・あの、兄さん、今日どこか行かない？」

「・・・雨が降っているのに何処に行くんだい？」

そしてまた黙り込む蕾。少し後悔したがこれはこれでしょうがないだろう。なんとなく蕾をじっと眺めていると・・・

「うん？」

彼女の後ろに黒い霧のようなものが見えるのだ。ずっと見てないと分からないし、少しでも集中しないと見ることは出来ないようだった。一体全体このもやもやはなんなのだろうか、もしかして悪霊なのかもしれないので本人に直接聞いてみることにした。

「ねえ、後ろになんか黒いもやもやがあるみたいだけどそれ何？」

「え？」

彼女はそう言っただけで後ろを振り向くが不思議そうな顔をするだけであり、どうやら僕の勘違いのようみたいだ。昨日の網さんの白い光になんとなく似ていたようでもないがこれは一体なんなのだろうか？

「・・・そんなことより今日やっぱどこか行こうよ。姉さんも誘ってさ！雨が降っていてもいいから！」

その顔は切実な願いが込められていてもしこの申し出を断ったら二度とこの娘の兄でいられることはないに違いない。そして階段から音がしてきた。

「・・・わかった。どこかに行こうか？」

この雨の中何処に行くかはほとんどわからなかったがそれでも頷くことにした。

そして嬉しそうな顔になった蕾とその姉が顔を出したのは同時だったのかも知れない。ここで記載をしておこうと思うがこの姉妹は双子らしい所がほとんどない。姉の方が切れ長の目が特徴的で名前は

涼<sup>すず</sup>という。そして妹の方はつぶらな瞳である。身長は大体同じくらいで、体重は不明である。そして姉の方は低血圧らしく朝は不機嫌まっしぐら。

「・・・おはよう、蕾。おはよう・・・時雨。」

「ああ、おはよう時雨。」

涼は不思議そうな顔をして蕾のみ身元で何か話している。それに嬉しそうな顔で答える。しかしここから聞くことは出来なかった。で僕は立ち上がり食器を洗い始めようとしたが蕾にそれを阻止された。

「兄さんは先に準備してきてよ。ここは私達がしておくからね。」

階段を上がり自分の部屋の扉を開けるとなぜかそこには賢治がいてベッドに腰をかけていた。

「やあ、おはよう時雨君。」

全く持つて何処から入ってきたのだろうかこの生徒会長は・・・

「実はこの生徒会が編集、製造をしたこの本を君に薦めに来たんだ。作者は生徒会図書委員長だ。」

そう言つて渡された本の題名は『五界辞書』と書かれていた。大きさはホントの辞書よりある程度は小さい。

「今ならこの本がなんと千円！ちなみに定価は三千円！どう、お買い得だと思わないかい？」

・・・商売をしているのか？しかしこの辞書は僕にとって必要になるに違いないからここは買っておくのがいいだろう。

「分かったここは買うことにするよ。」

「・・・まさかホントに買うなんて思わなかったなあ。（小声）」

「？何か言った。」

「いいやなにも言っていないよ。」

賢治はそう言ってお金を僕から受け取るとさらにこんなこと言い出した。

「君は番長『蒼霜』を倒してしまったから今の高校でも君が番長だ。これによって君は今度から生徒会の一人として働いてもらうからね。」

「え、なんで？それに僕は亜美さんに負けを認めたよ。」

あの決着は僕がお腹が減ったので一方的に負けを認め、女の子を殴るのはなんとなく気がひける。これは偏見などではなくてただ単に僕が苦手としているからである。

「詳しいことは彼女に聞いて欲しい。それじゃあ僕は家にかえりましょう。」

雨降る窓を開けて賢治は呪文を唱える。

『我は、悲しみを背負い哀しみを癒すもの』

紅い光が彼を取り巻きすぐにその光りは血の色をした羽を形作り賢治はそのまま飛んでいつてしまった。どうでもいいことだが窓だけは閉めていつてもらいたかった。雨が入り込んできて部屋が濡れている。

「にいさーん、そろそろ行こうよー。」

そんな声がしてきたので僕はさっさと窓を閉めた後、かなり久しぶりにタンスを開けてみたがその中身は空っぽであった。しょうがないので学ランを切ることにしたのであった。財布を持って自分の部屋を後にした。本はベッドのうえにおいておいた。

玄関にはいつの間に着替えたのか分からないがお出かけモードの二人が傘を持って立っていた。薔は青いシャツにネクタイを閉めていてスカートをはいているし、涼は緑色のＴシャツを着ている。（僕は悲しいことに学ランである。）

「兄さん、学校に行くんじゃないんだよ。」

「そうよ、時雨何考えてるの？」

涼は僕を呼び捨てで呼んでいる。なぜかはじめてからそのように呼んでいるのだ。

「いや、実は僕の服が完璧にきれいさっぱりなくなっているんだ。」

そして薔と涼は顔をあわせて僕を見て同じにしゃべった。

「じゃあ、今日は服を買いに行こう。」

そして僕は靴を履いて傘を捜したが、僕の分の傘が見つかることはなかった。

「……僕の傘もないよ。これじゃ風邪ひくかも知れないな。」

これには二人が顔を見合わせにらみ合うようにして僕に言った。

「じゃあ、私と一緒に傘を使おうよ。」

やれやれである。僕は考えついたことをこの二人の義妹達にはなすことにした。

「それじゃあ涼と蕾が困るだろ、そういうもんは彼氏とするもんだと思うから僕が片方から傘を借りればいいんだよ。」

少々名残おさそうに僕を眺めて渋々ながら涼が僕に持っていた傘を渡した。僕としては近くに女の子がいると心が休まらないのでここは正直言つて僕の考えた策略なのである。（あまりにくだらな策略でもある。）

さて、一緒に外に出ると雨は小雨ながら降っており、それでもいくことにしたのはこの二人が無言で僕の後ろから眼差しというものをぶつけてきたからである。

「じゃあ、デパートに行こうよ。」

蕾のそのような発言によりデパートに行くことが決定。しかしながらこの後僕たち（主に僕）は不良に絡まれる運命だったらしい。

デパートに行く間は蕾が一人でしゃべっており、僕と涼は時折相打ちを打つぐらいであった。

「・・・兄さんはあっちにいる時に彼女とか出来たの？」

「ああ、うん・・・じゃなかった。いやできなかったよ。ぼくがかよっていたのはだんしこうだったからね。」

男子校で彼女など出来るはずはない。出来るとしたら彼氏ぐらいなモノである。

二人は同時に溜息を吐き出して今度は涼から話し出てきた。

「何で彼女作らないの？時雨ぐらいの顔なら面食いの女ぐらい彼女に出来るだろうに。」

僕の顔に関わらず僕は前にも言ったが女の子が少し苦手なのでまづはこれから直さないと彼女うんぬんどころではない。今、この二人と話すのも気疲れするものなのだ。

「それは・・・女の子が少しばかり苦手だからだよ。」

これをどういつふうに受け取ったのか知らないが涼は嬉しそうな顔になり、蕾は少々ながら悔しそうな顔になった。

「・・・つまり時雨は気の強い性格の女のことが好きってわけ？」

「なぜそうなるだい、僕は全体的に女の子が苦手なんだよ。」

なぜこんな会話をしなくてはいけないんだろうか？僕としては他

の話をしたいと思う。

「…………じゃあ、何時雨は女の子が嫌いになったの？」

これまたこの答えを答えたら困ったことになりそうなので……実際に薔が僕の目を真剣な表情で見ている。

「それは……そのお。過去にそんなことがあったからだよ。」

ここはお茶を濁すことにして絶命的な状況から逃げ出すことにした。デパートまではまだ少々距離があるので仕方ないので別の会話になってくれるのを祈るしかない。ここで今まで黙ったままだった薔が口を開きまた僕に質問してきたのであった。

「兄さんはあっちの高校で番長だったんでしょ？」

同い年で兄さんもないだろうが話題が変わってくれたのは非常にありがたい。

「うん、そうだよ。誰からきいたんだい？」

二人はにやりと笑い互いに笑いあった。

「賢治君から聞いたんだよ。兄さんが帰ってくる二日前ぐらいにね。」

全くもってあの生徒会長は何がしたいんだ。

そんな話をしているととうとうデパートについた。傘をたたみ、そのままに持っていていこうとしたが誰かが薔に話し掛けてきて状況は一変。これから僕は全く持っていない事件に巻き込まれるこ



とになった。

「よお、蕾ちゃん。」

なんとも柄の悪そうな青年が話し掛けてきたので僕たちは足を止めてその人物をじっくり眺めていた。まあ、簡単に言うなら不良と言っ奴だろう。

「……いこう、二人とも。」

藤の本人はそのまま無視して僕たちの手をひいて通り過ぎようとする。だが、この風量産はさらにしつこく蕾に話し掛けてきた。

「無視しないでよ、ここで会えたのも何かの運命。俺の彼女になつてよ。」

僕はなんとなく感心して（こんなに人がいる前でそんなことを言うのは僕には多分無理に違いない）その一連の動きを客室から眺めていたようだったがここから本格的にこの騒動に巻き込まれることになる。

涼はこの相手を睨んでみていて今にも殴りかかろうとする気配を感じていた。そして蕾はいきなり僕を相手との間に押しやってんでもないことを口走っていた。

「わるいけど、今の私には彼氏がいるんだ。ほら、この人。」

僕はそのまま相手の顔を眺めて首をひねっていた。（先程、蕾が言ったことをなかなか理解しかねたのであった。）他の二人も同時に首をひねっており、一番最初に理解したのは相手の不良さんだっ

たらしい。

「て、てめえ。よくも・・・」

理解してきた証として僕に突然殴りかかってきた。（未だに僕の頭の中では先程蕾がいつていたことを考えている途中であった。）僕はその拳をさっさと避けて反射的に相手の腹部に軽く拳をぶつける。その結果、相手の前に倒れるようなパンチのおかげで僕の軽いパンチは普段より威力を持っており、相手はカンフー映画みたいに吹っ飛んだ。

そして辺りは静かになり、今度はどたばた音がして警備員さんが慌てた顔をしてやってきた。

「時雨、蕾ここは逃げよう。」

幸いまだ扉の近くだったのでさっさと逃げ出すことにした。

他のお客さんが見ていたら僕が容疑者に見えるかもしれないが僕は被害者で間違いないと思う。そんなことを考えながらも傘を持って小雨の降る外に逃げ出し何処をどうやって帰ったか分からないが家にかえりついた。二人より足が遅かった僕は一番後から走ってきてどこかに傘を落としてきたのに気がついた。

「傘落としてきたから拾ってくるよ。」

蕾から傘を借りて涼の傘を捜しに行く。逃げるときに通った場所と思われるところをだんだん戻って・・・さっきの不良とであった。

「・・・あ、さっきは反射的に殴ってしまったけど大丈夫ですか？」

不良さんは僕の顔をかなり睨んでおり、その顔には何か復讐めいたものがあるらしい。またもやいきなり襲い掛かってきた。

拳が僕に迫ってきたが、昨日の誰かさんのとは比べ物にならないほど遅く感じられる。こっちにきている拳に僕の拳を思いつきり叩き込んだ。相手は苦渋の表情になり今度は無事な方の拳を繰り出してきたが悪いがここで時間を取っている場合でもないのでさっさと気絶してもらうことにした。相手の顔面に全体重をかけるようにしてパンチを繰り出す。

その不良は鼻血を吹き出しながら小雨が降っていた道路に倒れこんで動かなくなった。たぶん死んでいるかと思うので濡れない所まで運んでいき、救急車を呼んでおいたので大丈夫だとは思ふ。その後、その場を離れて傘を捜していたがなかなか見つからないので昼食も取らずに捜していたらとうとう雨は上がってしまった。雲の切れ目から夕焼けの太陽が覗いている。

「……時雨君、お探しのものはこれかな？」

雨がやんでいるのに青い傘を刺している僕を眺める一人の人物が道の十字路に立っていた。

「賢治、何処でその傘を拾ったんだ？」

彼が持っている赤色の傘は間違いなく涼の傘であると思う。

「デパートの入り口付近で拾ったんだよ。君たちが血相変えて飛び出していったときに落としていったんだろうね。」

御礼を言つて受け取ろうとしたが彼は傘を渡してくれなかった。

「悪いけど少々ばかりついて来て欲しい場所があるからそこに行くまで話をしておくよ。なあに、それが終わったらちゃんと傘は返してあげるよ。」

その顔が笑っているのに気がついて少なからず警戒する。

「君は君の義妹をじっくり見たことがあるかい？」

その足が目指しているのはたぶん学校である。そして賢治が言っていることは今朝感じたあの黒いもやもやに違いない。

「……あの黒いもやもやの事かな？」

頷き彼は顔を上にあげて何か考えているようだ。

「……あの二人は悪魔なんだよ。悪魔は天使と違って普段から力が凄いから普通の人間に甘えたりしたらその人間は少々どころか骨にひびが入るかもしれないね。ま、その人間が牛乳を飲んでいてカルシウムを取っていたら話は別けどね。」

つまるところもしかしたら僕が過去彼女達に虐められたという過去はタダ単にあの二人が甘えてきただけなんだろうか？

そんな感じで考えていたがトイレの件がまだ残っている。これはどう考えてもあっちが悪いに違いない。

「……時雨君、君はどういう状況でトイレにはいったんだい。」

どうやら賢治は何でもお見通しらしい。あの時は確かこんな状況だったと思う。

「えーと、確かお風呂に入ろうとしてたら誰かが入っていてしょうがないからトイレに入ったんだっけ？」

「そのトイレは何処にあったんだい？」

トイレは確か……

「……お風呂のすぐ隣にあったと思うよ。」

「……もしも、あの二人のどちらかがお風呂に入っていて偶然着替える服を忘れてきていてさらにタオル一丁の姿であり、そこに君がばったり出くわそうとしたらどうなると思う？ 僕だったら君が入っているトイレの前に何か置いて急いで着替えてくるだろうね。」

ここは啞然とするしかないだろう。全くもってついてないね。僕をこの土地から追い出したのは完璧な勘違いだったに違いない。

「ちなみに入っていたのは双子の姉の方だと思うよ。妹の方なら君にちゃんと事情を説明していると思うからね。」

アリエール。全く持ってこの世の中は勘違いが多いものだ。

「さて、これで話は終わり。後は君をあの場合所に連れて行ってからそこでまた違う話をさせてもらおうかな。」

そして一方、家ではこんな事が起きていた。

「……蕾、さつき時雨の事を何で兄と呼ばなかったのよ。」

「それは……単なる反射だよ。」

このあと二人は家が半壊するほどの喧嘩を繰り広げ、かえってき  
た時雨に少々怒られるのであった。

「てかさ、悪魔って世間一般的にやっぱり悪い存在なのかな？」

「うーん、怒らせたら怖いぐらいでそんなに悪い方々ではないよ。  
まあ、根本的に人間と一緒にだと思いうし実の所罪人天使のもとなっ  
た種族の一つでもあるんだ。この話は学校の地下にある喫茶店で詳  
しく話してあげるから期待しておいて欲しいね。」

学校の地下に喫茶店なんてあったのは知らなかったが（まだ学校  
に行った事は一度しかない。）どのような所かは少しばかり興味の  
あることでもあった。この後時雨はまたもや思わずとばかり興味を  
受けて少しばかり賢治を恨んだりもする。

天界は神の使いたる断罪天使と罪人天使が主に住んでいる場所であ  
る。

（罪人天使はもとよりその数がかなり少ないので見ることはまれで  
ある。

）そして魔界には天界と違い多くの種族が住んでいる。

これらを二つに分けるなら『悪魔』と『魔族』。悪魔は主に天使た  
ちと戦っていたが魔族はほとんど干渉しておらず、（魔族をさらに

細かく分けようとするときが無い。）とばかりが来たときのみ  
それに対処していたのであった。そんな魔族は悪魔よりも力が無い  
ので彼らはどちらかというと人間に関係したりもしたものだった。

しょのさん 休日、それは不幸のはじまり（後書き）

えー、みなさんこんにちは。そろそろというかなんとかはなしをもっと面白くしていきたいと思います。後、何か不満がある場合（誤字があるとか）は評価してくれると大変嬉しいです。さて、次回は、知っている人は知っているあの場所の登場です。



しよのよん　夕方からよるにかけて・・・そして家屋の全壊（前書き）

今回はいつもより面白いと思います。

しよのよん　夕方からよるにかけて・・・そして家屋の全壊

魔界と人間界をつないでいる場所は極力少ない。

これは別に魔界側が人間達に知られたくないからではなく、扉を作るのがかなり面倒であり、時間と経費（魔統側も色々事情と言うつがあるのだ。）がかかるので扉を作ったりは滅多に無い。天界側も同じ事であり、特に彼らは何故だが白がある所からしか行かないようにしているらしく、天界側の扉は白いものが多い。

賢治が先に歩きながら学校の校門を軽く飛び越して薄暗い校舎の前にある校庭に降り立つ。そして後からついてきていた時雨に促す。

「ほら、早く飛び越してきたまえ。」

これに対して不承不承ながら頷き学校に不法侵入する。彼はこんな学校に喫茶店なんかあるのかどうかかなり疑わしくも賢治の後についてきたのであった。

「それじゃ、行こうか。」

賢治は走り出して既に夕闇となった校庭をさっさと先に走っている。

「あ、ちょっと待ってよ賢治。」

時雨はその後を追いかけていき、なんとなくここが自分の知っている学校とは違うような感じに教わっていた。

校舎のほとんど脇の方にくっついていたマンホールのようなものをどかし下に通じる階段を下りる。

先に降りた賢治が未だ上にいる時雨に声をかけて降ろされると時雨は地下の意外な広さに圧倒された。ある程度まで見えるがその先は曲がり角になっておりここからでは見ることは出来ない。賢治は近くにあった一つの扉を開けた。時雨は扉の隣にあった意外な札を眺めて賢治に話し掛けた。彼がどのようなものを見たかと言うと・・・

『霜崎 賢治はこのお店に入っただけじゃありません。もし入った場合は警告無く消えてもらいます。』

とっても危ないことがかかっている札であった。

時雨が賢治に言う前に緊急事態が起こってしまった、その結果銃をぶつ放す音が時雨の鼓膜を響かせていたのだった。

「性懲りも無くまたきましたね、賢治さん！」

手に物騒な重火器を持っている女性が賢治に対して声を掛ける。その女性は奇麗であり、優しそうでもある。だが、彼女の着ている服装はいかなものだろうか。

「メ、メイドさん？」

知りもちついたまんまの時雨は涼しい顔で扉の中を見ている生徒会長にたずねる。

「ああ、実はここメイド喫茶なんだよ。」

「今度はお友達まで連れてきたんですか？そっちの方も含めてお墓の中に一緒に骨を埋められたいんですか！」

もう、なんだろうか。時雨の頭の中は彼が今まで生きていた中で一番混乱していたに違いない。

「まあまあ、彼は僕の友達じゃなくて親友なんだよ。」

「……じゃあ、なおさら消えてもらわないといけませんね。」

その銃口の先にあるものは考え込んでいる時雨の顔である。そのことに気がついた時雨はその場からさっさと離れてどうにかして生き延びる方法を捜す事にした。

そして両者黙ったまま過ごしてメイドさんの向こうからもう一人メイドさんが出てきた。

「……おや、賢治さんではありませんか。今日はどのような用事でここにきたんですか？」

その声には何処にも殺気などこもっておらず、友達に接するような感じであった。賢治はこれに対して

「いえ、ちょっとこっちに転校してきた友達と話すためにここにきただけですよ。」

と答え先程のような殺伐としている状況ではなくなったのは確かであった。

「こちらが賢治さんの友達ですか？」

時雨を眺めて優しそうな笑顔を向ける。ぞくに言う天使の笑顔と言う奴である。

「ええ、そうなんですが美奈さんから命を狙われていたんですよ。」

賢治がそう言っ て美奈と呼ばれたメイドは恐縮しきつ た顔で後から来たメイドさんに頭を下げて弁明に走っていた。

「・・・だつてあの賢治さんのお友達と聞いたら普通の人は間違ひなく誤解しますよ。仕留めて置いて損は無いはずですよ。」

なんともまあ、物騒なことを言っているのだと時雨は思いながこのやり取りを眺めており賢治はその光景を別にどうと無く見ている。

「・・・確かにそうですね、それではこの方に課題を課せて試してみればいいことですよ。」

賢治と美奈は嗚呼、なるほど。と頷いていたのだが当の時雨はそんなことが分かるはずも無い。しきりに頭をひねるぐらいしか出来ていなかった。

「それでは今回の課題は鬼ごっことしておきましょう。鬼はそちらの賢治さんのお友達と賢治さんで逃げるのはこの喫茶店のメイドで結構ですね。」

美奈はそれを聞くと時雨たちがやってきた階段を駆け上がり外に消えて後からやってきたメイドは店内に戻って行った。そこに残されたのは未だにしりもちをついたままの時雨と賢治だけであった。

「鬼ごっこって何？」

「・・・そうだね、確かに彼女達がいないうちに君に話しておこ

うか。はっきり言うけどこの鬼ごっこは普通の鬼ごっことは違う。下手すると病院送りにされる危険性もあるから心してかかって欲しい。」

巻き込まれた時雨に至っては全くもって迷惑極まりないことこの上ないのだがここで文句をいっても仕方が無いと思ったのだろう。静かに黙って聞くことにした。

「まず、逃げる方は鬼に対してどのようなことをしてもいいんだ。たぶん重火器を使ってくると思っけどね。」

そんな鬼ごっこでは鬼の方が殲滅されるのは目に見えて分かる。

「ちなみに鬼はそのような飛び道具を使用してはいけないルールなんだ。」

この時点で鬼が生き残ることはほとんどゼロに近いと思われるのは時雨の頭の中での計算も必要ないくらいである。

「鬼は相手の意表をつくようなことをして逃げる人にタッチするなりすればそれでいいんだよ。以上でルール説明終わり。」

全く持って鬼さんがかわいそうなルールであると時雨は思っていたが自分達はその鬼だと思い出して少々ながら恐怖を覚えていた。まだまだ病院生活なんてしたくないのである。

そして店内から完璧に武装してきたメイドがそろそろ出てきて階段が上がっていった。最後に出てきた先程の冥土は武装せずに時雨と賢治の所までやってきてルールに補足をつけていった。

「今回の審判は私がしたいと思います。賢治様のお友達は初心者な



た。そして近くには目を回して倒れているメイドたちの姿が見えてそれらをカメラに収めている賢治の姿があったのである。

既に暗くなつた辺りに響く音は賢治のカメラの音だけであり、だんだん怪しい部分をとろうとしているので時雨はそれをやめさせるために賢治の隣に行った。

「ほら、次に行こうよ。そんなのとつてたら後で怒られるよ。」

賢治は渋々ながらも承諾してくれて校舎の内部に進入することにした。そして先程拾つた小石を廊下に放り投げている。

シュタタタ

畏が発動したらしく上から様々な鋭利なものが落ちてきた。このまま進んでいたら痛い思いをしていたに違いない。

「・・・時雨君はあっちの方から回っていつてくれ、僕はこっちから行くからね。」

そう言つて二人は分かれて進むことになった。

賢治が見えなくなつてすぐにあっちから凄まじい音がしていきなり激しい戦闘が行われているに違いない。

相手の思惑はまず賢治をつぶすことにしているらしい。

しかし、時雨の方にも少なからず敵は拝眉されているらしく教室からいきなり飛び出してきたり天井から飛び込んできたり、窓を割つて進入してきたりと様々な登場をしてきていたりもする。その相手にも難なく対処できていた時雨はなんとなく恐怖を覚えていたりもする。特に恐かつたのは柔道技とプロレス技を使ってくる二人であった。（過去の勘違いの記憶と彼は女の子が苦手なので体が触れた



だけでも頭がクラリと来たりしたものである。)

そしてそのままタッチをするときも恐々しながら(相手を行動不能にしていって降伏をしてもらっていた。)も賢治よりかなりゆっくりに目のペースで進んでいたのであった。

反対側の廊下を進んでいた賢治の方は時雨の選んでいた廊下よりも格段に敵が多く、さらに様々な罠が仕掛けられていたりもした。落とし穴があつたり、いきなり床が落ちてきたりもしていたが賢治には全く通用するような気配もせずそんな罠はほとんど賢治により解除されていき、なかには賢治がその罠を敵のメイドに向けて反対に相手を戦闘不能に追いやっていた。しかし、進むペースは時雨とあまり変わりはないのである。彼は別に女の子が苦手でもないのだが……

「いやー、やっぱり時雨君をここに連れてきた甲斐があつたなあ。

写真が取り放題だよ。」

そんな感じにカメラを片手に気絶しているメイドたちを遠慮なくその手に持つものに収めていっていたからである。

ちなみに彼はメイド萌ではないのでここで少しばかり彼の趣味について書かせてもらいたいと思う。

彼は頭もよく、顔もいい、性格も悪くないのであるが、そんな彼が愛してやまないのはずばり物である。

それが別になんであれ、その作った人物が丹精こめていればその形が何であれ彼はそれに恋をしてしまう性格であつた。

具体例をあげるなら焼き物とか職人の技が光る刀などであつたりもする。

あとというなれば、美少女フィギュアも大好きだつたりする。

そんな彼が何故あまり興味のなさそうな彼女達を取っているかはまた別の話だつたりもするのである。

知り合いにそのような人物がいてその人が彼女達のような格好をし

ているのが大好きだからである。

そしてその人は優れた職人であり、賢治が取ってきたものを参考に  
して職人なりの業を光らせて写真をとってきた代償として賢治に作  
ったものをプレゼントしてくれるのであった。しかし、それには条  
件があり、彼が気に入る角度やポーズで無ければ代償はあまりいい  
ものではない。だから賢治はどのように写真をとっているものであつ  
た。（賢治の家にもメイドはいるのだが、彼はなぜかそれを写真に  
納めようとしない。）

「さて、そろそろ本気を出していきますかね。」

これまで、賢治とメイドが繰り広げてきた様々な戦いは賢治の圧  
勝により幕をひいている。

多勢に無勢なのに賢治は普通に彼女達に勝っており、負けた彼女達  
はばつゲームとして賢治になすがままにされている。

（賢治はただ彼女達に床を雑巾でふかせさせたり、駅前で青春を自分  
なりに表現させられたりするのである。）検事のそのときの気分で  
決まり、彼は法律を違反するギリギリの事をさせたりするときもあ  
る。まあ、彼としてはお遊び程度だったが、それ以降彼女達は賢治  
を眼の敵にしており、このまえ彼が行ったときはたらいが上から降  
ってきたりもした。

とにもかくにも、彼としてはこの勝負はお遊びであり、本気とい  
っても手加減の範囲の中にある。

そしてその後、やはり彼は立ちふさがる敵たちをからかい半分で  
ゆつくりと倒していくのであった。

時雨はとうとう幹部クラスと思われる相手と戦っており、強さで  
戸惑うでなく相手が相手だったのでかなり苦戦していた。

これまでの戦闘スタイルが相手に伝わっていたらしく、つまるところ

るは時雨の弱点がばれてしまっていたらしい。時雨はこれまで戦っていた相手に指一本触れていないのでこの幹部を相手にしていたときも指一本触れていなかった。幹部は飛び道具を全く使っておらず、肉弾戦を仕掛けており、時雨は今のところそれを避けてばかりである。

「ほらどうしたんですか、さっきから避けてばかりですよ。」

「・・・く、これは・・・どうしたもんだろうか・・・」

繰り出されてくる柔道技のような仕掛け方をさつさとバックステップを踏んで避けて相手との距離を測る。そんな行為で先程からかなりの距離をかせいできた。その距離も軽く50メートルを越えている。わざわざ肉弾戦をかけてくるのでタッチしてしまえば時雨の価値なのだが、彼は未だに躊躇しているのであった。

（全くもって困ったものだ。このままではもしかしたら負けるかもしれないな。）

そんなことを考えながらこのまま走って逃げてしまおうと思った彼は誰かが敵の後ろに現われたのを気づいた。

「はい、タッチ。」

現われたのは賢治であり、時雨がかなりてこずっていた相手を赤子の手をひねるようにあっさりと倒してしまった。（まあ、誰でも倒そうと思えば倒せると思われる。）残るは美奈だけである。

「ありがとう賢治、かなり助かったよ。」

そう言っ感謝の態度を示していたが賢治は早速カメラを出して  
啞然としている幹部の写真を遠慮なく取っている。

「時雨君は先に行っていてくれ、僕はここを押さえているから。」

そんなかつこいいせりふを言っているが、彼らに襲い掛かる敵は  
残り一人であり、残っているのは既に捕虜とかしてしまっているメ  
イドさんたちである。ぶっちゃけ、賢治はこの人たちの写真をとる  
のに忙しくてもしかしたら時雨に邪魔される恐れがあるので彼を奥  
にやりたいだけであった。

「……まあ、いいかな。……あまり取っちゃ駄目だよ。」

そんな賢治の思惑が手に取るように分かっていた時雨はそのよう  
に釘を刺してその場を後にした。そして後ろから聞こえてくる音は  
邪魔者がいなくなったので喜びのあまり叫んでいる賢治とそれに恐  
れをなして逃げ惑う時雨と戦っていたメイドさんたちである。時雨  
は一瞬賢治をおさえに行こうと思ったが曲がり角を曲がった所でそ  
れどころではない事に木が付き廊下の端に飛び込むように避けた。

「喰らえ！美奈流、冥土隊奥義！！紅蒼紫赤黄緑黄緑薄青・麗邪亜  
！！（レインボウ・レーザー）」

七色とは思えないほどの線が誰もいなくなった廊下を通っていく。  
時雨は目をつぶっていたのでよく分からなかったがこの威力が凄ま  
じいことはすぐに分かった。

「……やりますね、では次を行ってみますよ。」

今度あんな攻撃を喰らったら痛いだけではすまされないに違いな

い。充電終了した場合は間違いなく時雨はこの世から消えるに違いない。骨も残さずにあっさり旅立つであろう。

「ちょっと待った、実弾は使わないんじゃないの？」

「これは実弾ではないのでルールには違反していません。それでは覚悟してもらいますよ！」

どっちかと言うと実弾より危険だと思われるがそんなことをいつている場合ではないと思われる。時雨は近くに開いていた扉を見つけるとそのままダイビング！その後ろを実弾ではない何かが通り過ぎていった。扉から顔だけ出して相手の確認をしてみると相手の右腕に装着されている機械が輝きだしている。

「もしそれが一般人に当たった場合はどうするんですか！」

既に暗くなった校舎に一般人が来るとは到底思えないのだが、一応確認してみることにした。

「その点は大丈夫です。私が先程結界を張っておきましたから一般人はこの校舎の中には入れないと思います。」

時雨は安心したが実は結界なんてたいそうなものではない。『この先立ち入り禁止』とかかれた札を校門の所に置いただけである。他にも裏門などがあるが美奈はここには何もおかずにただ単に黒と黄色のロープを置いただけである。

「それでは地獄に旅立ってもらいましょうか！冥土隊秘奥義！！！！  
めいどきうさしにゆきんし  
冥土鬼津沙真柔緊死！！！！」

細い光の線が扉から顔を出した時雨に降り注ぐ。威力は低そうだったがその数は多く時雨は防戦一方であった。顔を隠した扉に光線の後がくつきり残り改めてその威力を目の当たりにしていた。このままでは負けるどころか救急車行きである。もっともその車に乗るからだが残っていた場合の話ではあるが……

「全く、情けないですね。あまりにも面白くないので肉弾戦で行きたいと思います。」

そんな声が廊下から響いており、何かを感じた時雨は教室の奥に逃げた。さっきまでたっていた場所ごと壁が切れてその破片が地下に降り注ぐ。それを呆然と眺めている時雨の目の前に右腕に機械をぶら下げた恐怖の敵が現われる。そして左腕には長々としている獲物（月光に反射しているそれは刀と思われる。）を持ち、その目は本気であった。

「さて、これであなたにも勝利の機会が増えたと思います。もっともあなたが私に触れることが出来たらですけどね。」

もはや一般人が目で追えるか終えないかのスピードで美奈は動き出し時雨に衝突するかのよう袈裟切りを繰り返す。

「……うぐう……」

それを避けることは流石に難しかったのか時雨の学ランが斬れて斜めに紅い線が現われる。

「へえ、あれを避けるなんてなかなかやりますね。少し見直しましたよ。」

時雨はその顔を眺めながらも一応牽制のつもりで拳を相手に突き出す。

しかし、当てる気はない。相手はそのままある程度はなれて今度はおかしな構えをして目を閉じる。多分、思いつきり非現実的な攻撃が予想されると思われる時雨はおおいに戸惑った。そして思い出す、網との戦いの前に賢治に教わった困ったときの呪文。今やほとんど忘れてしまったので適当に唱えることにした。

『ええと、我は……哀しみ？を背負いし天使？』

たぶん不完全だろうがその力は始めて彼の前に姿をあらわす。

彼を血に染めるように紅い光が渦巻き

彼の背中にその色と同じ翼を与えて

彼の腕に紅の剣を授ける。

全くもって面白くないがここにしようやく時雨は罪人天使の力を作ったのであった。

「ようやく本気になりましたね、それではこちらも仕留める気ですかりたいと思います。」

（いやいや、これは鬼ごっこなのだからそこまで本気になられたら僕が困るんだけどなあ。）

そんなのんきだが本当のことを考えながら時雨は久しぶりに握る武器を思いつきりつかむ。

（こんなものを持つのは体育で剣道をやったときと先生から個人指導を受けたときぐらいだったなあ。）

その時教わったのは実践用の構えであり、面、胴、小手ではなかった。

「それでは参りますね。」

時雨の返事を待たずに突き出すようにして刀を構えてくる美奈を時雨は相手の刀に向かって自分の手に持っている物を使い、へし折る。そしてあっけなく折れてしまった刀を持ったまま美奈が驚きの表情でスピードを殺すことが出来ずに時雨に激突。時雨もろともその場に倒れこんだのであった。

「・・・た、タッチ・・・がくり。」

死闘の末、かなり常識はずれの敵を倒したのはいいのだが力尽きて時雨は気絶してしまい、ぶつかって一緒に倒れている美奈も打ち所が悪かったらしく仲良く気絶している状況である。その後、なかなか帰ってこない二人を心配して賢治が探しに行くのは一時間後のことである。見つかった二人の体制は凄かったと後に賢治が答えており、カメラに納めたらしい。

ようやく喫茶店に入ることが出来た時雨と賢治は可愛いテーブルに座っていた。

こんな所に来たことの無い時雨は辺りをきょろきょろしていて全く落ち着いておらず、彼が喫茶店を出るまでその行為は続けられるのである。



実際にだが、防犯カメラに移っていた時雨はかなり挙動不審で喫茶店がコンビニやスーパーだった場合、万引きをする前兆と思われるいても文句は言えないと思われる。そしてその向かい側に座っている賢治は今回の課題で何故相手に勝てたのかをまるで先生のように他のテーブルに座っているメイドたちに教えていた。

「・・・言わせてもらうけど、畏が全く良くないね。それに・・・」

「

詳しく書くとかなり時間の消費になると思われるので今回は省略させていただきます。

その話が終わり、彼らにとっては恒例の罰ゲームの時間になった。メイドさんたちは彼の友達（時雨の事である。）がもしかしたら彼と同じような性格でもしかしたら彼より酷いかもしれないと思っていたので少々この罰ゲームがいつもより厳しくなるのではと思っていた。（その頃時雨は目を泳がせながらも運ばれてきていたオレنجジュースを飲んでいた。）そしてとうとう賢治が口を開いた。

「・・・今回の罰ゲームは美奈さんを倒した僕の友達、時雨君に決めてもらいたいと思います。それでは時雨君、君の好きなようにしていいよ。」

呼ばれた時雨は天井を見上げており、みんなの注目が一気に自分に集まっていたことに気がつきかなりおどおどしているのであった。

「・・・え、えーと？罰ゲーム？うーん、出来れば今度は・・・鬼ごっこじゃないのがいいな。」

時雨は思いつきり混乱しているような状況だとその場にいた大多数の人数が思い、結局は賢治が決めることとなった。

「……彼は少々女の子が苦手なのでこのような状況でまともに話すのは無理のようだから今回の罰ゲームは最後に残った美奈さんが時雨君の家のお手伝いさんになってください。そして最後から二番目だった人が今度からここの体調補佐を勤めること。それじゃ、各自解散。」

賢治は未だにおどおどして目目の焦点が合わさっていない時雨を揺さぶり正気に戻した。

「さて、これから本題に入るよ。」

メイドさんたちは既にほとんどいなくなっており、残っているのは指名を受けて？時雨を待っている美奈だけである。

「実は君に仕事が出来てしまってね、あさってからまた学校が始まるだろ？放課後生徒会室に集まって欲しいんだ。話はここでいってもいいけど面白くないから明日はなすことにしよう。」

実の所はほとんど放心状態になっている時雨への配慮であった。肩を揺さぶっても反応しなくなったのを確認して手を放すとそのまま床に倒れそうにもなる。

「……コリヤ一度精神科医に行った方がいいんじゃないのかなあ。美奈さん、ちょっと時雨君に触ってみてくれないかな？」

躊躇している美奈に天使の笑顔を向ける。（見方によっては悪魔の笑みに見えないでもない。）この状況を打破してくれるのは美奈だけであるので時雨の精神的な傷の事を賢治は話したのであった。

「……なるほど、時雨様は初心な少年なんですね。もしかしたら賢治さんと一緒にいたいな性格と思っていましたよ。」

「それはどういう意味かな？今回はとりあえず、彼を膝枕してみたらどうだい？目を覚ますかもしれないよ。」

その必要は全く無かった。美奈が時雨に触った瞬間、時雨は飛び起きてその場からささと飛びのいた。

「……本当に初心な方なんですね。誰かさんとは大違いですよ。」

「まあ、いいよ。それより時雨君、今日からこの皆さんが君をお手伝いしてくれるようになった。」

「改めまして、冥土の美奈と申します。美奈と呼んでください、時雨様。」

「あ、どうも。天道時 時雨です。これからよろしくお願いします。……じゃなかった！何でそうなるんですか！」

賢治に食って掛かる時雨の顔は必死であり、その顔は夏休みが残り一日でまったく出された宿題が終わっていない人みたいな顔であった。その迫力に襲われながらも賢治はひらめいた嘘を試してみることにした。

「……落ち着いてくれ、時雨君。実は彼女はもうここにはいられなくなってしまったんだ。追い出されてしまいあてのない彼女は君ご奉仕する代わりに住む場所と三食を約束して欲しいそうだ。」

賢治が美奈を見てそう言ったので時雨は美奈の方を向いた。

「はい、負け犬の私はここを追いつけられる身となつてしまいました。そして賢治さんが時雨様なら承諾してくださるといつてくれたのでこのたび私は時雨様のメイドとなつたのですが・・・時雨様がやはりだめだというならば私は自分の生涯に自分で幕を下ろしたいと思います。」

彼女は役者であつた。この時点で時雨の心の約八割は罪悪感にさいなまされていたが美奈が次に行つた台詞により結局彼女を迎へいることになつた。

「そうなるならば、最後の思い出として時雨様に口付けをして果てたいと思います。」

先程賢治から聞いたことを覚えていた美奈はそんなことを言つて最後の止めとして上目遣いで時雨を見た。

しかし、時雨は既にそんな美奈を見ておらず目は在らぬ方向を向いて顔は真っ赤である。

そして賢治と美奈は二人で溜息を出した。

「やさしいし、もてそうなのにこんなあれだから・・・よろしく願ひするよ、美奈さん。」

「はい、かしこまりました。（やれやれ、かなり重症みただから私がどうにかしてあげたいなあ。）」

「あわわわわわ・・・」

そんな二人の近くで体から白い煙を出しながら突つ立っている時雨は美奈のタッチにより正常モードに移行完了したのである。

帰り道、賢治と分かれとうとう美奈と二人だけになり極度の不安と緊張により熱暴走寸前となっていた。二人の距離は先程より少しだけ近づいていたが、美奈がそれ以上近づこうとすると時雨もまた離れるのであった。そんなことをしているうちに道の端っこにあつたどぶにはまりそうになった時雨が悲鳴をあげる。

「のわあ。」

「危ないです！時雨様！」

その体を支えてあげたのは美奈であつた。こういう場合はどじな女の子を助ける主人公がかつこよく表現される場面だが、仕方がない。

「あ、ありがとうございます、美奈さん。」

「いえ、お怪我はありませんか？」

時雨の手を取ったまま美奈は告げて時雨の体制を整えてやる。そして時雨は大好きな男の子と手が当たってしまったよう女の子みたいな甘いシチュエーションではなく、ただ顔を赤くさせてうるたえるばかりである。

「本当に大丈夫なんですか？」

「あ、はははは、はい！大丈夫ですよ！！」

顔を真つ赤にさせて答える時雨を見て美奈は少しばかりいたずらしたくなった。

まず、賢治がいたら止めたくなくなるような感じで手を握っている時雨に体を預けてみた。

美奈としては時雨が受け止めるか、話すかによつて今後の態度を変えようと考えていたらしい。

（もしも避けたら今後毎日このようなことを時雨にしようと頭の中で考えていた。）彼が優しいなら美奈を受け止めるだろうし、もし、受け止めなかったら時雨はこの先ずっと女性恐怖症が治らないと美奈は思ったわけである。（一応、そう考えていたがやはり大部分は初心な少年に対するいたずらである。）

「ああ、ちよつとめまいがしてしまいました。」

「え、つてうわあ。」

結果として時雨は美奈を支える事になった。支えた時雨は頭が思いつきり空っぽになってしまったので何とか冷静になろうと努力していたのであった。それを見た美奈は満足して自分から時雨とはなれてまた歩き出した。

「さて、それでは時雨様の家に案内してもらいますね。」

そして、家に帰り着いた時雨は啞然と自宅を眺めていた。さつきより近くに立っている美奈もその光景を眺め呆然と立ち尽くしていたのであった。

家が半分なくなっていたのである。それもすっぱりと……。

「……いやあ、時雨様の家は変わってますね、いつ頃建てた家なんですか？残り半分も今にも崩れ落ちそうですよ。」

「……僕も久々に帰ってきてたんでいつの間になんぼろぼろになってたの気づくことは出来なかったんだ。学校に行くまえ、一度家に戻ったときはまだ大丈夫そうだったんだけどな……。」

「そしてこの家をぼろぼろにした犯人達が壊れていた家の残骸から出てくる。」

「ねえさ……ん、ごほお。これは少々やりすぎなんじゃないの？家が半分なくなっているよ。」

蒼い翼を背中に背負っている蕾がそう言って立ち上がる。近くにいる時雨と美奈にまだ気がついていないようだ。蕾の近くの瓦礫からもう一つ蒼い翼を持った悪魔が立ち上がる。

「……何いつてんの……あんたが素直に受けてたらこの家はまだまだ元気だったに違いないわよ。今回はここまでにして……ってこれやばいじゃないの！時雨が帰ってくる前に何とかしないと……。」

本人が近くにいるのに全く気がついていないところはやはり姉妹と言う奴であろうか？

「いや、もうこれを直すのは不可能に近いと思うんだけど……。」

「じゃ、ごまかしましょう！ガス爆発が起きたとか何とか言えはいじゃない！ええい！こうなったらこの場から逃げ出してやるう。」

「あ、ずるいよねえさん、待ってよう。」

蒼い翼をはためかして二つの悪魔は空に飛んでいった。衝撃だったのか強い風が吹いたのか分からないが二人がいなくなった直後、残っていた方の時雨の家も盛大な音を立てて崩れてその原形をとどめることはなかったのである。

「……美奈さん、ちょっと待っててくださいね、あの二人をとりあえず捕まえてきますから……。」

「はあ、がんばってくださいね。時雨様。」

蒼い翼を追って赤い翼が空に上がったのはすぐ後の事であった。

二人を捕まえた時雨達はその後、空中で説教したのである。

そして住む家は賢治が近くにあった家を紹介してくれたので今のところは困っていないのであった……。

冥土、それは主人を地獄まで安らかに生活できるようにお手伝いする魔族である。

護身用として、全ての平気や武器を使えるように教育がなされてお



り、火縄銃からレーザー兵器など様々なものが使えたりもする。もちろん、料理もうまい。一般的に魔族は悪魔より力が弱いので関わり合いがあるのは人間の方が多い。時には手伝ったり、襲ったりとしている。そして一言に魔族といってもかなりの種類があり、その全てを知っているものはいないといわれている。

しよのよん　夕方からよるにかけて・・・そして家屋の全壊（後書き）

さて、どうだったでしょうか？面白かったら嬉しいです。今回はドンパチドンドン！見たいな事を考えながら書いていました。次回は視点を変えて書きたいと思います。

しょう」『断末魔』！初めての遭遇！！

契約、それは相手と自分をつなぐ見えない絆といっても過言ではないかもしれない。そして、契約は同種族同士ですることが基本であるが、中には他の種族と契約するものもある。種族同士で契約した場合、その力が増幅される。そして他の種族とした場合は稀に、その双方の能力が使えるようになったりもする。基本的に一回しか出来ないのであるが、唯一その例外がある……

私、霜崎 亜美はもこの学校の番長だ。

（この前負けてしまったのでその称号は他人に譲った。

）何故番長になったかは簡単なことである。

私が高校二年生になったとき（今から二週間前の事であった。

）同じクラスの友達が柄の悪そうな上級生の男子生徒に絡まれていたのを助けてあげたことがきっかけであった。

（私に通っている高校には変態が多い。

）勿論、相手は人間であったので遠慮するくらいのことはしてあげたので未だに病院にいるかもしれない。

それから今まで大変なことの連続であった。

いつのまにか上級生の男子から『蒼霜』と呼ばれるようになってしまい、二日に一回のペースで他校の番長たちに絡まれるようになった。（校門の所に手下を連れて立っている。）その相手をばこぼこにしておいたので他校の番長たちも未だに病院生活をしているかもしれないが私はそんなことより彼らが大地に沈む前に呟く言葉の方が気になっていた。皆、口をそろえて

「……俺が負けるなんて……『紅時雨』以降だ……」

（たぶん前半は嘘だ。

「そんなことを言って倒れるので私は気になって夜も眠れなかった日が一回あったかもしれない。」

まあ、気になったので従兄弟である賢ちゃんに聞いてみた所、その『紅時雨』は今まで一度も負けたことが無いと言っていた。

賢ちゃんにそれについて調べてもらった所、弱冠、高一で悪名高い知流高校の番長たち上級生のほとんどを一人で倒してしまっただけだ。

人間ではないのかと聞いたなら『紅時雨』は人間だと賢ちゃんは言っていた。

その時は恐ろしい人（人間としては）だと思っていたが『紅時雨』が実際に転校してきて拳を交えた所、なんともまあ、かなり変わった人物だと言うことが分かった。（まず、攻撃を避けるのが凄かったし、特に驚いたのは女の子がかなり苦手みたいな所だ。）今日の朝、通学路で後ろから追いかけてみて声をかけるとびっくりしてその場に転んだりもしていたのだった。

住む場所が変わってしまった僕たちは母さん達に連絡を取ることにも出来ずに困ってしまっていた所を賢治により救われた。

今は使われていない賢治の旧家を使ってもいいといわれそこに移り住むこととなった。部屋は前より多くなっており、ホントにこんな所に住んでいいのか思っていたが、母さん達が帰ってきたことにより家が崩壊してしまうことを説明しなくてはいけなくなってしまう。とりあえず、ガスが爆発したというなんとも適当なことを言った所、母さんとお父さんは

「それじゃあ、ちょっと旅行に行つて来るから、霜崎さんによろしく言っておいてね。」

といって旅行に行ってしまった。その際、美奈さんのことを家族に言った所、

「別にいいんじゃない？」

と言われて公認として僕のお手伝いさんとなってしまうた。彼女にも部屋があてがわれており、大きさは僕たちと同じ大きさである。そして犯人の二人組は同じ部屋に住むこととなった。これは当然の行為であるし言い出したのはあっちの方からでもある。そんなこんなで日曜日を過ごし、月曜日となった。

誰かに呼ばれたので目を覚ますと目の前に美奈さんの顔があった。驚いて立ち上がり、起きたばかりだったので布団にしりもちをつく。

「おはようございます、いい朝ですね。」

「あああああ、う、うん！おはよう。」

手を出されたのでそれを眺めていると、皆さんが面白そうな顔になり、

「つかまって下さい、私が起こしてあげますよ。」

そう言われたので反射的にそうしてしまった。そこで僕の部屋の扉が大きな音をたて、開け放たれる。

「グッドモーニング！兄さん！起床の時間だよ！………ってあれ？」

そう言って入ってきたのは蕾であった。そして僕を見て顔つきが変わった。

「そ、そんな！この前（時雨が帰ってきた次の日）起こそうと思っ

て早起してたからそのときよりも早起したのに！また邪魔が入るなんて・・・うわああん！」

そう言つて廊下を去る音がして蕾がいなくなる。それをしばらく眺めていたが未だに手を握つたままだつたのを思い出したので起き上がる。顔が真っ赤だつたのが自分でも手に取るように分かる。

「うふふ、時雨様は可愛いですね。今度また起こしてあげますよ。」

ある意味、僕にとって一大事なことである。今度からはもうちょいだけ早起しようと思つた片隅にでも置いておこうかな？

そこで、皆さんがこの前みた、メイド服という奴ではないことに気がついた。今きている服は僕の物でその上には緑色のエプロンが取り付けられていた。そして頭の上にはやはり緑色の三角巾が装備されているようだ。そんな美奈さんをずっと見ていたからだろうか？急に皆さんからしゃべりだした。

「あ、これはですね、昨日、時雨様のお母様から頂いたものなんですよ。私が着ていた服はあそこにかかげられています。」

指さされた所には僕のぼろぼろの制服と彼女の冥土服が静かにハンガーで吊るされていた。

「実は、時雨様の制服はぼろぼろだったので修復させてもらいました。」

明るくそう言つて制服を渡してくれた。亜美さんによつて貰かれた所と、皆さんによつて思いつきり袈裟切りを食らつた箇所はほとんど後が残らないように繕われていた。おまけとしてか、暗めの青い学ランにはチリ一つついていなかった。

「あ、ありがとうございます。」

「いえ、私はあなたのお手伝いさんですからね。時雨様のためならたとえ火の中の水の中ですよ。そんなことよりそろそろしたくをしな」と学校に遅れますよ。ささ、着替えてください。」

このままボーっとしていたら美奈さんに全て剥がされかねない状況だったので自分で着替えるために一度部屋を出てもらうことにした。

今、僕のダンスの中には何も入っていない。

まあ、今洗濯しているのがあるので困っていないからいいがこれからも当分は制服を着ていないといけないと思われる。

（結局この前、服を買うことは出来なかった。

）さて、そんなこんなで着替え終わり、朝食を食べに広間に行くとそこには既に学校に行く準備をした二人とニコニコしながら立っている美奈さんが待っていた。薔は微妙にしょんぼりと、涼は目をぎらぎらさせながら朝食を口に運んでいる。その二人の間の席が空いていてどうやらそこが僕の指定席らしい。この二人の間に座るのは普段でも居心地が悪いのに今の雰囲気はこれまた別の意味で気分が悪くなりそうだ。

「・・・おはよう、二人とも。」

「うん、おはよう兄さん。」

「・・・・・・おはよう。」

覚悟を決めて間の席に座り、目の前にある料理に手をつける。こ  
うなっただけだ、彼女達が口を開く前にここからいなくなっ

まえば良いんだ！

そんな都合いいことは起こらず、僕が目玉焼きをようやく食べ終わった所で涼が口を開いた。

「・・・時雨、あんたもしかして蕾に手を出したの？」

「（びくう）なに言ってるのかよく分からないけど、僕は少々ながら女の子に弱いのは知っているだろう、自分から触れることなんてあまりしないよ。」

「！時雨は女の子に弱かったの？何故？」

美奈さんはにこやかに笑って聞いていたが、急に口を開きこの会話を打ち切らせるためなのかどうか分からないが、とりあえずこの会話を終了させてしまった。

「はいはい、皆さんはやく学校に行かないと遅刻してしまいますよ。ここで悪いですが朝食タイムシユーリヨです。」

「時雨、この件は家にかえってきてから聞くからね。」

「それでは、兄さん先に行ってますね。」

二人はそのままいなくなり、その場に残ったのは僕と美奈さんだけになり、唐突に口をまた開いたのは美奈さんであった。

「・・・今日の運勢は最下位がさそり座でした。『何かめんどろな出来事を他人から押し付けられたり、お金を拾うとありえない人物と出会う。』と言ってましたよ。」



僕の星座はさそり座である。何故、彼女が知っているのかは分らないがそんなことより今は学校に行くのが先決である。（特に気になるのは後半部分。）僕は美奈さんに礼をいって二人と同じように家を出たのであった。先程の星座占いがホントかどうかは実際に今日という日を送ってみないことには分かりようが無い。

そんなこんなで時雨、二日目の学校が幕を開けるのである。彼は今回かなりめんどろな事柄に引き込まれる。これには少々彼の家族の過去が混じってもいるがそんなことは関係ないだろう。

時雨は学校に向けて歩き出して数分のところで賢治とであった。（電柱に寄りかかってからすにとらみ合っていた。）時雨に気がついて彼のもとに歩いてくる。

「やあ、時雨君おはよ。この前君に言っていたことを悪いけどここので言わせてもらうよ。君にお願いしたいことは近頃こちらで暴れまくっている『断末魔』という連中をどうにかして欲しいんだ。四人組のグループで構成は確認されている今の段階では男が三人、女が一人となっている。」

一瞬、この前襲ってきた三人組かと思っていたがそうではないようだ。（これが美奈さんが先程言っていたことのひとつに違いない。）

「具体的に被害をあげるならば人外のもの・・・多くは断罪天使が襲われている。（逃げようとしてこけた。）まあ、被害的には軽症を負ったりしているのだが、（膝をすりむいた。）そこまで危険視しなくてもよさそうなんだが一応一般生徒を巻き込んでしまった場

合がいけないからすばやく対処をしておいてくれると嬉しいな。それでは健闘を祈るよ。ちなみに相手も人間じゃないから手ごわいと思うからね。」

まだなにかいいたそうな顔をしていたが賢治はさつさと僕を置き去りにしていつてしまったので僕はそのことを考えてた。名前から考えるにめちやくちやよわそうというかなんとか・・・それでもこれ以上の被害が出るのは確かに寝起きが悪いなあ・・・。

そんなことを考えながらぶつぶつ呟き登校している時雨の後ろに不穏な影が一つ。その影はなにやら呟いている時雨の背中を叩き・・・

「や、おはようさん！」

亜美は時雨を軽く叩いた後、前に回りこみ彼の顔を覗き込んだ。

「うわぁー！び、びつくりしたぁ。」

やはり、驚く時雨を見て亜美は笑う。彼が心臓麻痺で死ぬ日はそう遠くないかも知れない。

「ははは、ごめんごめん、全くもってすきだらけだね。そんなことじゃ、夜道も歩けないよ。たぶん変質者に教われてアウトだね。」

男を襲う変質者には襲われたくないなあ。そんなことを思う時雨は前に賢治に言われたことを亜美に聞くことにした。

「えつとさあ、契約って何かな？前に賢治に聞いたら亜美さんに聞くように言われたんだけど。知ってる？」

「け、契約って・・・それは・・・なんというかぁ。そうだし学校で教えたげるよ。そ、それじゃあね。」

先程の笑顔は何処にいったのだろう、慌てた様子でチーター顔負けの速さで（彼女の場合本気で走ったらそれ以上になるかもしれない）。

「学校に向かって走っていった。」

ちらりと見た顔はなんとなく赤くなっていた様なきがした時雨はその後を追おうとして何かの音を聞いた。

硬貨が地面に落ちたときの音によく似ている。

（意外に耳がいい時雨は音で硬貨の種類を当てるといふ特別スキルをもっている。）

「時雨はその辺りを音を出した物（彼はその音の主を五百円玉と推理した。）を探していると五百円玉が落ちていた。彼がそのまま無視して学校に行ったら運命というものは変わっていたかもしれない。五百円玉を拾い、視線を上に向ける。そこにはすらりと伸びた細くて白い足があり、その先には白いパンツが・・・」

「ぶっ・・・あわわわぁ。」

時雨はその場にしりもちついて鼻血を勢いよく吹き出していた。アスファルトに血が飛び散り慌てて立ち上がった時雨はさらにその顔を驚愕に染めた。

「!?!? 何で君がこんな所にいるんだ!」

「お久しぶりですね、お兄様。」

驚く時雨の前に立つ何処となく時雨に似ている色白で可憐そうな少女は顔を微笑みの形に変えて時雨を眺めていたのであった。

彼女の名前は不和<sup>ふわ</sup> 氷雨<sup>ひさめ</sup>。時雨の元、父親が離婚したときに連れて行った時雨の双子の片割れである。妹で幼い頃から病弱だったので医者だった父親に引き取られていたのである。そして時雨はその後全く氷雨にあった事は無い。今の時雨には氷雨が別の何かに見えていた。人間ではない何かに……

「……………」

彼の元父は交通事故で死んだと時雨は祖母から聞いていた。彼が運転していた助手席には……氷雨が乗っていたと聞いていたのだ。事故現場には氷雨のいた形式などは全く無く、助手席にはただ血がついてたらしい。その後、彼は写真の中の氷雨にあっただくらいである。

「今日からお兄様がいる高校に行くことになったんだ。よろしくお願いしますね？」

彼女の服装は上が、学ラン、下がスカートという彼が通っている高校の格好であった。

時雨はただ頷き去っていく彼女をボーッと眺めていた。その結果として彼は転校二日目で遅刻になりそうになってしまったのだが……  
・とりあえず彼にはこれまた不可解な出来事の始まる序章に過ぎなかったかもしれない。死んだはずの妹、時雨は心臓がドキドキしているのを感じていた。（もしかしたら先程見た白いものの余韻かもしれない。）

教室に入った時雨を迎えたのは（数の少ない）男子達の喜びであった。

「おお、時雨ではないか、今日もまたもや転校生がこのクラスに来るそうだ。しかも美少女らしい！」

女子達も浮かれている様で時雨の席の近くにいる方々も騒いでいた。

「いやあ、どんな人かなあ。今から楽しみだよね時雨君！」

「……ああ、そうだね。」

彼は氷雨のことを考えていた。（転校生は彼女で間違いない。）一体全体彼女は何者だろうか？まず人間ではないのは確かだろう。隣に座っている亜美は赤い顔のまま時雨を見ていて話し掛けてみようとしないうし、彼の近くには男子が数人（全男子）いるのだが、彼らは先程教室から出て行き、このめちゃくちや広い校舎の中を職員室に向かって突っ走っているに違いないだろう。まさしく走り屋な男子達である。

分からないことは他人に聞くことが一番、そう思っただけで時雨は男子の中で唯一座って何かを見ている（その表紙は美少女の絵がかかれていた。）賢治のもとに行った。

「……ねえ、賢治は死んだと思っていた人物が自分の前に現われると思う？」

「そうだね、よくあるんじゃないかなあ。僕としては日常茶飯事だからもうそこまで気にしなくなったよ。」

そんな日常はいやだが、今はそんなことを行っている場合ではな

い。昨日賢治から買ったあの本を読んでいると興味深いことがかかれていた。それには『紅色の翼を持つ天使は相手が何者か分かるような感覚を覚えるという。』と書かれており、（手書きであったが、なかなかの達筆でもあった。）つまるところは氷雨は・・・なんであろつか？

「ねえ、賢治・・・」

時雨は先程の事を事細かく説明して、賢治に氷雨の正体を聞くことにした。一応、あの事（氷雨のパンツを間違って覗いてしまったこと。）も話しておいた。

「なるほど、多分その彼女は・・・吸血鬼ブラッドイーターだね。数えるぐらいなら英単語の一つでも覚えた方がいいと思えるほどある魔族の中の一つだよ。」

賢治はそう言ってほとんどそのことについて興味を失ったようで時雨を見てから未だにボーっとしている彼の従姉妹を見て頷いた。その顔は何か面白いことを考えている顔である。

「ちよいと、亜美こっちにきてくれないかな。」

席に座って時雨の背中を見て顔を赤く染めている亜美はその声に我にかえり間抜けな返事をした。

「へ、別にいいけど。」

時雨の前に立たせて賢治は亜美の後ろにまわり、不思議がる亜美と目線を合わせることとなった時雨は当然のように亜美から目をそむける。下を向いたのは間違いだっただろう。

「春風のいたずら!!」

「きゃ。」

時雨が下を向いた瞬間、堅持はあろう事か亜美のスカートを思いつきり上にあげたのであった。

下を向いていた時雨は当然のようにそれを直視。

朝から立て続けに起こった出来事により彼は（鼻）血をいきおいよく吹き出しながらその場に気絶してしまったのであった。

かろうじて二人に血はかからなかったが賢治はそのまま逃走。

その後、鬼神と化した亜美と壮絶な（リアル）鬼ごっこを展開、この前のメイドたちとの鬼ごっこも凄かったがそれ以上に校舎への負担が凄かった。

亜美が諦めて（賢治相手では流石の亜美も捕まえるのが不可能らしい。）帰ってくるまで時雨はその場に放置されたままであり、クラスにいたほかの人々はそれを啞然と見ていただけであった。そして元凶の賢治は時雨が意識を取り戻した所で天井から降ってきて一応形だけの謝礼を時雨に述べたのであった。（亜美に対しては全く悪いことをしたとは思っていないようだ。）

「あゝごめん。（全く持つてその声からは誠意と言うものを感じられない。）これは実験だったんだよ。それにまさかあの亜美のパンツを見て鼻血吹き出して倒れるなんて夢にも思わなかったんだよ。（彼がこれまで試してきた相手はそろって嫌そうな顔をした挙句、）「うわっ、損した。」

と言つて亜美に殴られた。」

ここで亜美が行った男子への報復を書かせてもらおう。

まず、女子に嫌がらせをしてくる男子（ナンパみたいなことをして

いたらしい。

」はすべて屋上につるされた。

体育の時間覗きをしていた男子を柔道場まで引っ張っていきサンドバックのように扱った。

そして最後に・・・亜美を間違えて男子だと思って声をかけてきた男子を天使化したあげく空に打ち上げてしまった。最後のは思いつきり被害者がかわいそうだったがこれもこの学校には少々スケベな人物（男子）が多いからである。結果として、この学校にいた多くの男子はありえないことに転校したり、学校を辞めていたりもした。学校を辞めていったある少年A君のその後を書かせてもらおう。

「・・・ええ、もう凄まじいですね。夜眠っていると彼女に思いつきりぶっ飛ばされた夢を何度となく見るんです。あれから女の子を見ると自分から近づかないように心がけています。この前、あの彼女に会いましたが僕はその場で意識を失ってしまいましたよ。」

そこで、今時雨たちが通っている学校に未だにいる少年B君は違うことを言っている。

「いやー、彼女に殴られるとなんていうかそのね、こう、何か言葉で説明するのが難しい何かを感じるんだよ。」

つまり、今この学校に残っている男子の多くはそんな危なそうな趣味を持つ連中が多い。一応言っておくがこれはあくまで多くであり、ちゃんとまともな連中は・・・多分いると思う。

だから、そんな亜美のパンツを見て鼻血を吹き出す男子はいなかった。実際、他にパンツを見た少年C君のことを書きたいと思う。

「いやあ、他の女子のなら結構覗いているんだけどあの時は運が悪かったね。その後あったテストでろくな事無かつたし、見てもなん



だが得した気分なんてないなあ。どっちかって言うと見ると損する  
ような気がするね。例えるなら・・・校庭に生えている木に蜂の  
巣を見つけたときと似ているね。」

この体験を語ってくれた君はその後誰かに闇討ちを喰らっているらしく近くの病院で生活している。（亜美は知らないと言っているが目が泳いでいたと賢治は語っている。）

そして、睨んでいる亜美をおいて賢治が席についたときにチャイムがなり、先生ともう一人誰か入ってきた。（いなかった男子は後ろの方から顔を赤くしたまま鼻の下を伸ばして入ってきた。）

「えー、彼女は・・・不和 氷雨さん、こここの高校の近くにある鮮斗羅琉高校から転校してきたそうだ。皆仲良くするように。」

今日の先生はなんとなくやりであった。その隣に立っている美少女、氷雨を見てクラスの興奮はいつもより高かった。

「不和 氷雨です。皆さん、これからよろしくお願いしますね。あ、家族構成は生き別れと言うか・・・双子の兄がいます。好きな食べ物はトマトです。」

自己紹介をしている氷雨を取り囲んでいるクラスの女子達を見て時雨はその近くに行っていない亜美の顔を見た。（机は隣なので恐々と眺めている。あまりにずっと見ているとまた鼻血を出すに違いなし。）その顔は少しこわばっているようだ。

「・・・『寒風』・・・不和 氷雨だって・・・」

「へ、『寒風』って何？」

賢治がこちらにやって来て詳しく説明してくれた。

「ああ、思い出したけど彼女はここらで有名な番長さんなんだ。女の子の番長が多い気がするの僕だけかなあ。まあ、そんなことより彼女はかなり冷徹で流れている血は青いつて噂があるくらい極悪非道なんだよ。それ以降、彼女に近づく男子はいなくなったって言われているからね。現われたのはそうだねえ、高校一年の初めぐら이었다かな。彼女に告白した男子は全て振られたそうさ。なんでも、夜道で襲ってきた変質者を幾度となく捕まえたりしていて警察にもお礼を述べられたことが結構多いみたいだね。」

賢治の目は紅く染まっており、その目は……氷雨を凝視している。

「お兄様、これからは一緒に住めますね。」

いつのまにか時雨の前には氷雨が立っており、クラス一同ぽかんとしていた。そんなことも少しの時間であつて、また騒がしくなる。

「ええ、うそお。時雨君が双子のお兄さん！！ってこんな可愛い妹が他にもいたの？」

「うーん、そういえば確かに似ている感じがするね。」

特に男子からの鋭い視線は恐い。まるで親の敵を見る眼だ。

「畜生、奴はあんな綺麗な妹が他にもいるくせに女子が苦手なんて……」

「そうだ、蕾ちゃんや涼ちゃんがいるくせにそんなに妹キャラが好きなのか！このロリコンやろうが！」

「お前、やっぱり背の低い亜美なんかが好みなんだろう！」

そんな好き勝手なことを言っていて賢治は笑っているが亜美と氷雨はにらみ合っている。

「……これはこれは、『蒼霜』さんではありませんか……お久しぶりですね。」

「よくいうね、この前も会ったじゃない、『寒風』さん？」

彼女達からはもはや人間とは思えないオーラがめっちゃめっちゃ吹き出している。クラスメートは教室の隅に退避しており、先生は既にこの教室から去っていた。時雨は二人の間にいつのまにかはさまれている状況に陥っており、これはまた、ある意味恐怖である。

「ここの高校の番長さんは男の子を足蹴に扱っていると噂に聞いていますよ。それに男の子に全く興味ないとか？私のお兄様に触らないでもらいたいですけど。」

時雨の左手を掴む。時雨いわく、その手はすべすべしていたらしい。

「それは……スケベが多いからよ！あんたも今まで男子からの告白を全て蹴ったらしいじゃない。」

氷雨に対抗するように時雨の右腕つかむ。そして時雨いわく、温かみのある手であつたらしい。

にらみ合う二人の真ん中で時雨の心境は微妙なものであった。賢治に助けを求めるように目を向けるとその顔はめちやくちや面白そうにしており、時雨は孤島に置き去りにされた気分を生で味わっているような感覚を覚えた。

「私のお兄様から手を放してください！それともなんですか？あなたは私と決闘するとしても言うのですか、『蒼霜』さん。」

「のぞむところよ。その天狗みたいな性格、へし折ってあげるんだからね。」

「・・・・・・・・・・」

「それでは、二人の決闘の司会者を勤めるのは生徒会といたしますね。」

いつのまにか教壇には複数の人物が立っており、真ん中を賢治、それから横に何人かの生徒たちが立っている。

「ルールは簡単、只今巷で有名な『断末魔』を退治してきた方の勝ちです。人間とは思えないあなた達ならできると思いますので頑張ってください。商品は『紅時雨』ですので気合も入ると思います。なお、時雨君も参加オーケーなので頑張ってくださいね。起源はこれから先『断末魔』のメンバーを捕獲、断罪、もしくは僕のところに連れてきた人が優勝です。」

どうやら、僕はまだ大丈夫のようだ。そんなことを考えながら賢治を見ている時雨は

両脇にいた二人はいなくなっていることに気がつき辺りを見回した。

そして

「教室の窓が開け放たれていた。他のクラスメートは驚いてそっちの方向を見ている。」

「ほら、時雨君、早く行かないとあの二人に遅れをとっているよ。このままじゃ君が物品になる日も近いと思われるね。（とっても素敵な笑顔）」

賢治に言われて時雨は慌てて教室を飛び出した。無論、きちんと廊下の方からである。しかし、慌てていると道に迷うことは多い。（時雨はまだここにきたことは数回である。）案の定、時雨は無駄に広すぎる校舎の長い長い迷路の中で迷子になってしまい困ってしまった。

「授業しなくていいのかな？」

教室に戻ろうにも戻る道が分からなくなって困っているので授業どころではない。辺りを見回していると一人の男子生徒が目映った。（恐ろしいことに教室から半分顔を出して時雨を見ている。）

「すいませーん、道に迷ったんですけど！」

その男子生徒はいきなり時雨に襲い掛かっていた。とっさにそれを避けて（反射的に）けりを腹に喰らわせる。相手はひろーい廊下の向こうに吹っ飛びまた起き上がる。その目は獲物を見つけた動物の目をしていた。

「何で襲ってきたんだ？まさか亜美さんが言ってた男を襲う変質者か？」

いやいや、そんなことはない。

説明させてもらおう。

襲い掛かってきた奴は食者<sup>イター</sup>。

時雨が賢治からもらった本の中にかかれていた多くの魔族の種類にその名前が刻まれていた。

食者は人間を喰らったりもするのだが、多くは人間を食べたりはしない、それは味がまずいらしく栄養も無いらしいので（人間に襲い掛かった食者は腹痛を起こしてトイレと友達になることが多い。）人間には無害だが人外の物にとってはうるさい存在である。一度狙われると付きまとわれたりもしてストーカーに狙われている気分（報告として自宅の窓にへばりついていたりしているらしい。）を味わうらしい。そして食者にはさらに詳しく分かれており、食べる部分でその呼称を決められている。

「・・・のど渴いた。新鮮な水分が欲しい・・・じゃなかった。」

テストで出てくる問題をとくようにして考えていたが食者はまたもや襲い掛かってきた。いつのまにか水の固まりのような獣の姿になっている。

「・・・我、『断末魔』の水神。天道時 時雨を仕留める者。」

獣がそんなことを言っていてその鋭く長い爪をかざして時雨に突っ込んでくる。それを避けて拳を叩き込んでいる時雨はこの食者を何とかして倒せないかと考えていた。

そんな中、結構前に鳴ったチャイムが再び鳴り響く。これは多分一時間目の終わりを告げるものだ。すると、水神と名乗った食者は

時雨から離れて一気に走り去っていかうとした。

「・・・挨拶として今回はこんくらいにしてやらあ。その首丁寧に洗ってまっつな。」

捨て台詞を残して人間状態になった少年は颯爽と歩いていかうとして（時雨はその間去っていく後ろ姿をただ眺めていたのであった。）時雨の後ろから飛んで来た竹刀を食らって窓から落ちてしまった。

「時雨大丈夫、怪我は無い？」

やってきたのは涼で小脇に抱えているのは教科書である。その顔は少しながら青くなっている。どうやら時雨の心配をしているようだ。

「ああうん、ちょっと驚いたけど・・・怪我は無いよ。そんなことよりどっから竹刀だしたんだ？」

そして吹っ飛ばされたあげくに二階からのひも無しばんじ ジャンプを自分の意思で無く他人の意思で決行された水神は・・・やはり生きていた。頭から落ちたのになぜか尻をさすって起き上がり、一言。

「・・・癖になりそう。」

この学校には変人が多く集まっているのかもしれない。  
そんな中、教室の窓から飛び降りした他の方々は公舎内の剣道場

で激戦を繰り広げていた。

「そりゃあ。」

「なんの！」

天使化した亜美と吸血鬼の氷雨は激しいぶつかり合いを見せており、なかなか決着がつきそうに無い。それどころか剣道場が破壊されそうな具合である。今の状況は床が所々抜けており、切り結んだ相手を吹き飛ばしたりしたので既に壁はいたるどころにへこみが出て来ている。その後も彼女達の無駄と思われる決闘は続く。

「がきん、ぎぎぎぎぎっ！ばきん！」

白い剣で戦っている亜美と自分の血を固めて剣として使っている氷雨の実力は互角のように思われ、切り結んだときには口を開きそこで戦いを始める。

「・・・少しはやるみたいですけど、さっさと諦めて降参したらどうですか？」

「何いつてんのよ。そっちこそ負けを認めたらどうなのよ。」

二人がそんな校舎を破壊しかねない状況の中一人教室に残っている賢治は・・・

「ああ、美奈さんかな？これから時雨君の携帯の番号などを教えるからめもっておいてくれないかな？え、うん、そうそう・・・」

休み時間中に携帯を取り出して友人の携帯の画面を眺めてそんな



ことを言っている。さらにそれを聞きつけたクラスメート達は時雨の電話番号やアドレスを勝手に自分の携帯に登録。それを知らない時雨は涼と未だにいたのであった。

ブラッドイーターイーター  
吸血鬼は食者の一種である。

その名の通り血を求め、その血が彼らにとって美味しいものならば吸血鬼は強くなったりできる。

余談として朝の目覚めが良くなったり、無理な姿勢をしていても疲れなくなるなどの報告を受けている。彼らは罪人天使とどこかにている所があり、その数は少ない。力を具現化させるときに現われるものは翼こそ出てこないものの罪人天使のような赤い剣のような物を授かると言う。一説では罪人天使のなりそこないといわれている。

しょう」 『断末魔』！初めての遭遇！！（後書き）

これからは『断末魔』との戦いとなっていくと思われます。流されるままこの状況に既に慣れてきている時雨の運命はいかに！！そして、呼んでくれる人達ありがとうございます！これからもよろしくお願いしますね。

しょのろく 時雨のあれを治したい！！（前書き）

近頃、かなり誤字があると注意されちゃっているのだから今回はいつもより頑張ってみました。

しよのろく 時雨のあれを治したい！！

滅亡者、それは世界の全てを終わらせることができるもののことである。もとは神様が世界をやり直すために作った装置だったが、その装置が何者かに奪われてしまい、何者かの体と融合、そのものは世界を一度滅ぼしてしまい、その力を持つものは結果として神様に狙われることとなった。

『断末魔』メンバー、水神に襲われた時雨は今、中庭にて女の子と一緒に弁当を食べている。もつとも、羨ましそうなこの表現はたとえのもので実際のところは・・・

「まったく、まさかお弁当を忘れるなんてぬけてるんじゃないの？」

「はい、ごめんなさい。今度から気をつけます。」

お弁当を忘れた時雨は涼に頼みお弁当を分けてもらっているのである。

（と言ってもウインナー一本だけである。

）涼としては（妹がいるときは自分が上なのだからとしっかりしているが兄がいるなら思いっきり甘えたいとも思っている。

実は蕾より兄が出来たのを嬉しがったのは涼の方である。

）内心嬉しいのだがそんな彼女は蕾と違い素直ではないので決して口に出すことはないであろう。（さつき手が触れただけで時雨は顔を真っ赤にして鼻血を少々たらしめている。）そして時雨も未だに抵抗があるのだが、（彼は一応治したいらしい。）これは自分の失態なので顔を赤くさせながらもお弁当を食べているのであった。

「けど、『断末魔』が時雨を襲うなんて珍しいんじゃないかなあ？  
それにまさかこの高校にいるなんてねえ。」

「たしかに、まさか学校の中にいるなんて思わなかったな。」

そんな二人の所に蕾がやってきた。彼女は先程時雨と涼と一緒に歩いているのを見て一生懸命追ってきたのだ。（一瞬、あの兄さんが？と疑った。）

「……兄さん、さっき賢治さんから聞いたけど『断末魔』に襲われたって本当？」

ここら辺の地域では有名な話のようだなあ。そんな襲われた当の本人（被害者ナンバー2番）がのんきな事を思っているところで第四の人物登場。

「お兄様、お怪我は無いんですか？もし、血が流れているなら私が頂きますね。」

お腹がすいたらしい氷雨である。三人の女の子に囲まれているので他の男子が見たら羨ましがるに違いないだろう。（時雨がみたら少々ばかり苦しそうにするかもしれない。）もしかしたら体育館裏に呼び出されてリンチを受ける可能性も出てきた。（この男子は相手が番長だろうと恐れることは無いようだ。）

しかし、そこはやはり時雨であろうか？三人に囲まれて先程まで我慢していたものが鼻から吹き出そうである。

「時雨、この人誰よ？あんたの事お兄様なんて呼んでるみたいだけど……」

必死にそれをこらえて時雨は説明しようとしたがどうやって説明しようか困った。なんせ氷雨は死んでいるはずである。

「ええとね、この子は・・・不和　氷雨といって僕の双子の妹なんだ。いろいろ事情があつて今まで離れていたんだよ。」

「え、それじゃあ、兄さんと血がつながっている兄妹なの？」

今度は蕾がそんな時雨の目を見て話してくる。個人的にそんなこと（女の子に睨まれたり、見つめられたり・・・）に弱い時雨の状態ははつきり言つて蛇の生殺しと言つ奴かもしれない。

「・・・ああ、そうなるね。戸籍上でも僕の妹だと思うよ。」

最も氷雨が生きているものならばの話であるが・・・。時雨はそんなことを思いながらその場を離れることにした。今度誰かが彼の顔を覗き込むような姿勢をとれば間違いなく鼻から勢いよく赤い液体が吹き出るに違いない。そう思つて立ち上がるうとする時雨の腕をすべすべの手が握り、時雨の手はその持ち主の胸に当てられた。

「私は、嬉しいですよお兄様。ほら、分かるでしょうこの胸のときめきが・・・（やり方が古臭いかな？早くお兄様から血をもらわないと貧血で倒れるかも・・・）」

カウントダウン　スタート　スリー！！！！

「ああ！あんた何やってんのよ。」

ツー！！

「！！なんて大胆なんだろう。」

ワン！

「・・・もう駄目。」

その後、鼻血を吹き出した時雨は午後の授業を出血多量で休むこととなった。（ちなみに氷雨は貧血で倒れることは無かった。）いやはや、大変なものである。

そして、彼が目覚めたときには既に放課後。隣には氷雨が座って赤い何かを透明のグラスでのんでいた。トマトジュースという奴であろうか？

「あ、お兄様起きましたか？まさか気を失うなんて思っていないでしたよ。それと少々ながらお兄様の鮮血をもらいました。」

「・・・それってトマトジュースじゃないの？」

「はい、お兄様から取れた鮮血ですよ。どうです、飲みますか？」

「いや、遠慮しておくよ。」

自分からとった血を自分で飲むぐらいならはじめっから出したんじゃないだろう。そんな事を思いながら体を起こしてみると体がかなりふらついた。

「結構血を拝借させてもらったので今は血が足りていないんだと思いますよ。それにしても流石お兄様です、こんな美味しいのは初めてですよ。」

ここは素直にありがとうと言うべきであろうか？しかし、彼としては未だにふらふらする頭でものを考えることは少々難しかったようだ。

「・・・氷雨、今までどこでどうやって暮らしてたの？」

「そうですね、住所不定、無職です。住む場所は日によって変わってましたし、そうですね、ダンボール生活がよく似合うと言われたりもしました。食事は誰かを夜道で襲って血を飲んでいましね。（そんな失礼なことを言った本人を後ろから襲いました。）お兄様を探してしまえばいいと思っていましたからねえ。」

「じゃ、何で番長みたいに皆から呼ばれているの？」

賢治や亜美が言う風には氷雨は間違いなく番長と言う奴である。

「それは簡単ですよ。番長になれば他校の番長が襲ってくるから思いつきり血をもらうチャンスなんですよ。」

ここらは微妙に高校が密集していたりするからそのような出来事が起こりやすいようだ。やってきた番長を殴り倒すなりなんなりして気絶している間に路地裏に連れて行き生き血をもらってたんだろうなあ。なぜか時雨の頭の中にはそんな出来事がありありと浮かんできた。

「しかし、その心配はなくなりました。お兄様に出会えたので食料の心配しなくてもいいし、住む場所にも困りません。私の念願の夢も叶いそうなのでこれで十分です。もはやいつ死んでも後悔はありません。」



たぶん、彼女は死んでいるんじゃないかと思う時雨はそのことを口に出して言うことは無かった。理由は簡単、まだ頭がふらふらしているのですんな事をいえなかっただけである。

「・・・同じ屋根の下にいるんだからもし間違いが起こっても・・・きやつ！はずかし。」

まず、時雨ならそんな間違いは起こさないであろう。何かの拍子でそのような事態になりそうになってもその場に赤い彼の血が無様にぶちまかれてそれでおしまいになりそうだからだ。ようやくはつきりしてきた頭をさすりながらベッドから下りて帰宅の準備をすることにした。

「お兄様の血で分かったんですけど、お兄様はかなり珍しい罪人天使なんですね？マニアに売ったら高く売れそうですよ。」

「へえ、血だけでそんなことが分かるんだ！（マニア？そんなのいるのか？）」

氷雨の将来は臨床検査技師なんてどうだろうか？そんな事を考えながら氷雨に話し掛ける。

「分かりますよ。例えばお兄様の好きな果物、動物、車、そして便器の形（？）。手にとるように分かるんですよ。血をもらった相手の情報が分かるのはいいことです。」

えらそうに胸をそらしていたのでつい時雨はそんな氷雨を見ていたが、保健室の扉が大きな音を出してあいたのでそちらの方向を見た。入ってきたのは蕾と涼、そして賢治と亜美であった。

「久しぶりの兄妹水入らずを邪魔して悪いね。実は時雨君に話があるんだ。」

賢治はそう言つて廊下に出て時雨に手招きをして他の人たちは保健室に残った。保健室の中から聞こえてくる話し声は保健室を出た時雨の耳にもかすかに聞こえた。

「あんた、時雨君にやらしいことしたらしいじゃないの！蓄と涼から聞いたわよ。」

「あれは私の身を守るための行為です。お兄様がいなかったら他の生徒を襲つてましたよ。」

そんな事を言っている亜美の声が聞こえてきたが、賢治が話し始めたのでそれ以降聞こえることは無かった。

「実は、少々（君にとって）厄介なことになってね。『断末魔』から君宛にメールが来たんだよ。」

いつのまにか賢治が時雨のケータイをなぜか持つており、その画面には次のようなことが書かれていた。

『お初にお目にかかります、僕の名前は『断末魔』の炎神と申すものです。今日は水神が盛りのついた犬みたい（笑）に時雨様に襲い掛かったと聞いたのでお詫びを申し上げます。あ、アドレスは賢治さんから頂きましたので安心してください。さて、本題に入りますが、これから先、『断末魔』はあなたを狙うことをここに宣言します。あなたは幸か不幸か知りませんがとっても面白そうな実験対象ですからね。それではまた今度。』

「いやあ、これで君以外が襲われることはなくなったみたいだね、皆のために犠牲になれるんだからよかったねえ。」

賢治は他人事みたいにそんな事を言っている。（彼にとっては本当に他人事なのだが・・・）

「冗談だよ。もしも、君に襲い掛かってきた『断末魔』に対しては僕が事前に対処しておくからね。苦戦しないようにしておくから期待しておいてくれたまえ。」

それよりも、敵にアドレスを教えるような行為はして欲しくない。いつそのことからアドレスを変えておいたほうがいいのかもわからない。そんな感じで時雨が賢治を見ていると彼は苦笑していた。

「そんな恐い顔しないでくれよ。この埋め合わせはするからね。それじゃ、僕は忙しいからこれでさいならだよ。」

片手で時雨に手を振り去っていつてしまった。残された時雨もそのまま帰ることにして校舎を出た。

そして保健室にいた全員は置き去りを喰らっていたのであった。

「あれ、時雨君がいない!!」

一人家に向けて帰っている時雨は暇なものだ。部活にも入ってな

いし、別に慌てて勉強しなくてはいけないほど学力は悪くない。家にかえった場合は美奈の手伝いをすることにしていた。それで時雨が電柱の横を通りかかると電柱が話し掛けてきた。

「お久しぶりですね、時雨さん。」

木刀を持って顔を隠しているどこかで見たような人物が時雨の目の前に現われた。今日は三人おらず、襲ってくる気配も無い。

「……他の二人はどうしたんですか？」

「えーと、竹箒を持ってた人は今日は風邪でお休みなんですよ。それで竹刀を持ってたこはデートでいません。」

集まりの悪い集会みたいな状況に時雨は疑問を覚えた。この人たちは暇人なのだろうか？

「じゃあ、今日は何で一人できたんですか？また、何かの相談を聞いてくれたりするんですか？」

木刀さんは首を振って時雨の真正面にたって口を開いた。

「……事情が変わってしまったのでこれ以後はいったんあなたを襲うのはやめて、あなたを助けることになりました。『断末魔』があなたを狙っていると聞いているのでこれ以後は襲われていたらサポートさせてもらいますね。」

そして右手で自身の顔を覆っている覆面に手をかけてそれをとった。

「!??って君は……確か僕のクラスにいた……たしか高仲さんだっけ?」

覆面から覗く顔はどこかで見たことのある顔であり、時雨の前の前、その右の席だったと思う。(時雨の席は一番後ろの席であり、近くには三人の男子がいる。)

「覚えててくれたんですね、ただど下の名前までは覚えてないようだからここでいっておきますね、私の名前は高仲<sup>たかあか</sup> 凧<sup>なぎ</sup>実は『断末魔』に襲われた(実は被害者ナンバー1。)のは私なんですよ。だから私も時雨さんと共に『断末魔』を壊滅させたいんです。それでは今日は帰りますね。また明日……」

ちなみに言うておくが直接『断末魔』のメンバーが彼女を襲ったわけではない。少々脅かした所、彼女が予想以上に驚き叫びながら逃げたときにこけてしまったのだ。(そのとき襲っていた人物は思いつき驚いた。どちらかと言うと襲った本人の方が驚いていたらしい。)彼女はそう言うて走って夕陽に消えてしまった。

「……………結局何がしたかったのだろうか?」

驚いて声も出ない時雨はそのまま家にかえることにした。これ以上かなり頭が困惑してしまう状況は本日中にまたあってしまったら頭から真っ白い煙を出してしまうに違いない。

「ただいまあ。」

「あ、おかえりなさい、時雨様。」

広間で黒光りしている武器の数々を布で丁寧に拭いている美奈が時雨を見て答える。時雨はその数々を眺めながらその光景に興味をもった。

「どうですか時雨様、何か使ってみたいものがありますか？」

そんな物騒なことを聞いてきた美奈に対して時雨はやめておいた。これでまた家が破壊されてしまったら今度こそみんなでダンボールに住むしかない。しかし、興味があるのは事実なので説明をしてもらうことにした。

「使い方やその物騒なものの説明とかしてくれませんか？」

「ええ、いいですよ。まずは自慢の一品、私が愛用している刀ですね。この前時雨様に折られましたが、このたび復活したので（名前は『蒼月・改』）ほっとしました。名前は『蒼月』と言いまして、これは『紅陽』と対になる刀なんですよ。そしてこの前時雨様に対して初め使用したこの銃は……」

ほんの軽い気持ちで人に説明を頼むのはいけないことだと時雨は本日始めて知ったのである。時雨の妹達がかえってくるまで時雨は正座した状態で先生の授業を聞いていた。もちろん、先生とは眼鏡を（時雨のものである。）つけている美奈がどこから持ってきたのか分からない黒板を使って武器の授業を受けていた。

「……ここの装置をですね、そうそう、上手ですね時雨様は……」

「……ただいまあ。」

「あ、帰って来たようなので今日はここまでです。今度は他の種類の武器の使い方を教えたいと思います。楽しみにしておいてくださいね。」

去っていく時雨の家庭教師となってしまったメイドの後ろ姿を眺めながら真剣な表情で時雨は考えていた。

（……この知識はいつか役に立つのであろうか？できればそのような事にはなりたくない……）

そして時雨も立ち上がり、いい匂いのでしてくる方に向かって廊下に踏み出したのであった。勿論、未だに残っている武器は美奈の部屋に持つて行くのは忘れていなかった。もし万が一誰かが触ってしまったら大変である。

夕食の席でニコニコ笑っているメイドさんに氷雨の事を話した。やはり彼女は笑っていてこう答えた。

「私は構いませんよ。この方が時雨様の妹さんなら結構ですし、吸血鬼さんなら暴れて時雨様を傷付けられると思いますしね。もっとも、時雨様を仕留めようと思っっているなら私がこの場で料理しても構いませんから。」

首をかくかく動かす氷雨を見て他の一同は思った。

（このメイドさんに逆らったら命はないかもしれないし、お弁当やそのほかいろいろ自分達がやらなくてはいけないかもしれない。）

意外にめんどくさがりやな性格が多い天道時一家であった。ここに書いておくが時雨の母は凄いいめんどくさがり屋で、たとえ蚊が手

に止まっても叩こうとしない。

「分かればよろしいんですよ。そしてこれは私からのプレゼントです。」

美奈が氷雨に手渡したのは大きな注射器であった。そして時雨たちが聞こえるか聞こえないか微妙な大きさの声でこう言った。

「・・・いいですか、この注射器は特別なもので相手に痛みを与えないような作りになってます。もし、氷雨様が必要になったときはあなたのお兄様に対して使用してくださいね。」

まだぼそぼそ言っていたが時雨はそれは安心できる状況ではなかった。痛みが与えられないならずっと血をとられていて失血で気を失ってしまうかもしれない。それどころか二度と目がさめないことにもなりかねないのである。話し終わったのか今度は食べ終わって逃げようとする時雨が部屋に戻ろうとしたので美奈はその時雨を呼び寄せた。

「・・・今日寝る前に私の部屋に来て下さいね。実は賢治さんから言っておくようにと言われていることがあるんですよ。」

それだけ言ってみんないない（いつのまにか消えていた。）テーブルの上を片付け始めたので時雨はその後部屋に戻ったのだが彼の部屋には三人が既にいてトランプをしているのであった。

「・・・何やってるの?」

「誰が兄さんと同じ部屋になるか決めているんだよ。」



この家は前いた家より大きいが、流石にここまで多くの人物が住む事は出来ない。親達の部屋は一応一緒だが、それでも他の部屋は荷物などがあり、住めない。相部屋になるのは当然で既に涼とつばみは同じ部屋である。とんでもないことだが、時雨にとつては少々大変なことであるので彼は彼の部屋を賭けたトランプ勝負に身を投じたのであった。

「あれ、こんな所でみんな何やっているんですか？」

「いや、どうやら僕の部屋を賭けて勝負しているらしいんだ。」

その後、美奈もその戦いに混じったので大変なこととなった。ルールはシンプルなものでババぬき。一番初めにぬけた人が勝ちで、その期限は一ヶ月である。

「やった！あがりだ！！」

非常に他の人は面白くないのだが、一番初めにあがったのはこの部屋の持ち主であった。そんなに嬉しかったのか現在進行形で飛び跳ねている。

「じゃ、ここは氷雨の部屋でいいよ。」

「え、お兄様良いのですか？」

「うん。」

時雨はそんなことを言つて数少ない家具を持って部屋を出た。

「僕は居間で寝るからここを使つてもいいよ。」

残りの人物が啞然としているなか、時雨はそういい残して元、彼の部屋を出て行ったのであった。その後、居間で誰が寝るか再び対決が起こったのは言うまでも無いかもしれない。その優勝者には一週間の今で寝る権利が与えられると言うものであった。

「……ほら、氷雨はやく取りなさいよ。」

言葉で相手を誘ったり、フェイントをかけたりとその勝負は熾烈を極めた。

そのおかげか知らないが氷雨は早速新しい家族と仲良くなったりもするのである。

しかし、勝負には勝ち負けが存在しており、妥当な線として勝利者は今のところ時雨の保護者的な存在の美奈が第一回の激戦を制したのであった。かかった時間は一時間近くだったらしい。そんな美奈が部屋に戻ると時雨が部屋の前に立っていた。今回負け犬の人たちはすぐごと退散してそれぞれの部屋に戻って行った。

「それではどうぞ、私の部屋に入ってくださいね。」

促されて入った部屋のベットに腰をおろす。女の人の部屋の中に入ったのは初めてであったし、その部屋はかなり片付いていた。（さすがメイドさん。）机の上（これ以外に家具はベッドしか見当たらない。）には白い封筒が置かれており、それを美奈が時雨に手渡した。無言で受け取ってそれを開ける。

「えー、時雨君には少し話しておきたいことがあるんだ。まずは僕の正体から教えておきたいと思う。僕は君と同じで罪人天使なんだ。まあ、その名のとおりなんだけど近頃僕は一つ分かったことがあるんだ。ずばり、罪人天使は必ず何か罪を背負っており、その罪はな

かなか消えることは無い。ちなみに僕が背負っているものはね、ゴミ箱に空き缶などを放り込むことが出来ないんだ。そして思うことに、時雨君の罪は女の子が極力苦手だと思うんだよ。そしてこれらが本題。罪はなくそうと思えばなくすることができるんだ。とりあえず今の状況をずっと保っていればそれはなくなると思うから頑張つてね。追伸 きつとそんな罪を被っているのは過去に女の子をたぶらかしたからじゃないかと思う。』

それで手紙は終わっており、時雨にとっては嬉しい？手紙であったでしょう。

「つまり、僕はその罪がなくなるまで鼻血を拭きださいといけないのかな？」

悲しそうな顔をしてみてくる時雨に美奈はこう言った。

「良かったじゃないですか、鼻血を吹き出してもそれを氷雨様になめてもらえば彼女も喜びますよ、それでは早速鼻血を出してもらいますね。」

美奈のその言葉を聞いて時雨は扉を開けて逃げようとしたが扉にはいつのまにか外から鍵がかかっており、開かない。何度も何度も試してみるがやっぱり無駄であった。

「……無駄ですよ、時雨様。」

いつのまにか抱きつれており、何かが時雨の頭に当たる。

「う、うわああああー！」

彼は叫んだ後いつものようにすぐに気を失うことが出来なかった。時雨は思う、何故だ？何故いつものように気を失うことが出来ないんだ！！叫んでも誰もこないのので少しばかり覚悟をしよう。ちなみにこんなに叫んでも誰も彼女の部屋にこなかったのはこの家には防音効果をもつ素材が使われていたからである。

「・・・許せ、時雨君。これも君のためなんだ。」

いつのまにか家に侵入していた賢治は美奈の部屋を外から鍵をかけていたのであった。これにより、時雨は逃げられなくなったというわけである。

「多分、今頃部屋は（鼻）血まみれになっているだろうね。これも世のため人のため。とりあえず時雨君には女の子恐怖症を急いで治してもらわないと・・・」

部屋の中からかすかに聞こえてくる時雨の絶叫を聞きながらそんなことを考えている賢治は考える人のようであった。そして、賢治に気づいた人物が一人彼のもとによってきた。目をぎらぎらさせた少女は注射器片手に賢治に話し掛けた。

「・・・賢治さん、献血にご協力ください。少々小腹が空いたので血を拝借させてもらいます。」

「・・・僕の血は美味しくないと思うよ。ま、いるならあげるよ。」

注射器でとった血液をそのままダイレクトで口に持っていく氷雨を見ながら賢治はまた扉の中から聞こえてくるかすかな時雨の叫び声を心に残していたのであった。少年よ、成長したまえ。

「うえ、まずう。これならどぶを飲んだほうがまだいいかもしれない。」

隣で口から血を吹き出しながら悶絶している氷雨に賢治は苦笑しながら（微妙に傷ついた。）あるものを渡した。それは、彼が今朝から集めていた時雨の（鼻）血であった。

「いいかい、今度からは時雨君の血を念の為に集めておいた方がいいよ。だけど、あまり彼の血を飲みすぎると君は大変なことになるからね。」

「はあ、分かりました。お兄様の血はたまにしか飲まないようにします。しかし何であなたがここにいますか？」

「ちよいと野暮用だよ。」

扉が中からノックされて鍵を開けると中から血まみれ（全て時雨の鼻血と思われる。）となった美奈が現われた。その顔は何かをやり遂げたときの顔であった。

「・・・賢治さん、約束通り時雨様を普通の男の子ぐらいまでに戻しましたよ。」

彼女の床では今でも鼻血を吹き出しながらとうとう気絶してしまつた時雨がいた。目からは涙まで出ているくらいである。後に、彼はそのときの感想を述べている。

『ええ、あれは凄かったですよ。僕はもう出血多量で死んじゃうかもしれないと何度も思ってますしね。』

賢治はかたわらで心配そうな氷雨にこう告げた。

「今日に限り飲み放題。と言うより彼を奇麗にしてあげてくれないかな？」

「わかりました。」

氷雨は方膝ついて気を失っている兄、時雨にタオルを使い顔を拭いてあげた。

「・・・さて、これで彼が明日襲われても大丈夫だろう。美奈さん、お礼を言うよ。」

「いえいえ、これで私も彼と話せるようになるんですからいいですよ。彼は一定の距離を私から置いて話してきますからね。」

その夜、時雨は目を覚ますことは無かった。そして彼らの学校のある教室では『断末魔』のメンバーが集まって会議を行っていた。

「・・・今日、天道時時雨の弱点を手に入れたんだが、聞いてくれ。」

「いや、多分それは全員知っていると思うぞ。どうせ女の子が苦手だっけ言うんだろ、炎神。」

「彼の教室にいる人ほとんどがそのことを知っていますよ。てか、ほんとに役立たずさんですね。」

「・・・ふうーんだ！！いいもーんだ！！どうせ僕は駄目人間の役立たずリーダーだよ。」

「ひがまないで早く進めてくださいよ。そんなことよりフルネームで呼ぶのも古臭いですよ。」

「・・・リーダー、あんたホントやく立たないね。これなら雷神さんのほうが役に立つよ。あ、後俺も彼の事を堅苦しい名前で呼ぶの反対。意外に彼はフレンドリーな感じがするからね。」

「・・・ヘーヘー、じゃ、今度から標的の呼び名は『しー君』だ。そして今回の作戦は風神にやってもらおう。」

「まあ、いいでしょう。私がしー君を倒してあげますよ。役立たずは一人で十分ですからね・・・」

罪、それは人によって変わる物。

そしてそれを償う方法は自分にとって苦しいことである。

『救世主』と呼ばれていた伝説の罪人天使もその罪にさいなまされていたのだ。彼がどのような罪を犯したのかは不明だが、一説によると彼がその罪を受けるとき、さらに不幸が訪れるらしい。目撃した者達が言っているのは『彼の頭からいきなり空き缶（その他、空き瓶、パック、ガム）が落ちてきて、必ず彼の頭に当たるんだ。その後、さらに大きなものが彼を襲う。』とのことであり、嘘かどうかは分からない。

しょのろく 時雨のあれを治したい！！（後書き）

さて、今回でようやく？時雨のあの症状を改善できたと思います。  
（僕の場合は誤字をなくすのを目標に掲げております。）そして今  
度は宣言どおり、風神が時雨に襲い掛かる予定です。これからもよ  
ろしく願います。



しよのなな 多分、馬鹿みたいな図書館

「時雨君、これをもって逃げてくれ！」

「分かった。剣治はどうするの？」

「ここを原形とどめないようにしてから逃げるから、先に逃げてください。」

「わかった！それじゃまた後でね！」

紫の羽を使うことが出来ない狭い廊下を走る少年は、床に落ちていた雑巾に足をとられてすっ転んだ。どうやら掃除係が落としてそのままにしているらしかった。紫の羽を持つ天使は彼の友達から渡されたボタンのようなものを彼のお尻でおしてしまった。

結果、世界は終わりを迎えたのである。

今で時雨は目を覚ました。先程まで気絶していたような感覚と似ている。頭がぼうつとしている状態から覚醒させるために手で顔を叩こうとしたがその肝心の手が動かない。手がある方向を見ると美奈のからだの下になっている。

「！？」

慌てて鼻をおさえたが（片手）いつも来る感覚がまったくこない。何故だ？何故なんだ？不思議に思う時雨は馬鹿みたいに美奈の寝顔

を眺めていた。いつもならこんなに近くに女性がいたら赤くなる顔も今日はまったく赤くなっていないみたいだ。どうしたんだ？これは夢だろうか？そんなことを考えている時雨は昨日の事を思い出した。

「・・・ぶっ！！」

キター！あの感覚が戻ってきたが前のものよりしょぼい。

どうやら本当にあれは治っておるようだ。

時雨の感覚から言うなら女の子を見たら恐怖を感じていた。何故鼻血が出るかは分からないがとりあえず恐かった。しかし、今は違う。これなら何とかやっていける気がした時雨の心は軽かった。そんなこんなで生まれ変わった？時雨の生活が今、ようやく始まるうとしていた。試しに美奈を触ってみることにした。

「・・・時雨様、できれば私の胸の上に置いている手をどかしてくれませんか？」

「わわっ、すいません！！」

まあ、過ちを犯すことはよくあるだろう。・・・これから僕には今までよりも苦しいことが起きるかもしれない。それでも、僕は強く生きていこう。時雨はそう言って心に誓うのであった。

「冗談です、触りたいなら触って結構ですよ。時雨様のメイドですからね。」

うふふと笑って美奈はその場を去って行った。辺りに誰もいなかったら時雨は助かったに違いない、もしも誰かいたらかれは磔の刑となっていたところである。くわばらくわばら。

それから、時雨は朝の挨拶をみんなにしてから一人で先に登校したのである。

「ねえ、美奈さん、時雨の様子がおかしかったんだけど何かあったの？」

「ああ、女の子恐怖症が治ったんですよ。」

「！！え、じゃ、これから兄さんにおさわりしても大丈夫なんだね！これまでそんなことしてたら鼻血をあたりにぶちまけてたから・・・」

「ええ、大丈夫です。」

「じゃ、あんなことをしてもこんなことをしても大丈夫？」

「・・・えーと、それは・・・試してみないとわからないですね。」

「じゃ、私がお兄様のあれをあれしてこうやって・・・」

「さ、それより学校に行かないと知りませんよ。」

ちなみに、その後彼女達は遅刻となり、時雨は兄妹だからという理由だけで職員室に呼び出しを喰らうのである。前途多難なお兄さんである。

「や、時雨君すきありィ！」

「あ、おはよう亜美さん！」

登校時、網にあつた時雨は彼女の近くで朝の挨拶をした。隙をついて時雨に血を出させようとしていた亜美は驚いた。

「ど、どうしたの！今日は赤くならないなんて・・・」

「治ったんだ！まあ、その、いろいろあつてね。結果としては治ったからよかったけどこれからは大丈夫、きちんと亜美さんの隣で授業をうけれるから。」

今までも亜美の隣の席だが、亜美とは約2メートルの距離をおいて机を構えている。

「へえ、ほんとに鼻血でないの？」

「うーん、多分。」

「わかった、じゃ、今日はちょっと用事があるから先に行くね。」

他の生徒がやっているようなことが出来て時雨は嬉しかった。以前の彼がそのようなことを行えば気絶するか鼻血を吹き出すだけである。そして、もう一人時雨を見ている人物がいた。それは賢治であり、この前見たときみたいに電柱に背中を預けている状態で時雨を見ていた。そんな賢治に気づいた時雨は彼のもとに走っていった。

「おはよう時雨君、今の君は無駄に喜んでいるよ。」

「え、そうかな？」

「うんうん、そんなことより君にバイトがあるんだがどうだね？」

今の時雨はバイトをしていないので（知流高校にいたときは何故だか知らないが下級生がお金を持ってきたりしていたので代わりに勉強などを教えていた。）今の季節は温かい春だがお財布の中は厳しい冬である。

「うーん、じゃ、どんなことすればいいのかな？」

新聞配りをそろそろ考えていた時雨は一応賢治の仕事の内容を聞くことにした。彼が頼んでくる仕事はたぶん尋常なものではないかもしれない。そんなじゃそこのバイトと格が違うと思われる。

「えつとね、今回はボディガード。」

時雨が想像していた仕事よりはマシであった。（ちなみに彼は単身で空手家三百人と戦うと思っていた。一度似たようなことがあった。）そんなでもって時雨は首を縦に頷くことにした。どうせ痴漢あたりが相手になるぐらいだろうと時雨は思っていた。

「そうかい、じゃ、早速行こうか？」

これから学校なのにどこに行くのだろうかと思いつながら賢治を追って行った時雨はびっくりした。

曲がり角を曲がった所には黒塗りのながい車があったのだ。こんな車を見たことはこれまで一度も無い。（ちなみにそれはテレビで話である。）そして黒いタキシード？をきた老人が後ろのドアを開ける。中から出てきたのは黒い服（学ラン）を着た上品そうなお嬢様？そんなお嬢様の事を見たことがあるような気がした時雨は賢

治に話し掛けた。

「ねえ、この前賢治の隣に立ってた人じゃないかな。『断末魔』の話をしたときさ・・・」

「そうだよ、彼女は生徒会、文化委員長なんだ。」

さて、お嬢様と生徒会長はどちらの方が権力が強いのだろうか？時雨がそんなことを話していると賢治にその文化委員長が近寄り話し掛けていた。

「おはようございます、生徒会長様。本日はどのようなご用件ですか？」

どうやら生徒会長の方が権力が上のようだ。時雨が彼の頭の中でそのように決着をつける隣で賢治は文化委員長に返事をしていた。

「ええ、実はあなたが探していた護衛さんを見つけたんですよ。實力は僕が保証しますから。」

そして賢治は時雨を彼と彼女の間に持つていつて紹介した。

「はい、これが保証書つきの護衛さんです。」

賢治は無言で時雨に合図する。その合図を自分で自己紹介して欲しいと受け取った時雨は自己紹介を始めた。

「えーと、僕の名前は天道時時雨です。このまえ、転校してきました。」

「いえいえ、そんなにかたくななくていいですよ。」

時雨は生まれて初めて見るその高貴なオーラに緊張していた。これは今まで戦ってきた敵の比ではない。月とすっぽんの差があるだろう。それにこの文化委員長とやは人間ではないようだ。魔力と言うかなんというか不思議なもやもやが彼女をつつんでいる。

「時雨君、彼女の名前は志乃村しのむら 焰ほむらさんと言って、魔界を治めている人の娘さんの一人だよ。魔法使い（マジック・ユーザー）らしい。」

魔界を治めている人＝魔王。これまた、賢治の友達だけあって普通の人ではないようだ。

「はい、これからよろしくお願いしますね？」

その笑顔は初体験の天使の笑顔。時雨はその笑顔を見ただけで彼女のボディガードを承諾したことを幸運だと思った。まったく都合のよい頭である。

「さて、それでは学校に行かないといけないね。」

賢治はそう言って走り去っていったので時雨も後を追おうとしたが、執事と思われる人物に呼び止められた。

「時雨様、私はこれより魔界に帰りますのでお嬢様をよろしく願いますね。」

そう言って焰を降ろした黒塗りの車は去って行った。その場に残された時雨と焰は徒歩で学校行かないといけなくなってしまったの

である。時雨としては別にいいのだが、このお嬢様はどうやらはじめて自分の学校まで歩いていくようだ。（時雨は多分すぐにギブアップすると思っていた。）

そして歩き始めて十分後、時雨が予想していた事態に陥った。

「うう、足が痛いです。」

そう焰は言って座り込んだ。時雨はそんな彼女の前にいって座り込んだ。

「僕の背中に乗って下さい。あまり乗り心地はよくないと思います。がそれでも今よりは楽になりますよ。どうぞ、家臣の背中へ・・・お乗りください、ご主人様。」

そんなくだらない言葉を言っている時雨に焰はおんぶされた。

「はい、ありがとうございます。」

体重を預けてきたところで時雨は立ち上がり顔に？マークを出した。背中に何か柔らかい何かが当たっている。そして彼は考える。何だこれは・・・もしかしてこれは・・・

「!?!」

あやうく鼻から液体がこぼれそうになったがそれをふんばって歩き出す。彼はこのとき本当にあれを治して良かったと思ったそうだ。そしてそれは彼にとって幸せな時間をもたらしていた。

焰からはいい匂いがしていて、時雨は幸せであったがそれも長く



は続かなかった。

「はじめまして天道時 時雨君。」

いきなり上から女性が降ってきて時雨に話し掛けてきたのだ。時雨は驚いた。そしてこの人は悪い人（スカートから出ている足にはすね毛ボーボー）であると直感的に反応して急いで後ろにいる焰をおろす。

「うふっ！！私の名前は『断末魔』の風神といいます。つてぐふう・・・」

時雨はそんなことお構いなしに殴りかかり風神をその場に沈めることに成功した。普段の彼であつたらそのようなことをしないだろうが、今日は違っていた。

「さ、早く背中に乗って下さい、今のうちに学校に行きますよ。」

「は、はい。分かりました。でも、この人はいいのですか？」

道路に倒れて苦しんでいる人物を見ながら焰はそう言うが時雨は首を振り（時雨はこの人物に関わるとろくなことがないと瞬間的に感じた。）その場を後にすることにした。そして、倒れている人物の横に新たな影が現われる。その人物は倒れて動かない人物を軽蔑の眼差しで見ながら独り言を言った。

「・・・やはり役に立たないリーダーですね。まさか私に女装するなんて思っていないませんでしたけど・・・なるほど、私の服が消えて

いたと思ったら犯人はあなただったんですね。帰って来たら覚悟しておいてください。あまつさえ、パンツや下着まで着用するなんて・・・」

時雨が恐れもせずに彼女（彼）を殴ったのは結果的によかった。本物の風神はそんなリーダーを置き去り（彼女も時雨と同じように彼を殴っておいた。）にして姿を消した。

「まあ、オカマさんが道で倒れているよ！」

「こら、指さすんじゃないですね。」

そして、あれから走りに走ってチャイムギリギリで学校にすべり込んだ時雨は焰をおろした。登校中の生徒たちは不思議そうに彼らを眺めていたので焰が恥ずかしいだろうと思ったからである。

「それでは僕は教室に行きますね。」

そのまま自分の教室に行こうとした時雨の制服がつかまれる。どうしてだろうかと思って後ろを振り返ってみると焰が少々怖い顔で時雨を見ていた。

「何言っているんですか、あなたは今日、私のお供ですよ。」

そう言っただけで引っぱ張っていく。

時雨は登校中の生徒たちに指で指されながら自分の教室ではない所に連れて行かれたのであった。彼女が時雨を連行していった所はなぜか図書館であった。ここの図書館には初めてくるような気がした時

雨はその大きさに驚いていた。校舎の大きさもさることながらこの図書館も相当大きい。そんな驚いている時雨に焰は説明してくれた。

「この図書館は凄いですよ。種類も豊富だし、本を大切にしています。それにこの図書館にはランクがあつてよく利用する人はいろいろなことができるようになるのです。」

なるほど、壁には紙が貼っており、それには次のようなことが書かれていた。

『・・・ランクは銅、銀、金に分かれており、銅では一般の本が普通にかりれます。銀は危険度が高い本もかりれるようになり、金は図書室の奥にある部屋に入ることができます。』

奥の部屋に続く所にはカードを差し込む所があつてそれがなくとおくにいけないようだ。

時雨が他の所をうろうろしていると焰から離れ迷子になってしまった。あたりは子供が借りることが出来ないようなムフフな本が置かれている。治っているとはいえ、時雨にとってここは危険地帯、急いでそこから脱出するために道を適当に進みようやくゴール（焰のところ）についた。あぶなかった、後一分でもいたら本に赤い血がつくところであつた。

「あ、言い忘れていましたが、あちらのほうに行つた場合は警察に補導されますので気をつけてくださいね。少々過激なものがありますので・・・」

時雨が先程までいた危険地帯を指差す。焰は時雨がいなくなったことに気がついていないようだ。時雨は思いつきり首を何度も何度も上下運動をさせながら焰の後を進んでいった。

それから十分後、迷路のような図書館を進みようやく焰は足を止

めた。

（この時点で時雨の背中に乗ってナビゲーターとなっている。）そこには机があり、いろいろな書類が置いていた。隣には眼鏡をかけた少年が目の下にくまを作りながら寝ている。焰はその人物を起こした。もつとも、起こし方は非常にむごい。どこから出したか分からないが辞書でその無防備な少年を叩いたのである。

めきよ。

「んがあ！す、しゅいません、焰文化委員長！」

立ち上がって頭を下げる少年を見ているとかわいそうになった時雨は彼に話し掛けた。

「きみ、大丈夫かな？」

「はい、大丈夫です。そろそろ授業が始まるので失礼させていただきます。」

そう言っただけで走り去ってしまった。しかし、時雨には次のように聞こえた。

『あ、悪いですけど僕の身代わりとなってください。それではさようなら。』

やれやれと思いながらも時雨は背中に乗っている自分より少し背の低い女の子を降ろす。降りた焰は先程座っていた少年の椅子の隣に座りメモ帳らしきものを取り出して時雨にページを開けて渡す。無言で渡されたメモ帳には今日の予定が書かれていた。

『今日の予定その一、午前は奥の部屋にある蔵書の点検。担当は文化委員長。』

そしてそれを時雨が呼んでいる間に焰は金色に輝くカードを持っておくにある部屋に向かって歩き出した。

「私が帰ってくるまで時雨さんはそこで本でも読んで待っていてください。」

彼女はそう言つて奥の部屋に続く道を行くために曲がり角を曲がり姿を消した。時雨は言われたとおりに近くの机においてあつた辞書をとつて眼鏡をつける。適当に取つた本の題名は『魔法入門、炎が魔法初級者にも使える本』というので興味をもつた。そしてそれから30分後、初めの魔法の呪文をゆっくり頭に入れていた時雨のところに焰がやってきた。

「ど、どうしたんですか！」

這いつくばつて何とか戻つて来たようだ。その顔には疲労の色が見える。

「・・・私は・・・もう無理です。どうか、かわりに・・・やっぱり私をおんぶしてください。」

読んでいた本を置いてあつた机の上において焰に背を向ける。背中に柔らかな感触がしたのを確かめて時雨は立ち上がった。体重は軽いので別に苦にならない。

道案内をしてもらいながら本棚の迷路を進む。奥に進むに連れてだんだん明かりの数が少なくなつてきてさらに道に迷いそうな構造になっている。

「・・・もしここで迷ったりしたら誰か助けにきてくれる人いるんですか？」

「いいえ、元々この図書館は学校の恐怖スポット第一位なので近付こうとする人たちはあまりいませんね。年間、行方不明者なんかも結構出ますよ。（ここにきた生徒全て）」

迷ったら大変だと思いながら天井に届くぐらいの高い本棚を見上げる。

「しかし、本当にスゴイ数の本ですね。」

「ええ、実はこの高校では自分で本も出せるんですよ。この高校の図書館には生徒が書いた本も入っているんです。私も書いているんですがなかなか読んでくれる人がいないんですよ。」

「へえーどんなのを書いているんですか？」

時雨はこの高貴そうなお嬢様ならきつと趣味のピアノとか楽器の事を書いているに違いないと思っていたが現実違った。

「えつとですね、題名は・・・」

彼女の口から出てきた言葉に聞き覚えのあった時雨は記憶をたどりその名前を思い出した。それは賢治が売りにきた本の名前であった。

「え、それ、僕持ってますよ。」

「ほ、本当ですか？実はまだ一つしか売れてないんですよ。」

「・・・多分僕がその一つを買っている人物ですよ。」

そこまで話して時雨は強い風が吹いたので背を低くする。そして、目の前に竜巻のような現象が起こりその竜巻は人型となった。

「・・・身長百六十後半、きている学ランに傷がある、優男みたいな顔・・・よし、どうやらビンゴのようですね。」

そして摩訶不思議竜巻人間はさらに強い風を起こしながらしゃべり始めた。

「初めまして、私の名前は『断末魔』のメンバーである、風神です。」

そう言うってから人間の姿となった風神は朝に会ったものよりまともであった。時雨はこのとき朝のように彼女を殴ろうとも思わなかった。

「朝、あなた達の前に現われたのは私たちをまとめているものが私に擬態（女装）したものです。」

「・・・ちなみに性別は？」

「男です。名前は炎神といいまして、好きなものは美少女のお人形で嫌いなものは勉強。好きな言葉は『MAKEの過去形』。嫌いな言葉は『努力』です。それから・・・」

その後『断末魔』のリーダーの役立たずぶりを披露してから彼女

の愚痴になった。

「・・・それからあの馬鹿は何度言っても集会場のトイレに美少女のポスターをはるので困っているんですね。今度警察にでも行くかな？時雨君はどう思いますか？」

「それは・・・何か落ち着きそうにありませんね。」

さらにその後、立ち話もエスカレートしていき四時間目が始まる所で風神が、

「あ、すいません、今日はちょっとこれから用事があるのでそろそろ行きますね。また時間があるときにきますので・・・それではしー君、焰さん、さようなら。あ、それとケータイのアドレスを教えてくださいおきますね。」

呼び方もいつのまにか変わっており、いつのまにか仲良くなってしまう時雨と焰であった。強力な旋風が起きてあたりにかぶっていた埃もついでに持って行って『断末魔』の風神はいなくなってしまった。

「さて、しー君私たちもそろそろ行きましょうか。」

「そうですね、そろそろ昼休みになりますからね。」

何事もなかったかのようにマイペースな二人は思い鉄の扉の前にやってきた。鉄の扉にはカードを差し込む所があり、時雨から降りた焰は手に持っている金色カードを差し込んだ。

がちゃ。



何かが開く音がして時雨は目の前にあるおも　い扉をあけた。

「・・・時雨さんは悪魔だったのですか？」

「いえ、違いますよ。何か罪人天使と言うそうです。」

驚いた顔になる焰だが時雨はその顔を見ていなかった。前を向いていたから分からなかったのである。

「あの、罪人天使なんですか？」

「はあ、たぶんそうですよ。」

その後、完璧に開けられたドアの中を覗きながら時雨はここで後ろを振り返った。

「あきましたよ、焰さん。？どうかしたんですか。」

「・・・時雨さんは罪人天使がどのようなものか知ってますよね？」

「数が少ないんでしょう？」

その後、時雨はかなり意外な真実を知ることになる。それは賢治が教えてくれなかった事実であった。

「・・・罪人天使はこの人間界にはあなたを含め二人しかいません。他の罪人天使は全て天国に連行されました。多分、あなたを襲うであろう人物達がやってくると思います。気をつけてくださいね。」

「？何かよく分からないけど分かりました。気をつけます。」

二人でそのまま奥の部屋に入る。そこは外より乾いており、外の比ではないぐらいに本があった。背表紙には時雨が読むことが出来ないような字であつたり、かすんでいて読み取れないものもある。

「この本はなんなんですか？」

「まあ、魔界に関する本やら天界の本やらはたまた年齢制限のかかっている本のレアなものとかですよ。ちなみに、最後の種類の本を読もうとするとトラップが作動しますので止めてくださいね。」

その言葉に時雨は反応した。（最後の種類ではない・・・と思う。）

「具体的にはどのようなものですか？」

「例えば、魔法使いが記した魔道書とか、魔王が書いた本などですね。ベストセラーにならなかった本もここでは取り扱っているんですよ。いわばここは裏の図書館。」

「・・・ちなみに名づけるならなんていいいますか？」

「そうですね。ここに来るのは私ぐらいだから・・・『私の秘密の花園』ですね。」

多分、ここに来るのはこの文化委員長が最後に違いないと思ってしまう時雨であつた。早速？仕事をするために焰は時雨に指示を出す。

「時雨さんは右の方から見てみてください。この前見たときは誰も触ってなかったし、ここには私たち以外はいはずですので本が抜けていたらすぐに報告してください。あ、それと・・・」

彼女が言ったことは時雨は忘れないだろう。そしてここにはもう二度ときたくないと思った。

「奥にある鏡の前を通ったらさようならですので気をつけてくださいね。」

その声には冗談はまったく含まれていなかった。時雨は首を縦に動かして肯定の動作を取った。焰と分かれて本の点検をする。意外に楽だったのだが、量が多く、彼のノルマを達成することには彼の時計はとつくに次の日になっていた。だが、疲れはほとんどない。

「はい、お疲れ様ですね。ここは時間の間隔があやふやなので時計なんかを頼りにしても意味がありませんよ。それでは昼食を取りましょうか。」

外に出て図書館の時計を確認すると丁度昼休みになっている時間帯だった。先程、机があった所に戻るまでに道に迷っていたりもし、て昼休みは終わってしまった。ここから校舎をうるついていた。したらそれこそ放課後になりかねない。ホントはいけないのだが、今日は特別に図書館の中で弁当を食べることとなった。

「はい、時雨さん、あーん！」

「いえ、結構ですよ。」

食べ終わって今度は午後の仕事を始める。

『図書館のなかで誰かが迷子になっていないか調べた後、掃除をする。担当は文化委員長。』

それから迷子はいないか時雨が歩き回り・・・

「あれ？ここどこ？？」

自分が迷子になり、一時間をかけて焰のもとに到着。焰と共に図書館のなかを掃除してこの日の図書館の仕事は終了、既に窓から優しい光を送っていた春の太陽は沈んでいた。校舎を出たところで黒塗りの車が焰を待っていたのでそこでお別れとなった。

「それではさようなら、また会いましょうね？」

「ええ、また今度ですね。」

そう言つて車は去っていき、時雨も帰宅しようとしたが、学校の方から校内放送が流れてきた。

『2年、2組の天道時 時雨君は後30分以内に職員室にきて下さい。こない場合は覚悟してもらいますね！』

慌てて時雨は回れ右、職員室に向かって全速全身！いつもの三倍のスピードで職員室に行ったのであった。

用件は今日、彼の妹達が遅刻したと先生にきちんと図書館にいないことを伝えなかったことだった。お説教はすぐに終わったので帰ろうとしたら今度は携帯が鳴り出した。

『天道時 時雨様。また鬼ごっこをして遊びませんか？あの場所で

待ってますね！』

その後、彼が家にかえった時には他の人たちは眠っていた。ぼろぼろになってしまった時雨の第二回目の鬼ごっこはまた今度にしておこつ。

世界が滅んでから、神様たちは激怒した。

その結果としては人間界にいる罪人天使をすべて捕獲することになった。

だが、中には抵抗するものもいて、その行動はなかなか治まらなかった。特に凄かったのは紫を持つ罪人天使で、彼を襲うものは全て痛い目にあっていた。一時期、罪人天使が世界を滅ぼしたと噂があったがそれはすぐに消えてしまった。結果としてはその罪人天使以外は天国に連れて行かれてしまったのであった・・・

## しよのなな 多分、馬鹿みたいな図書館（後書き）

今回、何かどつと疲れました。さて、そんなことより、『断末魔』の方々がほとんど出すことが出来たのでよかったです。というより、まだ生徒会メンバーはあまり出てないので次回で少し出したいと思います。

しよのはち 時雨の鼻血の勢い、足蹴にされるつかすてキャラ（前書き）

## しよのはち 時雨の鼻血の勢い、足蹴にされるつかすてキャラ

彼等、罪人天使は神様から言わせるなら単なる試験体である。全ての予想を遥かに越える存在を作り出したかったある神様が創ったのだ。事実、他の種族は契約が一度しか出来ないが、罪人天使は何度もできる。しかし、罪人天使が欲したものは違った。彼らが求めるものは……自由である。

今朝、時雨は自分がどこで寝ているかまったく分からなかった。きよろきよろ目を動かしているとそこが居間だと分かった。昨日のように右隣では美奈が静かに寝息を立てて眠っている。

「……あ、そろそろ起きないといけないかな？」

立ち上がるときにふと柔らかい何かを掴んでいた。なんであろうか？これは……左手の方を見るといつのまにか蕾がいた。そしてその腹の上のほうに手が置かれていた。

「うっくん？」

他の男子だったら何をするか分からなかったが、時雨は妹にそんなことをするわけでもないのそこは素早く手をはなして立ち上がる。美奈がいるほうに洗面台があるのでそこに行こうとすると寝返りをうつた美奈に躓いた。

「んがぁ！ぐふぁあぁー！！」



廊下においてあつた掃除機に思いつき顔を打ち付けて鼻血を放出。青い掃除機はたちまちシャ 専用機になってしまった。そして美奈が起きて時雨を見下ろしている。その長い髪には少々ばかり寝癖がついている。

「し、時雨様、誰にやられたんですか！」

痛くて返事の出来ない時雨はそこらへんをのた打ち回り、あたりを赤く染める。

「ま、まさか私を襲つて我慢できなくなつて鼻血を出したとか??」

顔を赤くしながら服を整えている美奈に向かって首を思いつきり振りながら時雨はどうにか立ちあがつた。

「・・・さつき起きたから顔を洗いに行こうとして寝てた美奈さんでこけたんです。」

「あゝすいません。低い鼻がより小さくなつてしまいましたね。けど時雨様もまぬけさんですね、まさか寝ている私でこけるなんて・・・」

その顔はなんとなく面白そうだったので時雨は少しむつとした。

てか、早く顔を洗いたいのので洗面台の方に歩いていこうとすると美奈につかまれて引き寄せられた。赤ちゃんのように優しく抱かれて

「はい、いたいいたいのとんでけえ」

をされたのであつた。そんなことにまったくなれていない（子供の頃、怪我した時雨は母親に泣きついたりしたが、相手にまったく

されずに

「唾でもつけておけば治る」

と言われた。その後、時雨は帽子のつばを怪我したところにつけていた。ちなみに、そんな馬鹿なことをしたのは彼の過去の友達である。(そして、さらに出ている血の量は増加。時雨の頭は何も考えられなくなった。

「あららーやはり時雨様には刺激が強すぎたかなあ？」

「おっはよう！」

朝から機嫌のいい涼は朝食を食べている時雨の顔を見て驚いた。

「ど、どうしたのその顔！」

鼻栓をしており、顔を真っ赤にしてうつむいてご飯を食べているのだ。彼の頭の中は真っ白であり、特に何も考えていない。涼がいることにも気がついていないのである。そんな時雨に変わって答えたのは美奈であった。

「実は朝からいろいろあつてですね。そりゃもういろいろ・・ここでは言えないような事いたいたいとんでけえとかですね。」

あの後、時雨は美奈看護された。(お医者さんごっこみたいだった)この前治ったあれが一時的に復活してしまった時雨は朝から結構血を出したのだ。時雨はフライパンをかじった方がいいと思われる。

「……じゃ、もし今時雨を触ったらどうなるの？」

ちなみに、今彼を涼が触ってしまったたら行動とかも重なって次の結果となる。

そのいち、涼が後ろから

「おはよう、時雨お兄ちゃん！」

といって抱きついたら彼の朝食は鉄分がさらにプラスされることとなり、その鉄分がふんだんに入っている赤い朝食の上で気絶するであらう。

それに、涼が近付いただけで時雨は立ち上がって走り出すと思われる。散々おもちゃにされたんだからそれは致し方ないことかもしれない。

涼はなるべく刺激しないことにして時雨の前に座って挨拶をするだけにしておいた。

「あ……涼、おはよう……」

あたりに青白い人魂が見えた気がしたが涼の気のせいかもしれない。今の時雨がいるべき場所はお化け屋敷である。そして、そんな時雨にはまだ妹がいることを忘れてはいけない。

「兄さん！おつはよー！！」

座っている時雨に思いつきり抱きついちゃったのは蕾である。目の前に座っている涼には時雨の顔がどんどん赤くなっていくのが分かったのであった。そして

ボン！

といったが、何とか鼻血を出さずにすんだのは蕾の胸が美奈より小さかったおかげだろう。

「・・・いいかい、蕾、朝からそんなにはしゃいでたらいけないだろ。」

時雨はなんとかそう言っつて蕾をはがして席に座らせる。素直に応じた蕾を見ながら溜息をついた涼は時雨の顔を見た。その顔は真っ青。フラフラの足取りで自分の席に戻った時雨は朝食を素早く食べ終わった。蕾に事情を説明した涼はそんな時雨を見ていると何か嫌な予感がした。

「・・・ごちそうさま・・・」

お化けのように音を立てる事無く退散していく時雨を氷雨という不幸が襲った。

「おにいさまぁーおはようございます!!」

真正面からのダイブ。時雨は避ける事無くそれを受け止めてとうとう、鼻血を出してその場に倒れる。そして、時雨を倒したときに返り血を浴びた犯人は目を丸くしている。

「ええええ！何で気絶するのですか!!」

事情を知らない氷雨は慌てて、その他の人たちは溜息をついた。とりあえず、氷雨は時雨の血を集めるために指を鳴らした。たちまち、あたりに飛び散った時雨の血は集められて、氷雨の席においてあるコップの中におさまる。これは吸血鬼の能力の一つである。

倒れている時雨を美奈は担ぎ上げて美奈の部屋に持っていった。  
時雨はうなされており、何かぶつぶつ言っている。

「さすがにやりすぎましたね、そろそろお目覚めの時間ですよ時雨様。」

「ぼかん！ぼこ！どかあ！！あべしい！！？」

朝食を食べている彼女達はすごい音を耳にした。たんこぶを作った時雨はやつとまともな顔になっており、ふらふらしながらも家を後にした。

そして、時雨は道端で倒れてしまったのである。

涼は少々ながらも時雨を心配していたが、その前におかしなことに気がついた。

「あのさあ、何で時雨の血ってあんなに勢いよく吹き出したりするの？」

「それはですね、もとより罪人天使は紅血臓器と言うものが体にあるんですよ。なんでも神様の遺産とかで、血がすぐに作られたり、傷がすぐにふさがったり、ゴキブリ並のしぶとさを持っているのが罪人天使なんです。それに、今人間界にいる罪人天使は二人しかいないんですよ。そして、時雨様は巷で噂の『滅亡者』らしいんですよ。世界を消そうと思えば息を吹きかけるぐらい簡単なんですよ。」

「……そ、そんな！時雨が一度世界を滅ぼすなんてありえないよ。」

「そうですね、彼はとっても優しい人ですからね。私もラッキーなご主人様のメイドになれて嬉しいですよ。」

その目が怪しかったので涼は美奈に質問してみることにした。

「……美奈さんもしかして、時雨の事が……」

「はい、私は時雨様の事しか思ってませんよ。それに他の人はほとんど時雨様に甘えていたりしないので私が甘えているだけです。」

涼も時雨に甘えてみたいのだが、これまでの空白の時間があるのでなかなか話し掛けることも出来ない。それに、彼女は既に高二だから……と言う理由でも遠慮しているのであった。

「やれやれ、思いつきり今のうちに甘えておかないと時雨様に彼女が出来た場合二度とはいいませんが甘えることが出来なくなるんじゃないんですか？それに、今の時雨様なら甘えても大丈夫なんですからね。」

涼は詳しく時雨の事を知らない。何故、彼が女の子が苦手になったのか……。

「そうですね、彼は……恥ずかしがり屋なんですよ。」

涼の考えていることが分かったような口ぶりで美奈はそう言った。そして、立ち上がって弁当を涼に渡す。そろそろ、彼女の登校時間

である。

気絶していた時雨は学校の保健室で目を覚ました。あたりに人影はなく、保健室の先生もいないようだ。そこはほとんど病院の個室並みのベッドの数があり、白一色で統一されている部屋からは清潔感があった。保健室の先生にはあった事がまったくないが、とりあえず自分が何故このようなところにいるか、考えてみる。  
・・・・・・？

全く、記憶がない。思い出せるのは昨日のことぐらいである。

まあ、確か夜はあの地下にある冥土喫茶に行つて・・・・

「あ、今晚は時雨様！みんなあ、時雨様が来ましたよ！」

「ワァー、店内から凄まじいぐらいの声が聞こえてくる。何故なんだ・・・・」

「あのお、何でこんなに騒がしいんですか？お客さんは他にも来るんでしょ??」

奥から僕と背が同じぐらいのメイドさんが現われる。

「いえいえ！お客さんは賢治さん以外こないのですよ。それに、賢治さんは何かとっても変な目やらしいで私たちを見たりするのでとっても初心な時雨様はみんなに好まれるんですよ。それでは今日もこの前みたいに、鬼ごっこをしましょう！」

いええーい！と店内ではエキサイティングなメイドさんたちが騒

ぎ出して外に出て行った。

「それでは今回も私が審判をつとめさせてもらいますね？時雨様、頑張ってください。」

外に出ると早速罷らしきものが転がっていた。

「えーん、みんなにおいていかれました・・・」

正確には転がっていたと言うより、しゃがみ込んで泣いていたんだが・・・絶対これは罠に違いない。そうと分かっている僕はその泣いている少女に話し掛けてしまふ。しかし、保険をかけておくべきだろう。

『我は、哀しみを背負いし天使・・・』

時雨の背中家から鮮血のように紅い何かがほとばしり、彼に力を与える深紅の翼となる。

「・・・えーと、タッチ。」

少女の方に手を置いて一応安全を確保する。これなら彼女に襲われる心配はないだろう。

「ホントに皆においていかれたの？」

「・・・はい、私、ここに来たの最近の事なんで・・・よく分からないんです。その、あの、できればみんなのところまで連れて行ってくれませんか？」



連れて行くも何も、僕はこれからそこに行くのである。

「うん、いいよ。それじゃ、背中に乗ってくれないかな？」

僕は背中に小さな女の子を乗せてから校内に続く階段をのぼっていったのである。

「・・・時雨様を確認、背中に新米を背負っています！」

「あのおばか・・・」

「どうしますか？」

「全軍攻撃開始。手抜きなんて一切不要です。」

「了解、全軍攻撃い！」

そんなやり取りが聞こえて、すぐ後、凄まじいほどの攻撃が僕に襲い掛かった。

ヒヒューン！ダダダダダダッ！！！！

「うわあ、ホントに手抜きなしですか！！」

恐るべし、冥土軍団。てか、いつの間に光化学武器が量産されたんだ！実弾以上に危ないだろう！とりあえず、今は避けることに専念しなくては・・・

紙一重で僕は全ての攻撃をかわすことにした。というより、紙一重でしか、かわす事が出来ないからだ。

「……うおおお！！たっち、タッチ、多津血！！！」

前線でいろいろ撃ってきていたメイドさんを戦闘から除外。今の僕なら何とかなるはずだ！さらに、後ろで攻化学兵器をいじっていたメイドもゲームオーバーとする。

「大丈夫？かすり傷とかしてないかな？」

「はい！大丈夫です！！それにしても本当に強いんですね、さすが『紅時雨』時雨様です。」

白旗あげている皆様の前に後ろに乗っていた小さなメイドさんを降ろして本当に怪我してないか確認する。きている服にもどこにも綻び等がなかったのでよかった。

「さ、それじゃあ僕は行くからね。」

「はい、また後であいましょうね、時雨様。」

そんな話している最中にも曲がり角からなんか怪しく黒光りする筒のようなものが僕を狙っている。ここにいたら白旗あげているほかの人たちも被害に巻き込まれること間違いないのでその方向に突っ込む。

もはや時代はビームの時代。先程から脇を光の線が通過している。学ランはぼろぼろになっておりまた縫ってもらわないといけないようだ。しかし、学ランの代償として、生き残っているメイドの数は片腕で数えるぐらいまでになっている。

「・・・タッチ！」

そして、残り一人。屋上に駆け上がり、あたりを見渡すと・・・美奈さんが立っていた。

「み、美奈さん！どうしてここに！！」

「・・・私は時雨様のメイドですが・・・ま、ご主人様の力量拝見と再戦ですよ。それでは行きますね！！」

右腕にはこの前説明してもらった、『蒼月・改』が光っている。そして左腕には『蒼月』と対を成す刀『紅陽』が握られている。そして・・・ありえないことに・・・彼女の背中にはランドセルのようなものが装備されており、黒光りする物騒な黒い筒が僕を狙っている。

「・・・美奈せんせえ、今度僕にその背中の中のを教えて下さいね。」

「はい、了解しました。」

一陣の風が吹いて戦闘は始まり、時雨は両腕に深紅の剣を出す。そして美奈は右腕、左腕を振り上げて叫ぶ。

「蒼月奥義！！『蒼青藍』まつさお 紅陽奥義！！『赤紅朱』まっかつか」

突如光りだした刀は僕に凄まじい剣げきを喰らわせてきた。そのほとんどは防ぐことにせいこうしたが、学ランは先ほどよりぼろぼろとなってしまうた。

その後、ただ剣を振り回しながら戦っていた僕はなかなか美奈さんを倒すことが出来なかったが、持久戦に持ち込んで勝利を収めた。今回、罰ゲームは一応言っておいた。（仲間は大切にすること）そして家に帰った僕は居間でいつものように寝たのである。うん、ここまででは記憶としてあっているだろう。

「お、起きたようだね。君は今日、登校中の途中で倒れたんだよ。」

保健室の向こうの部屋から賢治がやってきた。そして必死になって思い出すのだが、やはりどこにも今日の記憶がない。これも一種の記憶喪失と言う奴だろうか？

「ま、元気になったのならもういいよね。今日は文化委員長が手伝いはいらなそうだから今日はずいぶん授業を受けるんだよ。それじゃ、迷子にならないように教室に戻って来るんだよ。」

時間は既に午後になっていた。その後、僕は教室に5時間目はじまってから入り、亜美さんの隣で授業を受けた。

そして、休み時間。

「時雨君、学ランぼろぼろだよ。どれかと戦ったの？」

「いや、知り合いと鬼ごっこしてたらこうなったんだよ。」

危うく、体もぼろぼろになりそうだったよ。

「今日は登校中に倒れてたって賢治が言ってたけど大丈夫なの？」

「うん、寝てたからもう大丈夫だよ。」

時雨は少し前から不思議に思っていた。怪我してもほとんどすぐに治ってしまうのだ。それに、前より鼻血が出る量なんかも多くなったりしている。

「・・・さ、そんなことより次の古文は小テストだから勉強した方がいいんじゃない？」

「そうだね、でも今からやって間に合うかな？」

テストの結果は悲惨なものであり、とても口に出せるものではない。今日の授業はここで終わり、放課後となった。

未だに、先程の結果を悔やんでいる時雨は掃除の当番であったので更に気が重くなる。

「はあ。」

出るのは溜息ばかり。他の掃除当番の残った一人（他の男子は全て逃げたので時雨以外は全て女子。）は不思議に思っで時雨に話し掛ける。

「どうかしたの？」

「あ、高仲さん。実はですね・・・」

時雨は自分のからだの異変と小テストの結果を報告。

「ああ、それはね、罪人天使の体の中には凄まじいほどの回復力を持っている臓器があるんだよ。だからちょっとやそつとの攻撃では死なないよ。」

「はあ、なるほど。しかし何でそんなこと知ってるの？」

「それはね、私は断罪する者だからだよ。」

「・・・そうですか・・・」

少々、暗い雰囲気になったので掃除をさっさとして終わらせようと時雨は頑張った。

「それよりさあ、何であの時僕を襲ってきたりしてたの？」

「それはですね、天国にいる神様たちがあなたを恐れているからですよ。時雨さんはかなり危ない存在だと言われていますし、一度世界を滅ぼしているんです。二度と同じような過ちを犯さないように時雨さんを仕留めるのが私たちの任務だったのですが、この前、天国から連絡がきてその必要はなくなったそうなんです。なぜかは分からないんですが・・・だから、時雨さんが『断末魔』に襲われたと聞いたので私は独断であなたの護衛をすることにしましたんです。」

「あ、そうなんだ。ありがとう。」

そのとき、教室のドアが勢いよくあいて、一人の人物が立っていた。その男は背が高くかなりがたいのよい体育会系の格好であった。

『・・・標的発見。これより排除します。』

「！？『断末魔』の雷神！！時雨さん、逃げてください。」

男は右腕を時雨に向ける。その腕は人間のものではなく、黒い筒

があつた。時雨は、その腕に向かつて持っていた簞を投げてから高仲を抱いて教室を出た。廊下側ではなく、開いている窓から下にダブしたのである。

「あ、天使化するの忘れた。」

二階だったので、幸い大怪我する事無く着地に成功した。これも彼が人間だったら骨折していたに違いない。なんとかしびれる足を立たせて上を見る。窓から雷神が時雨を見下ろしていて今度は左腕を時雨に向ける。時雨はさつさとその場を後にした。

そして、また校舎の中に入って時雨は自分達の教室から離れていく。途中、まだ校舎に残っている生徒たちが時雨を指さしている。そのなかに、さつき掃除から逃げていった三人組がいた。

「おーい、しぐれえー！高仲とデートか？学校でお姫様抱っこしていてもいいことないと思うぞ。意外だが高仲はもてるから少ない男子から反感買つよ。ちなみに俺は亜美だけしかめにならないからあ！」

「違つよ！ちよつと用事があるだけ。」

誰もいないところまで走ってきて高仲をおろした時雨は一応あやまった。

「ごめん、とつさの事だったから・・・つい。」

「い、いや、いいよ。・・・そんなことより敵が来たよ。」

廊下を突き当たった場所に先程の人物が右腕から煙を出しながら

たっている。その目は間違いなく時雨を睨んでいる。

『・・・許さない。許さない許さない許さないユルサナイ』

「こ、こえー！もはや顔も人間じゃないし、ホラーだ！！」

「ここは任せて下さい！！」

高仲がいつのまにか持っていた幕で突っ込んでいったが、左腕で軽く払われただけで時雨に激突。

「・・・おかえりなさい。お怪我はありませんかご主人様？」

「・・・ただいま。大丈夫です。」

彼女を受け止めて、時雨は彼女にこう頼んだ。

「・・・僕がああ機械に襲い掛かるから一撃でしとめることが出来なかったらその隙に一撃でどうにかして欲しい。できるかな？」

「わかったよ。」

もはやコメディイではないような気がしてならないが、ここは黙っておこう。

『我は、哀しみを背負いし天使・・・』

鮮血のような翼が彼をまとい辺りには紅き羽が飛び散る。その光景を見ていたものは数少ない。舞い上がった羽が床に落ちるまでに決着はついていた。高仲は舞い散った紅い羽の向こうで雷神が倒れ



ているのに気がついた。その向こうには時雨が立っている。

「さ、掃除の続きをしようか？早く終わらせないと暗くなるからね。」

時雨は近くにあつた掃除用具にぴくりとも動かなくなった機械人形を丁寧に入れた。そして高仲の方を振り返って笑った。

教室、外は薄暗くなっており、もう残っているのは二人ぐらいである。あの後、急いで戻って掃除を再開してようやく今終わったのである。

「じゃ、高仲さんまたね。」

「うん、ばいばい。」

校門の前で別れて小さくなる背中を時雨はずっと見つめた後、再び校舎の中に入った。そして、先程雷神を入れた掃除用具の所まで行って、動かなくなった雷神を引っ張り出して持ってかえることにした。

「・・・ちよつとやりすぎたから修理しておかないといけないな。持ち主が怒りそうだから・・・」

彼にそんな高度な自立ロボットみたいなものを直す事は多分出来ないだろう。直すどころか次の日粗大ゴミに出してそうだ。時雨は雷神を引っ張って家まで持ってかえた。途中警察に聞かれたので時雨は嘘をつかずにはっきりといった。

「ちょっと調子が悪いので家に連れて帰っているんですよ。」

まだ話し掛けてこようとしたが、事件性はないと思ったのか警察は諦めてかえっていった。ようやく家の前について時雨はどうしようか考える。持ってきたのはいいが、一体誰がこのロボットを直すんだろうか？

とりあえず引っ張って中に入れる。すると、美奈が時雨のもとにやってきた。

「遅かったですね時雨様。妹さん達は既に帰ってきてますよ。」

そして時雨はこのロボットの事を美奈に任せようと思った。重火器やらなんやらの扱いがうまい美奈なら少なくとも時雨よりはマシのはずだ。時雨は美奈に大体の説明をした。

「分かりました。今日は徹夜でいじらせてもらいますね。」

そして、次の日。朝起きて時雨はトイレに行くとトイレが変わっていた。

「どうです、時雨様？生まれ変わったでしょう？他にいろいろあった部品は私が全部もらっちゃいましたけど、別にいいですよね？」

『はじめまして、私の名前は雷神と申します。これ以後、私は時雨さまのときのみ、トイレでのふんばる時間応援させていただきますね。』

なんだか、よく分からないままこうして『断末魔』のメンバーが一人消えてしまった。

その頃、消えたメンバーを探している人たちは朝から電柱などに雷神の写真を張っていた。

『名前：雷神 特徴：ごつい 飼い主から切実なメッセージ：雷神、早く戻ってきておくれ、僕は君以外に認めてくれる人がいないんだよお』

#### バベツト 人形。

誰かが神様の真似をして創造した種族である。基本的に従順な性格で、作成者によってその形や能力は変わる。その昔、天界と魔界の戦争にも使用されていたりもした。一度も暴走などをすることはなく、人形は自分達の手で仲間を増やしていった。だが、稼働時間が存在していて、それを超えるとその人形は動かなくなってしまう。

しよのはち 時雨の鼻血の勢い、足蹴にされるつかすてキャラ（後書き）

今回は少し遅くなつてしまいました。こんな作品でも待つていてくれる人がいたら嬉しいですが・・・さて、今回は時雨が何故あんなに鼻血をぶち負かすのかをちゃんと説明してみましたがどうでしょう？面白かったら幸いです。次回は、勘違いをした人物が時雨に決闘を申し込む話になると思います。

## しょのきゅう 形となった罪（前編）

神様はこの世の全てを一度やり直そうとした。神々で集まり、それを実現させるために力を集めた。そして、一人の提案により、それは装置となった。その装置をおしたものは再生された世界が気に入らなくても再び世界を滅ぼすことができる。何度でも……

時雨に家にしゃべるトイレが設置されて二日後にあたる日。その日は時雨にとって厄日となる。

「やあ、時雨君。今からちよつと暇はあるかな？」

賢治はそう言って帰り支度をしている時雨に話し掛けてくる。たいてい時雨は今日の今後の予定を頭に思い出そうとしたが、そんなものは何もなかった。合ったとしても物騒なものの使い方のお勉強ぐらいである。

「うん、暇だけどうしたの？」

「実はね、亜美に頼もうとしたんだけど今日は休みだろ？ま、とりあえず僕の家に来てくれないかな？」

時雨にとっては賢治の家に行くのは始めてであつたので少々興味があつた。噂によると賢治はかなりのお金持ちで家はでかいらしい。

「わかつたよ。」

それから約数十分後。時雨は賢治の家を見て驚いた。

「……これは家じゃないだろう！」

その大きさは例えるなら売れているテーマパーク並はある。方向音痴な人物がこんな所に迷い込んだら大変なことになるに違いない。しかも何のためだか知らないが賢治が言うにはこの庭は迷いやすくなっているらしい。

「さ、こつちだよ。」

それから再び時間をかけて賢治の家に訪問。ドアを開けるとびっくりかなりの数のメイドさんが賢治を迎えた。

「おかえりなさいませ、賢治様。」

「ああ、みんなただいま。」

「…………お、おじゃまします。（小声）」

賢治と時雨の荷物を持つと二人のメイドさんがやってきた。

「二人とも、この少年を知っているかな？」

「ええ、名前は天道時 時雨様。近頃眼鏡をかけていて、寝癖のよくな髪型が特徴的で性格は温厚。ちよつと前まで女の子が苦手で過去一度も女の子と付き合ったことはない。ここに転校してくる前は『紅時雨』と呼ばれていてあたりの高校からは恐れられていた。好

きな食べ物にはミカンで嫌いな食べ物は特になし。意外と妹思いであり、彼の過去は辛いものがあり、もしかしたら涙を誘うかもしれない。例をあげるなら……」

「いや、もういいよ。さ、時雨君行こうか？」

「……」

彼の私生活なんて何でも知ってそうだ。この様子から見ても時雨の過去もばれてそうである。プライバシーなんて存在してないようだ。

メイドさんは会釈して二人を見送った。賢治の部屋の前に行くのにも時間をかけ、こんな家だったら時雨は毎日迷子になるに違いない。部屋の中は綺麗に保たれていた。多くの本があり、まあ、なんだろう？結構な数の美少女の人形も置いてあった。どれもポーズが際どい。

「まあ、くつろいでくれたまえ。」

「う、うん。」

賢治が机の上で何かを探している間時雨はその人形をまじまじと見つめた。触った場合は賢治が本気で怒りそうなので見るだけとする。

「ああ、あつたあつた。時雨君、これを見てくれないかな？」

賢治が時雨に渡した紙にはここらあたりの詳しい地図が書かれており、色々と書かれていた。

「実はね、時雨君がこっちに来る前・・・正確にいうなら一ヶ月前、僕達の高校の女子生徒が襲われてるんだ。夜道を歩いていたら急に声がするそうさ。そして、その後首を振ってあたりを見渡そうとすると、気絶してしまうそうなんだよ。」

「・・・物騒だね、だけどそんなことは大体どこでもあるんじゃないの？」

時雨の言う意見も一理ある。温かくなってくるとそういう人物は増えるのだ。だが、賢治は首を振って地図を指さした。

「その場所を見てくれたら分かると思うけど、あたりには隠れる場所が全くないんだよ。」

そんなものは後ろからつけばいいものだろうと時雨が思っていたら話はそれだけではないらしい。賢治は少し真剣な顔になって時雨に告げた。

「襲われた人の証言によると、何か音がするそうさ。突風のような音がするらしい。それにだ、これ以上犠牲者を出すのはいけないよ。うだからね。警察も捜査をしているらしいけどもし彼らが怪我をしたら大変だからね・・・」

「・・・わかったよ、僕がその襲撃者の犯人を見つければいいんだろう？だけど、『断末魔』とかじゃないの？」

「ああ、全く違うとは言い切れないからね。一応僕も探してはいるけどそのせんはないと思うよ。」



ここで賢治は言葉を切ってこう言った。この時点で賢治は犯人が人間ではないと思っているようだ。

「ま、なにせよ男だけじゃ全くその犯人を捜すことは不可能だから（試しにやってみた）誰かと一緒に捜した方がいいと思う。時雨君が女装するなら僕が手伝ってあげるよ。」

時雨がその申し出を思いっきり遠慮したのは言うまでもないことである。結局、それから時雨は家にかえるのになんか時間を費やしてしまい、賢治の家の前の門の所に差し掛かった所あたりは暗くなっていた。

「時雨様、大丈夫ですか？」

暗くなった道路に美奈が心配そうな顔をして立っていた。先程賢治が家に電話したらしい。

「さ、かえりましょうか？みんなが待ってますよ。」

「あ、はい。」

この数日間で既に美奈とはかなり打ち解けており、時雨にとっては姉のような存在みたいなものである。（過去にもそのような人物が少数いたが、時雨はそのことをあまり話したがない。）時雨は近頃起こっているらしい事件を美奈に話した。美奈はそれを考えながら時雨の顔を見ていった。

「……なるほど、時雨様は苦労人ですね。たとえ相手が魑魅魍魎だったとしても助けを求められたらまず間違いない助けようとするでしょうね。それはいいとして、どうするんですか？誰をパート

ナーとするんですか？」

時雨はそれを聞いて悩んだ。犯人を捕まえるなら多分おとりを使う必要があるだろう。だが、万が一失敗したらそのおとりとなった人物に被害がいきかねない。時雨が女装するなら被害は自分ひとりですむのだが……。

「うーん、かかしかなんかを立てて置いたらどうですか？」

美奈にちよつと睨まれたので時雨は溜息をついた。

「……正直、頼む人がいませんね。もしもの事を考えると誰に頼んだらいいか全く分かりません。」

「そうですね、一応頑張ってみたらどうでしょうか？ 後三日以内にその相手がいないなら時雨様が女装するか私が時雨様のパートナーになりますよ。だって私は時雨様のメイドですからね。さて、それでは家につくまでにこの前の続きから勉強しましょうか？ いずれ役に立ちますよ、この武器の知識は……」

喜々としてはなし始める美奈を見ていて時雨は一旦この事件のことを頭の隅に押しやって美奈の自分が持っている兵器の自慢話のよきな講座に耳を傾けていた。そして、家にかえる前にいつも通っている辺りに特に何もないところに差し掛かって何か違和感を感じた。

「……時雨様。何かこちら辺りにいるようです。気をつけてください。」

美奈は既に警察官が見たら手錠を持ってくるに違いない物騒なものを両腕に装備している。

「・・・!？」

羽ばたくような音を聞いて時雨は上空を見る。そこには一つの人影があり、時雨を見下ろしている。その目は紅く光っており、片方は暗くて見えないがどうやら人間ではないようだ。もっとも、羽をはやして空に浮んでいる時点で人間ではないと思われるのだが・・・

ばさりばさり

その影は二人に興味を失ったのか空高く舞い上がって消えてしまった。

「時雨様、あれが噂の犯人じゃないんですかね？いつそのことここで捕まえましょうか？」

「いや、間違つてたら大変だから今回はやめておきましょう。」

「わかりました。それでは先程の続きからですね。ええっと、時雨様が天使化してから手に持っている剣はですねえ・・・」

何事もなかったように美奈はまた話し出して時雨は彼女の話聴くことにした。

夕食を食べ終わった時雨はトイレに入った。別に用をたしにいったのではなく、少々気になったことを確かめただけである。

『今日は時雨様。いえ、既に夜なので今晚はですね。』

新型とも言える未来のトイレに違いない存在に時雨は腰掛けてそのトイレに話し掛ける。

「えっとね、雷神さんが『断末魔』で稼動してたときは女子生徒を襲ってた？」

新型トイレは少し黙り込んでから離し始めた。

『そのようなことは特にありませんでしたね。一度炎神様が襲ったそうですが、逆にびっくりして汗だらだらで戻って来たことはありました。』

「じゃあさ、雷神さんは人間じゃないものが人間を何故襲ったりするか分かる？」

『そうですね、何か目的があるんだと思いますよ。例えば、吸血鬼だったら血を集めるために上空から襲ったりしますね。時雨様の妹様の氷雨様はもと私たちの仲間だったので吸血鬼の手段はよく分かりますよ。』

時雨はちよつと気になったことがあるんだが、今回はそのことは関係ないだろう。

「目が真っ赤な魔族っているのかな？後、羽をはやしているんだ。」

近頃のトイレは物知りだ。

『それは吸血鬼で間違いないと思いますよ。どの種族も大体、第一段階と第二段階いった成長段階があるんです。例えば吸血鬼の場合、

第一段階なら羽を持っていません。第二段階になると羽が生えます。力を手に入ればその種族は大体第二段階になれるんですよ。』

微妙なうんちくが飛び出してきたが、とりあえずは相手の種族が分かった。

『あ、ちなみに契約するなら魔法使いがお勧めですね。魔法が使えるようになるし、魔法使いにはかわいい女の子が多いですからね。少しばかり体は幼児体系なんで……』

その後、時雨はトイレの話をかなりの時間聞いていて、トイレをでるとみんなに囲まれた。そして、

「時雨様、トイレに引きこもらないで下さい。ここにしかないんですよ。」

「そうだよ、時雨はいいかもしれないけど、心配したんだよ。」

「兄さん手つきりトイレの中で気絶したと思ってたんだからね。」

「お兄様は昔も何回かトイレで気絶したんですから焦るんですよ。」

彼が頭を下げてあやまったのは火を見るよりも、零点を取ったテストを親に見せて怒られるよりも明らかであった。

そして、いつものように今に布団を設置。隣に美奈が同じように布団を敷く。

「とりあえず、気をつけてくださいね。」

美奈はそう言って静かにまぶたを閉じた。時雨も目を閉じてこれからのことを考える。

まぶたが重くなってきたすぐ、時雨は夢の世界に旅立っていった。

深夜、ふと目を覚ました時雨はトイレに行くことにした。雷神は眠っているようで、時雨に話し掛けるようなことはしない。さっさと用をすまして居間に行こうとすると時雨は涼であった。

「あ、時雨、ちょっといいかな？聞きたい事があるんだけど・・・部屋にきてくれないかな？」

「え、別にいいけど・・・どうかしたの？」

眠った頭で時雨は考えたが、思いつくわけでもないので涼の後ろをついていき、彼女と共に部屋に入る。ベッドは二つあるが、片方の持ち主の姿は見当たらない。初めに言っておくがやらしいことは特にないと思われる。

「・・・あのさ、時雨は私たちの兄になって嬉しい？」

「は？」

時雨の半分は眠っている頭で考える。

（・・・何言ってるんだろうか？涼は寝ぼけているのかな？）

はつきり言って時雨のほうに寝ぼけているのだが、時雨はその質問の意味がよく分からなかったので詳しく聞くことにした。

「涼、それってどういう意味かな？」

うつむき加減で涼は答える。

「……美奈さんから聞いたんだけどさ、時雨の女の子恐怖症は私たちのせいだったんでしょ？」

ここでなんか気の利いた台詞でも普段の時雨は言ったかもしれないが、いかんせん、彼は今寝ぼけている。

「大丈夫大丈夫、もう治ったんだしさ。それに今はこっちに戻ってこれてよかったと思っっているし、僕としては涼たちの兄になれてよかったと多分思っているよ。大体、僕が勘違いしてただけだったし、僕が悪かったようなものだよ。」

微妙に引っかかる部分があるが、気にしないでもらいたい。

「じゃ、じゃあさ、その、あの……」

なんとなくいい雰囲気になっているが時雨の顔は凄い。目は半開きで、必死に寝るのをこらえている状況だ。

「……甘えていいかな？」

今の時雨に無理難題を吹っかけても首を縦に動かすに違いない。例えば世界を滅ぼして欲しいとか……。当然、時雨は特に意味もなく首を縦に動かした。もしかしたらうつらうつらしていただけかもしれないが……

「ああ〜いいよ。ふにゃあ〜」

ここで時雨はダウン。隣に座って顔を赤くしている涼に体を預けるようにして倒れる。が、気合で復活したのかもう一度目をしょぼしょぼさせながら体勢を戻す。

「・・・今度から・・・お兄ちゃんて呼んでいいかな？」

賢治あたりが聞いたらちよつと喜びそうだが、時雨はまあなんと言つか・・・またもや首を縦に動かした。今日は疲れているに違いない。

「・・・人間じゃないなら・・・もう、いろいろしても大丈夫だよね？」

そのいろいろが許容範囲ならいいだろう。何の許容範囲かは言わないようにしておくが・・・

「ああ、いいよぉ～ふああ。さ、涼はもう寝ないと明日、遅刻しちゃうよ。」

明日、時雨の目はぎらぎらに輝いているに違いない。罪人天使と言えども、眠いときは眠いのだ。時雨はその腰掛けていたベッドに倒れて眠ってしまった。そんな時雨を見ている涼も彼女の兄に習うようにそこに寝てしまった。

「おやすみ、お兄ちゃん。」

そして、朝を迎える。

早起きした時雨はびっくり仰天。目の前に自分の妹の幸せそうな顔



があるではないか。更に、その腕は時雨をがちり押さえ込んでおり、なかなか放してくれそうにない。おろおろしている時雨はそのパニくっている頭で昨日の事を思い出そうとした。だが、トイレに行ったような記憶があるが、その後がまったく思い出せないのだ。

「・・・？」

しきりに首をかしげている時雨の近くで音がした。部屋の扉が開いた音である。

「おはようございます、涼様！」

美奈である。部屋に入った彼女は時雨を見て硬直。器用に脚の指先だけを動かして部屋を出て部屋の扉を閉めて退出。

「失礼しました！！気にしないで続きをやってください。」

何を勘違いしているか分からないが、とりあえず時雨はそんなメイドさんに助けを求めた。

「美奈さん。助けてください！！」

時雨は美奈の助けを待ったかが、一向に來る気配はなかったので、結局の所は涼を起こすことにした。しかし、ぐっすり眠っている涼はなかなかおきずに、それどころか時雨に更にくっついてくる。時雨は内心焦っていた。あれから数十分経っているのでそろそろ学校に行く時間である。

「ほら、涼おきなよ！遅刻しちゃうよ。」

「うーん、むにゃむにゃ。」

時雨は今度は頭を使うことにして、まずは鼻をおさえてみた。

「ふんがあ。」

「いたつ。」

結果として、涼にかみつかれてしまった。今度は耳元に顔を近づけて催眠術をかけるようにしてみる。

「ほーら、涼、早くしないと雪崩が来るよお。起きないと生き埋めだよお。」

これには反応があった。時雨の腰辺りにまいていた腕をほどいたのだ。だが、喜んでいた時雨はその場からすぐに立ち退くべきであった。涼のうでは今度は時雨の首にまわったのだ。そして涼の顔が間近にあって時雨は言いようのない焦燥感にとらわれた。これはやばいんじゃないのかと時雨の脳内細胞が警報を告げる。

「あーねえさんずるいよお！兄さんもないと思ったたらねえさんのところに行つてたなんてえ！！」

幸か不幸か蕾がやってきた。顔を思いっきり膨らましている。

「た、助かったのか分からないけど、蕾、何とかしてくれえ！」

時雨、心からのヘルプミー。

「じゃあさ、助けてくれたら私も甘えていい?」

それはあまり解決にならないだろうが、時雨は焦っていたので許可した。落ち着きないことこのうえない。

「ああ、とりあえず涼を起こすかどうにかしてくれないかな?」

「まあかせて!」

蕾はどこから取り出したのか木刀を持っている。その木刀はいまや蒼く染まっており、蕾自身も蒼い光を纏っている。

「ちょっとまった!さすがにそんな力を使ったら涼は怪我するだろう!」

「大丈夫大丈夫。なんたらは計画的にっていうじゃん!」

「計画的な人は何たらしめないよ!!」

「あ、手が滑っちゃった。てへ。」

「てへじゃない!!」

涼の頭に迷いなく振り落とされる木刀を時雨は受け止めた。頭で・  
・・

「な、涙が出ちゃう。今日はたまねぎを切って涙を出さないトレーニングしないとイケないな・・・」

「兄さん、それ無意味だよ。大丈夫?」

かくかく頷く時雨を見てほっとしている蕾だったが、先程の一撃で持っている部分以外消えてしまった木刀を捨てて新たな一本を取り出す。時雨はそれを慌てて止めようとした。

「ストップ！タンマー！」

「あぶないぞ 車は急に とまれない」

そして、振り落とされた木刀はそのまま時雨にヒット。涙目になりながらも必死にこらえる時雨。

「いやあ、兄さんホントに凄いな！私の本気を二つもらっても気絶どころか泣いてもいないなんてね。」

そりゃ、本当は泣きたいが兄貴のメンツもあると言うものだ。妹に泣かされるのはこっちに帰って以降は嫌なのである。その昔は泣かされまくっていたが、今の時雨は違うのだ。

「・・・うん。」

「あ、ねえさんが起きたよ。」

時雨の頭にたんこぶ二つで涼は目を覚ました。

「あれ？何で時雨の顔がこんなに近くにあるの・・・」

困惑した顔で間近にある自分の兄の顔から離れる。

「それ！いただきい。」

そして入れ替わりに蕾が時雨の首に手をまわす。そして扉が開いて美奈がやってきてから時雨たちに言う。

「早く行かないと遅刻ですよ。既に氷雨様は学校に行っていますよ。」

彼らは遅刻してしまい、連続して遅刻となってしまった涼、蕾は掃除当番となってしまうのである。

「しかしまあ、ここでも時雨は大変なんだねえ。」

氷雨は隣に行く旧友に言葉を振る。

「ああ、そうだよ。君と言う存在はどこに言ったって変わらないものさ、君が大体世界を滅ぼすからこんなことになるんだろうに。」

首を振りながらそんな相手を見て答える。

「ま、あれは仕方なかったんだよ。これも罪なんだろうね。」

「そうさ、そろそろ君がわざわざ自分ではない自分に会いに来た理由を行ってどうにかしないと時雨君の両親が帰ってくるぞ。時雨君には双子の妹なんていないんだろ？」

「ま、いいんだよ。今の僕がどこまでやれるか試すためにきているんだからね。ちょうど、いい相手がいるそうじゃないか。」

「ああ、丁度いいタイミングで吸血鬼が出たからね。今の君に頑張

ってもらつよ。時雨君。」

「さあね。今の僕は時雨じゃないからわかんないよ。ま、血を吸ったおかげかな。」

空はどことなく曇っていた。

しょのきゅう 形となった罪（前編）（後書き）

今回、微妙にコメディーではないような気がします。気にしないで下さい。というわけで、次回はとうとうやってきた記念すべき第十回目！できればきたして欲しいです（何を？）とりあえずは、まあ、その・・・頑張りたいと思います！！

しよのじゅう 第十回記念 司会 賢治と美奈（前書き）

今回は休憩みたいなもので短いです。



しょのじゅう 第十回記念 司会 賢治と美奈

「こんにちは、皆様方。記念すべき？十回目、司会をさせてもらいます霜崎 賢治です。」

「休日だったのに呼び出されちゃった時雨様のメイドの美奈です。」

「まあ、なんというかですね。目標の半分が終わったわけですが・・・」

「え、後半分で終わるんですか？」

「いえいえ、あくまで目標ですよ。実は一〇二十まではぶっちゃけ、旧時雨君の罪を償ってもらうんですよ。全く、世界を滅ぼすなんて誰もしないと思いますがね。あの人はやっちゃいましたからねえ。」

「・・・そうなんですか・・・というより、そんなこと言っていていいんですか？」

「いいのいいの、別に滅らないからね。そして、彼は今かなり苦しんでいます。ええ、そりゃもう、いろいろと・・・記憶が戻ったらいいですからねえ。だけど、彼はいずれ消える運命なんですよ。」

「ええ!!」

「いや、そりゃもう、あの時もあまり彼の血を飲まないほうがいいといったのに、がぶがぶ飲んだらしくて・・・せつかく僕がほどこしていたものまで駄目になったらしく、覚醒しちゃったらしいからね。それに・・・」

「彼の話が終わるまで私が頑張ります！！それでは、私の過去話でもどうぞ。」

私の名前は美奈と申します。

苗字はしいて言うなら霜崎でしょうか？もと、というか今でも私は命と言うものを持っていません。

実の所は私は人形です。

製作者は霜崎 賢治という人物で、私を作った理由は『ただ、なんとなく』だそうです。

その後、私は彼の家にいる沢山のメイドさんたちの手伝いをすることにしました。

掃除、洗濯、料理、筋トレ・・・最後のは冗談として、私は彼の家のメイドさんとなりました。

そして、賢治さんからはその後、色々と教わりました。

この世界の事、魔界、天界、天国、地獄。

その他にも、人を騙す方法、あっち向いてほいの必勝法、落とし穴の作り方・・・様々なことを学びました。

今思えば後半のものは私にとっては全く必要な物ではなかったと思います。

数年たったある日、賢治さんは私と一緒に喫茶店に行きました。

そして、まだ年の若い賢治様はそのウェイトレスさんたちとあるう事が重火器を取り出して大暴れ。昔からの因縁らしく、店はぼろぼろ、賢治さんは私を見捨ててかえって行っちゃいました。そして私に残された道は一つしかありませんでした。テーブルの上に乗っていた紙には『壊した分はこの子を使ってください。』と書かれているだけでした。

そして、それから数年たったある日、賢治さんと久しぶりにあった私は彼に剣を向けました。彼は言いました。

「オーケー、まずはその大根をスーパーの袋に入れよう。周りの人がびっくりしてるから・・・よし、今日から君は自由だ。先にいつておくけど、君の残り稼働時間は後、数年だ。それまでこの世界を満喫してくれたまえ。」

人間で言うなら残り寿命を宣告されたようなものでした。全く、酷い人物です。そして、私はその後も彼からいろいろ言われてとうとう、決心しました。死ぬ前に歴史に残る偉大なる人物になろうと・・・

それから、私は数ヶ月をたててどうしたら歴史に残るか考えました。

ずばり、世界を征服する事です。

今勤めている所をやめて私はとある喫茶店に勤めました。

その喫茶店はちよつと変わっていました。

その喫茶店はメイド喫茶でそりやもう、珍しいのに客は全く来たりしなかったのですが唯一の客はあの賢治さんでした。

彼がきたときは店のみんなが大暴れ。

ただ、暴れる所は別の所でしたが・・・どっちにしても彼に勝つことは出来ませんでした。

そのメイド喫茶はそういうこともあるらしく・・・どこかで見たような物騒なものを使い方を教えていました。

その後、私はすぐさまその使い方をマスターしてそのメイド喫茶のメイド長の補佐となることが出来ました。

そして、私の目標も多少で達成できると言うものでした。

しかし、あの時私の目標は変わってしまったのです。

時雨様とはじめて相対したとき、私は自分の血が踊っているのがつきました。いや、一応人形ですけど血は流れているんです。彼に負けた後の私は彼を鍛えることが楽しみとなりました。もう少しで稼働時間が終わりを迎えてしまいますが、それまでには時雨様に最後のお願いをしておきたいと思うんです。

ずばり、世界を征服して欲しい。

だから、私はこれからも時雨様のメイドでいたいと思います。

「……だが、彼は結局の所今の時雨君を見守る存在となったんだ。」

「ふう。ようやく賢治さんの長話も終わりました。」

「まだまだ、僕は物足りないからあの名刀との出会いを話してあげようじゃないか。」

「『紅陽』と『蒼月』ですね。まあ、賢治さんはそういうのが大好きですね。未だに部屋にはいろんなゴミが飾っているんですか？」

「ゴミじゃない！あれは僕の宝物なの！！」

「そうですか、それはすいませんね。」

「さ、気を取り直したところであの二つの刀のお話をしたいと思います。」

昔々、あるところに賢治と言う十歳ぐらいの少年がいました。

とても美男子で頭もよかったのですが、（嘘は言わないで下さい！）（わかったわかった！！けど事実だからしょうがないじゃないか！）腹黒くて誰も友達になつてくれませんでした。

友達が出来なかった彼は趣味をもつことにして、本屋に行きました。そして、彼の運命を変える一冊の本とであつたのです。その名前は『赤ちゃんでもできる簡単な名刀の作り方』というなんとも胡散臭い本でした。（そんなの買うなんて馬鹿じゃないんですか？）（さつきからうるさいな。ちよつとは黙つて欲しいものだ。）

「すみません、これ下さい。」

「あ、はいはい、20850円になります。」

そのとき、少年は思った。金持ちに生まれてよかったと・・・（うおい！それは酷いだろう！）札の中で一番高価なものを三枚出してレジのお兄さんに渡す。

「いい買物したぜ。」

少年はそう言つて店を後にするのであつた。

「アーやつと売れたよ。あんなもの買つてどうするのかなあ。」

その本はかなり前のもので、そのレジのお兄さんに色々と教えてくれた店長さんの一代前の人のときからあるものだった。

家にかえつた賢治少年は早速その本を読み始めた。

しかし、漢字が多すぎてまったく分からず（うわ、やっぱり十歳な  
んですね。

）読める所はないか探した。何しろ漬物石並みの重さで、厚さはホ  
ットケーキを十二枚ぐらい重ねているぐらいの大きさなのだ。気が  
ついたらあたりは真っ暗になっていたが、少年は構わず続けた。そ  
して、最後から一ページ目と二ページ目（まずは目次を読みましよ  
うよ。）（えーい、僕は目次なんて物は必要ないんだよ。）

の所にひらがなでかかれているところを発見した。そして、賢治少  
年はそこに書かれている材料を探しに行くことを決心したのだ。（  
何て書かれてたんですか？）（えつと、たしか・・・紅いクレヨンと  
蒼いクレヨンだったかな？）（・・・）幾度となく文具店に足  
を運んだが、定員の反応は現実的だった。

「僕、ごめんねえ。紅いクレヨンと蒼いクレヨンは今品切れ中なの。  
」

賢治少年はそれにも負けず、その材料を求めて、魔界に旅立つの  
であった。

（凄いですね、たかがクレヨンを求めて旅に出るなんて・・・）そ  
して、そのクレヨンを持っているという魔王を倒すために旅に出た  
のであった。（た、たいへんだあ！クレヨンごときの為に打倒魔王  
まで行きますか普通？）まず、賢治は魔王の娘を誘拐（とうとう犯  
罪までやったんですね。）悲しむ魔王一家に対して紅いクレヨンと  
蒼いクレヨンを要求したのであった。

「おらー、早くクレヨンを渡さないとお前の娘の命はないぞー！」

「く、なんてあくどいんだ！娘を、ハデスを返しなさい。」

「ははははは！なんとでも言いたまえ！『正義』のためならどんな

『悪事』を働いてもいいのだ。』

なんとも酷いことを連発している賢治少年はその後、クレヨンを自力で奪って逃走。

人質となっていた魔王の娘の一人は顔にタヌキの落書きをされた状態で見つかったそうだ。

これに激怒した魔王は魔王軍を動かすことを決定したのだ。

そして、念願の材料を手に入れた賢治少年は早速、名刀を作り始めた。

とても利口で手先の器用な賢治少年は失敗する事無く、名刀を二本作り上げたのだ。

しかし、出来上がったときに魔王軍に賢治少年が魔界で隠れ家にしていた場所がばれてしまった。そして、あたりは騒然となり、囲まれてしまった賢治少年だが、できたてはやはやの二本の名刀を使っ  
てやってきた魔王軍を蹴散らした。まあ、切りまくったのでその名刀はもはや名刀ではなくなり、その刀は意志をもつようになった。  
そして、なんともはや、賢治少年がそれを触ろうとすると

『触らないで下さい！賢治様！！』

『……触れないで下さい。』

といわれるようになったのだ。

仕方なく、賢治はその刀を鞘に収めて、紅く刀身が光る方を『紅陽』、蒼く鋭く光る方を『蒼月』と名づけたのであった。しかし、鞘に収めているのにあの二本の刀は賢治に毎日のように文句を言うてくるのだ。それをうるさく思った賢治は知り合いの冥土にそれをプレゼントすることにした。（それって私ですか！！）せいせいした賢治はその後、二度と名刀などを作ろうとしなかったそうだ。

「うん、なんとも涙をそそる話だったねえ。」

「どこですか!！」

「うんうん、あ、そうだ。ちなみに魔王軍の総大将の魔王は討伐しておりますーん。」

「え、なんですか?」

「途中まではいつそのこと魔界をいただこうかと思ったんだけど、意外に魔王って仕事が多いんだよねえ。だからめんどいんだよ。」

「……無気力人間。」

「ま。なんとも言うてくれたまえ、僕は今の生活でいいからね。」

「はあ、と言うよりどうするんですか?まだ何か話すんですか?」

「いやいや、今回はただ単に十回目だったからね。ただそれだけだよ。それでは皆様、また今度!!司会は霜崎 賢治と……」

「冥土の美奈でした!」



しょのじゅう 第十回記念 司会 賢治と美奈（後書き）

ここまでくるのに長かった。そんなことはさておき、どうだったでしょうか？面白かったら幸いです。これから頑張っていきたいので出来ましたら応援よろしくおねがいしますね。

## しょのじゅうち 形となった罪（中編）

紫の羽を持つ少年は、世界が滅びるそのときに色々と願った。そして、最後に自分自身を裁きたいと思った。しかし、なかなかさばく方法がわからなかった。いよいよ、世界が消える瞬間に彼が選んだことは自分自身ではなくなることであった。そして、客観的に自分を見るのが自分の役割と決めたのである。

遅刻してしまつて時雨は先生に朝のホームルームが終わつた後、教室の前に呼び出されて注意を受けたのであった。

「もし、もう一度遅刻してしまつたら君にはトイレ掃除を命じよう。分かつたかね、天道時クン？ 所詮君は一介の生徒に過ぎないのだよ。その所をわきまえたまえ。」

今この先生はとっても機嫌が悪い。しかもその原因は時雨にある。廊下を走っていて曲がり角でぶつかった担任の先生をぶつ飛ばして壁に礫にしまったのだ。あまつさえ、廊下に倒れた先生を涼が踏んづけていった。先生の頭にはたんこぶがついているのだ。

「・・・はい、すみません。本当にすみません。」

「うむ、分かればよろしい。それではみんな、久しぶりに席替えをしようか？」

この先生は非常に変わっており、思い立ったが吉日としているらしく、こんなことをよくするらしい。一時間目の彼による理科の授業は席替えによって消えそうである。なぜなら、くじ引きによる平

等な結果を得るまでこの席替えは終わりを迎えないのだ。時として、男子

対女子の壮絶な戦いがあつたりするのだ。

（男子が教室の中心にかたまつて陣取つた場合、隠し撮りなどをすると亜美が言つて壮絶な殴り合いが始まるのだ。結果としては男子が一度も勝つた事はない。）そして、男子は大体教室の隅に配置が決定されて有無を言えなくなった状態の男子はそこで悔し涙を流すのである。しかし、男子がかたまっていなければ問題はないらしい。

「さ、それではレディーファーストで女子の皆様からどうぞひいてください。」

「せんせーそれ卑怯だ！」

「そうだそうだ」

「男女平等を求めます！！」

時雨、賢治以外のこの教室の男子が騒ぐが先生は動じない。

「ふふふ、なんとも言いたまえ。女にでもなつてきたら君たちに先にひかしてあげよう。」

そして、大体みんなの配置が決まつた所で先程騒いでいた男子が立ち上がる。

「ハーレムは俺のものだ！！」

一人目がひいたが、結果は廊下側の一番後ろである。残念！

「はーっははっは！！あまいわあ！！」

二人目、結果はまあ、ドンマイ。最前列の真ん中。先生と目を合わせる機会がとて多い場所である。無念！！

「みんなあ、ゴメン！！俺がみんなの分まで幸せになるよ！！」

三人目は窓側の一番後ろ、ポジション的には結構いいところだが、悲しいかな？近くに座っている女子は彼よりも背が高いので黒板の文字なんかも見えない。頑張れ、青少年。

「じゃあ、先にひくよ時雨君。」

ラストの手前である賢治はくじをひく。残っているのは教室のど真ん中と真ん中の一番後ろである。そして、賢治は後者の方であった。

必然的に賢治を除くほかの男子から殺気立ったものが時雨に送られる。着信拒否をしたい気分になるに違いない。

「さ、誰か今回文句がある人は前に出たまえ。闘技場は用意してるよ。」

教室は両サイドに机が既に運ばれている。しかし、女子側からは特に文句はなかった。そして、男子の方からは三名が名乗り出た。

「『なめんなやあ！』『紅時雨』かなんか知らんがただでは済まさん！！覚悟しろ！！」

時雨めがけて三人は立て一列に突っ込んでいく。

「『ジエツトストリー……』」

「なんかよく分からないけど、ごめん!!」

そんな三人の足に滑り込むような状態で時雨は彼らに突っ込み、時雨以外の三人はそのまま廊下の壁に激突。保健室行きとなった。

「さ、みんな。今回は意外と早く済んでよかったよかった。それでは授業を始めたいから机を移動させて席についてくれたまえ。」

がたがたと机を鳴らしながら時雨は先ほど保健室に運ばれた三人の分とそれを連れて行った賢治（右手、左手、口にくわえて持っていた。）の分の机も運んであげる。教室の中心に置かれた自分の席に座るとギョツとした。

右には亜美、左には高仲が座っているのだ。氷雨は賢治の右隣である。

「いやあ、偶然って怖いね。時雨君。」

「そうですね、恐いですよね時雨さん。」

何かを企んでいる顔になっている二人の顔を見て時雨は言いようのない不安にかられた。今すぐここからきえてしまいたい衝動にもかられたらしい。なんとなくあせたらたらで両方の隣人に笑いかける。

「あはははは……さっき見たときはまったくべつの人物だったようなきがしたんだけど……」

「気のせい気のせい。」

「そうですよ、気にしない気にしない。」

その顔には間違いなく嘘をついていますと書かれていた。

「それより時雨君、今日の放課後賢治から頼まれていることやるんでしょう？」

「私たちが手伝いますから頑張らしましょう！」

二人はその場でエイエイオーと大声でわめき散らしていたので先生にしかられたのであった。

そして、放課後となる。犯人が誰だか全くわからないので町をうろつく事にした。時雨としては二人に協力はしてもらいたくない。

「ねえ、どうしてもやるの？」

「大丈夫ですよ、今回は三人いるんですから絶対勝てますって！！」

先に行く亜美に聞こえないように時雨に話し掛ける高仲はちょっと真剣な顔になった。

「実はですね、以前賢治さんに頼まれているんですよ。そのときは私と亜美さんだけだったんですがなかなか犯人を見る事無く今にいたるわけなんです。」

「え、高仲さんが断罪天使だって言うことを知ってるの？」

時雨としては賢治と亜美は高仲の事を知っているとはあまり思えなかった。高仲は肯定のしぐさを取って時雨に真実を打ち明けることにした。

「いやあ、実は私は天使化、使えないんですよ。だから多分二人には分かっていないと思いますよ。」

別に隠す必要はないだろうが天使化が使えないのはどうやら恥ずかしいことらしい。

結局、時雨たちは別に何も見つけれないまま本日は解散となったのであった。

「ただいまあ。」

歩き疲れた時雨はそんな間延びした声をあげながら帰宅の意図を伝える。そして、パタパタと歩く音が聞こえて美奈がやってきた。

「はいおかえりなさい時雨様!!」

どことなく慌てているような様子だったが、時雨はそこまで気にせずに家に入った。美奈はそんな時雨に何か言おうとしているようであった。

「あ、あのですね時雨様・・・」

チリリリリーン

自宅の電話が鳴り響き、時雨は近くにあった家の電話を素早くと

る。（今頃こんな古そうな音がする電話はどこにも置いていないと思われる。）

「もしもし？天道時です。」

『あー、時雨時雨かい？私だよ私。』

「・・・いまだきそんな手に引つかかる人はいませんよ。」

『そうかい？お母さんはつきり引つかかると思ったんだけどねえ・そんなことよりちよつと仕事が忙しくなつて家にかえれそうにないんだ。悪いけど頑張つてくれたまえ。』

時雨の母はそう言つて電話をきつた。昔からそうだったので時雨はさしもきにしない様子である。

「美奈さん、実は母さんと父さんはなかなか帰つてこれなくなるんだつてさ。」

仕事場が一緒の二人がそろつて帰つて来ない事はよくあるとこの前時雨は涼と蕾に聞いていた。そのことを美奈に伝えると今度は美奈が口を開いた。

「じ、実はですね時雨様！」

テテッテテレッテ テン

今度は時雨の携帯が鳴り響く。どうやら賢治からの着信らしい。

「美奈さん、ちよつとゴメンね。」



「ええ、いいですよ。」

『時雨君、見回りの方はどうだったかな？』

それから賢治と色々とはなして電話をきる。最後の方の賢治は全くその事とは関係のない話をしていたし、時雨もそろそろげっそりとやつれたような顔になっていた。ここでようやく時雨は美奈を見た。

「・・・時雨様、驚かないで欲しいのですが、時雨様が先日はなしていた物騒な方に涼様と蕾様が襲われました。」

「うええ？」

時雨はそう言ってびっくりした。そりやもうそのときの驚きようは凄いものだった。

「先程おつかいに行っていた私が見たものはひと気の無い道で誰かが襲われていた事です。襲っている人物にありったけの攻撃を仕掛けておきました。そして、私は倒れている人物を助けたのです。私はびっくりしました。なぜなら・・・」

だだだだだだだ

「うわあああん時雨！どうしよう！！」

そう言って時雨に抱きついてきたのはみたこともない少女であった。いや、どこかで見たような顔であった。

「涼様はこんなに小さくなっていたのです。」

美奈はそう言ってエプロンのポケットから白いレースのハンカチを出して目におしあてた。そして、片方の手で時雨の腹の辺りに顔をうずめている涼の頭の後ろの方をつついた。

によき

するとどうだろうか、涼の頭から猫の耳が生えたのだ。それを見た途端、美奈は声を出して笑い出してしまった。

「わ、わらうなあ〜」

いくぶん幼くなってしまった涼は顔を赤くしながら美奈にけりを入れる。時雨はその光景を見ながら啞然として自分の妹を見ていた。

「ど、どうなってるの？」

いまや壁を叩いてひびを入れながら笑っている美奈と顔を真っ赤にして怒っている小さくなっている涼を見て、時雨は混乱していた。そりゃそうだろうさっきは襲われたと言ったのでびっくりしたがこれはなんだろうか？そんな時雨に状況を教えてくれる人物は一応いた。

「兄さん、おかえり。」

廊下の向こうから現われた蕾の顔はちょっと青い。蕾は時雨に何があったかを説明してくれた。

「掃除が終わった後に一緒に帰っていたら上空から音がしたんだ。」

上を向こうとしたら急に意識が遠のいてしまつて起きたら家のベッドの上、隣でねえさんが小さくなつて寝てたんだよ。美奈さんから話を聞いてたらね、ねえさんがおきたんだ。起きたねえさんの顔が赤かったから美奈さんが頭を触つたら・・・こつなつたんだよ。」

とりあえず、美奈さんのつばにはまつたようだ。凄く笑いようである。時雨は怒っている涼の頭に自分の手を置いた。これでとりあえずは耳が見えなくなつたであらう。

「ひーっ、ひーっ。あーすいませんね涼様。時雨様、安心して下さい。別に命に関わるようなことにはならないと思います。」

美奈はそう言つてその場から逃げるように立ち去つた。涼の顔をこれ以上見ていたら美奈は壊れてしまふだろう。顎が外れてしまふに違いない。

「・・・じゃ、私も眠いから寝るね。」

時雨の脇を通るときに薔は時雨に耳打ちしていった。

「兄さん、今のねえさんはどことなく幼くなっているからよろしくね。もし、私が同じようになつたらそのときもよろしく。」

そう言つて自分の部屋に戻つて行つた。廊下に残されたのは時雨と頭に耳の生えている涼だけである。

「しぐれえ、いつまで頭にておいてんだよお。」

どことなくふて腐れたような感じで時雨を下から見る涼を見て彼は笑いそうになつた。無論、彼の場合は心の中で笑うことにした。

「ごめんごめん、しかし本当に小さくなったね。」

少々思うことがあるのだが、ここで時雨がたずねることは違うことの方がいいと思う。仮にも騒がれている不審者による犯行に違いないのに被害者に掛ける言葉が違うだろう。

「襲われたのに心配もしてくれないの？」

そして、被害者はその事を心配して欲しかったようだ。ほつぺたを膨らませて怒っている。怒りの矛先を向けられて時雨は蕾が言った事を思い出した。

（ああ、なるほど、これは少々幼い仕草だなあ。）

のほほんと涼を見ていて時雨はそう思ったのだが、とりあえずは涼の機嫌を直すことにした。

「ああ、ゴメンゴメン。僕が悪かったよ。何かされなかった？」

だが、これは間違いである。

「さつき蕾の説明聞いてなかったの？されたからこんなに小さくなったの！！」

ぜひとも彼女には牛乳を飲ませるべきだ。カリカリしていると人に八つ当たりしたくなってしまう。時雨はそんな怒っている自分の妹を左手で持ち上げた。

「まあ、元気そうでよかったよ。身長が小さくなってるから困った

ことがあつたらなんでも行つてね。」

「・・・わかつたよ。」

やはりふて腐れたような幹事で時雨に返事をして涼は時雨に連れて行かれたのであつた。

そして、外は暗くなり雨が降り始めた。未だに氷雨が帰つて来ないので時雨が心配していると涼がやってきた。テレビを見ている時雨の膝の上に載ってテレビを見始める。時雨がそんな涼をみていると唐突に涼は時雨を見上げて不機嫌そうに言った。

「何か悪い？」

「い、いいや、ただ・・・」

時雨は内心焦っていた。何故焦っていたか自分でも分からないがとりあえず焦っていた。

「・・・ただ？」

「ほら、そのお、あのお。かわいいなあと思つただけだよ。」

時雨はとりあえず思っていることを口にした。

「か、かわいい？私が？」

顔を赤くした涼が時雨に問い返してくる。時雨は首だけを動かして肯定の仕草をして再びテレビを見始めた。涼もテレビを見るため

か時雨が向いている方向を見る。そして、時雨に背中を預ける。

「・・・小さくなったから甘えていいよね？」

「いや、別にいいけどネ。」

時雨は昔氷雨にしていたようにボンと涼の頭に手を乗せる。時雨は忘れていたわけではない。

によき

「うわぁ！」

引っ込んでいた耳が再び時雨の前に現われて時雨は驚く。そんな時雨を見て笑う涼は笑っていた。そこで時雨の携帯が鳴り出した。相手は賢治である。結構時雨の番号などを知っている人物は多いが今のところかけてくるのは小数の人物だけである。

『時雨君、今すぐ学校に来てくれ。犯人がわかったぞ！！それじゃ。』

ガチャ

一方的にそれだけを言うと言電話を切ってしまった。まだ時雨はもしもとも言っていない。これまた失礼極まりない行為である。しかし、時雨は先程賢治が言ったことを頭で考えていた。

「涼、ちよつと行ってくるよ。」

「なに？解決編？」

「多分ね……」

時雨はそう言って涼の頭をなでて傘も持たずに家を飛び出したのであった。ここから学校まで少し時間があるが、幸いまだ雨は小雨である。

学校に到着するとまだ残っている生徒がいた。まあ、一人だけだったが……

「時雨君、犯人は保健室の先生だ。」

時雨にそう言った賢治はなんだかニヤニヤしている。これまた不可思議である。そんな賢治は時雨に話し始めた。

「あの先生はこの世界をある意味で征服しようと思っていたんだ。」

近頃世界を征服するのがはやっているのであろっか？あるメイドに話したらもしかしたら手伝うかもしれない。

「ある意味って何？」

「全人類を獣耳にすることだ！」

時雨とニヤニヤしている賢治の間に沈黙が訪れた。時雨はある意味ビビって声が出ない。まあ、しょうがないだろう。

「彼は今保健室にいると思うから君は時間を稼いでいてくれ。僕はそのうちに色々と準備をしてそっちに向かうよ。それじゃ、がんばってね。」

賢治はそう言って暗闇の中に消えてしまった。残された時雨にどうやら拒否権はないらしく、世界制服を企んでいる人物の本拠地の元に取り込むことにした。

校舎の中は異様に静かで、保健室の所まで誰とも会うことはなかった。保健室は明かりが漏れていて、どことなく怪しい。

「入りましたえ。」

時雨は保健室の中から聞こえる声に従い扉を開けた。時雨は保健室の先生の顔を知らない。初めて見る保健室の先生は凄かった。そりゃあもう、夢に出てこられたら時雨はちよつとビビルかも知れない。

「やあ、初めまして・・・いや、この前あったから久しぶりかな？」

右目に眼帯をしていて、服は白色。だが、いつぞやの時代の貴族が着るような格好でなんともきざつたらしい。

「・・・今日、先生は誰かを襲いませんでしたか？」

ここで、犯人だったら知らないなり何なりいったらうがこの先生は変わっていた。

「別にあれは襲ったわけではない。それに私が欲しいのは血だ。多くの種族の血が欲しいのだ。飲み比べてどの種族が一番なのか決めたいのだよ。と言うのは冗談だ。私はこの世界が欲しいのだ。邪魔するものは全て倒すし、負けたものには私が作り上げたこの薬を打ち込むのだ。」



高らかに笑う保健の先生に時雨は聞いた。

「……ちなみに何の薬ですか？」

のりのりで機嫌がよかった先生は答えてくれた。

「耳が生えるくすりさ！ふはははは！！」

時雨はついでに聞く事にした。

「それを飲んだら小さくなったりするんですか？」

しかし、答えは意外なものだった。

「いいや、そんなことはない。私はそんな趣味ではないのでね。第一、人を小さくしてしまう薬を作ったのは黒い人たちだろうに。」

あえて彼が行ったことを流すこととして時雨は先を続けた。

「じゃ、じゃあ、その薬が効いても小さくなったりしないんですか？」

「ああ、副作用でもそんなことはおきないと思うよ。もしかしたらそうかもしれないが……私が作るのは若返る薬ではないからちよつと分らないな。」

そこで彼は手を鳴らして時雨の目をしかと見据えてきた。

「ところで君は何しに来たのかな？具合でも悪いのかい？それとも・

・私の仲間になりに来たのかな。」

「いいえ、あなたを捕まえに来ました。」

時雨も先生を見てまじめに言った。これまで彼は様々な人物を倒してきたが、今回はちよつときつそうである。

「そうかいそうかい、若人は元気があっていいね。さて、他にききたいことは何かないかな？君が運がよければ天国に悪ければ地獄に行く前に最後に教えてあげよう。」

「なぜ、女子を襲ったんですか？」

時雨はなるべく時間を稼ぐためにその話題に触れた。しかし、その思惑は外れるのである。

「いや、男の血不味かったんだよ。うん、飲んだ次の日から一週間は寝込んでたんだよ。」

それで話は終わりと言ったように時雨に近付き肩に手を置く。そして、時雨を保健室から出した。

「さて、一応最後に私からも質問だ。私と一緒に世界を猫耳とかで埋め尽くさないかね？第二の天国ができるよ。」

時雨は律儀な性格でもあるのでその質問に真剣に考えた。

（うーん、たしかに涼のあれをみたときはかわいいと思ったけど・  
・男もするのはちよつと怖いなあ。やっぱりやめておいたほうが  
いいんじゃないかな？）

「遠慮しておきます。天国ができるかもしれませんが一緒に地獄も出来そうですから・・・」

勿論、先生が行ったのは男は除外されている。悲しいかな・彼がもう少し詳しく説明していたら時雨は彼の仲間になっていたかもしれない。

「そうか・・・それでは君に消えてもらおう。」

そう言って時雨からはなれて広い廊下の真ん中で止まる。時雨が瞬きした瞬間には彼の背中から羽が生えていた。目は赤く染まっており、吸血鬼の本領発揮と言った所だろうか？

どこからか注射器を取り出して（大きさはしゃれにならない。多分世界で一番でかいだろう。）時雨にその切っ先を向ける。そして、時雨も天使化をしようとして

『我は、罪を背負いし哀しみのて・・・あたあ。』

舌をかんだ。慌てて言おうとしたのが間違いだろう。

その隙を当然のことながら先生は待つてはくれない。それに注射をさすときはぶすつといくものだ。針は時雨の征服を貫き、肩に刺さる。

「くっう。」

急いで肩に刺さっている部分を引き出そうとしたが間に合わずに今度は体を吹っ飛ばされた。そして、時雨の体は開いている窓から外に火縄くぐりをしているライオンみたいに華麗に放り出された。

「うわぁ。」

雨は先程より強くなったのか辺りはもの凄く暗い。次に時雨の目に写ったのは赤く光る目と子供が嫌いなお医者さんの道具だった。再び注射器は時雨心臓を貫こうとして・・・何かに阻まれた。

「・・・氷雨？」

紫色の羽が時雨の視界を包み、氷雨と呼ばれた人物が時雨のほうをちらりと見る。だが、すぐに前を見て手に持っている何かで注射器をいとも簡単に破壊。そして注射器を壊した何かを相手に叩きつける。

パシーン！！

雨の音がうるさいのに時雨の耳にはそんな響きが聞こえた。そして、相手は校舎の壁に思いっきりぶつかって気絶してしまったようだ。氷雨と思われる人物はそのまま羽をはためかして闇夜の空に消えてしまった。右腕に大きなハリセンを持って・・・

しょのじゅうち 形となった罪（中編）（後書き）

ふーい、なんだか微妙にコメディーから脱線しているような気がしますね。さて、今回は分かる人には分かるかもしれない人物を出してみました。次回は後編を書きたいと思いますね。

## しょのじゅうに 形となった罪（後編）

紫の羽を持つ罪人天使はいない。そんなものは神様が創った物でもない。神々が創造した罪人はもはや彼らでは防ぐことなど出来ない。神々は恐れた。そして、異分子は全て取り除くことにしたのである。

雨が降る中、時雨は泥だらけの体を立たせて紫色の翼を持つ人物が飛んでいった方向をずっと見ていた。

「ほら、時雨風邪ひくよ。」

不意に時雨を叩いていた雨がさえぎられ彼の目の前に少女が現われる。その顔はどこか心配そうな顔をしていた。

「あ、ありがとう涼。」

いまさら傘をしていても意味が全くないのだが、時雨は涼にお礼を述べた。そして、校舎の壁にぶつかって気絶している人物を見る。しかし、そこにその人物は既におらず、代わりに賢治が手を振っている。

「おーい、あいあいがさなんてしないでちょっとこっちに来てくれないかい？」

何故だか知らないが面白そうな顔をしていたので時雨は涼に手を引つ張られるような感じで賢治の元に向かった。

「さ、この事件はこれで終わり。時雨君はせつかく迎えが来たんだから早く帰って温かくしないと風邪ひくよ。あの眼帯貴族は僕が責任をもって捕獲したから安心していいよ。」

時雨がああ紫の羽を持つ人物の事に触れようとすると・・・

「帰った帰った。今の君に必要なのは情報じゃなくて包帯だよ。全身傷だらけじゃないか。」

時雨の体は刺された覚えのないところまで血が出ているし、学ランはぼろぼろ。まるでぼろ雑巾のようだ。時雨は黙って回れ右をして校門のある方に歩き出した。涼はそんな時雨の後を小さい体で追いかける。家の近くまで無言だった時雨は涼に話し掛けるわけでもなく、ポツリと呟いた。

「・・・哀しみの天使か・・・」

それを聞いた涼は時雨に問い掛ける。

「何それ？」

「いや、さっき事件の犯人に外に投げ出されたときに聞こえたんだ。それ以外は聞こえなかったんだけど・・・」

そんな風に難しそうな顔をしている時雨の背中に涼は飛び乗る。

「時雨、ここ、右肩の当たり凄い傷だよ。」

「え、あ、うん。注射器でぶすりとやられたんだよ。」

時雨はこれ以後先端恐怖症になるかもしれない。家に涼を背負ってはいると美奈が心配そうな顔をして立っていた。その手には包帯と塗り薬が握られている。

体を奇麗に洗った時雨は次に美奈による手当てを受けることになった。

「良かったですね、時雨様が人間だったら多分死んでるかもしれないですよ。出血多量で今頃お墓の下になってましたよ。」

塗り薬を時雨の体に塗っている美奈の手つきはなんだかへたつびである。時折顔をしかめながらも時雨はその荒い治療を耐えていた。

「しかし、本当にぼろぼろにされましたね。今日は天使化をしなかったんですか？」

「・・・実は舌をかねて失敗してしまっただんです。」

うーん、これは笑うべきなのか慰めるべきなのか美奈は判断に困ったのであった。とりあえず話を変える事にした。

「それより涼様のあれを直す方法を聞いてきたんですか？」

頭の上に手を置いて耳の形にして動かす仕草をして時雨はあつと声を出す。

「・・・聞くの忘れてた。」



溜息をつきながら治療の終わった時雨はとりあえず涼を呼んだ。  
もしかしたら何かわかるかもしれない。

「どうしたの？」

涼がやって来て時雨の膝の上に乗っかる。美奈はそれを見てほほえましい気持ちになった。

「ちょっとゴメンね。てえや！」

涼の頭をパコンと叩いてみる。今までならによきと生えてくるのだが、今回は何も出てこなかった。涼が時雨を睨むだけである。

「いたいなあ。何すんだよお。」

「え、ご、ごめん。」

今度はぼんと頭に手を置いてみるがやはり何も出てこない。これならどうだと撫でてでも全くあの不思議な耳は出てこなかった。

「時雨様、とりあえずは結果オーライでいいんじゃないんですかね？身長は依然として小さいままですが・・・」

どうやらあの耳と涼が小さくなったことは関係ないようである。何故であろうか？時雨は難しい顔をしながら涼の頭をぐりぐり回すのであった。

「明日も学校ですので今日は休んだ方がいいですよ。学ランの方は私が何とかしますから。」

「あ、うん・・・ありがとう。」

時雨は泥だらけでずたばろ、更に赤く染まった学ランを美奈に渡してその場を後にした。氷雨が帰ってきてないのが時雨にとってなんとなく心配要素の一つでもあったが、彼女の事は大丈夫だろう。そんなことを考えていたから涼が言った事を時雨は受け入れる羽目となった。

「時雨、一緒に寝よう?」

「ああ、うん。」

「ホント? やったあ。」

そして、はっと気づいて訂正しようとしたが遅かった。涼は自分の部屋に戻ると枕を持ってやってきた。

「さ、寝よう寝よう。」

「ちょっと待った。どこで寝るの?」

もういまさら間違いだったと言うことは出来ない気がしたので時雨は諦めたような口調で涼に言った。時雨の部屋はこの家に存在しない。

「ここ。廊下で寝ようよ。」

いつの間にか廊下には布団が準備オーケーとなっている。

「ちょっと狭くない?」

「大丈夫だよ。」

時雨を引っ張って涼は嬉しそうに布団に入る。

もとより布団は一つしかないので結局は二人で寝ることとなる。

電気なんかほとんどない廊下は暗いので良く分からないが時雨はできるだけ涼と距離をとろうとした。寝返りをうったときに涼をつぶしてしまったら大変であるし、再び美奈に誤解される可能性が高い。まあ、廊下に寝ている時点で他人にばれるのは間違いないだろう。寝ぼけた誰かが二人を踏まないことを願っておこう。

「しぐれえ、こっち来てよお。」

不意に甘えたような感じの声を出して涼は時雨を呼ぶ。時雨はちよつと意外だと思いながらも仕方ないと頭の中で整理して涼の近くに体を動かす。もっとも、廊下は狭いのでほとんど変わらないのだが……

「甘えてもいいよね？」

時雨の返事を待たずに涼は時雨に体を寄せる。時雨が量がいる反対方向に体を向かせる、涼はそんな時雨の背中にせみのごとく張り付いた。これでは時雨はうかつに体を動かす子は出来ない。

「つかまえたあ！」

「ははは……捕まった……」

内心焦りながらも時雨はこの次の涼の行動を考えた。子供が次にしてきそうな事はなんであろうか？

「えへへえ。」

時雨の背中に顔を押し付けて時雨を抱きしめる。そして、そんなことをしていることによつて夜はふけていくのであった。

朝起きるといつのまにか涼の顔が目の前にあった。デジャビュ？ そんなことより時雨は驚いた。なぜなら涼が重いのだ。これは彼女の体重が元から重いのではなく、昨日に比べたら重いと言うことである。つまり、それが意味することは一つ。

涼の体が元に戻ったのである。

涼の肩を掴んでゆするうとして廊下に人影があつた。この時間帯に起きているのは時雨か美奈ぐらいなものである。そしてその人影は美奈であつた。

「！！時雨様、朝っぱらから何そんな幼い子を襲っているんですか！！」

「ち、違うよ！体が戻っているんだよ。！！」

その弁解の仕方も勘違いされる可能性が大きいような気がしないでもないが今回は目をつぶっておこう。しかし、美奈が驚くのも無理はない。こんな狭い廊下にやはり二人がはいることないので涼は時雨に覆い被さるようになして寝ている。よくもまあ、こんな体勢で寝れるものだ。

「そうですね、それではそろそろ起きた方がいいと思いますよ。」

昨日、涼がぶかぶかのパジャマを着たのは正解だった。もしも、小さいサイズのものを着ていたら大変なことになったに違いない。時雨は静かに寝息を立てている涼を起こさないようにわきにずらして布団から出る。そして、立ち上がり、違和感を覚えた。

「あれ・・・？」

「どうしたんですか、時雨様？」

体から力が湧きあがるような感覚を覚えて時雨はしかめっ面をする。天使化をしたときのようない感じがするのだ。とりあえず、時雨は顔を洗い、トイレに入る。

『おはようございます、時雨様。』

「え、ああ、うん。おはよう雷神さん。」

そう答えて時雨はちよつと黙った新型トイレを見た。

『どうやら時雨様は悪魔と契約を交わしたようですね。』

「え・・・なんだって？」

その後、時雨はトイレによる契約の授業を受けたのであった。

『・・・つまり、時雨様は間違っただとしても涼様と契約してしまっただけです。そして、涼様は力を失っていた状態から時雨様と契約したのもとの大きさに戻ったのですよ。一般的に悪魔が力をなくすと小さくなることは知られていませんね。』

ついでに涼が小さくなったことまで分かった。トイレにしておくのはもったいない。

「じゃあ、やっぱり僕は・・・涼とその・・・事故だったとしてもキスしてしまっただの？」

『そうですね、そのようになります。罪人天使の時雨様なら神様も悪戯かもしれませんがまだ契約は出来ますよ。』

時雨は微妙な心境でトイレを後にする、すると涼と鉢合わせ。一瞬ビビってしまう。

「おはよう時雨！昨日は良く眠れた？」

「え、う、う、うん、おはよう。よく眠れたよ。」

ちょっと涼は不思議そうな顔をしたが、笑った。そして、少し顔を赤くしていったのだ。

「私はずっと時雨の妹だよ。駄目かな？」

その目は何かを知っている顔でもある。

「え、もちろんだよ。」

家の上では二つの影が立っていた。

「うーん、僕ってやっぱりついてないのかなあ？」

「生まれ変わっても時空が変わっても世界が滅んでも君はロリコンなんじゃないかい？これが君の罪だろうね。いや、大体君は女好きだろうね。」

「へん、いいやい、僕は僕だ。彼は彼。誰と契約しようがどうでもいいよ。僕は彼が間違いを犯さないようにしないといけないんだからね。」

「もう、間違い犯してない？」

「……………」

朝の日差しに包まれて二人の人影は消えた。片方は肩を落としていたような気がする。

学校ではいろいろと騒がれていた。どうやら賢治が色々としやべったようだ。一ヶ月前から起きていた女子を襲った犯人は転校してきた、番長、『紅時雨』によって捕まったと言われていた。時雨が教室に入るなり既に他の生徒は座っており、そのことでもちきりだった。

時雨が入ってきて席につくとみんなに囲まれてたのであった。

「やるねえ、時雨君。」

「私が捕まえるはずだったのに！」

そんな声が聞こえてくれるが、頭をばしばし叩かれる。特に約三

名のクラスメートからの攻撃は凄まじい。

「くそう、時雨の奴はいつもおいしいところもって行きやがって。」

「この前は俺たちを保健室に送り込んだくせにい。」

「気がついたのは昼休みだったんだぞ!!」

そんな中にも氷雨の姿は見当たらない。誰かに聞こうとして先生がやってきた。生徒たちはそれぞれ自分の席に戻っていったので時雨が聴くことは出来なかった。

「えー、実はみんなに連絡がいくつかある。まず一つ目、保健室の先生が捕まったので新しい保健の先生が見つかるまで保健室の使用は出来なくなる。この前、保健室に送られた人達は再びそのようなことがないように気をつけること。二つ目、このクラスにいた氷雨さんは昨日を持って転校することになった。詳しく分からないが、本人からそのようなことを聞いたので間違いないだろう。そして最後、天道時時雨くんは本日トイレ掃除をする事。理由は終わった後に伝えます。以上。」

先生は教室から出て行き、時雨は顔をしかめた。遅刻もしてないのでそんな掃除をする事自体がわからないのだが、しょうがない。そんななか、隣の席の高仲が時雨に話し掛けてきた。

「時雨君、氷雨の事何か聞いてないの?」

時雨自体初耳だったので昨日からあっていないことを言うと・・・

「うーん、兄の時雨君にも言っていないなんておかしいね。」



「ただ単に旅に出たくなっただんじやないの？」

亜美はそうのように言って時雨の顔を見ている。その顔はどんなに心配をしているような顔である。

「それより時雨君、学ランがとてつもなくぼろぼろで血のにおいがあるんだけどホントに大丈夫だったの？」

「え、うん。凄いはろぼろになっただけど大丈夫だよ。」

時折刺された箇所が痛むが、そこまでない。そして、今度は賢治が時雨の元にやってきて言った。

「トイレ掃除は覚悟を決めたまえ。トイレを侮ると痛い目を見るぞ。」

うんうんと頷いている賢治を亜美と高仲、そして時雨が見たが賢治はただ頷くだけであつた。

「あ、そういえば高仲さんのお友達はどうしたの？近頃全く会っていないよ。」

「風って呼んでください。あの二人はですね、行方不明になりました。この前のトイレ掃除の時に……。確か、おとといぐらいだったですかね？トイレは気をつけてくださいね。この学校にはちょっとした噂がありますから……。」

風はそう言つて席を立ち、どこかに行つてしまった。

「それってどういう事？」

「ああ、それはね、高校なのに怪談があるんだよ。女子トイレだから時雨君にはあまり関係ないと思うんだけどね。放課後のある時間帯にトイレの個室に入ると声が聞こえてくるそうさ。自分以外に人はいないし、何かがいるような気もしない。ただ単に声が聞こえるだけなんだよ。そんな話さ。」

どこにでもあるような感じの怪談だが、横から亜美が口をはさんだのでその怪談は変わってしまった。

「え、私が聞いたのは違うよ。トイレの個室の中にいると声が聞こえるって言うけど、それは水の神様が通る音って聞いているよ。それに、時間帯はどっちかというときだよ。」

時雨はどっちみち関係ないだろうと思い、その話を聞いていた。

「それに、人を襲うって聞いたこともあるし、過去にも行方不明者が出たんだよ。」

消えた一年生の謎・・・と言う題名でこの学校の怪談の一つらしい。

そして、今日は時雨の番となった。

夕方、時雨は男子トイレで一人で便器を擦っていた。今のところはきれいにしているし、床も掃除した。後、残っているのは個室だけである。個室は三つあり、廊下側から時雨は丹念に舐めるようにきれいにしていく。トイレは白く輝き、時雨に感謝しているようであった。もっとも、トイレから御礼を言ってもらってもどうかとは

思うが……。

とりあえず、時雨はトイレ掃除を完了。この後先生を呼んできて奇麗になったのを見せれば帰ることができる。時雨は帰宅部なのでこの後は暇である。

『……ああ……あ……』

そんな時、時雨の背後……一番近い個室からそんな音が聞こえてきた。不審に思う時雨はその個室の扉を開けて正直ビビった。

便器から水が溢れ出し、その水はなんと手の形をしていたのだ。そして、その不可思議な水の塊は固まっている時雨を掴み便器の中に連れ込んだ。時雨は謎の手に捕まれた所で気絶してしまい、その後どのようなになったかは分からない。

目を覚ますと下水道のような所であった。辺りは暗いというわけでもなく、それなりに視界は良好である。どうやらとても広い所のようにだ。そんな中、奥のほうに人影があり、その人影は時雨のほうを向いた。

「おや、しー君じゃない？どうしたのこんな所で？」

『断末魔』メンバーの一人、風神である。時雨の高校の制服を着ていて（といっても学ランとスカートだが……）不思議そうな顔で時雨を見ている。

「ここはどこなんですか？」

「ああ、ここはお馬鹿なリーダーさんが作った旧、『断末魔』の安らぎの地よ。今はマンシヨンの一角に移動されているけどね。もう

一度聞くけどどうしてこんな所にいるの？」

時雨はトイレ掃除をしていて起こった不思議現象の事を話した。風神はその話を聞き、時雨にその現象を説明してくれた。

「……それは間違いなく、あの水神の仕業ね。しー君をしとめようと思っただけじゃないの？あつちの方にもつとここより広い所があるからきつとそこに水神はいるわよ。水神を地獄に送るなら後で墓参りに行くって伝えておいてね。」

時雨の返事を待たずに風神は回れ右をして光が多く入ってきている方向にある曲がり角を曲がり消えてしまった。残された時雨は風神が言ったとおりのほうに歩き出した。『断末魔』とは敵同士だが、風神とは友達なので時雨はあっさりとその言葉を信用したのである。

「……あ……ああ……ああ……！」

奥に進むごとにそのような声が聞こえてきた。時雨は声が聞こえてくる扉の前で天使化をすることにした。昨日の二の舞にならないように彼なりに努力した結果である。

鍵がかかっていた扉を紅い剣で切り裂き、中に入る。

「ここからはやくだしなさいよ……！」

「そうです、早く出しなさい。」

「鍵なくしたんだからしょうがないだろ！今さっき誰かを捕まえたから多分助けに来るはずだ！それまでの辛抱だ……！」

ひろーい、部屋の中でこの前見た水神が二人の女子高生に追つか

けられている。二人の女子高生は天使化をしているようで、白い剣を振り回しながら水神を追いまわしている。

「つて、あぶなあ!!」

片方が白い剣を水神に向かって放り投げた。その件は水神の頭の横を通り、彼の前にある壁に刺さる。

「さあーで、長かった鬼ごっこも終わりですよ。昨日からの鬼ごっこは二人の鬼による・・・血が騒ぐであろう、血劇で終幕ですよ。」

「三枚に下ろされるのとハンバーグの元になるミンチ、どっちがいい？」

「ま、まで、お前らをここに落としたのは俺だが、ここから出れなかったのはお前達だろう!! 責任は双方にあるはずだ。」

壁にじりじり追い込まれている水神はここで時雨の存在に気づいたらしい。

「あつ! 助けが来たぞ!!」

二人が振り返ったほんの一瞬について水神は水の獣のような形をとり、時雨の後ろにまわり時雨を盾にするようにたった。しかし、次に時雨の耳元で時雨が驚くことを喋り出した。

「まさか、『断末魔』ってだけで女の子と付き合えないなんて知らなかったぜ。この前、炎神に規律を聞いてな、それにより俺は『断末魔』を抜けることにしたんだ。だが、抜ける前にしー君こと、天道時雨と再戦をするつもりだったんだが、手違いであの二人が

来ちまっただよ。今の俺はお前に構っているほど暇じゃねーんだ。だからお前と会っるのは今日で最後だ。さらばだ。」

そんなことを言っている水神めがけて凶暴化した天子は白き光を放つ剣をバンバン投げてくる。つまり、水神の前にいる時雨にとってはいい迷惑だ。つい先程彼の耳から血が飛び散った。

「やべえ、それじゃな。」

そう言っただけで水神は必死の形相をしてなくなった扉をあつという間に突破して下水道に流れている水と一体化して消えてしまった。

「まああてええー!!」

「逃がしませんわ。」

そして、もはや天使と言うより青森のなまはげのような顔をした二人は水神を追って下水道にダイブ。凄い根性である。そのまま消えてしまい、時雨は再びその場に一人、残されたのであった。とりあえず、外を目指して全身、先程風神が消えた方向に歩くことにする。そして、彼が見たものは・・・

「何処だここ!!」

どこかの山奥である。と言うより、古くなった家が近くに見えて更にその近くに一つの井戸がある。まるで恐怖映画のワンシーンのようだ。井戸のほうを向いていると白い手が出てきた。

「う、う、うわああああ!!」

そんな時雨を見下ろす一つの影があつた。

「・・・あとは二つか・・・彼が犯していた四つの罪、『ロボット人形をばらばらにした罪』と『その昔、時雨君がおもらした罪』は消えたからね。後、残っている罪は『うちわで女の子のスカートの中身を確認していた罪』と『火遊びした罪』だけだ。これが終われば『断末魔』もお終いか・・・。しかし、まあ、あの時雨君もいろいろあつたんだねえ。」

運命の齒車は大きな音を立てて外れていた。神々は慌て、その補修をしたが間に合わなかった。そして、外れた齒車は世界を混乱させたのであつた。

余談だが、時雨が自分の家にたどり着いたのは数日後だったらしい。

しよのじゅうに 形となった罪（後編）（後書き）

頑張ってみました。いや、何処が頑張ったかときかれたら困りますが・・・さて、今回は時雨の罪といった目標で書きました。どうでしたでしょうか？



## しょのじゅうさん 美奈とエンゲージ

時雨がどこかの森から戻ってきた次の日、休日はずっと終わっており、学校が始まっていた。

戻って来たといっても夜遅くで、後一時間ぐらい時雨が帰ってきたのが遅かったら次の日になっていたかもしれない。時雨は帰りついたときのみんなの反応を忘れないだろう。まず、きているものを蕾と涼に引き剥がされ、美奈にお風呂に連行されて体を出るまで洗ってもらい（それはもう、嫌がる時雨をもの凄いい力で押さえつけすみ隅まで洗った。）あがったところでようやく感動の再開シーンとなった。

「え、あの眼帯貴族だったの犯人（保健室の先生）が逃げたの！？」

時間帯はお昼休み。時雨は中庭にて亜美と凧、涼と蕾からその話を聞いていた。その話を聞いているとどうやら、時雨がいない間に刑務所から脱獄したらしい。人間じゃない彼なら易々と逃げたに違いない。シャバの空気はうまいといまさら言っているかもしれない。

「うん、それでね、今日賢治は来てないんだけど昨日ね、『時雨君が来たらその犯人を手分けして捜してくれ』って言われたんだよ。」

それから、昼休みをかけてチームを編成。次のとおりとなった。

一組目、涼と蕾。

二組目、凧と亜美

### 三組目、時雨

力の差が大体同じになるように亜美が決めたものである。時雨はこの前捕まえたと言うより、負けてしまったので今回はリベンジに燃えていた。

（……せめてあの耳で世界を征服する考えだけはやめさせよう。彼を止めないと世界に恐怖が生まれるに違いない。）

まあ、人のやる気の原因は色々として、その日の放課後から始めることとなった。各組、町のいろんな所をくまなく探し、見つけた場合は全員そろうまで見つけた組が時間稼ぎをする。そういった作戦内容である。作戦を考えるのに使った時間は約三十秒。即席のなんだか頼りない作戦である。ぜひと頑張って欲しいものだ。

そして、時雨は只今、スーパーの野菜売り場にいる。ふざけているわけでもない。彼なりに真剣である。ここに来るまでに彼は彼の罠を各所に設置、触れると彼の携帯がなるという仕組みになっている。そんな高度な技術は彼は持っていない。持っているのは・

「時雨様、今日は何にしますか？」

彼のメイドさんである。彼女と学校の校門前であつた時雨は状況を説明。美奈の意見を取り入れていたるところに様々なえさを置いてきた。

「うーん、じゃ、今日はコロッケがいいや。」

この二人が本当に犯人を捕まえたか不安だが、時雨の携帯がなかった。どうやら何かがわなに引っかけたようだ。

「時雨さま、行きましょう。」

「うん。」

その後、美奈と時雨はスーパーのレジ（行列になっている。）でお会計を済ませ、いったん自宅に帰り、満を帰して目的地に到着。そして、落とし穴にはまっているどこかで見たことのある少年を眺めていた。

「あ、思い出した。『断末魔』リーダー、炎神さんだ。」

ちなみに彼は美奈が仕掛けた美少女人形を手にもっている。（美奈が賢治の屋敷に侵入、そして彼のコレクションの一つを持ってきたのだ。）その人形には傷ひとつついていない。しかし、それを持っている炎神は傷だらけである。

「助けてください！」

びるるるるるる

彼が叫んだのと同じに再び時雨の携帯が鳴り響く。不幸なことに時雨と美奈は彼のことを置いていった。そして、残された彼はその後自力で脱出できず、風神に助けてもらったらしい。

二つ目の罠の所にいたのは賢治だった。その顔は怒りで変形している。

「……やあ、時雨君と美奈さん。奇遇ですね、こんな所で会うなんて……。ちょうどいいや、なぜこんなところに僕のコレクシヨンの一つがあるのか説明してくれるかな？」

すでに背中には紫の羽が生えており、時雨と美奈はちよつとどころか生命の危険まで感じてその場から逃げたくなった。

「……遺書を書くなら今がお勧めだね。お墓に入った後は何もできないからねえ。」

いつのまにか右腕には禍禍しい何かを纏った鈍く紫色に光る剣を時雨に向けている。絶体絶命のピンチ！賢治を怒らせると人間界が吹っ飛ぶ可能性がある。そんなことを考えながら美奈が時雨の前に立った。

「時雨さまは悪くありません。悪いのは……」

時雨は美奈が体を張ってまで自分のことを助けてくれそうだったので泣きそうになった。

「あの世界征服をたくらんでいるお馬鹿な吸血鬼です。」

責任転嫁だと時雨はちよつと思ひ、出かけていた涙は涙腺の奥に引っ込んだ。賢治は美奈を見ていたが、

「……おしい、今の台詞で自分が悪いといつてたら助けてあげただけだな。」

と時雨となんとか同じ感想を言って再び時雨に剣の切っ先を向け

た。

「ちょ、ジョーダンです。冗談。私はどうなってもいいから時雨さまだけはどうにかしてください!!」

「じゃ、時雨君、悪いが地獄に行ってくれ。」

美奈の申し出に聞く耳を持たずといった様子で時雨に特攻。二人の目にとまることのない異常な速さで時雨に迫る。

「守りたい世界があるんだあああ!!」

ついでに誰かの台詞を辺りに大声でぶち巻きながら……

「やらせはせん、やらせはせんぞお。」

そして、時雨と賢治の間に誰かが割って入った。目をつぶっている時雨に顔は見えない。

ガキヤーン

そんな甲高い音が鳴り響き、その衝撃で時雨は後ろに倒れた。時雨を助けてくれた人物は美奈に何かを言って時雨を逃がした。

時雨は後ろから聞こえるさまざまな声。

「いけ!!フィン・アンネル!!」

「逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ!!」

などを聞きながら美奈にお姫様抱っこされて戦線離脱。完璧な安

全圏まで逃げることに成功。先程まで時雨達が居た所では火柱などが上がっている。どうやら戦闘がいまだに続いているようだ。

そんなときに携帯が鳴り響き、今日の探索は終わりを告げた。あとで賢治に謝っておくとして、時雨と美奈は仕掛けた人形を回収しに回った。（今、彼の屋敷にある人形はまったくくない。）お詫びの印として、何かをプレゼントしたほうがいいかもしれない。いや、間違いなくしたほうがいいだろう。

「今日は寿命が縮みましたね、時雨さま。」

「・・・うん。」

そんな会話をしていたが、辺りがだんだん暗くなっていき人形をすべて回収し終わったときはあたりは暗闇に包まれていた。（途中、いろいろな人物が人形を持っていくとしていたりしたので時雨たちと戦闘を繰り広げた。）そして、美奈は唐突に時雨に言った。

「・・・今すぐ家に電話をして涼様と蕾様に電話してください。」

「え？いいよ。」

時雨は携帯を取り出し、家の電話番号にかける。数秒後、蕾の声が聞こえてきた。

『あ、兄さん？どうしたの。』

「美奈さんがちょっと話したいって・・・」

時雨はジェスチャーをしている美奈に携帯を手渡す。電話をかけた時から繋がったら自分と変わってほしいと目と体で訴えていたの

だ。

「蕾様、今すぐ時雨様の部屋に行って私のメイド服がかかっているかどうか確かめてください。」

「え？わかったよ。」

氷雨が居なくなり、今は時雨の部屋となった。そして、美奈はあれからずっとセーターにエプロンといった格好で生活していたのである。

数分後、蕾はびっくりしたように言った。

『なくなってたよ。』

「そうですか、ありがとうございます。それでは失礼しますね？」

携帯を時雨に渡し、美奈は彼に言った。

「ちょっと寄りたい所があるんですけどいいですか？」

「う、うん、いいよ。」

美奈の声、顔つき、体から溢れる出るオーラ（先程の賢治と極似していた。）はとても怒っているようだ。赤い、赤いよ美奈さん。

時雨の手を取って美奈は勢いよく走り出す。近くを歩いていた女子高生のスカートを思いつきり捲らせ（時雨が確認したところ、青だったらしい。）暗くなった路地を時雨の高校に向けて走り出す。時雨は美奈に引っ張られるようにつかまれている。そして、美奈が止まった所はそう、あそこである。

冥土喫茶

時雨を扉の前に残して一人でご入場。扉越しに中の会話が聞こえてくる。

『あ、美奈先輩どうしたんですか？』

『私と背丈が同じなのは・・・あ、いた』

『ちょっと、なにするんですかあ。』

『失礼しますね。』

次に、中から悲鳴が聞こえてきた。

時雨が扉を開けようとして中から美奈がメイド服を装備してフル装備（右腕装備、『紅陽・改』。左腕装備、『蒼月・改』。背中、ゴツドガンダのバックパック。）これから何処かの国を攻めるような格好でもある。そして、扉の向こうに見える光景は凄い、下着姿のメイドさんが一人立っており、こつちを見ている。

「さ、時雨様行きますよ。敵はこの学校の保健室にいと私のアンテナが言ってます。」

今度は時雨の首根っこをつかんで一気に保健室を目指して美奈は走り出す。時雨の視界から下着姿のメイドさんは飛んでいくように消え、次に時雨を待っていたのは後ろに飛んでいく光景だった。

時雨が半ば乗り物酔い（美奈酔い）で吐きそうになったときに美奈は急停止。手を離された時雨は慣性の法則で美奈が止まった位置



から五メートル先ぐらいまで飛んでいった。時雨が立ち上がり美奈を見ると早速美奈は刀を抜いて保健室に切り込み・・・と思いきや再び廊下に戻って時雨の元に向かう。

「伏せてください時雨様。」

既に伏せの状態になっている時雨に覆い被さる。時雨としては何かやわらかいものが顔にあたった気がしたのでなぜだか知らないが得した気分になったそうだ。そして、次に起こったのは老化が爆発する現象であった。

「・・・なっ・・・」

時雨はその光景を倒れた姿勢のままで眺めていたのだが、爆発が終わったあとすぐに美奈をどけて保健室を覗き込む。そこには、時雨がギョツとする光景が広がっていた。

噂の犯人がメイド服を着てたっていたのだ。

「お久しぶりだね、時雨君。私は今日、絶対的な力を手にいれたよ。素晴らしい、実に素晴らしい!!」

そういつて自分を抱きしめるような格好を取って、くねくねした。時雨としてはこのような格好を見るだけでも怖気をするのにさらにこのような行為を見たあとはどうにも気分が悪くなった。顔が赤くなっている時雨の後ろから美奈が叫ぶ。

「今すぐ私の服を返してください!!今返すのなら手加減だけはしてあげます。」

「残念だが、それは駄目だ。これは私の手に入れてきたアイテムの中で最高峰に位置する品物だからね。なんともこの着心地が最高だ。」

時雨はそんなやり取りを終始みていたが、やはり背筋が寒くなるだけだった。

「それでは、腑抜けの時雨君とその偽のメイドさんとはちょっとの間お別れだ。耳で世界が征服できないなら今度はこれで世界征服を狙わせてもらおう。」

再び、時雨は頭の中で想像し、今度は頭痛までしてきた始末だ。メイド服を着た奇妙な男は背中から羽を広げ保健室の窓を突き破って逃げいった。

「ま、まちなさい。」

残念ながら今の時雨には犯人を負う気力はまったく残っておらず、怒っている美奈を見ていることしかできなかった。

その後、いまだに煙を上げる廊下に座り込んで時雨は美奈がなぜ自分のメイド服がなくなっただのがわかったのか教えてもらっていた。

「・・・あれには発信機がついており、移動したりすると私にはわかるんです。私の機能の中にそのような装置がついているのです。」

時雨は先程、美奈の正体を知った。別に聞いてもまったく驚かなかったが（どつちかというと、当然のように思えた。生身で始めてあったときしていたことをするのは危険だと思ったからである。）

なぜあんなにあの服にこだわるのか不思議だった。

「実はあの服には『紅陽・改』と『蒼月・改』以外の私の武器が入っているんですよ。エプロンについているポケットの中はドラえもん並みの蓄積量数を持っているんですよ。」

もはやなぜそのような危険な服が存在するか不思議だが、時雨はあえてそのことを追及せずに別のことを聞いた。

「じゃあ何で今までメイド服を着てなかったんですか？」

着ていたらとられることはないだろう。もつとも、さっき美奈がしたような好意を受けたら襲ってきた人物が跡形もなく消えるかもしれないが……

「それはですね、時雨様から着て欲しいと言われるまでとっておきだったんですよ。」

美奈は顔を赤くしながらそんなことを口走る。そして、時雨は

(え、じゃあ、これって僕のせい?)

と思い、何気に自己嫌悪していた。悩むこと数分、時雨は立ち上がり美奈に告げた。

「じゃ、今からあの眼帯さんを追いましょう。」

「はい、わかりました。」

再び時雨の首根っこを掴み走り出そうとした美奈に時雨は待った

をかける。

「ちょっとまってください。僕が天使化をしますから・・・」

数秒後、開け放たれていた保健室の窓から紅い羽根をまとった何かが飛び出していったのであった。

美奈が教えるポイントには凄い光景が広がっていた。場所は時雨たちが住んでいる地域のある公園だったが、その公園の地面にはさまざまな武器がセットされていた。

「対戦車砲！？美奈さん、あなたはいつたい何をするつもりだったんですか！」

「いや、つつい・・・てへっ。」

時雨の背中の上で美奈は質問に答える。

「いや、ちょっとまってくださいよ。何であんな大きなレーザー砲までポケットに入るんですか！！」

まさしく戦略兵器の光化学兵器までその頭を並べている。くわばらくわばら。

「そんなことより時雨様。急いで茂みに隠れてください。いい加減ばれてしまいますよ。」

そんな話をそらすような美奈の言葉にも時雨はまったくだと思ひ、言われたとおりに近くの茂みに着地をする。背中に乗っている美奈

をおろし、今後どのようにするか話し合いをすることにした。

「さてどうするんですか美奈さん？」

時雨は美奈に武器のことをある程度は教わっていたが、やはりここは詳しい美奈の方に作戦を聞くべきだと判断した。そして、話を振られた美奈は暗がりながらもわかるぐらいに顔を赤くして答えた。

「・・・まずこうします。」

「え・・・ってうわぁ。」

物凄い力で時雨は倒れられて一番星の輝く夜空が視界に広がった。

「な、何をするん・・・」

時雨は体を起こそうとしたが、美奈の手に両方の頬をつかまれて・・・というより馬乗りの姿勢だったのでどっちみち起き上がることはできなかった。

「美奈、いきまーす!!」

「うええええ!!」

目を閉じた美奈の顔がだんだん時雨に近づいていく。そして・・・

「はうう・・・」

公園に並べられていた武器は再び美奈のメイド服に戻っていた。眼帯さんが入れたのである。

「さて、これだけ数があれば大丈夫でしょう。」

そんな事をいってこの公園から出るために翼を広げる。だが、それを阻むものがいた。

「最後の勧告です。今すぐ私のメイド服を返してください！」

飛び立とうとする彼の前に美奈が現れる。その手には何も持っていない。

「いい加減しつこいですよ。いくら温厚な私でもあなたの体に流れている血をすべて抜き出しますよ。……もつともあなたは人形ですから血が流れているとは思いませんがね。」

その申し出を否定の意思ととった美奈は行動をおこした。

『我は、悲しみを背負いし人形の姿をした天使……』

血のように紅い何かが美奈の背中から飛び出す。それは翼の形にとどまり、あたりに羽を飛ばす。

「……ば、ばかな……」

絶句している眼帯さんだったが、慌ててエプロンの中からバズーカ砲を取り出して美奈に向ける。だが、すでに美奈の姿は見当たらずにあたりを見渡す。

「・・・遅いですよ。」

格ゲーだったら凄まじいほどのコンボ数を稼げたに違いない攻撃を受けてメイド服を着た眼帯さんは夜の公園にあるジャングルジムにぶつかり動かなくなったのである。

時雨は近くの茂みのところで気絶しており、このことは知らない。行動を起こしたほうが登場できた行を獲得していた眼帯さんはこれにて御用となった。もっとも、二度と逃げ出さないように魔界にあるらしい強固な牢屋に入れられたそうだ。

時雨が目を覚ますと目の前に美奈の顔があった。そして、昨日のことを思い出す。

「あ、あああああ」

なんともいえない言葉を出した後、時雨はすぐ近くにあるメイドさんの顔を眺めることにした。特に意味はない。ただ、体がかつちりつかまっていたのでそうするしかなかっただけである。

「・・・しぐ・・・れさまあ・・・」

「み、美奈さん！！ちよつとどこ触っているんですか！！」

彼の苦労はまだ始まってもない。

## しよのじゅうさん 美奈とエンゲージ（後書き）

今回は美奈が主役となっていました。次回は・・・なんにしようかなあ・・・とりあえず感想、ご意見をよければくださいね。



## しょのじゅうよん 恐怖の図書館

今日も時雨は元気に登校中。朝から美奈といろいろあったが、何事もなかったと彼は思いたい。空は日本晴れでどこまでも青い。平和な日常である……

「うーん、昨日はちょっと疲れたなあ。」

肩を回したり首を回したり口の開閉を確かめてもみた。どれも良好である。途中から彼は気絶していたが、美奈が犯人の身柄を賢治に引き渡したらしい。

「時雨様、おはようございます。」

物思いにふけていた時雨の目の前に現れた一人の男性。黒いスーツと白い手袋、そして何より後ろに黙っているだけで存在感をアピールするような黒塗りの車……

「あ、焰さんの執事さん？」

頭を下げてその執事は時雨に手招きをした。彼のもとにいくと話をし始めた。

「実は、時雨さまにお頼みしたいことがあるのです。よろしいでしょうか？」

お願い事の中身を聞かないと判断のしようがないと時雨は思った。

「ああ、すみません。では話させてもらいますね。……実はお

嬢様・・焰様が学校の図書館で迷ったようなのです。」

「ま、迷ったんですか？」

「ええ。」

・・飼犬にかまれた気分には違いない。可愛いそうに。

「つまり僕に迷子・・いや、遭難してしまった焰さんを探してほしいんですか？」

「はい、その通りです。がんばってくださいね。それでは・・・」

執事は手際の良さがよかつたらしく、車にすばやく乗ってその場からいなくなったのである。

「・・・・・しょうがないか・・・」

時雨はそう呟いて再び学校に向かった。だが、その足は急いでいることは間違いない。あそこで迷ったら大変だと知っているからである。いつ彼女が行方不明になったのか時雨にはわからないが、一刻を争う自体かもしれないのだ。

時雨は学校に行くと図書館を目指して走った。

途中、教師を何人がふつとばしってしまったので頭を下げたりもした。

そして、図書館の前にたどり着いたが、中から声などは聞こえない。時雨は躊躇せずにゲームだったら『迷いの図書館』と名付けられる

だろうダンジョンに向かったのである。

学生かばんは一応図書館の前に置いておいた。こうしておけば時雨が戻ってこれなかったときに誰かが助けにきてくれると思ったからである。だが、残念なことにここでそんなことをするのはちよつと間違いである。なぜなら、この図書館で迷った人物を探すよりも手を合わせる人物のほうが圧倒的に多いのである。

「おい、焰さん!!」

ここが雪山だったら雪崩でも起きてしまったかもしれないが、ここは図書館。人は迷うが雪崩は起きないはずである。だが、これまた残念なことに時雨は気が付いてない。この図書館のある一帯では本の置き方が非常に雑なところもあるのだ。いっつもぐらぐらしていて、そこを通る時は抜き足差し足忍び足で行かないととっても危険なのだ。

ぐらぐらぐら・・・

「おーーーーい!!」

がしゃーん

時雨がきた方角にあつた本棚の中の本が見事、彼の帰る道を塞いでしまった。しかもかなりの量である。復旧のめどはまだたっていない。

「・・・とりあえず今は人命救助が先かな？」

倒れた本も気にせずに時雨は先に進むことにした。というより、先に進む道しかないのだ。

図書館はまるで迷路のようでだんだん時雨は道に迷ってきた。彼は今、自分の人生をある一つの物に託している。

「……どっちに曲がったらいいんですか？」

図書館に落ちていた鉛筆を床においてどっちに進めばいいか試してみる。右と左、鉛筆は右のほうに行けと結果を出した。

「……よし！」

時雨は足取り軽くそっちの方向に走り出した。そして、奇跡は起きる。時雨の進行方向に大量の本が落ちていた。その一番下から足が二本出ていた。

「ほ、焰さん！！大丈夫ですか？」

時雨は至急、本に襲われている？ 焰のもとに駆けつけ本を片付けた。どの本も結構な重さがあり、よくこんなもの下敷きになっても生きてるなあと時雨は思った。彼なりの心配だったが焰は本の数が少なくなるにつれてその姿をあらわし始めた。だが、残念なことにそれは焰ではなく他の人物だった。

「……亜美さん！！何でこんなところに亜美さんがいるの？」

時雨は級友の亜美を揺すって揺すって揺すりまくった。あまり反応がないので今度はほつたをぺちぺちたたいてみた。

「……ん……んっ……」

「起きて下さい!!」

しかし、よほどいい夢を見ているのだろうか、亜美は顔をニヤニヤさせながらまったく起きる気配を見せない。

時雨は亜美をどうにかして起こしたかったのでちょっと強引な方法をとることにした。そこらに転がっている本の中で最も重そうなものを手にもち、それを亜美の胸の上に置く。息苦しくなった網は目を覚ますだろうと時雨は思ったのだ。だが、お痛は禁止らしく、時雨に罰があたった。両脇にある本棚に残っていた本が時雨の後頭部に落ちてきたのだ。

「んがああ」

そのまま前につんのめり、体重を支えきれなくなった時雨は亜美の胸にダイブ。持っていた本も手から放れ辺りに転がる。しかし、これにより亜美は目を覚ました。

「……時雨君、積極的なのはいいけれど寝ているのを襲うのはどうかと思うよ。」

「いや、襲われたのは僕のほうだけだね……」

「じゃあさ、いつまで私の胸掴んでるの？」

時雨はさつと亜美から離れ、亜美を立たせた。そして、なぜここに亜美がいるのか聞いてみた。

「……実は図書館にお化けが出たとか噂が立ったからね。賢治に頼まれてここに来たんだよ。ところが……落ちてきた本に潰されてしまってそのまま気を失ってしまったみたいだね。いやあ、失

敗失敗。」

亜美はそう言って時雨のほうを向いた。

「ところでなんで時雨君がいるの？」

「実は文化委員長が図書館で行方不明になったって聞いたんだ。それで搜索を頼まれてここまで来たんだよ。」

亜美はなるほどおと思ったようだが、時雨に背を向けていった。

「じゃあさ、私も手伝うよ。二人で探したほうがいいでしょ？」

実のところ図書館で二手に分かれて人物を探すのはちょっと無理である。探している人物が見つかってもしその片方の人物が今度は迷子になってしまう。

「うん、助かるよ。」

こうして、時雨と亜美（どちらとも方向音痴である。）は焰を探すたびに出た。

「……どっちが入り口だろ？」

「こっちじゃないかな？僕はあっちから来たからね。」

早速、道に迷ってそんな気がするがこれも愛嬌。時雨と網は時間短縮のために走り出した。すると、亜美と時雨が通って来た道にあった両脇の本棚がいつせいにゆれ始めた。そして、本が上から降ってくる。

「きゃああああ!!」

「うわああああ!!」

このコーナーは辞書だらけだったのだろうか？後ろではすごく鈍い音が連続して聞こえてくる。あれがあたったら痛いに違いない。いや、痛いで済んだらいいほうかもしれない。

ある程度はしつたら音はしなくなった。どうやら辞書コーナーを脱出したようだ。

「ふう、もう大丈夫みたいだよ。」

「うん、ちょっと休憩しようか？時雨君。」

「そうだね・・・」

図書館の床に座り本棚を背もたれにする。網はその本棚にある一冊の本を取り出した。

「あつ、これエロ本だ!」

「・・・何喜んでんの。」

「時雨君もこんな本持っているの?」

「い、いや持っていないよ。」

時雨が言っている事に嘘、偽りは無い。このような本は本当に持っていない。

「ふうん、意外だなあ。じゃあさ、こんなことされても大丈夫なの？？」

「のわああ」

亜美に押し倒されて時雨はそれをどかそうとしてかたを掴もうとするが亜美の違う部分を掴んでしまう。

「これで本日二回目だね？」

「ご、ごめん！こ、これは・・・事故だよ！あの時も上から本が落ちてきたんだよ！！」

亜美の顔はうれしそうである。時雨の顔にほとんどくっ付きそうなので目と目が合って時雨は目をそらす事ができない。これはまだ大丈夫だろう。

「じゃ、悪いけど私もしたい事させてもらうね。」

「べ、別に僕は触りたくて触った訳じゃ・・・んんう。」

時雨の口を何かが覆った。

ここで何が覆ったのかは不粋な質問なので聞かれても答えるつもりはない。時雨は目をつぶっているのですがその光景を目にすることはできないので動かないでいた。そと、何かが口から放れたので目を開ける。そこには顔を赤くしている亜美が未だに時雨に覆い被さるようになして乗ったままだ。ちなみに言うなら時雨の手もさつきと同じところを掴んでいる。



「さ、焰を探しに行こうか？」

「え、う、うん。」

網はそう言ったものの一向に時雨からどうとしない。時雨も亜美が動いてくれないとどうしようもないのでさっきの体勢のままで再び二人の間にいいムードが流れ始める。そして、亜美がまた顔を近づけてきたのを時雨が確認したので今度も目を閉じる。だが、いつまで経っても何もおきない。

「・・・私に優しくしてくれた男子は時雨君が初めてだよ。」

「え？」

瞬間、時雨の上に乗っていた体重がなくなった。

その近くの本棚から二つの顔が出てくる。

「いやあ、見ているこっちが恥ずかしいね。どうだい、見守っている人としては？」

「うーん、僕としては早く焰さんを探しに行ったほうがいいんじゃないかな？こんなところでいちやついている時間もないだろうにねえ。」

「時雨君の言うとおりだな。こんなR18のかかっているコーナーで何やってるんだろつか？亜美の方から押し倒しちゃったから大丈夫だったけどもし時雨君のほうからしてたらどうなってただろうね？」

「……さあね？」

そして、再び亜美と時雨は図書館を走っている。

もう少しで貸し出しカウンターがあるところのはずである。

これまで亜美と時雨は同じところを三階ぐらい回った後にここまでやってきた。再度言うがここで迷ったら助けにきてくれる人物はあまりいない。時雨と亜美の視界がひらけ、今までよりある程度広い場所に辿りつく。そこにも焰の姿はない。ただ何冊かの本が机の上にきれいに置かれている。どの本も魔法が何たら〜といった具合の本である。

「時雨君、どうやらここに焰さんはいたようだね？魔法関係の本を見るのは彼女以外でこの学校にはいないからね。」

「へえー。」

時雨はその中の本の一つを掴んで開いてみた。どうやらかなり前の本らしく題名はまったく見えない。中身もすでに変色しており、茶色で見ることも結構難しいものであった。

「えーっと、召喚の本？」

「……時雨君、こっちのほうに何かいる気配がするんだけど？」

亜美が指差す方向には確かに何かがいるような感じがする。時雨は万全の準備をするために天使化することにした。

『我は、悲しみを背負いし天使・・・』

『我は、罪を裁く天使・・・』

まず時雨がその方向に近づいてみるが何の気配もない。だが、次の瞬間、時雨に敵意を感じたのか知らないが炎が時雨の頭をかすめて行った。炎は網が消したので火事になることはなかった。

「こ、こいつは・・・!」

時雨の目の前にいる生命体は間違いなく人間ではない。荒々しい目つきにどんなものでも引き裂くことができる爪、そして極めつけは背中に生えている大きな翼。

「ファンタジーかよ!!」

「しかし何でこんなところに龍ドラゴンがいるんだろ？」

とりあえず龍は時雨があつという間に倒した。龍は口から泡を吹かして倒れてしまっている。その光景を見て時雨はちよつとやりすぎたかもしれないと思ったのであつた。とりあえず時雨と亜美はその龍を跨いで先に進むことにした。そして、途中である人物と出会った。

「・・・シー君、悪いけどココから先には行かせる事はできないわ。」

二人の前に立ちはだかつたのは『断末魔』メンバーの中でもっとも強い風神である。（炎神は何度も何度もこの風神を相手に戦いを挑んだが結果はどれも惨敗。だが、なぜだか彼はリーダーである。）

「何が起こっているんですか？」

「悪いけどうちのリーダーが世界を征服したくなったそうなのよ。」

簡潔にそう言つと風神はその体を台風のような突風で覆った。まずその被害にあつたのは亜美である。

「きゃあああ！！」

スカートが舞い上がり中身が見えそうになる。時雨はできるだけそっちの方向を見ないように努力してみた。そして、後ろのほうから声が聞こえてくる。

「亜美、悪いが君のパンツを見て興奮するのは時雨君だけだからそんなにかわいい声を出さなくてもいいと思うよ。」

賢治が紫の羽を出して剣の切っ先を風神に向けている。その後ろにも人影が見えたような気がしたが時雨は突風に吹き飛ばされないように踏ん張る事しかできない。

「・・・時雨君、早く今のうちにこの先に行きなよ。」

「え、うん！わかった。ありがとう賢治。」

時雨と亜美は風神の方向に向かって走り出す。そして、その後ろから大きなはりせんが飛んできて風神の頭を叩く。時雨は一瞬後ろを振り返ろうとしたが網に引っ張られてみることはできなかった。

この先にある物を時雨は知らない。この前の部屋があるのは違う方向なのでこちらにきたことは一回もない。

「こ、これはいつたい？」

図書館の中でもっとも大きいと思われるスペースに時雨と亜美が探していた人物がいた。だが、それはものすごい光景であった。まず、部屋の中央で大鍋がぐつぐつ煮えたぎっていて、その上にほむらがロープでぐるぐる巻きにされて吊るされているのだ。

「あ、時雨さん。どうかしたんですか？」

当の本人は涼しい顔で時雨たちを見下ろしている。

「焰さん、大丈夫ですか？」

「ええ、大丈夫ですよ。」

今にも大鍋に落とされてシチューにされそうな雰囲気漂っているがほんとに大丈夫だろうか？

「ようこそしーくん。私の新たな拠点はどうかね？」

「あ、炎神さんじゃないですか。何やってんですかこんなところで？」

大鍋をはさんで反対側に『断末魔』リーダーの炎神がいた。その顔はまるで世界征服をたくらむ悪の親玉のような顔をしているのであった。そして、時雨と亜美の前にやってきて得意げに説明をはじめ

める。

「これはね、召喚の装置だ。術者本人がこのなべに落ちればその術者と同じ力を持った何かがお鍋の中から現れる仕掛けになっているんだよ。さっき本を試しに投げ込んだら竜が出てきたんだよ。君たちも見ただろう?」

そんな事を言っている炎神に神の鉄槌があたったのだろうか? 何かが彼の額に直撃してバランスを失った彼は後ろにあった大鍋の中に入ってしまった。

『・・・世界の清潔を守る、便器の聖騎士参上!!!』

彼にあたったのは便座であつた。そして、それを投げたのは時雨の誇るスーパートイレ、雷神である。

時雨の家にて美奈による大幅な改造手術を受けた彼は普段は普通のトイレだが仲間のピンチになると姿を変えて彼らの前に現れるのだ!!

『・・・それではトイレでまた会おう!!』

こうして、雷神のおかげで大鍋の中に悪の首謀者は落ちてしまった。時雨と亜美はなんだかあっさりしている今回の事件に不満を感じながらもロープでぐるぐるまきにされている焰を奪還。

「あ、大鍋からなんだかかわいい人形が出てきたよ?」

これが炎神の代わりに召喚されたものだろうか? 亜美はそれを手にとって時雨に渡した。

「はい、これ時雨君にあげるね？」

時雨としても別にほしいわけじゃないが足蹴にするのもなんだかいけないような気がしたので素直に受け取ることにした。

「……ありがとう。トイレにでも飾っておくよ。」

トイレに飾って置いたら雷神が喜ぶかもしれないなあと思時雨は思いながら図書館から出ることにした。

……最後に書いておくが彼らが学校を出ることができたのは次の日の放課後である。散らかしてきた本や倒れた本棚などをきれいにしたりもしたのだ。

「……さて、これで全ての罪を償えたね時雨君？」

「うん、確かにそうだけどこれからあの時雨には頑張れと言わないといけないなあ……」

「後なんかいでれると思う？」

「……あと一回で決着をつけないといけないんじゃない？」

「それでは次回、『しぐれとしぐれ!!』までごきげんよう。」

「……やれやれ……」





しょのじゅうよん 恐怖の図書館（後書き）

そろそろ・・・前の時雨から今の時雨にきちんとした物語を歩んでほしいと思ってます。今のところは前の時雨の過去のせい遺産といたあれですからね。まあ、なんだかまだまだがんびりたいと思うのでがんびつていきたいと思います。あと、かなり長い文章になっているんで・・・今度から改めたほうがいいのかも思っている今日、この頃です。

しょうじゅんじゅん じゅんじゅんじゅん…… (前書き)

今回はかなり短いです。

しょうじゅうい しぐれとしぐれ！！

『断末魔』が滅びたことを知らされた時雨は今、生徒会室にいる。

「風神はね、僕たちが説得したからもはやあの組織の一員ではないんだよ。」

「僕達？やっぱり賢治のほかに誰かいたの？」

賢治が天使化した時に使っている剣の形はなんとも禍禍しい形をしたお世辞にもかっこいいとはいえない剣である。しかし、たびたび時雨を助けてくれた謎の紫の天使はなんともはや……はりせんの形をしていたのであった。

「ああ、彼の名前は……天道時 時雨と言うんだ。この世を破滅させた重罪人天使だよ。彼の罪がようやく無くなったから今日中に彼はこの世界からいなくなると思うんだ。」

賢治は時雨にどのようなことが起こってどうなったかと伝えた。賢治もそのことはほとんど覚えていなかったが紫の罪人天使が雑巾でこけたことは知っていた。ついでにそのことも話しておいた。

「さ、今から彼に登場してもらおうかな？」

賢治がそういうと生徒会室の扉が開いて入ってきた。

「……どうも、はじめまして……」

入ってきたのはもはや幽霊でも通るであろう色白い……とい

うより廊下が透けて見えた。

「時雨（旧）君、あと十分で消えてしまうからね。早く彼に言いたいことをいいなよ。」

「ああ、わかつているよ。最後に彼に伝えたいことがあるんだ。本当はぜひとも君にいろいろと教えておかないといけないことがあったんだけどね。ま、これも運命。」

古いほうは笑っていた。ああ、これが世代交代というやつか？

「……最後に僕が思っていたことを……。いや、君に完璧な時雨の姿となつてもらふよ。もう時間がないんだ。行数短くしようと誰かががんばっているからね。」

古いほうはそう言うなり新しいほうを思いっきり殴った。

ずばあしいい

もはや殴ったときに出てくるような音ではなかったが、そのことに氣をとられてはいけな。時雨は自分を殴った自分を見ようと目を開けた。だが、そこにいるのは賢治だけである。

「……時雨君、彼は君の力となつたんだよ。ほら、最後に君が思ったことはなんだい？」

そう、時雨は完璧な時雨となつたので最後に時雨がかすかながらも思ったことが今ならわかるのだ。賢治はそれが聞きたかったのだ。……当の時雨は顔をしかめている。

「いや、まあ……（ちなみに最後に彼が思っていたことは次のようなことである。）

「ああ、自宅の机の上から三番目に友達から借りてた本がいまだに封がされていたんだけど……。死ぬ前に中身が見たかったなあ。多分、僕がここで消えたら新しい世界でその本を探してやる！」  
「といったものだ。いや、彼らしいといえば彼らしいかもしれない。」

ここで、時雨は苦し紛れの言い訳を思いついた。いや、恥ずかしいからしょうがないのである。許してほしい。

「……最後にとある本を見たかったんだけどね。それで僕は絶対にその本を見たかったらしいんだ。」

「ふうん、なるほど。」

賢治は納得してくれたようだ。その顔には疑いという文字は浮かんでいない。新生時雨はとりあえずここからさっさといなくなりたいかった。

「じゃあね、賢治。」

「ああ、最後に言うておくけどね……。君が君であるのだから……。前の君に関係した人物たちがもしかしたら君の前に現れるかもしれないね。」

賢治は意味ありげな表情を浮かべてそういった。時雨は昔会った人物たちを思い出そうとして思い出せないことに気が付いた。まあ、人生そう都合よくいかない。

「……さて、とりあえずは……メイドさんたちと戦ってこよう。」

時雨はそのまま冥土喫茶まで走っていった。だが、夜にならないとあかない喫茶は影も形もなかった。しょうがないので家に帰ることにした。

「あ、時雨様。おかえりなさい。」

あれからメイド服となった美奈は返ってきた自分の主人に挨拶をした。彼女は時雨に会っていたことから少し彼のことが心配であった。この人物には何かが足りていないと思ったのである。だが、今の彼にはその何かが戻ってきたようで初めてみるような笑顔を見せてくれた。

「うん、ただいま美奈さん！」

「あ、兄さんお帰り。」

お菓子作りをしていた蕾は自分の兄を見て幸せな顔になった。彼がこっちに帰ってきたのもうれしかったが……そのとき見てもこの兄は何か足りていないと思ったのだ。彼女なりに考えてみた結果、多分、カルシウムが足りていないと思った。だが、今の彼にはカルシウムが完璧に足りていると思うことができた。

「ただいま、蕾！」

涼は今、時雨の机をあさっている。先程、賢治から電話があり、

二階に前から置いてある机の上から三番目の引出しをあけて中身を彼に渡しておいて欲しいと言われたのだ。彼女はそれを見つけ出した。それはどうやら、本であった。

ちょうど、時雨は二階に上がってきたので涼はそれを今まで見る中で一番幸せそうな自分の兄に渡した。

「はい、時雨。賢治さんが渡してくれってさ。」

黒い袋に入っていたので中身はわからなかったが・・・時雨が受け取るうとして、落とした表紙に中身が出てきてしまった。

「・・・へえ、だから幸せそうに帰ってきたんだあ。時雨のエツチ。」

「いや、べ・・・別に・・・」

今まで幸せそうな顔をしていた時雨はかなり顔を真っ赤にして黙り込んでしまった。

中身が露出してしまった本は彼が最後に賢治から借りていた本であった。ああ、運命とは残酷なものである。

しょうじゅう しぐれとしぐれ!! (後書き)

ええと、遅くなってすいません。あと短くなってしまいましたが・  
・こっちのほうがいいと少し思っています。さて、一見きれいに  
終わってしまったようですが・まだまだ、パーフェクトな時  
雨となった彼の物語は始まってもしませんので・できれば楽し  
みにしてもらいたいと思います。



しょのじゅろく ああ、無常の世の中・・・

エロ本の件はとりあえず涼が黙ってくれたらしい。あれから少したつが蕾と美奈は何も時雨に言ってこない。いや、嬉しい事だが、時雨としてはちょっと危険な状態である。なぜ危険な状況かと言うと・

「時雨、今日も一緒にお風呂。」

「う、うん。いいよ。」

時雨は見つかったあの日から涼の言う事を素直に聞いていた。あの日、時雨が完璧な時雨となった日の夜のことである。時雨が一人でテレビを見ていると涼が時雨のもとにやってきた。

「時雨、お風呂一緒に入ろうよ?」

「は・・・・・・なんで?」

「・・・・・・本。どうしようかなあ。」

「ごいつしよさせてもらいます。」

こうなった時雨は今日も涼の背中を流している。できるだけ前に意識しないように真っ白な方向を向いてがんばっているのだ。

「・・・・・・涼、さすがにやばいんじゃないの?」

「大丈夫だって、兄妹なんだし・・・・・・。」

力は戻ったって前の時雨の記憶はほとんど残っていないことに時雨は気が付いた。ああ、なんだか不幸だとも時雨は思った。

「さ、そろそろあがろうか？」

涼の意見は絶対だ。時雨に拒否権など存在していないと思われる。時雨もこれ以上、悪化しないようにいろいろと努力もしていたが無駄だったので誰かに相談することにした。

「賢治、実は相談したいことがあるんだよ。」

「なんだ、どうせ涼ちゃんのことだろう？」

一応賢治にこれまでの経緯を詳しく話して何かいい案はないかと期待する。頼られている賢治は珍しく顔をしかめて本気で考えているようだ。そして、彼はこう言った。

「……時雨君、涼ちゃんに何がしたいのかはつきり聞いてみたらどうかな？もしもこれで駄目だったら……諦めるしかないよ。」

「……わかった。」

時雨は一応、賢治に礼を言った。この世のすべてを知ってそんな彼でもさすがに難題であったようだ。というより、彼が時雨にある本をプレゼントしようとしなければ今の状況にはなっていないかったかもしれない。まあ、Ifなんてありえないと思うが……。

その日の昼休みに時雨は涼と一緒に（二人で）弁当を食べることとなっていた。時雨が決めたわけではないことをいっておく。

「はい、時雨あーん。」

「……あーん……」

中庭でそれぞれ弁当を食べている辺りの男子生徒……ほぼこの学校の全員が時雨に殺気を向けている。涼や蕾はこの学校ではなかなかの人気らしい。

「ねえ、涼……何がしたいの？」

「え、ただ時雨といっしょにいたいただけだよ。」

それ以上、時雨はしゃべる事ができなかった。まあ、理由はいろいろとあったのだが……そのほとんどが回りの男子生徒からの異常なまでの視線であった。こわい、こわすぎる。

「ただいまあ。」

時雨は先に帰宅。

涼と蕾は部活に入っているらしく、時雨よりも帰ってくるのが遅い。両親も近頃顔なんて見てないし、家にいるのは美奈と新型トイレだけである。しかし、普段はすでに美奈がお買い物から帰ってきている時間帯のはずだが、返事がなかった。靴はあるのだからこの家の中にいるはずである。とりあえず時雨は自分の部屋に荷物を置きにいくつとして美奈と会った。

「あ、美奈さんただいま……？」

美奈の顔は凄く嬉しそうだ。なんだかとってもいいことがあったのかもしれないなあ。

「・・・時雨様、あなたが普通の男の子みたいになってとってもうれしいですよ。」

「はあ？どうかしたんですか？」

そして、美奈はエプロンの大きなポケットの中からとある本を取り出した・・・。

「うわあ、そ・・・それは!!!」

年齢制限のかかっている本である。この前涼が時雨に渡した本ではない。あの本は涼が没収してしまった。それは昨日、話を聞いて哀れんでくれた時雨の級友の一人が彼に貸した物であった。

「いやあ、やっぱりメイドさんが好きだったんですね？安心しましたよ。今日、時雨様の部屋を掃除したら出てきたんですよ。」

時雨は予想だにしない危機的状況により、頭の中が真っ白になってしまい、何も言う事ができない。ただ、いつかはわからないが・・・前にもこんなことがあった気がすると思っただのであった。

「・・・その、わたしはいいですよ？」

はにかみながら美奈はそういうと、顔を真っ赤にして去っていった。後に残されたのは真っ白になった時雨であった。だが、彼の不幸はそれだけでは終わらない。

「兄さん、ちょっと話があるんだけど……。」

蕾がああ後すぐに帰ってきて部屋で泣いている時雨のもとにやってきた。その顔は赤い。時雨は美奈が涼が本のことを蕾にも話してしまったのかと思った。

「ううう、どうしたの蕾？」

「これ、兄さんのお友達から兄さんに渡すように言われたんだ。」

それは時雨の安否を気にした友達からのものだった。黒い袋には紙が張っており、それにはがんばれと激励の言葉が書いてあった。

「……その、兄さん……確かにそんなものを見るのもいいと思うけど……。」

「？」

蕾はそんな意味不明なことを言っているが時雨にはやはり伝わらない。

「あんまりそんなの見てたら頭が駄目になるよ！私がいるからいいじゃない……！」

時雨にそういつて蕾は部屋からかけていった。はてなマークを頭に浮かべて時雨はその袋の中身を確認して再び固まった。中身は別の級友からのムフフウなプレゼントであった。あえてここでは黙っておこう。どうやら蕾はそれを見てしまったようだ。

次の日、時雨の目は真つ赤であつた。徹夜で泣いていたと思われる。そりゃまあ、家族も同然の人たち全員にばれてしまうのもかわいそうなものだ。どんまい。

しょのじゅうろく ああ、無常の世の中・・・（後書き）

さて、これからだんだん時雨は大変なことになっていきます。  
これはまだまだ伏線？だと思っただきたいです。

しょのじゅうなな たまりにたまる、賢治のストレス

世間は昼休みの時間である。教室にはほとんど人がおらず・・・といっても二人しかいないのだが・・・

「賢治、僕はどこかに逃げたい気分だよ！」

「いや、そんな悲痛な顔をしてどうしたんだい？」

四月もそろそろ終わりといった頃合で・・・今や時雨はクラスの一員となっていた。もともと人がいいので大体の人物たちと話してもいたし、いざこざも特になかった。だが、今回は学校のことでもめているのではない。

「だってさ、一日3回もお風呂に僕は入っているんだよ？あの三人が僕と一緒に入りたがるからさ！！」

「・・・別に一緒に入るのは問題じゃないのかい？」

今、家にいるすべての人物に本がばれてしまい、時雨は結局三人のいうことを聞いている。そのおかげで時雨は毎日、美奈、蕾、涼の順番で一緒にお風呂に入っているのだ。

「そういえば近頃の時雨君は石鹸の匂いしかしないねえ。」

そりゃもう、彼は風呂場ではされるがままになっているのだ。その行為はだんだんエスカレートしてきている。



「それにさ、曜日によつて寝る相手まで決まってしまったんだよ！  
」

「……両親には電話したのかい？」

「……うん、だけど無駄だったよ。」

時雨はさつさと両親に電話してみた。母親は別に大丈夫だし、父親にいたっては別に君に取られるなら本望だといったのだ。その時、時雨は白く燃え尽きてしまった。

「こうなつたらどこかに行くしかないんだあ。」

「別にいいじゃないか？君はいやなのか？」

賢治がそういうと時雨は黙り込んだ。必死になつて何か言い訳を探しているが時雨が言い訳を思いつく前に賢治が先手を打った。

「時雨君、もしかして彼女たちに冷たくあたつてないかい？たとえば自分から話さなくなつたとか？」

時雨はぎくつとした顔になり、必死に普段の顔を作ろうとしている。

「……そうだね、家に帰ってきてもただいまとか誰かが帰ってきてもお帰りといわなくなつたり……朝起きて目を合わせてもおはようといわなくなつたとか？そして、家で話しているのはトイレだけとか？」

時雨の顔はだんだん青ざめてきている。賢治の的確で非の打ち所

のない一言一言は時雨の心をマシンガンのごとく穴をあけていく。  
いや、その穴はひとつにつながっていき、もはや時雨の心は原形を  
とどめていない。

「・・・時雨君、君が彼女たちに話し掛けなくなったのはいつ頃だ  
い？」

「・・・今週の月曜日・・・」

「エスカレーターしてきたと思ったのはいつから？」

「今週の月曜日・・・」

そこまで時雨は行ってあつとなつた。賢治は頷く。

「いいかい、時雨君は一方的に相手に責任を押し付けようとしてた  
んだよ。ただ彼女たちは寂しいだけなんだよ。」

「わかったよ、今日、あやまるよ。」

時雨は賢治に礼を言って教室を去っていった。そして、今度は入  
れ替わりとして時雨の向かった反対側の廊下から薔がやってきた。

「どうしたの？」

「いや、ちょっと相談が・・・いまいいかな？」

「いいよ？」

薔が話すのは次のことだ・・・近頃前のように時雨が冷たくなって

きたらしく、家の中で話すのはトイレぐらいらしい。前と違って抱きついたりするのは極力抑えているようだ。だが、このまま行ったら再び家を飛び出すと薔は思っているらしい。

「大丈夫、時雨君はもう昔の彼じゃないからね？」

「うん、わかった・・・ありがとう！」

薔は廊下に出て行き、時雨を追っていった。今度は後ろの窓を誰かがノックしているようだ。

「・・・今度は美奈さんか・・・」

「賢治さん、大変なんですよ！！時雨様の机の裏に私宛の手紙が見つかりましたあ！！とりあえず読んでください！」

美奈は泣きそうな顔をしてその手紙を賢治に渡す。それには簡略的にいうならこの家を出て行ったが、これからもできればいろいろとこの家の家事をしてほしいと書かれていた。最後に、探さないでくださいとかかれており、追伸として、追ってこないでくださいとも書いてあった。時雨はとも思いつめていたようだ。所々涙の跡が見受けられる。

「これは多分、冗談だよ。時雨君はさっきあつちのほうに行ったから追いかければ間に合うよ。」

美奈も去り、賢治はため息を出す。だが、まだ甘かった。

「賢治くん！！ちょっと聞いてくれない？」

賢治は涼の相手もきちんとしたらしい。なんともすごい人物である。

しょのじゅうなな たまりにたまる、賢治のストレス（後書き）

この賢治のストレスにより、後に時雨はちよつと変わった経験  
します。いや、若いときの苦労は買ってでもしろとよく言われてま  
すし・・・

## しょのじゅうはち 最後のは注意しよう

四月も片手で指折り数えるだけで終わってしまふある日……。

いつもより早く学校から帰宅していた時雨は美奈と共に買い物に行っていた。あれからちょっと立つが三人に対する態度を改めたおかげか時雨は日に一日だけお風呂にゆっくりと疲れるまでになっていた。これも彼の努力ではなく、賢治のおかげであろう。

「美奈さん、荷物は僕が持つよ。」

「いえ、時雨様にそんなことさせるなんてできませんよ。」

「じゃあさ、誰かが僕に襲い掛かってきたときは誰が僕を守ってくれるの？」

時雨はほとんど美奈が休んでいるところを見た事がないので無理やりでも疲れることを省こうと考えていた。ああ、ええこや。

「ありがとうございます、時雨様……。やっぱり私は時雨様がご主人様でよかったと思いますよ。」

そんな美奈のところに誰かがやってきた。美奈と同じかつこうしでいて……。その手には手紙が握られている。

「あ、郵便ですね？ご苦労様です……。」

「いえいえ、それでは……。」

簡単なやり取りをしてそのメイドさんは時雨たちの目の前から去っていった。渡された手紙を美奈はしげしげと眺める。

「……………急用みたいですね？」

手紙をその場で確認した美奈は不思議な顔をした時雨にもその手紙を見せる。その手紙には次のようなことが書かれていた。

『……………魔界にいる冥土達は、自分たちの給料アップの為に時期魔王の娘を人質に魔王に対して抗議をしている。人間界にいる冥土もこれにぜひ参加してもらいたい。条件としては今のご主人様に不満をもっていること……………』

時雨は他人事のようにその手紙を見つめ……………美奈に話し掛けた。

「美奈さんもこのストライキに参加するの？」

「いえ、時雨様に不満を持っているわけではありませんし……………どちらかというなら毎日が幸せなのでストライキなんてしませんよ。時雨様、できれば今日、背中を流してあげますよ。この前みたいですね？」

時雨は冷や汗を掻きながらも……………その答えに迷っていた。いや、そんなことを心配するのではなく、これからのことに心配してもらいたいものだ。だが、さすがの彼もこれを心配できるとは思わない……………。

「……………つまり、賢治さんが作ったこの二つの刀はクレヨンからできているのです。だけど単なるクレヨンではなく、もとは絶大な

魔力を誇っていた魔法使いの結晶だという説もあります。」

そして、夜。時雨は美奈から『紅陽・改』と『蒼月・改』の歴史について講義を聞いていた。

「噂ではこの二つのクレヨンですね・・・秘密があるそうです。」

「美奈さん、夕飯まだあ？」

「はい、蕾様、わかりました。それではこの内容は明日のお楽しみです。」

蕾の腹減り虫が授業の終了を告げる。時雨は美奈と共に部屋を出て蕾のもとに向かった。

「さて、今日の晩御飯はみんなの好きな魚のソテーですよ？」

「「わーい!!」」

「いや、僕は魚大嫌いなんだけど・・・。」

時雨の唯一の嫌いな食べ物魚である。これを知った美奈は二日に一回は必ず魚の料理を作っている。

「時雨様、私が作った料理は食べれないというんですか？」

「・・・誰が作った料理でもさすがにこれはちょっと・・・」

他の人の魚は普通に頭なんて物はないが時雨のだけは尾頭付きである。時雨にとっては嫌がらせだ。



「そうですか・・・それでは口をあけてください。私が食べさせてあげますから・・・」

美奈は皿ごと持ち上げて時雨に迫る。時雨は逃げようとしたが両脇を妹二人につかまれて動くことができない。

「い、い、いやだああ!!」

頭からまるで蛇の食事みたいに魚を食べ終わった時雨の顔は青い。青魚を食べたからそうだったのではなく、これはただ単にさっきまでの・・・彼なりに言うなら惨状を思い出したからである。

「はぁ・・・。」

「時雨様、よく食べることができましたね?とてもいいですよ。」

なんだか子ども扱いされているようだが、誉めて伸ばすのが美奈の教育方針だ。だが、時雨の顔は厳しい。

「美奈さん、さすがに尻尾まで食べさせたのは間違いじゃないの?」

時雨は美奈にぼつりとそんなことを言った。美奈もちょっとそのことを考えて素直に謝ることにした。

「・・・はい、すみません・・・御主人様。いけないメイドを好きにしてください。」

時雨はしまったと思うのであった。美奈は正当な理由で怒られると突っ走るのだ。これはこれでかなりやばい。

「い、いや・・・反省しているなら別にいいよ。僕もちよつと子供じみて反抗してしまったのがいけなかったし・・・」

「いえ、私が悪いんですよ!!」

ため息をつきながら考える。この状態になった美奈に説得を試みても難しいだろう。彼女の目は据わっており、何をされても受け止めるような姿勢だ。

「あ、じゃあ・・・ちよつと留守番してくれないかな？これが君へのお仕置きだよ。」

「はい！わかりました!!」

もはや頭に思いついたことを適当に美奈に告げる。これで時雨は家を出なくてはいけなくなった。だが、今日の美奈はいつも以上に走っていた・・・。

「時雨様・・・もしもお留守番ができたなら誉めてくださいね？」

「え、うん？いいよべつに・・・」

美奈がこんなことを言うのはとても珍しいので時雨は承諾した。彼としてもいつも美奈にお世話をかけているので誉めるどころか崇拜してもいいぐらいだ。冥土教・・・あながちいいかもしれないなあ。時雨は思いながら時間をつぶすため、家の外に出たのであった。

別に行く場所もなかったので、家に近いコンビニに行くことにした。店内は店員以外誰もいないと思っていたが……時雨が本を読み始めて数分、彼の友達がやってきた。

「やあ、時雨君……とうとう、妹か美奈さんを襲って家を締め出されたのかい？ いや、襲われるのは君のほうだろうけどね？」

賢治はいまだに学生服でうろろしている。

「賢治、家に帰ったのなら服着替えたほうがいいんじゃない？」

そういう時雨もいまだに学生服である。しかし、彼の場合はこれ以外の服はないといったほうが正しい。

「明日ね、君に話がある。放課後、どんなことがあっても生徒会室に来てほしい。」

そういつて賢治は去っていった。

「……別に携帯でよかったんじゃないのかな？」

その場で時雨は首をひねった。

「お客さん、その本はあまり読んじゃいけませんよ。健全な少年ならもうちょっと我慢してくださいね？」

店員にそう注意されたので時雨は逃げるように家に帰った。

しょのじゅうはち 最後のは注意しよう(後書き)

もうちょっとですねえ。今のところ目標葉に受話ですからもう日  
とふんばりがんばりたいと思います。

今日も天気は快晴。晴れ晴れとした気持ちで学生たちは自分たちの教室で騒ぎ立てている。そんな教室の中心に席がある時雨は雨が降っているような顔でボーッと空を眺めていた。

「はぁ・・・。」

時折ため息も混ざっている。

彼は昨日、家に帰ったあといろいろとあったのだ。コンビニから帰ってきたら美奈が甘えだした。時雨の膝の上に座ってまるで子猫のように甘えだした。いや、うらやましいと思われる光景でもあるが・・・彼女が身につけているメイド服はとても重いのだ。支えきらなくなった時雨はそのまま後ろに転倒。置いてあった家具に頭をぶつけたりもした。

倒れた時雨に美奈が覆い被さってきて時雨はギョツとした。顔が目の前にあるではないか・・・。いつかのことを思い出して時雨の顔は真っ赤に染まる。今でも美奈が言った台詞は頭に残っている・・・。

「・・・時雨様が望むなら私は何でもしますよ？」

頭の中でそんなことが何回も繰り返されて時雨は今日の朝から不調。

「時雨君？どうかしたの？」

「あ、亜美さん・・・？」

気がつくとも目の前に亜美の心配そうな顔があった。そして、肩を誰かが揉んでいる。

「疲れているんじゃないんですか？」

風が時雨の肩をもんでいる。意外に力が強いことにびっくりしながらも時雨は笑った。

「・・・ちよつと体調が優れないかもしれないんだ。だけど大丈夫だよ。」

「そう？ならいいけど・・・」

昼休み、時雨の不調は回復したのであった。気分の問題だったようであつた。うでいつものようになったのでみんなはホツとした。これは数少ない男子生徒から見た今日の時雨の様子である。

「いやあ、今日の時雨はひどかつたなあ。先生から名前を呼ばれても上の空・・・先生が頭を叩こうとしてもそれを器用にずっと避け続けて先生は肩で息をしてたっけなあ？」

そして、次の生徒はこのようにかたる。

「そうそう、時雨君は珍しいことではないのですが・・・男子で教室の端に集まりメイドの話をしていたらすごい速さでここまで来たんですよ。そのとき彼は僕たちから見てかなり遠い場所にいたはずなんですけどねえ」

最後に・・・

「たまに顔を真っ赤にして頭から煙をふいてたなあ。あんな動揺した姿は珍しいってクラスの連中が携帯で写真とってたぜ?」

まあ、彼の動揺は先生から頭に水をかけられて正気になったのでよかったのだ……。このままではいつぞやのゴラみたいに爆発する可能性もあると誰かが言っていた。

「あ……。そういえば賢治はどこに行つたのかな?」

「賢治ならそこにいるよ?」

亜美にそう言われて一人で弁当を食べながら何かの写真集を見ている賢治のもとに行く。放課後の話をここで聞いたほうがいいと時雨は思ったからである。

「ねえ、何の用事なの?」

「時雨君、いつそのことで話しておくけれど……。君にやつてもらいたいことがあるんだよ。」

見ていた本……。(なかみはやはりというかなんというか……。美少女人形の本である。)を閉じて賢治は話し出す。

「……。魔界で冥土が反旗をひるがえしたんだ。」

「あ、それは知っているよ。」

美奈から見せてもらった手紙の事を思い出す。

「ならその部分は省くけど・・・実は魔界にある学校に立てこもつたらしいんだよ。だから時雨君にはぜひともこの事件を解決してもらいたい。」

「へえ・・・それはまた・・・不可能な仕事じゃない？」

どこから見ても時雨は単なる高校生である。警察でもなんでもないのだ。

「まず、説得にあたつてほしい。もしも説得に応じなかったらに煮るなり焼くなり好きにしかまわないよ。さて、それでは時雨君にはがんばつてきてもらわないとね？」

「いや、それつてもう・・・決定されてるの？」

賢治は時雨の話などまったく聞いていない。時雨はさつさと自分のこれからをあきらめた。

「時雨君、ぜひともこの二つの刀を持っていきたまえ。きっと役に立ってくれるよ。」

賢治がどこから出したのかは知らないが二本の刀を差し出した。時雨がそれを見るのは初めてではない。みながこの前賢治に修理をお願いした『紅陽・改』と『蒼月・改』であつた。

「・・・ちょっとした仕掛けがあるからね。ま、たぶん気が付かないと思うけど・・・」

「刀ってそんなにいろいろいじれるもんなの？」



「これ大体もとが鉄でできているわけじゃないし・・・大丈夫。」

賢治が持っている二つの刀はかなりゆれている。まるで妖刀のようで少々不気味である。

「ほら、早くもってくれないとこの二つは僕を細切れにしようと狙ってくるからね。」

いや、時雨の心境としてはこの刀をもらいたくない。というものである。まだ彼は魔界にも行っていないので装備品である二つの刀にこんなところでやられたくないもんだ。

「・・・僕が持つて大丈夫なの？」

「さあ、それはもってからの楽しみだよ。」

教室で刀を受け取るのもなかなか危ないものである。周りに誰もいなくてよかったと時雨は思いながらも結局賢治の手から二つの刀を受け取った。すると、刀は何事もなかったようにもとの無機物へと変わった。

「よし、成功確率30パーセントだったけどよかったよかった。」

「・・・もし、失敗したらどうなったの？」

「予想だにしない展開になってたかもね？そしたら僕がこれ以降は主人公になってたよ。」

さらりと物語が変わってしまいそんなことを賢治が言ったので時雨はちよつと心配になった。

「それじゃ、時雨君を魔界に案内するよ。」

「何かほかに必要なものは？」

「女の子と×××ができる心と過ちをおかしてもいいという勇氣だよ。」

あえてここでは伏せさせてもらおう。別にそんなに危険なことではない。あしからず。

「しかしどうやって魔界に行くの？ 僕行った事がないんだけど・・・。」

「初めての魔界ツアーを推薦したいんだけど今は観光に行っている場合じゃないので省略。ただ単に魔界に行く道を使えばいいんだよ。あるだろう、この学校にも？」

そう、この高校には誰も近づかない場所がある。一度迷ったら葬式屋を呼ぶ生徒のほうが多いといわれている場所である。

こうして、時雨は単身陰謀渦巻く魔界へと旅立つのであった。

「・・・ここだけの話、実は僕が行くのがめんどくさいから時雨君に代わりを頼んだんだよ。」

と言つのは賢治があとで誰かに話したことである。

しょうじゅきゅう さようなら時雨君、君のことは忘れない）BY 賢治（

ようやく、ここまでやってきました！！あと一つで目標達成です。  
いや、目標達成しても時雨の間改変をはじめたいのですがね・・・  
まあ、なんにせようれしいことです。

しよのにじゅう 第二十回記念！！ 司会 賢治と亜美

「皆さんこんにちは・・・近頃家のメイドさんからなぜか命を狙われている霜崎 賢治です。」

「どうも、この前時雨君に間違えて蹴りを食らわせた霜崎 亜美です。」

「さて、これまでできてようやく目標達成できたのは皆様のおかげです。はつきり申し上げて嬉しいものです。」

「そうですねえ。いろいろあつたし・・・。」

「今回は『罪人天使』を書くにいたつての裏情報をご紹介します。ただきたいと思います。」

天道時 時雨：おとなしくてなんでもはつきりと断ることができない。過去の自分を受け入れてからなんだかスケベになった。前の学校では『紅時雨』と呼ばれており、表では相手を血に染めるといわれているが裏では女子のパンツを見ただけで鼻血を出して倒れるといううわさである。

「まあ、彼としては実のところこんなところですよ。」

「え、じゃあ賢治の裏情報は？」

霜崎 賢治：時雨が転校して来た高校にいる数少ない男子生徒。少々、おたくな趣味をしているがロボット系は嫌いらしい。顔もよくて頭もよいがなぜかもてない。家はとてつもなくでかく、さらに多

くのメイドさんがいる。意外かどうかわからないがに器用なところがあり、なんでもできる。

「これ別に裏情報じゃないんじゃない？」

「・・・そうかな？じゃあ、亜美の情報いつてみようか？」

霜崎 亜美：賢治がいる高校の番長だった。時雨が来る前までは男をサンドバックのように扱っていて・・・そのせいで多くの男子生徒が辞めていった。噂では彼女の部屋は心を許した人物しか入ることができず、その中身は意外なものらしい。彼女がいる高校で彼女のパンツを見たものは次の日以降、眼科と精神科医に行くものが多く出るらしい。

「うん、彼女のパンツを見たら眼が腐ると誰かが言っていたからね？」

「よし、そんなことを言ったやつ、絶対見つけ出してやる！！」

「我を失っている亜美の代わりに進めます。」

美奈：もとは賢治お手製の人形だったが今では時雨と契約したので罪人天使と変わらなくなってしまった。どこからともなく重火器を取り出したりもしてちよつと危険な存在でもある。しかし、時雨の家の付近のおばさんたちからの評判はとてもよく、おばさんたちは時雨の奥さんだと思っているらしい。

「いやあ、とっても意外だなあ。」

「・・・最後のは所詮噂よね？」

「それでは次です。」

「ちょっと、無視しないでよ!!」

天道時 涼：時雨の義妹で蕾の姉。その漢字からりょうと呼ばれることがあり、名前を誰も正しく読んでくれることがほとんどなかったが時雨は初対面ですずと呼んだ。それ以降、彼女は時雨のことが気になり・・・さまざまなことをしてきた。しかし、まだ人間だった時雨はそれに恐怖することになり、家を去ってしまった。

「むごいねえ。まったく持って彼は非常なやつだ。」

「ま、あの背が小さいお子様は気が強いから天からの罰よ。」

天道時 蕾：時雨の義妹で涼の妹。高校一年生になったのだが、まだまだ甘えん坊な性格をしている。何かにつけてやさしい時雨のことを慕っており、彼の言うことは大半聞いている。あまりに甘えていた時期があったので時雨は家を出て行ってしまったことをかなり後悔している。彼が戻ってくるまでずっと暗い性格であった。

「・・・彼女もすごいなあ。」

「ブラコンねえ、しかしまあ・・・あの二人もかわいいからねえ。」

「じゃあ、次いつてみようか？」

志乃村 焰：魔界のお嬢様でとても冷静なところがある。悪魔と魔法使いの混血らしいが人間界が気に入ったらしく幼いころからずつとこっちにいる。悪魔の血のほう薄いのであまり体は強くなく、

常に誰かと一緒にいたほうがいいらしい。意外と時雨をたよっており、本当に困ったときは時雨に相談している。

「いやあ、この人はちょっとやりづらいからね。」

「うん、意外と物静かなんだけど・・・芯は強いからね。」

「そろそろ終わりに近づいてきましたが・・・次行ってみましょうか？」

高仲 風：神様からの命令により、時雨の命を狙っていたが、今では時雨の友達となっている。何かにつけて時雨のことを心配しているのは時雨が時に無茶な行動をするからである。時雨のことは大きな弟だと思っているところがあり、神様から頼まれたときも渋ったときもあった。

「まあ、今のところはこんなところじゃないかな？」

「そうよね、これから先は魔界編だからきつと変わった連中が出てくるに違いないわ。」

「それでは皆様、これからもできましたらよろしくお願いします！  
！」

「今回の司会は、笑顔が似合わないと言われる霜崎 賢治と・・・」

「笑顔になっても時雨君以外からは逆に怖いといわれる霜崎 亜美でした。」

しよのにじゅう 第二十回記念!! 司会 賢治と亜美(後書き)

さて、まずいいたいことがあります。ありがとうございます・・・  
うつつ、やったよ!! まあ、できましたからねぎらいの言葉をください。  
い。(冗談です。)次からは時雨の魔界編となりますのでついにあの少女が出ます。



## しよのにじゅういち 魔界編1 数と力

いち

彼の名前は天道時 時雨。人間界ではどこにでもいなさそうな高校生であつた。そして、今ではどこぞやのお嬢様を助けるために人間界から送られてしまった特殊工作委員のようなものである。彼を送った人物は最後に彼にこう告げた。

「・・・まことに残念だが・・・戻ってくる方法は自分で探してくれないかな？」

もう少しで彼女たちのストライキが成功するといふところで異変は起こつた。何者かが立てこもっている学校に侵入し、次々にメイドを気絶させていつているようだ。ついでは何だが、チョコで床にごめんなさいと書かれている。

「て、敵襲です。人間界から何者かが襲つてきました。どんどん、被害は増すばかりで・・・」

そんなことをいつているメイドさんを誰かが刀のみねで気絶させる。

「ごめんなさい・・・ああ、またやつちやつたよ。」

ため息をだしながら時雨は誰ともなしにいう。その手に握られているのは二本の刀である。どちらもまったく刃こぼれしておらず・

・・・どちらかという切れ味が増しているようであった。

「・・・しかし・・・ほんとに大きな学校だな。僕の高校よりもでかいんじゃないのか？」

それにもましてだが、敵の数は半端なものではない。ついで言うならいろいろ物騒なものや通信機器のようなものも廊下においてあったりする。まるで迷路のようなこの学校を道によく迷う時雨が走り回っているのにも理由があった。立ち止まっていたら敵に見されてしまうのだ。

「こっちからですよ。」

「敵は一人です。袋叩きにした後に私たちのおもちゃにしまいましょう。」

もう何人だかわからない敵に対してため息をだしながら時雨は再び走り出した。無論、やってくるだろう敵の方角にである。彼なりに考えてみた結果として、敵が向かってくる方向に行けばとらわれているお姫様を助け出せると思ったのである。

「・・・ええと、今すぐ白旗でも掲げてくれませんか？」

そして、時雨はきちんと相手を刀で狙う前に一応降伏するように促していた。ちなみに言うなら今まで全部である。

「そうねえ・・・。ちょっと時間をくれないかしら？」

ここにきて始めて時雨の話を聞いてくれるような人物が出てきた。これまで時雨が戦ってきた相手はすべて彼の話を聞く前に襲い掛か

つてきたりもした。

「……私としては……降伏してもいいんだけど……この人たちが駄目って言うからね……せつかくの申し出を断るのは残念なんだけど……」

「いえ、初めて話を聞いてくれただけでもうれしかったですよ。ありがとうございます。」

そして、時雨はできるだけ早く相手を気絶させたのであった。

「……ネズミさんのくせになかなかやりますね。たかだか一人に何をやっているんですか？」

時雨が向かっているこの学校の校長室。今ではこの学校を占拠しているメイドたちの総司令部となっている。

「はい……ですが……獅子奮迅の強さを見せています。」

「罪人天使ではないのでしょうか？なぜそこまで手こずるのですか？」

そろそろ学校を占拠している側にもあせりの色は強くなってきた。校長室の真ん中にロープでぐるぐる巻きにされている女の子はそこではじめて誰かが自分を助けにやってきたと知ったのである。

時雨もそろそろ校長室の近くに行こうとしていた。彼の体はまだ

どこも怪我していないし、綺麗である。しかし、降伏してくれといつても誰もしてくれないことにそろそろ不満がきていた。彼としてはちよつとやさしすぎではないかと思つたので違う方法で行つてみようとした。

ちようど、曲がり角に誰かが待ち伏せしているような気配がある。ここで時雨は立ち止まり、相手に新しいほうほうをためしてみた。

「……今すぐ手を頭に上げて出てきてください。もしも出てこなかったら本気で倒しますよ？」

するとどうだろうか、まだ年齢の低い少女たちがなきながらに出てきたのである。それを見て時雨は罪悪感に襲われてしまった。ああ、こんなことしなきゃよかったとも思っている。

「……ごめん。お兄さんは冗談で言つたんだ。」

時雨はさつさとその場から逃げ出した。なぜなら後ろからもやってきたのだ。きつと挟み撃ちにしようとしていたに違いない。

「どうしたの！！あの襲撃者に何かされたの？」

時雨の後ろでは後続部隊の一人が泣いている少女に話しかけている。

「ああ、これから僕は……変質者としてのレッテルを貼られながら生きていけないといけないのか……」

勝手にやって勝手に苦しんでいる彼はある意味かわいそうな人物でもある。しかし、彼はこんなところで立ち止まっていはいけないのだ。もし、メイドたちに捕獲されてしまった場合は間違いない。

彼女たちのおもちゃにされる。それはもう、表現されるのははかれるようなことをされるだろう。普段から使役されている立場なのでたまには誰かを自由に使ってみたいに違いない。

「いたわ、突撃い!!」

時雨の目の前にメイド一個中隊が現れる。そして、スタンガンらしきものを手に格闘戦を仕掛けてくる。これが賢治だったら喜んで受けて立つに違いない。きっとそのときはメイドさんたちの悲鳴がこの学校中に広がるに違いない。

「……すみません。悪気はないから許してくださいね。」

一応相手に謝っておいて時雨は向かってくる相手に対して全力で攻撃した。

「総督、もうだめです。相手はもうそこまで来ています。脱出しましょう。」

「つく……ここまでか……全員退避!!」

校長室に陣取っていたメイドたちはいつせいに学校から脱出しようとする。だが、どうやら敵のほうが来るのが早かったらしい。

コンコン!!

「すみません、そろそろ白旗揚げてくれませんか?」

校長室のドアを丁寧にノックしている。総督と呼ばれたメイドは

これを最後の賭けとして残っている仲間に作戦を告げた。

時雨は先ほどの戦闘で一人だけ気絶させないでいた。めがねをかけていたのでもしも刀があたった場合割れて目の中に残るかもしれないからである。震えている彼女にやさしく話しかけて人質が捕まっているところを聞くことに成功した。

ノックをしても返事がないので中に勝手に入る。すると、部屋の中央に一人のメイドが立っていた。

「ここまでですよ。降伏してください。」

「……それはこっちのせりふです。みんな、今です!!」

時雨の周りからメイド軍の総戦力が現れる。そして、時雨の周りを囲む。時雨は困った顔になった。

しよのにじゅういち 魔界編1 数と力（後書き）

ようやくはじまった？魔界編。主要キャラは今のところ時雨と刀二本です。

しよのにじゅうに 魔界編2 決着をつけよう！

に

囲まれてしまったので刀を振り回せば間違いなく誰かが怪我を負ってしまふのは目に見えていた。時雨としては誰も傷つけないのだが……

「あなたが今まで倒してきたメイドたちはみな無事だと先ほど連絡を受けました。」

「それはよかった……。痣とかのこってませんか？」

「ええ、大丈夫だそうです。」

時雨は自分のことのようにほっとため息をつく。しかし、彼にとつては今は袋のねずみ。

「……人質は無事なんですか？」

「ええ、人質に怪我をさせてしまったら価値が下がります。」

言い方はちょっとひどいが人質に怪我をさせていないならそれでいい。時雨はこっちに来るとき、賢治とある約束をしていた。もしも、人質に怪我をさせてしまった場合は時雨は世にも恐ろしいことに巻き込まれると賢治が断言したのだ。賢治なりにたとえるなら、目が覚めたときに目の前にドリアンが置かれているよりも恐ろしいことだそうだ。



「さて、メイドさんたちにもう一度だけ言いますが今すぐ降伏してください。」

「強がりと言わないでくださいね。どっちが降伏するんでしょうか？」

時雨はため息をついた。こっちに来てから今の今までほとんど聞き入れてくれなかったからである。そして、彼は何ごとか口の中でつぶやいた。

「何かのおまじないですか？」

校長室はその後、紫の旋風が巻き起こり、スパアーン！！という音が大量に響き渡った。

賢治は古ぼけたラジオを生徒会室で聴いていた。しかし、意外に中身は新品らしく、先ほどから電波の受信も好調である。一見するとザ　だが、性能はジオ　グに違いない。

『ええ、先ほどからお伝えしていますが・・・反乱を起こしていたメイドたちは何者かにすべて捕らえられたようです。』

賢治は一人安心したようなため息をついた。

ところ変わって、先ほどからテレビ局なんかが大勢来ている学校。連行されているメイドたちはほとんど怪我をしていなかった。最後に出てくるメイドたちは頭の上に大きなたんこぶを作っていたがそ

れ以外は別に怪我などしていなかった。

「・・・はあ、何とかなったからいいけど・・・。どうやって家に帰ろうか？」

誰に聞くでもなく、時雨は学校の屋上でため息をついた。こつちにきたのはいいが、帰り方がさっぱりである。人質も怪我をさせることなく助けることができたし、相手に怪我を負わせることもほとんどなく終了させることができた。

「・・・空が紅いな・・・」

昼なのか、あたりは明るいうより、地面が蒼いので変わっていると思えば変わっている。もう一度時雨はため息を出した。すると、屋上の扉が開いて誰かがやってきた。屋上に隠れる場所はほとんどないので相手はすぐに時雨を見つけた。

「おお、あなたがわが娘を助けてくれたのですね？」

「・・・失礼ですが、あなたは焰さんのお父さんですか？」

時雨は自分が助けた少女が魔王の娘なら、自分の知り合いの焰が魔王の娘であることも知っていたのでそう聞いてみた。

「焰の知り合いでしたか・・・とりあえずありがとうございます。」

「いえ、ただ友達に頼まれたからです・・・」

時雨としてはその友達に置き去りを食らったような感じだが、結果としては人助けができたのでよしとすることにした。

「ぜひとも、感謝したいので私の家に来てくれませんか？」

これがゲームだったら魔王の陰謀に違いない。のこのこついていった勇者は毒殺なり何なりであつさりとゲームオーバーだ。だが、時雨は勇者でもなんでもない、ただの学生さんである。

「はい、わかりました。」

こうして、時雨は魔王さんの城にまぬかれる事となった。

魔王の城はどこかのゲームみたいにとてつもなくでかく、くるまでも時間がかった。それは、テレビ局の人たちが誰がメイドたちを倒したのかということになり、探していたからである。時雨はこっそりと出ていくのにいろいろ気を使っているうちに時間がかかってしまったのである。まあ、ばれずにここまで来たのはある意味幸運である。

「ようこそ、どうぞこちらです。」

魔王じきじきに出迎えられて時雨は戸惑った。だが、素直についていくことにして、奥の広間に案内された。さすが魔王城だけあつてかなりの大きさである。

「みんな、ハデスの命の恩人がついたぞ！！挨拶しなさい。」

席に座っている時雨のものに何人かの少女が現れる。

「いやあ、まだ実はいるのですが、ほとんどが家を出ているのです。なんでも自立したいらしいので・・・」

このおじさんは魔王ではないと時雨は思った。こんな照れ屋のおじさんを倒した日には彼を慕っている配下の人たちが勇者をしとめるに違いない。

「ハデスっていいいます。助けてくれてありがとうございます。」

まず先に挨拶したのは時雨が助けた少女であった。しかし、時雨はただ単に彼女の縄を解いてあげただけなのでこれを助けてあげたかどつかは人それぞれである。ハデスは銀色の髪の毛を長く伸ばしていて、目はくりくりしている。緊張しているのか、顔は真っ赤である。

「・・・キスだ・・・」

時雨にそうそっけなく答えたのはキスと名乗る少女であった。髪はやはり銀色だが、短く切られている。その目はまるで獲物を狙うハンターに似ている。

「イクスよ。よろしくね。」

最後に挨拶した少女は彼女たちの中で一番年長のようだ。しっかりしているようで、時雨に対しては尊敬と警戒の色をにじましている。

「どうも、天道時 時雨っていいいます。」

時雨もこの人たちとはほとんどかわることはないだろうと思い、

名前だけを出した。

あまりいい雰囲気とはいかないようだ。時雨はここに来てわずか数分で出て行きたくなつた。まあ、彼としてもさっさと人間界に戻つて明日の予習とかもしないといろいろ後で面倒になつてきそうなのだ。彼は勇者ではなく、明日の予習が大切な学生である。とりあえず、時雨はこの城を出て行く前に魔王に聞いた。

「あの、人間界に戻る方法ありますか？」

「え・・・すみませんが・・・それはわかりませんね。」

「そうですか、それでは僕は明日の予習があるのでおいとまさせてもらいますね。」

時雨は睨むようなキシスの視線から逃げるように立ち上がった。

「ほんとにお前があのメイドたちを一人で倒したのか？」

「こら、キススー!!」

魔王はそうだったが、キシスの目には狙いをつけた狙撃主のような光が宿っていた。

### しよのにじゅうさん 魔界編3 職業決定！

さん

時雨はその質問に答えるべきか迷った。ここに長くいる必要はないから別に言ってもいいのだが・・・さて、どうしたものだろうか？

「私に睨まれたぐらいで逃げようとする腰抜けが一人で倒せるのか？」

キシスの挑発は続く。

時雨は別にどうでもよさそうにそのことを聞いていた。彼としてはついさっきに知り合った中なのでしょうがない。時雨はいろいろな学校の番長たちから初対面のときにいろいろないわれたことがあるので平気だ。実はスケベだろう、など・・・彼としては声を大にして否定したいことを行ってきた連中も多くいた。

「・・・魔王さん、せっかく招待してくれたのにすいませんね。どうやら僕を勧誘してくれているのは少数のようですから・・・」

時雨は後ろも向かずにそういつて城を出て行った。彼なりにかっこよく出て行くことに成功したと思ったのだが、現実はその甘くなかった。見た目、チョコレート。味、唐辛子。そんなものである。

「あ、皆さん！！でてきました！！」

城の外にはテレビ局の人が殺到しており、すごい状況になっていた。カメラが光り、マイクが時雨に向けられる。気分としては旧型

で新型の大群に突っ込んでいくような感じである。

「時雨さん、何か一言!!」

「え……いや……」

「メイドたちは強かったですか？」

「はあ……まあ……」

時雨はそんな調子であった。もはや自分がどこにいるのかもわからない。前も後ろもカメラやインタビューをしているお姉さんたちが大勢である。

ちよいちよい

そんな中、時雨の手を引く誰かがいた。ハデスである。

「こつち……に……きてください。このままではきっとぺちゃんこになりますよ。」

「あ、ありがとう。」

時雨の手を引っ張ってハデスが誘導する。こんなことになれているのか誰につかまれるでもなく、城の中に戻ることに成功した。中にはしょんぼりとなっているキスが廊下までやってきていた。改めてこの廊下を見るとかなり大きく、ガンダでも置けそうな雰囲気である。

「ふう、ハデスちゃんのおかげで助かったよ。」

時雨はこつちを睨んできているキシスのことは放っておく事にした。時雨が何かを言つてキシスがまた何を言い出すかわからないからだ。触らぬ神にたたりなし！！

「・・・時雨といったな？」

近頃の神様は触らないでもたたりがあるらしい。キシス是不機嫌そうな声で時雨に話しかけた。時雨は真剣にお供え物でもしたほうがいいのかもしれないと思つたのである。

「さつきは失礼な真似をした。無礼を許してくれ。」

魔界にも武士みたいな口調で話す人はいたようだ。時雨はそんなことを思いながらもうなづくことにした。

「あ・・・うん。別に気にしていないから・・・」

相手は自分より幼いのだ。小さい子相手に起こつていても何も始まらない。

「お父様が今日は泊まっていけといていたぞ。あちらで呼んでいる。」

時雨はハデスとキシスにつれられて魔王がいる部屋にやってきた。そこには魔王の部屋と書かれており、今日来る勇者の予定が書かれている。今日の予定が終わっているのか、名前の欄にはばってんがつけられている。

「お父様、時雨を連れてまいりました。」



「あいているから時雨君だけ入ってきなさい。」

いわれたとおり時雨だけ中に入る。中はゲームで見るようなあの赤いじゅうたんが敷かれていた。そして、奥の玉座には威厳たつぷりに魔王が座っていた。

「・・・時雨君には聞きたいことがある。君はなぜ私の娘を助けに来たんだ？」

「え・・・友達に言われたから助けにきたんですよ？」

何を言っているんだといわんばかりに時雨はそう答える。彼としてはこれはもはやボランティアの領域に入っている。魔王が時雨を見ていると電話が鳴った。

「はい、魔王ですが？」

玉座においていたのか携帯電話で話し出す魔王。ある意味威厳が失われる瞬間だなあと時雨は感じた。

「な・・・それは・・・わかりました・・・」

魔王は携帯を再びどこかに置くと時雨に向き直った。

「すまん、実は昔の強敵からであった。彼が言うには時雨君の親友だといっている。私の娘が誘拐されたのを聞いて珍しくかわいそうになったといっている。だから時雨君に向かわせたそうだ。」

賢治だなと時雨は思った。こっちに来ていることを知っているの

は賢治以外にいない。というより時雨をこっちに送り込んだのは彼である。

「それでだ、帰る方法がわかるまで君に仕事をするようにいつていたんだが・・・ちょうどいい仕事があるんだが？」

賢治の策略にはまった気がして時雨は考えた。賢治が考えたものなら何かが仕掛けられているに違いない。一応、仕事内容だけは聞いてみることにした。

「それはなんですか？」

「・・・先生だ。君には今、城にいる三人の教師になつてもらいたい。教材は彼が今すぐに送るといつていたから・・・がんばつてくれたまえ。」

魔王の顔は嬉しそうであつた。まるでちょうど家庭教師でも雇おうとしていたようである。

「いやあ、一応給料は払うからがんばつてくれないかな？」

「・・・わかりました。できる範囲でお教えします。」

もはや逃げる道が見当たらないので時雨は受け入れることにした。いずれ帰れるのでそれまでの辛抱だと思ふことにしたのだ。人生ではあきらめは肝心である。

「まずは君の部屋に案内しよう。ちょっと悪いがついてきてくれたまえ。」

時雨の前に立って魔王は歩き出す。もはやわけがわからなくなったのは時雨だけである。主人公をかなたに置き去りにして話はどんどん進んでいく。

「この部屋は比較的きれいだから自由に使ってもらって結構だ。彼女たちが学校に行っている間は自由にしかまわないからね。」

魔王が去って行った後、時雨は部屋の掃除に移った。ある程度はきれいであるが、ほこり積もっている部分もあり、このままいたらのどが痛くなってしまう。

「……ため息をつくのも控えていたほうがいいかな？」

時雨は先ほどからずっと腰に差していた刀をきれいなベッドの上に丁寧に置き、その隣にごろりと横になった。

そして、そのまま眠りに入ってしまったのであった。

そんな彼の隣の刀……『真・蒼月』が、夜の光に怪しく輝いていた。

しよのにじゅうよん 魔界編4 家庭教師になろう！（前編）

よん

時雨は誰かに起こされるの感じて目を開ける。

「時雨さん、お父様が夕食ができたといってますよ？」

「あ……ありがとう、ハデスちゃん。」

あのまま眠ったらしく、まだ外は暗がりのままだ。

「さ、こつちですよ。」

時雨はハデスに案内されながらみんなが待っているところまでやってきた。

「時雨君、どうやら疲れているようだね。」

「はい、ちょっとだけ疲れてしまったようです。」

「そうか、それではいろいろ聞きたいこともあるけどまずは夕食を食べよう。メイドたちがストライキをしていたから私が自ら料理をしなくてはいけなくてね、口に合えばうれしいよ。」

夕食の席には時雨が想像したような洋食なものはなく、意外と和食であった。その中には魚も含まれており、時雨の顔に冷や汗が伝っていた。

「キシス、魚もきちんと食べなさい。」

「お父様、魚を食べたっておいしくないのです。」

さりげなく、魚を端にどけようとしたキシスが魔王にしかられる。時雨もキシスのように脇にどけようとしてやめた。

「ほら、時雨君なんて涙を流しながら食べてくれているぞ？」

結局、時雨は魚を泣きながら食べることにした。

楽しい夕食も終わり、自由時間となるはずであったが、早速仕事に取り掛かることとなった。

「えーと、まずはそれぞれが教えてもらいたいものを聞か・・・」

まずは面談からいることとなった。時雨はまずはハデスの部屋に行くことにした。

こんこん

「はい、どうぞ・・・」

時雨が部屋の中に入るとそこはいたって普通そうなところであった。本棚もあるし、ベッドも意外に普通のものである。

「・・・今日から家庭教師となった天道寺 時雨といいます。よろしく願います。」

「え、時雨さんが私の先生ですか？」

「うん、そういうことだよ。まずはどんなことを教えてほしいか話そうか？」

時雨は扉に寄りかかって話を始めた。魔王からもらった書類にはいろいろなことが書かれている。

「・・・えーと、魔法が使いたいなあ。」

「魔法ね・・・」

時雨はその書類に書き込む。跡でこれを魔王に提出すればその方を学習するのに必要なものが時雨に渡されるらしい。時雨としてはもはや偽者家庭教師だが、彼なりに努力してみることにした。そのほかにもいろいろと質問を終え、時雨は部屋を出ることにした。

「時雨さん、どこの部屋に泊まるんですか？」

「え、トイレの近くの部屋だよ。」

「わかりました。」

ハデスはなにやら決心したような顔になり、時雨はハデスがやる気を出しているのだなあと思いながら部屋を後にした。次に目指すのはキシスの部屋である。

こんこん

「あいているぞ・・・」

扉を開けてから、先ほど庭から持ってきた石を放り込む。

どかーん

するとどうだろうか、部屋の中に地雷でも埋められていたのか時雨の目の前で床が爆発した。

「やるな……。私のトラップに引かなかったのは時雨が初めてだ。」

「はぁ……。僕に対しては敬語は使わなくていいから、ほかの目上の人にはきちんと使うようにね。」

床が爆発することを知ったのは先ほど魔王からの情報によるものだ。キスがいうには、泥棒除けだそうだが彼女の部屋にけ金目のものはほとんどないとのことだ。更にいうなら、ただ誰かが引つかかるのを待っているだけらしい。ほかにもどんな罠が仕掛けられているかわからないので彼は部屋から出て話を聞いたほうがいいといっていた。

「それじゃ、何を教えてほしいのか言ってくれないかな？」

「さて、まずは私から質問させてもらおう。好みの女性の年齢層は？」

有無を言わず質問を開始。時雨は戸惑いながらも質問に対する答えを考える。

（……僕としてはやっぱり頼りがいのある人がいいからなあ……

・)

「・・・同級生、もしくは年上・・・」

「次、目の前に自分より年齢の低い女の子が倒れている。どうする？」

「触れずに警察に電話する。」

この手の質問は前にいた知流高校でされたことがあった。これも何かの運命。時雨は前と同じように答えていった。

「・・・最後、自分の好みの性格は？」

「・・・特になし・・・」

終わったことにほっとしてため息を出す。満足しただろうと時雨はキスを見てこっちの質問を始める。

「・・・僕に習いたいことは？」

「狙撃だ。それと武器のことを教えてほしい。」

なんとも物騒なものであったが、時雨は疲れていたのですささと書き込み欄に狙撃と武器のことについてと書いた。

「じゃあ、僕はこれで・・・」

「ああ、後は時雨の部屋の位置を教えてほしい。」



ハデスのときもそうきかれた気がしたが、とりあえず答えることにした。

「トイレの近くにある部屋だよ。」

「そうか・・・わかった。」

最後に残ったのはイクスである。彼女はどことなく、お高くとまっているような感じがしており、時雨はそのような態度をする相手が苦手だった。ただ、何か理由がありそうな感じもしており、できるだけ刺激しないようにと彼女の父親から言われている。部屋には特に何も仕掛けておらず、トラップの心配だけはしないでいいそうだ。

## しよのにじゅうご 魔界編5 イクスの性格

ご

イクスの部屋をノックする。

「あいてますわよ。」

中に入ることにする。中は今までの中で一番すごかった。どこもかしこもなんだか不思議な本で囲まれており、ベッドが見当たらない。窓は本が隠している。この部屋の主は本であるといっても過言ではないだろう。

「・・・イクスちゃん、何か僕に教えてもらいたいことはないかな？今日から僕が君の家庭教師になったんだよ。」

「あらそう、それならぜひとも・・・あなたに魔法でも教えてもらいたいわね。」

その言葉には挑発が含まれているのは目に見えてわかっていた。だが、時雨はあえて気がつかないふりをして話をすすめることにした。これまでいろいろな番長たちを地面に静めてきた彼には挑発を無視されて話を進めたら相手がどんな行動をとるか知っていた。

「じゃ、魔法だね。それじゃあね。」

「・・・まちなさい。あなた魔法が使えるの？もしくは私より強いと思つて？」

「たぶん、魔法なんて使わなくても君より強いと思うからね。それにこんなかわいい少女に手を上げたなんて聞かれたら大変だからね。」

大人びた態度をとる人物は相手に子ども扱いをされるとおこることも時雨は知っていた。まあ、彼としては別に彼女ににらまれてもまったく怖くない。新型機が戦闘機にけんかをうっているようなものだとし雨は思っていた。ぶつぶつ言っているイクスに背中を見せて魔王のところに行こうとした。そんな時雨の後ろからイクスの憎悪のこもった声が聞こえる。

「……私のことを愚弄した罪を償ってもらわね！くらいなさい！」

大きな水玉が時雨に向けて突撃。廊下は水浸しとなった。手ごたえありと思ったイクスはその場で笑った。

「どうよ、ちよつと季節が早い水浴びした気分は？」

「さあね、水なんてかかってないからわからないね。」

彼女の後ろに回りこみ、どこから取り出したのかわからない水鉄砲をイクスの顔に向ける。驚いて振り返るイクスの顔に時雨は躊躇なく強力な水鉄砲を食らわせたのであった。

「イクスちゃん、もしも今度から不意打ちをしようとするのなら、リスクを背負ってやるようにね。」

黙りこむイクスの顔をタオルで拭いていった後、時雨はさっさと走っていった。後に残されたイクスは唇をかねて部屋に戻っていつ

た。

「おお、どうだったかね、時雨君？」

「まあ、それぞれ反応が違いましたよ。でもいいんですか？」

そして、それぞれの面談を終えた時雨は今、魔王の部屋にいる。魔王の部屋はこの城の中で物置小屋に続くぐらゐの簡素な部屋で、机とベッド以外に何も無いところだった。魔王といえども苦勞をしているらしい。

「・・・いたずらをした子供にはお仕置が必要だからね。これまで私は娘たちを甘やかしてきたんだ。その結果・・・辛党の私の妻は私のもとを離れていったんだ。」

まったく関係ないような気がしないでもないが・・・あえて時雨は突っ込まなかった。

「・・・わかりました。」

「時雨君、特にイクスには気をつけてくれ。あの子は自分より優れているものを妬み、劣っているものを馬鹿にするところがあるんだ。ぜひともその性格を何とかしてほしい。」

もはや家庭教師がするような仕事ではない気がするが、お節介やきの彼は何とかその性格を直そうと考え始めるのであった。

「他にどうにかしたほうがいいと思われるところはありますか？」

「・・・あるのだよ。キシスは兵器マニアらしいからな。別にそ

のことは文句はないが、爆弾を設置させないようにしてほしい。  
普通の人が当たったら怪我ではすまされないからな。」

「はい、それはわかっているんですが……。ハデスちゃんは何かないんですか？」

「あの子はたぶん大丈夫だ。今のところは他人に迷惑をかけていないからな。だが、逆にやさしすぎるから魔王はまったく務まらないと私は思っている。魔王になるものはやさしすぎてはいけないのだ。相手に回復魔法なんてかける魔王なんか聞いたことがない。」

ハデスは魔王としては失格らしい。意外と魔王という職業？も苦労があるらしいのだ。

「……何か他にはありますか？」

「いや、大丈夫だ。時雨君の働きに期待しているぞ？」

勝手に期待されては困るができるだけ期待にこたえようと時雨は思った。しかし、偽者家庭教師と呼ばれてもあながち間違っていない時雨にはこれから先、どんな困難があるかわかったものではない。

「……早く人間界に帰れるといいな？」

「はい、そうですね……。」

彼としてはさっさと帰って寝たいのだが、こんなところで騒いでも仕方がない。意外と諦めが早い正確なのかもしれない。いや、主人公があきらめ早いのも心配だと思うが、そのところは彼にがんばってもらうことにしよう。

「時雨君、君が娘たちを教えていない時間はお客様だからね。」

「はあ、よろしく願います。」

そういつて時雨は魔王の部屋を出た。今日はもう遅いので明日に備えて眠ることにする。どうせ明日の朝などは自由時間だが、一応自分の部屋で休むことにした。

罨が仕掛けられているかもしれないので一応、身代わりの小石を持っていくことにした。

時雨は部屋を開けて中に石を放り込む。爆発音の代わりに誰かの叫び声が聞こえたのであった。

「?」

中を覗き込むとハデスとキシスがベッドの上に座っていた。どちらも眠る前なのかパジャマを着ている。しかし、どうやらサイズが少し大きいのかぶかぶかのようなうた。

「・・・何してるの?」

「・・・あの、お話がしたいんですけど?」

ハデスが申し訳なさそうな顔になり、そんなことを言った。たぶん、これはこれでいいという人もいるかもしれない。

「別にいいよ。ところでキシスはどうしたの?」

「……せんべつを持ってきた。」

手に持っているのは大きな筒。戦車でも攻撃するのだろうか？

「……ありがとう。もらっておくよ。」

うれしそうに時雨に渡し、部屋を去っていく。用事はそれだけだったようだ。時雨は一人残ったハデスを見て苦笑する。

「さて、何の話をしようか？」

「あ……なんでもいいですよ。」

その後、とりあえず時雨は自分のことを話すことにした。家族のこと、友達のこと、何でもこっちに來たかということ。

時雨が一方的に話していて、彼が気がついたときにはハデスは時雨のベッドに寝ていたのであった。彼はハデスの部屋まで連れて行き、寝かせてあげることにした。

しよのにじゅうろく 魔界編6 決闘！！お持ち帰りをお願いします。

ろく

ハデスの部屋を出た後、時雨は誰かにつけられているような感覚を覚えた。ここは城の中なので、もしかしたら勇者が盗賊まがいの行動をしているのかもしれない。

「……そこお！！」

余裕を持つて相手に持つていた小石を投げる。相手が小石に反応しているときに一気に相手の顔を確認。

「へ、イクスちゃん？」

彼の目の前に現れたのはいまだにパジャマ姿ではない、傍若無人の魔法使いであった。その目には決着でもつける前の武士の目を持つていた。これは何かあつたに違いないと十人中、九人は思うに違いない。

「……天道時 時雨！！私と勝負しなさい！！」

突然の言葉に時雨はただただ、ぼさつとしているしかなかった。彼女が時雨に指差してそう宣言してから約、一分後に彼は内容を理解した。

「……でもどこするの？」

時雨は拒否しても勝手に襲ってくるに違いないと思ったので受け



ることにした。力の差ははっきりしていたのでできるだけ怪我させないように勝とうと思ったのであった。

「魔王の間よ。今から三分後にはじめるわ。」

イクスはそれだけ告げて時雨の目の前から走って消えていった。ここから魔王のままでちょっと時間がかかるからそのために走って行ったに違いない。彼も急いでそのあとを追って魔王の間にむかっ

た。

魔王の間にある玉座には魔王が座っていた。

「時雨君、がんばりたまえ。」

なぜか自分の娘を応援しておらず、その隣にはキシスが座って決闘が始まるのを待っている。

「……ルールは簡単……相手が戦闘不能になれば勝ちよ。」

「何か商品でも出るの?」

「そうね、勝ったら相手を自由にできるのはどう?」

近くで自分の父が聞いているのを知ってかしらるか、そんなある意味凄い条件を出してきた。しかし、魔王はうなずき……

「時雨君、好きなようにしてかまわんよ。」

こうして、父親公認のもと、先生ぶいえす生徒の戦いが幕を切って落とされたのである。客観的に戦力分析をさせてもらうと、戦艦に戦闘機が一騎突っ込んでいくようなものだ。

戦闘が長引くことなく、開始数分で決着はついてしまった。やはり時雨の圧勝で、イクスは魔法を一度も唱えることなく負けてしまった。本気を出した時雨はもはや誰にも止められないであろう動きを出し、イクスの後ろに回りこみ、口をガムテープで塞いだあとにどこから取り出したのかロープで体をぐるぐる巻きにした。

「お子様一人テイクアウト」

ついでとして、目に目隠しもしておいた。もはや犯罪者になってもいい手際のよさである。まあ、彼の性格上はそういうことはしないであろうが……。

「むぐう!!」

芋虫となったイクスはじたと床の上でもがいている。父親はそんな娘の相手をしておらず、時雨に対して話しかけていた。

「時雨君、君の勝ちだ。イクスを好きにすればいい。」

まるで他人事のような感じがしないでもないが……そう思ったのは時雨だけだろう。

「いえ、ちょっと大人気なかったと思ってます。正直やりすぎました。」

このまま持って帰れば本当にやりすぎになるに違いない。それどころか取り返しのつかないことになる可能性だってある。いや、警察と呼ばれるだろう。

「……魔界に住むものは忠告はするが助けることはしない。ハデスのときもそうだったし、イクスのときもそうだ。こうなったのも自分のせいだし、責任は自分と相手の力量を認識できなかった自分にあるのだ。時雨君、敗者に優しさは不要だということは覚えておきなさい。」

なぜか時雨が説教を受けているような雰囲気があるが気のせいだろう。魔王は言うだけいっていなくなってしまった。責任感に乏しい父親でもある。

「……時雨、私も寝るからな。明日から学校だし……」

姉妹のキスも意外と厳しいのか眠たそうにしながら去っていった。目をこすっていたのでこのまま部屋に直行したあとに寝るに違いない。明日になったらこのことは忘れているだろう。

「……さて、誰もいないからお仕置きしようかな？」

冗談で時雨がそういうとイクスはびくつとして動かなくなった。そういうことはする気はないので時雨はさっさと縄をはずした。そして、ガムテープを慎重に外した後、目隠しをとってイクスを一人居残して時雨も魔王の間から出て行こうとした。彼の趣味はお姉さん。妹は見る分だけはおもしろいだろうが悪戯するのは可愛そうだというのが彼の考えである。賢治や他の人たちが聞いたら疑うに違いないが、彼なりに分別だってあるのだ。

「……時雨さん、何でもしないのです！！私の体に何が不満があるのです！」

「いやいや、そんなことは言っちゃだめでしょ!!」

興味ないからといったら流石にそれも可哀想だと思ったのでいつものように濁す事にした。彼は濁ったお茶は嫌いだが、話を濁らすのは好きであつた。だが、今回の相手は納得してくれない。

「・・・イクスちゃん、子供は寝る時間なんだよ?もう寝なきゃ・・・」

「うるさい!!子ども扱いしないでくださる!!これでも今年で15なのよ?」

時雨、今年16歳。

(・・・てつきり14ぐらいだと思った。)

そう思ったが時雨は心の中でとどめることにした。彼は火に油を注がないタイプである。これ以上、消火活動に追われていたら朝になつてしまう。

「・・・わかった。そこまで言うなら明日の夜までに考えておくよ。ほら、これでいいだろう?」

渋々ながらも納得したのか、イクスは顔をしかめながらも頷いた。その顔には意地を張らなければよかったと書かれている。

「嫌なら、今日のことはなかったことにしておくけど?」

「いい!-!」

時雨は思う、きっと彼女はひくにひけないタイプなのだと……。

「さて、それじゃあ……イクスちゃんの部屋まで送っていくよ。」

「子ども扱いしなくて結構ですわ!！」

「いや、大人の女性を襲う奴等がいるかもしれないだろう? だから送っていくんだよ。」

それで納得したのか、イクスは時雨がついてくるのにまったく文句を言わなかった。そして、時雨が言ったことは正しかった。

この後、時雨はハデスをさらおうとしていた賊と交戦。相手をすべて捕獲した後に警察に電話。朝になるまで状況を詳しく教えていたので結局、寝ることはできなかった。

そして、紫色の太陽が結構な高さまであがった頃に自分の部屋に戻る。だが、神様はそんなに優しくなかった。

しよのにじゅうろく 魔界編6 決闘!!お持ち帰りをお願いします。(後書き

まだまだ始まったばかりの魔界編!!これから書いていくので  
お暇な方は応援よろしくお願いします。

しよのにじゅうな 魔界編7 家庭教師になろう！(中編)(前書き)

前に書いてた前編から続く家庭教師の仕事です。

しよのにじゅうなな 魔界編7 家庭教師になろう！（中編）

なな、

時雨は目の前にいる人物を見て神経を集中させていた。

「・・・時雨殿、どうかしましたか？」

その相手はどっからどう見ても忍者。右から見ても左から見ても忍者だ。

「どちらさまでしょうか？」

「・・・時雨殿は自分を知らないのですか？」

少しばかり顔を曇らせて彼女は時雨に聞いた。もう一度上から下までなめるようにしてみている。髪形は綺麗な形のポニーテール。顔も整っており、首辺りには口を覆うためにあるだろっ青いマフラーがついている。体もすっきりしているが出ているところは出ていて・・・時雨はこのあたりで思考を停止させた。

「・・・すいません。僕にあなたのような見た目完璧の知り合いはいませんよ。」

ため息をつく謎の忍者。そこで顔を上げて納得したように頷いた。

「では、手を握ってもらいますか？」

「？はあ、わかりました。」



言われるがままに謎の忍者と握手を交わす。時雨はそこで何かを感じ取った。

「！？貴方はもしかして・・・」

「そうです、自分は貴方が振り回していた・・・『蒼月』です。」

言われてみれば彼女の腰の辺りに刀のない鞘がついていた。時雨は刀の化身であろう忍者をまじまじと眺め・・・

「まさか女性だと思わなかったな・・・。振り回してごめんね」

と呟いた。蒼月はちよつとばかり笑いながらそんな時雨に答える。

「いえ、自分は貴方の刃ですから当然のことです。しかし・・・。」

そこで一旦言葉を切ってはにかみながら答える。

「生まれて初めてですよ。あそこまで真剣に握ってくれる人物がいるなんて・・・。これから先は時雨殿の影となって生きて行きたいと思っていますのですが・・・どうでしょうか？」

今のところに時雨の命を狙っているようなそんな物騒な相手はいない。時雨は苦笑しながらやんわりと拒否した。

「いや、今のところは大丈夫だから・・・何かあったときに頼むよ。」

そういった時雨は反射的にその場を離れる。先程までいた場所に

は紅く光る刀が突き刺さっていた。危うく時雨は団子のようになるところであつた。

『・・・やるねえ……。さすが拙者が選んだ御主人様だ。』

紅い光に包まれて刀は時雨の目の前で形を変える。その顔は・・・蒼月とほとんど同じであつた。

「・・・蒼月さん、ご姉妹？」

彼がそういうのも無理はない。蒼月と紅陽はまったく同じ顔をしているのだ。違うところといえば・・・紅陽の髪はぼさぼさしているところと・・・侍のような服装だということである。

「・・・はい、この者は・・・」

「ま、何でもいいけど・・・拙者のことは紅陽と呼んでくれてかまわない。主君は時雨というのであろう？」

「はあ、わかりました。」

めちゃくちな人物であるが・・・二人とも優しそうである。しかし、困ったことに時雨がこの二人を雇っているわけではない。いいにくそうな顔をしていると、きがついたのか蒼月のほうから時雨に話しかけた。

「時雨殿、私たちは刀ですので食事などは必要ありません。」

「ああ、たまに気分転換におにぎりでもくれればそれでいいよ。」

時雨はほっとしてベッドに倒れこむ。

「二人とも、悪いけど寝かせてもらっね……」

時雨はとうとう我慢の限界に達し、ベッドの上に倒れこんだのであった。

時雨が目を覚ますとすでに日は傾いており、特に何もやることなく……無駄に一日を過ごしてしまったのである。しかも、彼が自分で起きたわけではない。

「……時雨さん、大丈夫ですか？」

「……ん？あれ……？」

目をぱちくりさせながら時雨はベッドから起き上がる。彼の隣には刀が鞘に納まっていた。まるで、寝ている彼を守っているようである。

「時雨さん、刀と添い寝するなんて変わっているんですね？」

「ああ、この二本はね、僕の友達のものなんだよ。それにね、僕を守ってくれるんだって。」

起こしてくれたハデスに礼を言ってから時雨は立ち上がる。そして、もう一度刀を見る。自分が見たものは夢ではないと思っているので彼は刀にこう言った。

「これから……何かあったときはよろしく頼むよ。」

時雨は、ハデスの部屋にいつて早速仕事を始めることにした。

「さて、魔法の勉強からしてみようか？」

「はい！！がんばります。」

時雨は魔法初心者だが、彼が初心者でも判るように送られてきていた教科書は親切丁寧だった。今日は基本から入るということで、ハデスはいろいろな魔法の基本を覚えた。特に、相手の怪我を治す魔法がうまくっており、彼女がいれば消毒液は必要ないといったところまで上達してしまった。

「・・・じゃ、今日はここまで。よくがんばったね。」

「いえ、時雨先生の教え方がうまかったんですよ。」

初めて先生と言われたので時雨の心は高速道路でぶんぶん飛ばしているような漢字を覚える。案外、先生もいいかもしれないと彼は思った。

次に、彼が向かったのはキシスの部屋。だが、彼女の場合は狙撃と兵器の勉強というなんとも物騒なものなのでとりあえず能力確認のテストとして屋上にやってきた。

「うーん、あそこの木に生えている葉っぱを落とす能力検査の結果・・・は一枚か。」

ちなみに、彼女が撃った弾の数は二十発。更に言うなら発破の先端にかすった程度である。

「・・・先生、私では駄目か？」

「・・・まずは集中力をつけてみようか？キシスちゃんは気が散りやすいタイプみたいだからね。」

キシスの授業内容は精神を集中させることととりあえず兵器の使い方と手入れの仕方などの知識となった。ちょっと時間がかかりそうだが、いけそうである。

そして最後、イクスの部屋では時雨とイクスが向かいあっていた。

「イクスちゃん、僕に一発当てれば君の勝ちだよ。」

「・・・わかったわ、みてなさい！！」

しよのにじゅうはち 魔界編8 つ、疲れた……

はち、

時雨はとりあえず彼女の能力がよくわからないので試験をすることにした。どれだけ魔法が使えるか試してみるのだ。

「……さあ、はじめようか？」

「ええ。」

イクスの今日の授業内容はとりあえず時雨に魔法を当てるといったことであつた。だが、時雨に当たるどころかかすることもなく、結果は無駄にイクスが疲れるだけとなつた。

「……はあ……はあ……」

「よし、じゃあ……休憩しようか？」

時雨は近くの席に彼女を座らせてから散らばつた本を本棚に戻す。もはや虫の息といつても過言ではない彼女はそんな時雨を見ながら息をする。

「………せんせえ、どうだつた？」

「ん？まあ、いうだけのことはあるからね。やっぱり君は筋がいいんじゃないかな？」

あれだけ動き回つて息ひとつ乱れていない時雨を見てイクスはよ

うやく整ったため息を出す。

「せんせえ、やっぱり……私は体力をつけたいのですけど……」

「?そうかい、じゃあ今度からは広いところに場所を変えようか?」

すっかり綺麗になった部屋を見て時雨はうんと頷く。そして、イクスの部屋を出た後は調理場に向かって歩く。

「ああ、時雨君じゃないですか……。昨日の夜はどうもすいませんね。」

「いえ、いいですよ。」

可愛いエプロンを着てにんじんの皮をむいている魔王とはどうにも想像し難いものである。時雨はそんな彼の隣に立って手伝いを始める。

「時雨君は料理もできるんですね?」

「……少しぐらいならできます。一時期ですが一人暮らしをしていたんですよ。」

今となっては遠い過去のような気がする昔の一人暮らしを思い出す。前の自分と今の自分は大きな違いがあるような気がする……。時雨はそう思いながらさつさとにんじんの皮をむいていた。

夕食も終わり、もはや後は寝るだけとなった時間、時雨は部屋に戻ってくる。すると、そこには刀が人間になって待っていたのである。

った。

「時雨殿、ちょっと体が疲れているようですよ?」

「そうだねえ・・・ちょっとばかり顔色が悪い気がするね。」

「うん、ちょっとだけ・・・疲れたみたいなんだよ。」

時雨は再びベッドの上に転がる。このままこうしていたらきつと眠ってしまうに違いない。

「・・・では時雨殿、私たちは城の警護に回りますね。こういうときこそ、主君の影として生きる私の務めですから・・・」

「・・・はあ・・・まったく、姉上は頭がきつと固いんだろうね。しょうがないから拙者もついていってやるよ。」

時雨はそんな二人に感謝の言葉を述べて寝ようとした。今日は少ない時間だが、シャワーを浴びているので気持ちがいい。だが、時雨は寝ることができなかった。

「・・・時雨さん、ちょっといいですか?」

「・・・ん、ハデスちゃんどうかしたの?」

彼の部屋にいつはいったのか、ベッドの近くにハデスが立っていた。

時雨は重たいからだともぶたに総攻撃を開始、見事勝利を収めているもののような顔に戻ってハデスに座るよう、促す。

ハデスはすでに寝ていたのかパジャマ姿である。だが、ちょっとパ



ジャマが変わっており、なんというか・・・ワイシャツの上だけを着ているようにしか時雨には見えなかった。しかもボタンは上のほうしか止まっていけない。過労時でピンクの枕を胸の前に抱きしめるようにしているのできわどさではなく、可愛さが勝っている。

「・・・実は、先ほど怖い夢を見たんですよ。」

そういつて顔を青くするハデス。その表情からすると本当に怖い夢を見たようだ。

「どんな夢かな？できれば教えてくれない？」

「はい、実はですね・・・」

彼女が見た夢は次のとおりである。何故か・・・気がついたらつぶすとプチプチなる物体をハデスはつぶしていたそうだった。だが、その途中で誰かにそれをすべてつぶされた後に、泣いている彼女の前で更にプチプチをつぶすという、普通の人にとっては間違いなくどうでもいいことであつた。

「・・・あの、だから・・・また見るかもしれないですよ。」

彼女は何かを伝えたがつているのだが、時雨はまだ気がつかない。眠気が彼を襲っているのだ。眠気と戦っているのですがいつていることを真剣に考えようとしてもなかなかできない。

「ええと、もっと具体的に言ってくれないかな？」

彼が今にも睡魔に負けそうな感じでハデスに告げる。そろそろ時雨の体力はそこをつきそうになっていた。

「…………一緒に寝てください。駄目ですか？」

「…………え…………？別にいいよ？」

眠気が時雨の感覚を奪っていく…………まるで別人のようなことをいつているのだが、しょうがない…………時雨軍は睡魔に負けたのである。

「ほんとですか……！」

「…………うん、ハデスちゃんも明日は早いだろう？」

「はい……！そうです。じゃ、失礼しますね。」

自分の枕を時雨の枕の隣に置いてから彼女は寝転がる。彼が使っていたベッドは客用なのでかい。二人は悠々と寝ることができた。

「…………時雨さん、あなたは何で私を助けてくれるんですか？」

「…………う…………ん…………それは…………」

「それは？」

それ以降、彼は黙ってしまった。答えに困ったのではなく、眠ってしまったのだ。ハデスは時雨のほうに擦り寄っていき、丸まるように眠った。

そして、時雨は目を覚まして驚いた。いや、驚くという表現では足りないだろう。

「・・・・・・・・。」

彼の体にハデスが引つ付いて眠っているのだ。彼を離すまいといった感覚でなかなか離そうとしない。まるでコアラか蟬だ。そして、時雨はもつと驚いた。ハデスの格好は朝から刺激が強いものだ。だからである。ボタンはすべて外れ、見えそうで見えない・・・・そんなきわどい所であつた。

「・・・・・・・・？」

昨日のことを思い出そうとしても思い出せない。彼はあせつた。かなりあせつた。別に何もなかったのだが、記憶があいまいな彼はあせつたのである。この後、朝起きたハデスは枕をそのまま時雨の部屋において出て行つた。

時雨は思う、世の中には危険がいっぱいだと・・・・

しよのにじゅうきゅう 魔界編9 へっへへのへっへ

きゅう、

「先生、ここがわかりません！」

「先生、ここがわからんのだが？」

「せんせえ！！ここがわからないんだけど？」

時雨が魔王の三人娘の家庭教師になってから数日が経った。基本的には一人ひとり個別に教えているのだが、たまには全員で勉強をして見ることもあったんだが・・・こうやって先生の取り合いが続発。三人はにらみあいをしている真つ最中だ。

「・・・まあ、ね。落ち着いてくれないかな？」

家庭教師となった時雨は自分の生徒たちを落ち着かせるためにいろいろとがんばったが、無駄であった。彼は今後、三人を一緒に勉強させるときはテストのときだけにしようと思ったのであった。

時雨も数日経ったのでいろいろと城の内部がわかるようになってきていた。意外なことに風呂まであったので時雨は驚いたのであった。しかし、まだ外にはほとんど出たことがないのでどんなものがあるのかはよくわかっていない。とりあえず、彼なりにいろいろと努力しているのだが、生活はいろいろと大変であった。

まず、午前中は城にいたメイドたちの仕事。ただいまメイドたちは裁判所にていろいろ罪を決められているらしい。だが、まだまだかかるらしく、忙しい魔王の代わりに蒼月と紅陽、そして時雨が分担してがんばっている。時雨の仕事は大体、掃除と書類の片付けや

昼食担当である。

そんな時雨も今日はちょっと変わった仕事を魔王から言いつけられたのであった。

「……一日魔王ですか？」

「そうだ、私はちょっと今日用事があるから今日の一日だけ魔王のいすに座っていてほしい。」

魔王の仕事はいたって簡単。今日くる予定の勇者なり何なりがやってきたらそれを退治すればよいということだった。しかし、ずっと座っていないとはいけないのでその間にたまっている事務などをこなさないといけないらしい。

「次が重要だ。勇者がやってきたら魔王らしい台詞を言ってくれ。」

「はあ、がんばります。」

こうして、時雨の一日魔王の日が始まったのであった。

「時雨殿、それにしても暇ですね。」

「うん、そうだねえ。」

時雨の隣には蒼月と紅陽が控えており、（時雨が台詞をいえないときに代わりに言うらしい。）時雨はただぼさっと座っているだけであった。

「あ、来ましたよ。」

勇者がやってきた。だが、その数は半端なかったのである。いや、数える時間も結構かかるに違いない。

「魔王よ、今すぐわれわれに負けを認めろ！！さもないとお前たちの娘の命はないぞ！！」

勇者の一人であろう、人物がハデスとイクス、キスをロープでぐるぐる巻きにして時雨に突き出す。やり方がもはや勇者ではない気がしてならないが、これがもっとも安全に魔王を倒せると彼らは思っていた。だが、考えが甘かった。

「……みんな、悪いけど……目をつぶっていてくれないかな。」

時雨は三人に呼びかける。彼の目は普段の優しい顔ではなく、恐ろしい顔になっていた。

「……ついでに言うなら耳も塞いでいたほうがいいよ。」

三人はロープでぐるぐる巻きにされている拳句に目隠しをされているので時雨が言った事はまったくもって無意味だった。それほど時雨がおこっていたのだろう。

怒った時雨が群がっていた勇者たちを蹴散らすのにそこまで時間はかからなかった。

例えるなら、91で旧クの群れに突っ込んでいくようなものだ。今日やってきた勇者たちは世にも恐ろしい魔王によって、命まではとられなかったものの……城から放り投げられた。魔王の間が血だらけにならなかったのは蒼月と紅陽がせつせと掃除を行ったか

らである。無言の連係プレーにより、三人娘には血を見せることなく、事態は終了となった。

「……大丈夫？」

「は、はい……」

ロープをとった三人は皆顔が青かったが怪我などは見当たらなかった。三人はもう一度学校に戻っていった。

「……時雨殿、午前中は終わりですよ。」

「うん、ちょっと疲れたなあ。」

「今度は拙者も暴れていいか？」

三人でそんな話をしながら、その場で昼食を取る。今日のメニューはおにぎりであった。

「……誰がこのおにぎり握ったの？」

「拙者と姉上ですよ。」

蒼月と紅陽がおにぎりを作ったらしい。それを食べながら談笑を始める。魔王というのはとりあえず戦っていない間は暇であった。話も進み、時雨は蒼月と紅陽の過去について話を聞いていた。

「……そして、私たちはあのすけべな賢治殿の手から離れることができたのですよ。賢治殿は私たちを触ったりしていたので少々、切りつけたくなる日もありました。」

「いやらしい手つきで触ってくるからなあ。そのときの目が特にやべえな。うん、拙者は時雨殿が主君になったらほっとしたぜ。」

談笑も終わり、午後から仕事となった。魔王の間に勇者たちの足音が響き渡る。そして、はいつてきた人物を見て時雨と蒼月、紅陽は驚いた。

「やあ、元気にやってるかな？」

「け、賢治じゃないか!!」

やってきたのは人間界から魔界に時雨を送り込んだ張本人であった。

「元気で何より・・・そんなことより、時雨君にお知らせにやってきたんだ。後でこの包みを開けてほしい。」

時雨が荷物を賢治から預かっている間、賢治は時雨のことなど眼中にないのか、近くにいた蒼月と紅陽をやらしい目つきで見ている。彼曰く、物こそ全てらしいので・・・刀の二人を見ているとぐつと来るものがあるらしい。さて、それはおいといて時雨は賢治に聞くことにした。

「賢治、僕はどうやってたら人間界に帰ることができるの？」

「がんばれば努力は報われる。少年、がんばれ！」

賢治はそういつとそのまま消えてしまった。賢治が今ここにいたことを証明できるのは時雨が持っている小包だけである。賢治が消



えてしまったのにびっくりしたのは時雨だけで、他の二人はどこかほっとした顔をしていた。

「時雨殿、勇者がきましたよ。」

蒼月が指差す方向には……再び捕まっている三人の姿が見えた。

「魔王よ、今すぐ私たちに負けを認めたまえ。」

時雨はため息をついて小包をおくと、立ち上がって台詞を言う。  
午前中は我を忘れていたのでいえなかったからである。

「……勇者たちよ……ええい！！もうめんどくさいや！！」

時雨が珍しく暴走した結果……時雨は気絶した自分以外の人物たちが気がつく前に魔王の間を一人で急いで掃除する羽目になったのである

しよのにじゅうきゅう 魔界編9 へっへへへのへっへ(後書き)

えゝ題名がおかしいですが気にしないでください。さて、次はとうとうやってきた記念すべき?三十回目です。いや、まだまだ続くと思いますので、応援のほうよろしくお願いしますね。

しよのさんじゅう 魔界編10 三十回記念 司会 賢治と時雨（前書き）

魔界編の最後です。

じゅう、

「皆さん、こんにちは。既にお馴染みの賢治です。」

「どうも、一応主人公をやっている天道時 時雨です。」

「目標の二十回を超えたので、ここに来てようやく主人公が出てきました。……別に意味がないと思います。」

「……何気に傷つくね。」

「しよげる主人公なんてほおっておいて、今回は時雨君の魔界ライフではなく、ちょっと人間界の様子を見てみましょう。」

「あ、それ僕も思ったところだよ。どうなってるの？」

「ぶっちゃけいつてかなり凄いことになってます。それではどうぞ。」

時雨が人間界からいなくなり、日数が経った。そんな彼の家では今、時雨の葬式が始まっている。発端は賢治が消える前に言った言葉であった。

「時雨君はね、君たちがきつといけないところに言ってしまったんだよ。はつきり言うならもう……この世にはいないんだよ。」

賢治がまじめな顔をしていったので家出から殺人事件に発展。結果として時雨は死亡となってしまった。これにはいろいろな事情があり、こうなってしまった。

「……うう……兄さん……」

骨がないまま、時雨の戸籍は死亡扱いとなった。ああ……時雨、君は死んだことになってしまったぞ！！

「……ってな感じになってます。」

「のわあ！！僕って死んだことになってんじゃん！！」

「……ああ、あの時美奈さんに時雨君は星になったんだよって、冗談で言ったのが間違いだったのかな？」

「……く、このままいつたら本当に死んでしまったことになってしまっ！！早く人間界に戻る方法を見つけなくては！！」

「それでは、あわてる主人公をおいて話を始めてみましょう。今回は、この前僕が時雨君に渡した小包から話は始まります。」

時雨は、賢治からもらった小包を渡されたその晩にあげた。魔王からは礼を言われたが、勇者たちと一緒に気絶してしまった三人と二本からは何があったのかしつこく聞かれる結果となってしまった。いってしまったら大変なことになると時雨は判断したので黙っておくことにした。（嘘をつくのは苦手なので黙っておいた。）そして、小包を開けた時雨は驚愕した。

「こ、これは・・・」

メイド服が一着。そして、紙切れが一枚。紙切れには次のように書かれていた。『時雨様へ 時雨様が地獄に行っても私のことを忘れないようにメイド服を送ることにしました。どうぞ、使ってください。 美奈』

時雨は思う、ああ、なぜ死んだとしても天国とかいてくれないのだろう・・・。そんなに僕の行いは悪いのかと・・・しかし、彼にとつては困ったこととなった。このメイド服はどうしたものだろうか？

「・・・はあ、とりあえずかけておくかな。」

ハンガーで服をつるした後に、時雨は部屋にっていたテレビをつけた。なにやらニュースがあっているようだ。

『・・・ええ、この前、魔王の娘を誘拐していたメイドたちが捕まり、即急に裁判が行われました。裁判長は、同情の余地はないとして、メイドすべてに対して罪を着せる模様です。メイドたちの弁護人は行方不明などになっており、このままいくとメイドにすべての責任がいくとの見解です。・・・さて、次のニュースは・・・』

時雨は啞然とした。ニュースの内容にも驚いたが、アナウンサーは賢治であった。これはびびる。

「・・・。」

「時雨さん、お電話ですよ？」

ハデスが時雨のもとにやってきた。そして、彼女もびっくりした。

「しししっし、時雨さん……なんですか、その服は……」

「ああ、これはね、説明しがたいものだよ。全くもってね。ところで、誰からの電話かな？」

ハデスはテレビのアナウンサーからの電話だといった。テレビに移っている賢治も誰かに電話をかけているのか、こっちを凝視していて、耳に電話をつけている。

「……もしもし、時雨ですけど？」

「……時雨君、今すぐ裁判所に行くように裁判長が言っている。今すぐいったほうが身のためだよ。そこでなら堂々と意見を言えるからね。」

「……わかったよ。じゃあね。」

簡潔なやり取りを終えて、時雨はハデスに裁判所への道筋を聞き、走っていくことにした。ハデスも時雨についてきてしまい、帰すのもなんだかわいそうなので連れて行くことにした。時雨の学生服の腰部分には二本の刀がそうちゃくされていた。そして、その背中にはリュックが装備されており、仲には先ほどあけた美奈のメイド服がはいっている。

「……時雨さん、何でそんなに重装備なんですか？」

「え、それはね、念のためだよ。暴漢なんか襲ってきたら大変だ

からね。」

そういつてハデスの案内によって裁判所の前にまでやってくる。とてつもなくでかく、大きさは時雨たちの学校ぐらいの大きさであった。

「・・・・。」

ちょうど、裁判所で働いていると思われる人物が時雨に声をかけてきた。その人の誘導で、中に入る。仲には大きくて赤いカーペットがひかれており、壁はガンダ×でも置けそうなくらいの大きさであった。そんな大きな壁にはいろいろな額が飾っており、写真などが飾られていた。

「・・・・救世主という名の罪人？」

そうかかっているひとつの写真には、時雨の親友が写真の中で笑っていた。下の説明がきには過去一度、魔王軍をたたきにたたきまくった伝説の罪人天使であるとかかれていた。

「・・・・うん、賢治ならやってのけそうだな。」

他にもいろいろあったが、急に前を歩いている人が足を速めたので時雨たちも追いかけるのに集中し、見る事ができなくなった。

「どうぞ、ここで裁判長がお待ちになっております・・・・。」

開け放たれた場所に時雨とハデスはやってきた。そこは、裁判所といった感じはなく、闘技場といったほうがしっくりくるだろう。いや、これを闘技場といわないならなんと言うだろうか？



「……ようこそ、天道時 時雨君。」

闘技場の中央には大きななべがあり、その上に、縄で縛られた魔王城のメイドたちがつるされていた。うーん、真下から覗けばパンツが見えるかもしれない。と時雨が思っていると、声の主がようやくその姿を現した。

とても美しい女性であつた。

「……はあ……女神様だ。」

ハデスが頬を膨らまして時雨の学生服を引っ張る。

「時雨さん、見とれている場合じゃないですよ！」

「あ……ごめん。」

とりあえず、ハデスに謝って再び女神の顔をした相手に向き直る。時雨の顔は再び、緩む。

「……天道時君、ちょっとくるのが遅かったわね。もう少し早く来ていたらこのメイドさんたちは助かったかも……。ただだね、もう判決が下つたのよ。全員有罪で、地獄のなべで全員かまゆで。これが魔界裁判名物の冥土煮よ。」

うーん、これは笑うところなのかと時雨が考えていると、痺れを切らしたのか相手から話を進めてきた。

「……まあ、天道時君が私に勝てたらこのメイドたちをあな

たのものにしていいますよ。どうですか？」

「……あの、これは一応、コメディーですよ？大暴れオーケーなのですか？」

「大丈夫ですよ。ほら、早くしないとメイドさんたちが赤く茹で上がってしまいますよ。」

彼女が指を鳴らすと、メイドたちを縛っている縄がゆっくりなべに近づいていく。全員に猿轡をされているので何も聞こえてこない。

「……く、なんてうらやましいことを……じゃなかった。なんて卑劣なことを……。わかりました。僕はあなたを倒してメイドたちを僕のものにしてみせます。」

時雨は覚悟を決めて彼女の近くに向かって歩く。その目にはなんだか欲望の炎が見えなくもない。いやあ、あんたも好きだねえ。

「……時雨さん、あの人神様ですよ？大丈夫なんですか？時雨さんは人間じゃないんですか？」

ハデスが時雨に助けられたときは目隠しをされていたので時雨が罪人天使だということを知らない。時雨も特に言うことはなかった。

「……お譲ちゃん、その天道時君はね、あの罪人天使なのよ？もはや人間界にいる数は片手で数えられるぐらいだからね。いわば、絶滅危惧種ってやつ？」

女神であろう、大人なお姉さんはそういうと、右腕を時雨に向けた。その右先からは白銀に輝くレイピアが出現する。

「さて、たまにはまじめにやってもらおうかな？ね、天道時君？」

「……そうですね。たまには本気を出してもいいですよ？その前にハデスちゃんを裁判所の外に出してくれませんか？ここにいと間違いなく怪我するでしょうからね。」

もはや時雨の目は普段の優しい目をしておらず、狼とたとえたほうがいいだろう。赤頭巾ちゃんを騙すためにおばあさんになりすました狼が一番近い。赤頭巾ちゃんに襲い掛かり、がぶりと丸呑みしたんだから凄いな。さて、そんなことよりハデスはここから出て行く気はなかった。とりあえず、時雨の手伝いをしたかったのだ。

「……わかったわ、ハデスちゃんには外に出てもらいましょう。」

再び、彼女が指を鳴らすと、まるで千と×尋の神隠しのワンシーンのようなことがおきた。扉が開き、ハデスの体が不可視の力に引っ張られて闘技場から姿を消した。

『………』

時雨の背中から、濃い、紫色の羽が生える。そして、腰の刀を抜き、戦闘体制に入る。

「……ふふ、なんともいじめがいがりそうない少年ね。」

そんな彼女の台詞に時雨の背筋がぞくりとしたのであった。

一方、外にだされたハデスは裁判所を外から眺めていた。建物内部から非常に凄い音が聞こえてきており、道行く人はそんな裁判所を立ち止まってみている。

ゴゴゴゴゴゴ……

裁判所の一部の扉が吹っ飛び、近くに生えていた木に直撃。テレビ局もやってきて裁判所を映し始めた。そして、今度は裁判所の屋根の一部が崩壊し、壊れた瓦礫などが中に陥没していくのが外からでもはっきりわかるのであった。もはや、裁判所は廃墟といってもよさそうなくらい、ぼろぼろで、いつ壊れてもおかしくない状況であった。

廃墟となった裁判所の騒動はすぐに収束を向かえた。あたりはすっかり野次馬が囲み、近くに近づかないように警察と思われる人たちが黄色いテープで裁判所の付近を囲んでいた。

「あ、今誰かが裁判所から姿を見せました。」

建物内部から、誰かの人影が見えた。いや、なんだかその数は非常に多く、そろそろといったほうがしっくりくるものであった。

「……メイドです！！メイドが中からそろそろ出てきてます。」

アナウンサーがそのようにほえ、メイドたちは中から飛び出してくる。だが、その中に時雨の姿はなかった。最後のメイドが出てくると、今までががんばっていた裁判所は崩壊してしまい、後に残ったのは大量の瓦礫の山であった。

「……そ、そんな……時雨さんが……」

ハデスはメイドに話を聞き、裁判長であつた女神の隙を着いて時雨がメイドたちを助けたことを知った。だが、その後すぐに建物内部が震えだしたので先に時雨がメイドたちを逃がしたらしい。

「そんなぁー！ー！！」

瓦礫の山に向かって彼女は叫ぶ。

一方、ところ変わって瓦礫の山となつた裁判所内部、時雨と女神が戦つていた場所では、いまだに戦いが繰り広げられていた。まあ、ほとんど身動きが取れないのでしょぼい戦いになつてしまつたのだ

「……………りんご！！」

「ゴリラ！！」

しりとりとなつてしまつたが、しょうがない。その後、なかなか来ない救助隊に業を煮やし、二人は我慢の限界が来たので暴れた。

「……………うおおおおお！！」

「……………はぁぁぁぁぁ！！」

その拍子に何かはじけとんだ音がした。そして、時雨が目を開けたときに広がつていた光景は時雨が魔界に行くためにやってきた図書館であつた。

「・・・・・・・・・・はあ、まだお別れも言っていないのに戻ってきてしまったか。」

そういつて時雨はため息をつく、とりあえず賢治がいるかもしれない生徒会室に向かつて歩き出したのであった。こうして、時雨の初めての魔界は尻切れトンボのように終わったのであった。

「ま、帰ってきたんだからいいんじゃない？」

「そうだね、またいずれ行くこともあるかもしれないからね。」

「・・・・・・・・じゃあ、時雨君、僕はちよつと君のお葬式に参列してくるから失礼するよ。」

「・・・・・・・・そうだった！！早く帰らないといけないんだった！！」

「それでは皆さん、まだまだ続くであろう、『罪人天使』をよろしくお願いします！！司会は、霜崎 賢治と・・・・・・・・」

「偽者家庭教師の天道時時雨でした！！」

〽魔界編終了〽

しょのさんじゅうち これも最後の終わり方・・・（前書き）

ええと、今回で最後となりました・・・皆さんにはいろいろとご迷惑をおかけしたりしてすいませんでした。最後ですのでできましたら評価のほうをよろしくお願いします。

しょのさんじゅうち これも最後の終わり方……

人間界に戻ってきた天道時 時雨。そんな彼は、人間界では戸籍上死んでいる人間となっていたのであった。自宅に戻ろうとしたが、彼の親友？の霜崎 賢治にとりあえず家に来てくれといわれたので彼は賢治のばかでかい家に向かったのであった。

「……つまり、賢治は僕にとりあえず戸籍を何とかする間は別の土地に移って身をひそめておけというのかい？」

「ああ、そうだよ。すでに僕が準備をしているからそこところは気にしないでいいよ。」

指をぱちんと鳴らすと、どやどやとメイドたちがやってきて時雨の体を縄で絞める。あっという間に、時雨はダンボールの中に閉じ込められて車につめられる。

「もがもがもが！！（訳：ちょっと！！僕は荷物かよ！！）」

彼の抵抗むなしく、そのままどこかの土地に運ばれていくのであった。腰に刺していた刀は気がついたらどちらともなくなっており、なぜだか体に力がいらなかった。

ダンボールにつめられて、トラックで搬送されること、約三時間ぐらい。時雨は賢治の家のメイドの一人に抱えられておろされる。ダンボールの中に押し込められたままなのでほとんど何もわからない。



「……どうも、宅急便ですけど?」

「もが?もがが!!(訳:へ?なんだって!!)」

「はぁい、どうもごろうさまですう。」

そういつてメイドの手から誰かの手に渡される。しかし、相手は以外に力がなかったらしく、

「おもっ!!」

ぼと……

「もがぁぁ!!(訳:いたぁ!!)」

時雨が入っているダンボールを落としてしまった。垂直落下で落とされたのでダンボールの中で身もだえする時雨はなんだかわいそうである。

「さあて!!何がはいつているのかなぁ?」

再び持ち上げられることなく、ダンボールを引っ張られてどこかに移動される。

「姉さんたち!なんだか知らないけど……賢治君から贈り物が届いたよぉ!!」

「へえ、きつとあの糞餓鬼からだからきつとろくでもないのがはいっていると思うねえ。」

「ま、何でもいいけどさつさとあけてみようよ。」

「……きつと生ものじゃない……かな？」

そして、時雨が入っているダンボールを乱暴に、包丁で解体していく。そのころ時雨はやつと口にはめられていた猿轡を取ることが出来た。

ぶしゅ。

「いたあああああ!!」

そうやって時雨はダンボールから飛び出したのであった。世に言う、ダンボール太郎の奇跡的な誕生である。

「……ほんとに凄いのが届いたねえ。」

「そうですね、これは凄いですよ。」

「少年、名前をなんていうのかな？」

床でごろごろ転がっている時雨に対して四人いる人物たちは注目する。

「……名前ですか？天道時 時雨っていいま……」

時雨の目が途中で止まる。正確に言うなら、四人いる一人の顔に注目される。

「ちちちちちち、ちにやつねええさん!!お、おばけ？」

「ああ、どうしたのかな？シグ？」

時雨を見下ろして不適に笑う一人。その人物から逃げ出そうと時雨ははいつくばってにげようと努力するが、すぐに捕まってしまった。

「あわわわわわわわわ！！！」

発作がおこったように時雨は震えだし、喋ることもできなくなってしまった。彼を猫掴みで持ち上げている時雨より少し年上の女性 はため息をつく。

「千夏、その子知り合いなのか？」

「うん、ほら、父さん母さんが別居してたときさあ、私だけ父さんのほうに行っただじゃない？そのときにその土地にいた友達だよ。」

「へえ、あんたの幼馴染ってやつね？で、いじめてたの？」

そうやって震えて小さくなっている時雨を指差す。だが、千夏は首を振った。

「・・・いや、実はね、あっち私は死んだことになってんのよ。だからじゃない？」

まだ何か言おうとしていたが、千夏は口を閉じてかつての幼馴染の少年を見下ろす。

「ね、シグ、とりあえず落ち着いたら？」

彼が落ち着くのは結構後となった。そして、出してもらったお茶を飲んで一息つき、まじまじと千夏の顔を眺める。

「……てつきり死んだのかと思いましたよ？ 実際にお葬式だつてやったじゃないですか？」

「ごめんごめん、いろいろあつたんだよ。で、なんでシグがこのダンボールの中に入ってたんだい？」

時雨はとりあえず、すべてのことを包み隠さず話した。時雨はこの四人が人間ではないことが手に取るようにわかったので魔界であったことも詳しく話した。

「ふうん、で、ここに送り込まれたわけか？ けどさ、シグが罪人天使なんて意外だなあ。昔はよくないて私の胸の中で眠ってたのに……」

「はあ、まあ……いろいろとありまして……」

恐縮するように頭をたれる時雨。そして、初対面となる千夏以外の年上の女性を見る。

「ああ、自己紹介がまだだったね。私の名前は季節きふし 春海はるみだ。春ねえと呼んでくれ。」

「私は……秋代あきよといいます。」

「つついて、私の名前は冬音ふゆねという。よろしく、天道時君。」

「最後に、私の名前は知ってると思うけど、千夏ね。」

ちようど、そんなときに誰かの携帯がなった。場所的に考えるなら春海の携帯だろう。

「……ふん、で、時雨君、どうやら君は今日からこの家に住む仲間となったようだ。君の親友から死刑宣告に近いメールが届いている。」

以下のことがメールに書かれていた。

『時雨君、今日からそこが君の牢屋だ。季節姉妹たちの言うことを忠実に守ること。わかったかな？なお、知っていると思うがその四人は人間ではないので気をつけること。気がついたら誰かの夫とまらないように気をつけたまえ。その家にランクがあるとしたら君は一番下だからね。ま、僕が君を迎えに来るまでがんばってくれたまえ。』

「じゃ、さっそくだけど……夕飯作ってくれないかな？いやあ、いいもんを送ってくれたものだね。」

そういつて、時雨の新しい生活が始まったのであった。

その日はとりあえず、廊下で寝ることとなった。布団や枕は足りないでそこは代用品の座布団とコートで我慢することとなる。

「……………はあ、しょうがないのかな？」

何事もなく、時雨の一日目は終わりをつけた。問題は二日目から始まる。

「で、時雨、今後君には私たちが通っている高校に行ってもらおう。

「時雨は彼女の容姿を見て驚いた。千夏は時雨より年上、そして、この晴海は間違いなく千夏より年上だろう。時雨は高校二年で千夏が時雨より少なくとも1歳年上だったとしても、春海は間違いなく社会人ではないのだろうか？」

「……シグ、実のところ、私たちの姉妹は凄いくことに落第者が多いの。春海姉さんはすでに社会人になってもいい年なのにね。まあ、シグが高校二年だとしても大体皆は高校三年生ってとこかな？」

「……はあ、なるほど？」

そついいながらも両脇から腕を抱えられる。そこには高校の制服を着ていた冬音と秋代がたっていた。

「さ、天道時君を高校まで連行しよう！！」

「……校長先生たちには話しているから職員室へ……連れで行かないと……」

こうして、時雨は名前も知らない高校へと通うこととなった。そして、意外な真実を知る。

場所は変わって千夏たちが通う学校。そこは時雨たちの高校より小さかったが、まあ、このぐらいが平均的な大きさに違いはない。

「……落第高校？」

時雨は校門にでかでかと書かれている文字を見て、少々びびった。なんとも縁起の悪い高校だ。これでは確かにこの姉妹たちが落第す

るのもわからないでもない。

「……シグ、この高校で卒業する人数は両手で数えられるぐら  
いなよ。まあ、平均的に十人ぐらいだと思ってくればいいけど  
ね。ちなみに、今いる在校生は……。まあ、ざっと千人ぐら  
いるでしょうね。」

「……ここにくる人たちは頭が悪いほうなんですか？」

「いやいや、どつちかというといいほうだよ。ま、実際に教室に入  
ればわかるからね。さ、あの先生がシグの担任の先生だからね。」

職員室に着き、千夏たちと別れた後に時雨は初めて会う先生とい  
ろいろと話した。まず、会ったときにその女の先生はないていた。  
普段見たらとつても明るそうな先生（どつからどう見ても春海より  
年下に見える。どうやら、新人の先生らしい。）でそうだが、今は  
泣き崩れているのでかなり凄い顔になっている。どうやら、誰かが  
でつち上げた時雨の過去話を聞いて涙しているようだ。

「……天道時君、大変だったのね？お父さんのせいでお母さん  
がいえを出て行き、残ったお父さんも過労で死んで一人ぼっちだっ  
て？で、今いる人たちのところの居候になっただって？……………  
何か困ったことがあったら私の携帯電話にかけてきてね？」

「……………はあ、わかりました。」

なんだか凄い先生であることがわかり、とりあえずポケットから  
ハンカチを出して先生に渡した。先生は渡されたハンカチで涙を拭  
いた後に鼻をかみ、時雨に返そうとして自分のポケットに入れた。

「……今度洗濯して返すわね。」

そして、時雨のクラスに案内されることとなった。この校舎は四階まであり、一階が一年生、二階が職員室やいろいろ売っている売店、そして特別教室。三階が二年生で、四階が三年生となっているみたいである。時雨は二年のはずだが、何故か案内されたのは四階の三年二組であった。

「……先生、僕二年生ですけど？」

「……え？でもあの書類には三年って書いていたけど？ま、大丈夫よ。ほら、ちよっとこれから友達となる人たちを見てみなさい？」

「……でも……」

時雨がそういうと、先生は泣きそうな顔になっていた。

「……うう、反抗できない親もないから、誰かに八つ当たりしたいのね？いいわ！先生が受け止めてあげるから！！」

「す、すいません。僕が間違ってたみたいです！！」

そういつて時雨は教室の扉を少しだけ開けて教室の中を見る。

時雨が想像しているのは茶髪の髪が大勢で、真面目という言葉に敵だと思っている連中ばかりである。だが、現実の違い、皆机に座って勉強している。その中にはあの四姉妹の姿も見える。とても異様な雰囲気、誰も話している人物などいない。そして、もう一つ時雨は驚いたことがあったが、とりあえず教室の扉を音なく閉め



ると先生に向き直る。先ほど話していた声より小さくして先生に聞く。

「……先生、男子の姿が見当たりませんか？」

「時雨君、この高校は今年から共学だから三年生と二年生には男子はいないのよ。」

時雨はその言葉を聞いて驚愕した。

「さ、私が君の名前を呼んだ後にはいつてきてね？」

先生はそういつてさっさと教室の中に入っていく。廊下に残されたのはいろいろなことが頭の中で駆け回っている時雨であった。

「……で、いろいろな事情より、急に転校してきた人がいます。皆さん、どうか優しく接してあげてくださいね？わかりましたか？では、はいつてきてください、天道時君。」

転校したことはあまりないが、時雨は意を決して教室の中に入る。前の教室も女子が多かったが、男子も一応、備品扱いとして存在していたから良かったのだが、今回はその備品たちもないので緊張していた。

「……天道時君、皆に自己紹介してください。」

「……はい、天道時 時雨といます。急な転校でかなり驚いています。皆さん、よろしくお願いします。」

「はい、上手によく言えました！では、誰か彼に質問のある人？」

教室の中で何人かが手をあげる。彼女たちが時雨を見る目はなんだか珍獣を見るような感じだ。そんな一人の女子を先生はどうぞといて立ち上がらせる。めがねをかけた少女は立ち上がりめがねを上げると時雨をまじまじと眺めた後に質問した。

「委員長の私から質問しますが、苦手教科は何でしょうか？」

「……ええと、大体平均的に取れていると思うのでないですね。」

教室中がおおつと声を上げる。質問をした委員長は座り、再び何人かが手を上げる。また先生が手を上げた一人の生徒を指し、その生徒は立ち上がる。

「……それでは、体育も得意なのでしょうか？」

「まあ、大丈夫だと思います。」

さっきの教室の反応より大きな声で全員がおおつと声を出す。気がついた人もいるかもしれないが、この高校のほとんどの生徒は体育で落第になっているのだ。つまり、体育以外は非常に良く、すさまじい。

「では、次の人で質問を打ち切りますが、誰がいませんか？」

千夏が手を上げる。他の人たちはなぜだか彼女が手を上げたのを見ると手を上げるのをやめた。どうやら、事前に話し合いでもあったかのようだ。

「……天道時君に質問です、付き合うなら年上と年下、どちらがいいですか？」

「年上……です。」

時雨がそういうと、教室中は更におおっと叫びを上げる。その中に先生も混じっていた。

一時間目が始まる少し前、時雨はお姉さまたちに囲まれていた。

「……でね、小さいころなんて良く私の後ろをチョコチョコ歩いてきたもんよ。」

小さいころの時雨を知っている千夏はそうやって膝の上に乗せている時雨の頭をなでなでしている。

「けど、ほんとに時雨君は私たちより年下なんだね。」

教室にいる一人がそういうとみんなは頷いた。千夏や春海が喋ってしまったので時雨の歳がばれてしまった。どうやらこの教室にいるお姉さまたちは自分より年下の男の子が好みらしく、時雨のことを弟を見るような目で見ている。

「……うーん、ぎゅって抱きしめたいよね？あ、でもちよっと大きすぎるかな？」

また、誰かがそういうと時雨を抱きかかえていた千夏は不適な笑い声を上げる。時雨はなんだか嫌な予感がしたので彼女の膝の上から無理やりでも逃げようとしたが、無駄な抵抗だった。

「……シグ、目をつぶってくれないかなあ？そうそう、いい子だねえ……」

時雨が目をつぶったわけではない、千夏が時雨の目を手で隠したのだ。そして、口の中でぶつぶつ呟くと時雨の体に異変がおとずれる。

体が小さくなり、お持ち帰り可能な状態となってしまった。

「いやあああん！！かわいい！！」

小さくなった時雨を千夏から取り上げ、抱きしめたりいろいろ悪戯して彼女たちは遊んでいる。

「……ちょ、千夏姉さん助けてよ！！」

「だあゝめ、先生が来るまで遊んでなさい。ほら、クラスになじむいいチャンスよ。」

そうして、時雨は先生が来るまでお姉さまたちのおもちゃと化した。

だが、言っている割に嬉しそうな顔をしていたので別にいいだろう。先生に気が付かれるわけでもなく、時雨は天候初日の嬉しい日々を全うしたのであった。うん、うらやましい……。そして、今日はもう一ついろんなイベントがあったのであった。それは、夜の出来事である。近くにある公園にこれまでであったことを整理するために一人でいた時雨は意外な人物と遭遇するのであった。まあ、その前に彼が考えていたことを教えておこう。

時雨は誰もいない夜の公園にあるさび付いたブランコに腰掛けている。

体が小さくなったままだが、今のところは不便ないので無視しておいても関係ないだろう。

まあ、そんなことより、彼は前世？の記憶が戻りそうだったのであった。

世界を滅ぼした自分のころの記憶である。

だが、一方でこれを思い出したらこの世界が消えてしまうのではないかと思う自分もいた。記憶と力……。これが今までもう一人の自分が持っていたものなのだ。そして、今では自分の一部となり、邪魔となっている。そして、なんだか物足りなさを感じているのだ。後姿は完璧なのに前に回ったらペッタンさんのような感じ？そんなもどかしさを感じている。とりあえず時雨は悩んでいた。

「……時雨先生……。」

だから、誰かが後ろに立っていることもまったく気がつかずに、そして、自分の体が元に戻っていることも気がつかずに悩んでいた。それに気がついた時雨は面白いように前に倒れこみ、目の前にある砂場に顔からダイブ！夕食前に砂場の砂をおやつ代わりとしてしまったのであった。そして、砂のおやつをプレゼントしてくれた相手を見る。

「ハデスちゃんじゃないか！」

そこに立っていたのは彼の教え子の一人であった。この前別れたばかりなのであまり久しぶりといった感じはない。だが、ハデスには黙ってこっちに帰ってきたので罪悪感があった。そのハデスは目に涙を浮かべている。

「・・・先生、死んだんじゃないかと思ってたんですよ？裁判所が壊れたから皆あなたの事を探そうとはしませんでした。皆死んでるって言うんです。で、私は・・・私はそんなの嫌だから・・・私が作った先生のお人形をお願いしたんです。」

女の子がお人形を自分で作るのはいいいことだが、彼女が作ったお人形は確かにお願いするものだが、ちょっと違うものであった。そう、わら人形に時雨の写真がはつてあるものである。とりあえず時雨はそのわら人形を出来るだけ見ないようにした。

「・・・ハデスちゃん、会いに来てくれて嬉しいんだけど・・・どうやってきたの？」

ハデスは涙を流しながら（わら）人形を大事そうに抱え、答える。

「・・・お人形さんをお願いしていたら賢治さんが来たんですよ。それですね、私をここまで連れてきてくれたんです。それで、時雨先生に会ったら次のことを言うように言われたんです。」

「？それってなにな。」

ハデスは思い出すようなそぶりを見せて、話し出す。

「・・・ええと、時雨君、君はとっても罪作りの男だ。そしてその罪は君の命では足りず、君の大切にしていたコレクションを日本全国に配布しても償うことが出来ない。だが、今回に限ってハデスちゃんの言うことを聞くことにより、その罪を消してあげよう。今頃君は過去の自分の罪を思い出して苦しんでいるだろうからね。だったと思うんですけど・・・。」

「……うん？ところでハデスちゃんの言うことを聞けって……まあ、僕はいいけど？」

人間、安請け合いをするとんでもないことに陥る。まあ、そんなことは問題ではないのだが……。とりあえずハデスは時雨を目の前にして急に顔を赤らめさせたのであった。

「……先生、私を先生の彼女にしてください！！」

時雨の顔の間近でそう告げる。時雨は何を言われたのかさっぱりわかっておらず、頭の中が混乱しており……。ハデスがそんな時雨を真剣に心配したところにようやく思考状態が戻ってきたのであった。

「……ハデスちゃん、僕は捕まっちゃうよ。」

時雨はつらいがそう告げた。だが、ハデスは別段気にした様子もなく、更に時雨に告げるのであった。

「……そうですね、なら……。このお願いなら聞いてもらえますか？」

「……何かな？」

「目をつぶってください。」

「？いいけど……」

ブランコを間に挟み、時雨はハデスの目の前で目をつぶる。

「いって言うまで目を開けちゃ嫌ですよ？」

「わかったよ。」

目をつぶって聞こえてくる音はハデスが息を整える音だけであった。

それ以外は何も聞こえてこない。

時雨がちょうど息を出したときにそれは起こった。

誰かが時雨の腰に手を回し、抱きしめ、唇に何かを押し付ける。何が起こったかよくわからない時雨は目を開けようとしたがやめた。目を開ければハデスとの約束を破ることになるからだ。そして、数分、時間が過ぎ（その間ずっと時雨は息を止めていたのであった。もうちょっとでまだ見ぬあの世というものが見えただろう。）相手は時雨から離れる。

「……先生、目を開けてください。」

時雨が目を開けると、そこには可愛い少女が立っていた。ハデスよりも背が高く、ハデスをそのまま成長させたらこうなるだろう。

「先生、これならいいですね？」

「?……誰ですか？」

「先生、魔法使いの血が混じっている魔族は……契約をすればみんなこうなるんですよ。これで先生も……捕まりませんよね？」

時雨は観念してその女の子を抱きしめてあげた。するとどうだろうか、少し前まで考えていたことがちっぽけなことだと思い、考え



るのをそこでやめてしまった。

「……………先生、あの世まで一緒ですよ？」

「……………こんな可愛い女の子にそんなことを言われるなんて本望だよ。」

その後、時雨は魔王となり、ハデスとのらぶらぶつぷりに苛立ちを覚えた勇者たちと数々の戦いを繰り広げていったのであった。しかし、誰も彼になうものはおらず、彼らが魔界を治めている間はそのらぶらぶつぷりに皆当てられるのであった。まあ、魔界に行ったことを知った彼の家族たちはその城にすむこととなり、今までとあまり変わらない生活を送るのであった。

（完）

「……………ふう、ようやく……………まともな終わり方をしたかな？」

「そうですね、まあ……………これもi f ってもですよ。」

場所はとある占いの館。高校生ぐらいの男子の前にサンダルをはいた中年おじさんがコーヒーを飲みながらそんな男子生徒に答える。

「ま、これでいいんですよ。いずれまた……………何かが起こるかもしれないからね。」

「そうだな、私は今からお天気お姉さんを観賞しなければいけないから……………また、な。救世主。」

「ええ、それでは失礼します。僕も可愛い彼女たちが待っていますからね。」

少年はずらりと並ぶ美少女人形を名残惜しそうに見てからその館を後にした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9447a/>

---

罪人天使

2010年10月10日18時58分発行